

東関東自動車道(千葉・富津線) 埋蔵文化財調査報告書11

－木更津市中越遺跡－

平成14年3月

日本道路公団
財団法人 千葉県文化財センター

東関東自動車道(千葉・富津線) 埋蔵文化財調査報告書11

—木更津市中越遺跡—





小銅鐸と石製舌



第Ⅰ文化層



第Ⅲ文化層



第Ⅳ文化層

序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第436集として日本道路公団の東関東自動車道（千葉・富津線）建設事業に伴って実施した木更津市中越遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、弥生時代から奈良・平安時代にいたる集落とともに、まだ出土例が少ない小銅鐸が出土するなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また郷土史の資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を始めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成14年3月25日

財団法人千葉県文化財センター

理事長 清水新次

凡　例

- 1 本書は、日本道路公団による東関東自動車道（千葉・富津線）建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、木更津市大久保字中越334ほかに所在する中越遺跡（遺跡コード206—011）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、日本道路公団の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の組織・担当者等は第1章に記載した。
- 5 本書の執筆は、第2章第1節・第2章第2節石器・第3章第1節を上席研究員 新田浩三が担当し、それ以外を室長 今泉潔が担当した。
- 6 積穴住居出土の炭化材の樹種同定については、株式会社パレオ・ラボの協力を得た。
- 7 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、日本道路公団、千葉県教育庁生涯学習部文化課、木更津市教育委員会教育部文化課、財団法人君津都市文化財センターの御指導、御協力を得た。
- 8 本書で使用した地図は、下記のとおりである。
 - 第1図 参謀本部陸軍部測量局作成 1/20,000 迅速測図「桜井村」・「上村」
(明治15年測量・明治20年発行)
 - 第2図 国土地理院発行 1/25,000地形図 「木更津」(NI—54—25—4—2)
国土地理院発行 1/25,000地形図 「神野山」(NI—54—26—1—1)
- 9 周辺地形の航空写真は、京葉測量株式会社による昭和60年1月と平成13年1月に撮影したものを使用した。
- 10 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。
- 11 本書で使用した遺構の種別・番号は、調査時の番号を踏襲した。
- 12 遺物の色調については、農林水産省・（財）日本色彩研究所監修の日本色研事業株式会社発行 「新版 標準土色帖」1988年 掲載の用語を使用した。

本文目次

| | |
|----------------------------------|-----|
| 第1章 はじめに..... | 1 |
| 第1節 調査の概要..... | 1 |
| 1 調査の経緯と経過..... | 1 |
| 2 調査の方法..... | 1 |
| 第2節 遺跡の位置と環境..... | 4 |
| 1 地理的環境..... | 4 |
| 2 歴史的環境..... | 4 |
| 第2章 遺構・遺物..... | 7 |
| 第1節 旧石器時代..... | 7 |
| 第2節 縄文時代..... | 57 |
| 第3節 弥生時代..... | 71 |
| 第4節 古墳時代..... | 73 |
| 第5節 奈良・平安時代..... | 98 |
| 第6節 その他の遺物 | 126 |
| 1 金属製品 | 126 |
| A. 小銅鋤・石製舌 | 126 |
| B. 小銅鋤以外の金属製品 | 130 |
| 2 木製品 | 130 |
| 3 石製品 | 132 |
| 4 石器 | 132 |
| 第3章 まとめ | 133 |
| 第1節 旧石器時代 | 138 |
| 第2節 縄文時代以降 | 138 |
| 付 章 中越遺跡の焼失竪穴住居跡出土炭化材の樹種同定 | 142 |
| 報告書抄録..... | 卷末 |

挿図目次

| | | | |
|----------------------------|----|------------------------------|----|
| 第1図 中越遺跡の位置と周辺の地形 | 2 | 第7図 第I文化層 第1ブロック石材別分布..... | 13 |
| 第2図 中越遺跡と周辺の遺跡 | 3 | 第8図 第I文化層 第1ブロック出土石器（1）..... | |
| 第3図 調査地位置図 | 5 | | 14 |
| 第4図 基本層序 | 7 | 第9図 第I文化層 第1ブロック出土石器（2）..... | |
| 第5図 下層本調査範囲とブロックの位置 | 8 | | 15 |
| 第6図 第I文化層 第1ブロック器種別分布..... | 12 | 第10図 第II文化層 第2ブロック出土石器..... | 16 |

| | | | |
|--------------------------|----|----------------------|-----|
| 第11図 第Ⅱ文化層 第2ブロック器種別分布 | 17 | 第44図 S I 14 | 71 |
| 第12図 第Ⅱ文化層 第2ブロック石材別分布 | 18 | 第45図 S I 14出土土器 | 72 |
| 第13図 第Ⅱ文化層 第3ブロック器種別分布 | 19 | 第46図 S I 03と出土土器 | 74 |
| 第14図 第Ⅱ文化層 第3ブロック石材別分布 | 20 | 第47図 S I 08・09と出土土器 | 76 |
| 第15図 第Ⅲ・Ⅳ文化層 分布状況 | 22 | 第48図 S I 09出土土器 | 77 |
| 第16図 第Ⅲ文化層 第4ブロック器種別分布 | 23 | 第49図 S I 10と出土土器 | 78 |
| 第17図 第Ⅲ文化層 第4ブロック石材別分布 | 24 | 第50図 S I 12と出土土器 | 79 |
| 第18図 第Ⅲ文化層 第4ブロック出土石器 | 24 | 第51図 S I 13と出土土器・土製品 | 81 |
| 第19図 第Ⅲ文化層 第5ブロック器種別分布 | 26 | 第52図 S I 17・18と出土土器 | 82 |
| 第20図 第Ⅲ文化層 第5ブロック石材別分布 | 27 | 第53図 S I 19 | 84 |
| 第21図 第Ⅲ文化層 第5ブロック出土石器(1) | 28 | 第54図 S I 19出土土器(1) | 86 |
| | | 第55図 S I 19出土土器(2) | 87 |
| 第22図 第Ⅲ文化層 第5ブロック出土石器(2) | 29 | 第56図 S I 21と出土土器(1) | 89 |
| | | 第57図 S I 21出土土器(2) | 90 |
| 第23図 第Ⅲ文化層 第5ブロック出土石器(3) | 30 | 第58図 S I 23と出土土器 | 91 |
| | | 第59図 S I 26と出土土器(1) | 92 |
| 第24図 第Ⅲ文化層 第5ブロック出土石器(4) | 31 | 第60図 S I 26出土土器(2) | 93 |
| | | 第61図 S I 28・29と出土土器 | 95 |
| 第25図 第Ⅲ文化層 第6ブロック器種別分布 | 33 | 第62図 S I 31 | 96 |
| 第26図 第Ⅲ文化層 第6ブロック石材別分布 | 34 | 第63図 3C-40出土土器 | 97 |
| 第27図 第Ⅲ文化層 第6ブロック出土石器 | 35 | 第64図 S I 01と出土土器・転用硯 | 99 |
| 第28図 第Ⅳ文化層 第7ブロック器種別分布 | 38 | 第65図 S I 02と出土土器 | 100 |
| 第29図 第Ⅳ文化層 第7ブロック石材別分布 | 39 | 第66図 S I 02出土須恵器・土製品 | 101 |
| 第30図 第Ⅳ文化層 第7ブロック出土石器 | 40 | 第67図 S I 04と出土土器 | 103 |
| 第31図 第Ⅳ文化層 第8ブロック器種別分布 | 42 | 第68図 S I 05と出土土器 | 104 |
| 第32図 第Ⅳ文化層 第8ブロック石材別分布 | 43 | 第69図 S I 05出土土製品 | 105 |
| 第33図 第Ⅳ文化層 第8ブロック出土石器 | 44 | 第70図 S I 06と出土土器(1) | 106 |
| 第34図 単独出土石器 | 46 | 第71図 S I 06と出土土器(2) | 107 |
| 第35図 上層遺構位置図 | 55 | 第72図 S I 07と出土土器 | 109 |
| 第36図 S K 02と出土土器 | 58 | 第73図 S I 11と出土土器 | 110 |
| 第37図 繩文土器(1) | 60 | 第74図 S I 15と出土土器 | 111 |
| 第38図 繩文土器(2) | 61 | 第75図 S I 20と出土土器・土製品 | 112 |
| 第39図 繩文土器(3) | 63 | 第76図 S I 24と出土土器 | 114 |
| 第40図 繩文時代の石器(1) | 64 | 第77図 S I 25と出土土器・土製品 | 116 |
| 第41図 繩文時代の石器(2) | 65 | 第78図 S I 27と出土土器 | 117 |
| 第42図 繩文時代の石器(3) | 66 | 第79図 S I 32と出土土器 | 118 |
| 第43図 砂群の分布 | 67 | 第80図 S B 01・S B 02 | 120 |

| | | | |
|--------------------|-----|------------------------|-----|
| 第81図 S B03・S B04 | 121 | 第87図 金属製品・木製品・石製品 | 131 |
| 第82図 S B05・S B06 | 123 | 第88図 その他の石器 | 132 |
| 第83図 S B07・S B08 | 124 | 第89図 旧石器時代 第I文化層器種組成 | 134 |
| 第84図 S I 22 | 125 | 第90図 旧石器時代 第III文化層器種組成 | 136 |
| 第85図 小銅鐸と石製舌 | 127 | 第91図 旧石器時代 第IV文化層器種組成 | 137 |
| 第86図 小銅鐸（保存処理前実測図） | 128 | | |

表 目 次

| | | | |
|------------------------|----|--------------------------|----|
| 第1表 中越遺跡文化層別器種組成表 | 9 | 第9表 第III文化層 第4ブロック石器組成表 | 23 |
| 第2表 中越遺跡文化層別石材組成表 | 10 | 第10表 第III文化層 第5ブロック石器組成表 | 25 |
| 第3表 全文化層石器組成表 | 10 | 第11表 第III文化層 第6ブロック石器組成表 | 32 |
| 第4表 第I文化層石器組成表 | 11 | 第12表 第IV文化層石器組成表 | 36 |
| 第5表 第II文化層石器組成表 | 16 | 第13表 第IV文化層 第7ブロック石器組成表 | 37 |
| 第6表 第II文化層 第2ブロック石器組成表 | 17 | 第14表 第IV文化層 第8ブロック石器組成表 | 41 |
| 第7表 第II文化層 第3ブロック石器組成表 | 17 | 第15表 単独出土石器組成表 | 45 |
| 第8表 第III文化層石器組成表 | 21 | 第16表 全文化層属性表 | 47 |

図 版 目 次

| | | |
|-------------------------|-------|------------------------|
| 卷首図版 1 小銅鐸と石製舌 | 図版 7 | 1 S I 13全景（北東から） |
| 卷首図版 2 旧石器時代石器 | | 2 S I 14全景（北東から） |
| 図版 1 航空写真（昭和60年1月16日撮影） | | 3 S I 14遺物出土状況（南から） |
| 図版 2 航空写真（平成13年1月16日撮影） | | 4 S I 14遺物出土状況（北から） |
| 図版 3 1 S I 01全景（北東から） | 図版 8 | 1 S I 15全景（東から） |
| 2 S I 02全景（南東から） | | 2 S I 17・18全景（南西から） |
| 3 S I 03・S D 01全景（南東から） | | 4 S I 19・20全景（南西から） |
| 図版 4 1 S I 04全景（南東から） | 図版 9 | 1 S I 19遺物出土状況（南東から） |
| 2 S I 05全景（北東から） | | 2 S I 19遺物出土状況（北西から） |
| 3 S I 06全景（北西から） | | 3 S I 19小銅鐸出土状況（北東から） |
| 図版 5 1 S I 07全景（南東から） | | 4 S I 19小銅鐸出土状況（東から） |
| 2 S I 08・09全景（南東から） | 図版 10 | 1 S I 21全景（東から） |
| 3 S I 10全景（北東から） | | 2 S I 24全景（北東から） |
| 図版 6 1 S I 11全景（北東から） | | 3 S I 25全景（北東から） |
| 2 S I 12全景（北東から） | 図版 11 | 1 S I 26・27・32全景（南西から） |
| 3 S I 12遺物出土状況（北東から） | | 2 S I 28・29全景（南東から） |
| 4 S I 12遺物出土状況（南西から） | | 3 調査風景 |

- | | | |
|------|---|--|
| 図版12 | 1 S B01全景（南西から） 2 S B02全景（北西から） 3 S B03全景（北西から） | 図版18 縄文土器（1） 図版19 縄文土器（2） 図版20 弥生土器・古墳時代土師器（1） |
| 図版13 | 1 S B04全景（南西から） 2 S B05全景（南西から） 3 S B07全景（北東から） | 図版21 古墳時代土師器（2） 図版22 古墳時代土師器（3） 図版23 古墳時代土師器（4） |
| 図版14 | 1 S B06全景（南西から） 2 S B06完掘全景（南西から） 3 S K02全景（北東から） 4 S K02断ち割り（南から） | 図版24 古墳時代土師器（5） 図版25 古墳時代土師器（6） 奈良・平安時代土師器 図版26 小銅鋸 |
| 図版15 | 旧石器時代石器（1） | 図版27 小銅鋸・石製舌 |
| 図版16 | 旧石器時代石器（2） | 図版28 金属製品・石製品・木製品・土製品 |
| 図版17 | 縄文時代の石器・その他の石器 | |

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査の経緯と経過

日本道路公団は、房総半島湾岸部を通る高速道路を計画し、そのうち千葉市南部から木更津市にいたる約35kmの区間が事業化され、東関東自動車道（千葉・富津線）として建設が行われることとなった。

事業実施にあたって日本道路公団から事業地内の「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会文書が、千葉県教育委員会あてに提出された。千葉県教育委員会ではこれをうけて、事業地内の現地踏査を実施し、事業地内に埋蔵文化財が所在する旨の回答を行った。この回答をうけて、日本道路公団と文化財保護委員会（現文化庁）とで取り交わした「日本道路公団の建設事業等工事の施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」（昭和42年9月30日調印）等に基づき、関係機関で慎重な協議が重ねられた。その結果、現状保存が困難な地点については、やむを得ず記録保存の措置を講ずることになり、調査機関として財団法人千葉県文化財センターが指定された。

中越遺跡の現地調査は平成5年度・6年度の2か年にわたった。組織・調査内容・担当者等については、以下のとおりであり、平成13年度に報告書を刊行することになった。

平成5年度

調査期間 平成6年1月6日～平成6年3月28日

確認・本調査（上層）350/3,500m²

本調査（上層）850m²

確認調査（下層）102/1,750m²

市原調査事務所長 石田廣美 副所長 西川博孝 担当者 主任技師 麻生正信

平成6年度

調査期間 平成6年4月1日～同年5月31日

本調査（上層）1,750m²

確認調査（下層）92/1,750m²

本調査（下層）160m²

市原調査事務所長 石田廣美 副所長 野口行雄 調査係長 柴田龍司 担当者 研究員 土屋治雄

平成12年度

整理（接合・復元・実測・原稿執筆まで）

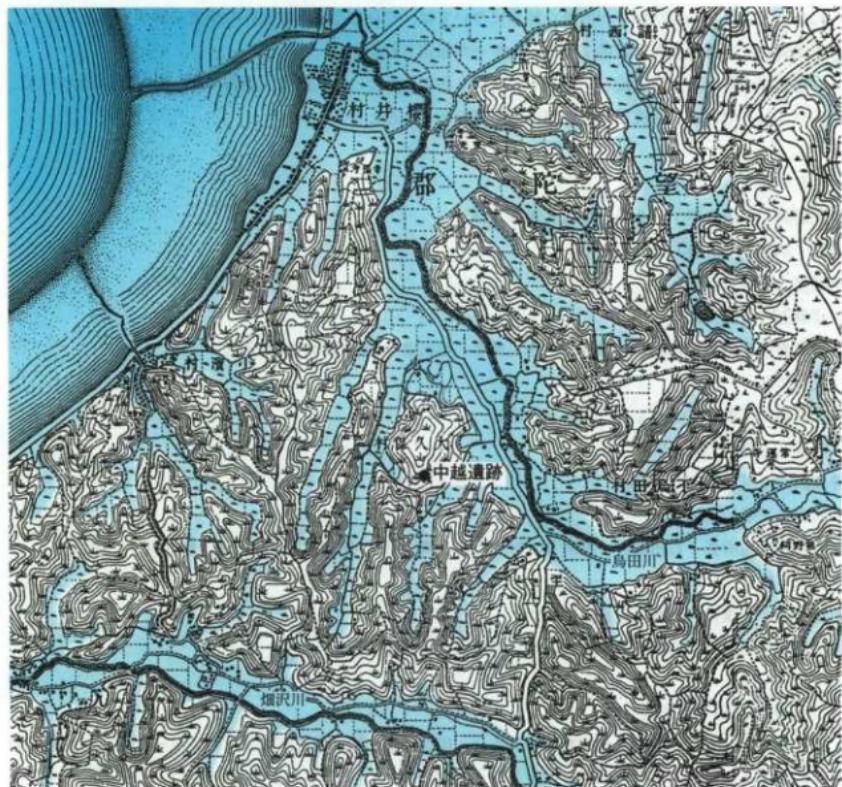
南部調査事務所長 高田博 副所長 小久賀隆史 担当者 室長 今泉潔

2 調査の方法（第3図）

調査にあたっては、調査地全域を覆うように、国土方眼座標（第IX座標系）のX=-72,300, Y=8,260を基点とする20m×20mの方眼網を設定し¹⁾、これを大グリッドとした。大グリッドの名称は起点から南北方向に南へ1, 2, 3、東西方向には東へA, B, Cとし、この数字とアルファベットを組み合わせて

グリッド名とした。そしてその大グリッドをさらに2m四方に分割し、北西隅が00、南西隅を99になるように割り振り、これを小グリッドとした。この大グリッドと小グリッドを組み合わせて、たとえば23C-45というように個々の地点を表記している。この表記は遺物の注記・記録類の整理にあたっても踏襲している。

上層の確認調査は調査対象面積の10%を目安に、平成5年度に調査対象面積3,500m²全域について確認調査を実施した。トレンチは調査地の形状に合わせてほぼ東西方向に設定した。その結果、調査地西側はすでに削平されており、一部には掘削も行われるなど、大きく搅乱されていることがわかった。また、遺構・遺物が希薄な部分もあったので、それらの地域を本調査区から除外して本調査を実施した。最終的な上層の本調査面積は2,600m²である。本調査の結果、縄文時代中期の埋甕1基、弥生時代の竪穴住居1軒、古墳時代の竪穴住居14軒、奈良・平安時代の竪穴住居13軒、掘立柱建物8棟を調査し、ほかに時期不明の竪穴住居1軒、近世の溝状遺構(S D01)・近世の土坑(S K01)などがあった。なお本調査にあたっては、各遺構に種別ごとの通し番号を付した。種別についてはアルファベットの略号で、竪穴住居をS I、



第1図 中越遺跡の位置と周辺の地形(約1/20,000)



第2図 中越遺跡と周辺の遺跡

掘立柱建物を S B, 溝状遺構を S D, 土坑を S K とし, これに通し番号を付した。今回の報告にあたって, 遺構番号を新たに追加したものはないが, 整理作業の結果, 遺構として認定しづらいと判断したものについては欠番とし, その都度本文中でふれることとする。

下層の確認調査は, 調査対象面積の半分を上層の本調査終了後に実施したために, 2か年にまたがっている。最終的に194m²の確認調査を実施した。確認調査の結果に基づいて, 160m²について本調査を実施し, 6地点で旧石器時代の遺物集中地点を調査した。

第2節 遺跡の位置と環境

1 地理的環境 (第1・2図, 図版1・2)

木更津市は房総半島西岸のほぼなかほどに位置し, 市域の南北に, 東京湾へ注ぐ清澄山系を源流とする小櫃川水系と小糸川水系によって大きく限られる。そして市の南西部には, 房総丘陵の北端部となる海蝕崖となった台地縁辺部がせまっており, 木更津市街地はおもにその北側の平坦部に展開している。1960年代に入ってから, 河口付近の干潟が徐々に埋め立てがはじまり, それまでの産業に工業も加えて, 京葉工業地帯の一翼を担って, 南房総の中核的な都市としてめざましい発展をしてきた。そして東京湾を横断する東京湾アクアラインが計画されるなかで, 市街地はさらに周囲の標高60mを超える, いわゆる木更津台地にまで広がるようになる。

木更津市域の台地は, 海蝕崖や小河川によって複雑に開析され, 台地奥部まで小支谷が入り込んでいる。調査地は, 南東から流れ東京湾に注ぐ, 烏田川南岸の台地上にある。中越遺跡が所在する台地は, 台地の基部から南北に約1kmあり, 東西幅が200mほどの南北に細長い舌状台地で, 台地の北端から400mほどどころに東西から浅い谷が入って, 先端部は独立丘陵状になっている。調査地はちょうど浅い谷の北側台地平坦部に位置し, 標高は30m前後になる。そして南側は調査地の平坦部が鞍部となって斜面を上がり, 台地の基部へと続いている。台地基部の南側には畠沢川が流れおり, 中越遺跡は畠沢川と烏田川に挟まれた地点に位置することになる。

調査地の基本層序をもつとも残りのよい地点で観察した結果は, 以下のとおりである。厚さ15cm~30cmの表土下に, 3層からなるⅡ層が数十cm堆積している。最上層のⅡa層は暗褐色土で古墳時代から奈良・平安時代にかけての遺物をもとに含み, Ⅱb層は黒褐色土で绳文時代から古墳時代にかけての遺物をもとに含む。Ⅱc層がソフトロームへの漸移層で, 砂群はもとにこの層から出土した。そしてそれ以下に立川ローム層が厚く堆積している。

2 歴史的環境 (第2図)

JR木更津駅周辺の現市街地は, 沖積地の砂丘列上に立地している。そうしたなかに金鈴塚古墳などが所在する。金鈴塚古墳はJR木更津駅から北東へ800メートルほどの微高地にあり, 1950年から本格的の発掘調査がはじまり, 出土品・石棺は1959年に重要文化財に指定された。また最近では四房遺跡²⁾などの集落遺跡も確認されるようになり, 低地での土地の利用状況が徐々に明らかになりつつある。

そして平坦地背後の台地上では, 早くから清見台地区・真船地区などの大規模な土地区画整理がはじまり, 昭和50年代に入ってからは, さらにその隣接地にいくつもの区画整理事業が立ち上がり, それに伴って請西遺跡群・大畠台遺跡群・千束台遺跡群などの発掘調査が本格化していった。

烏田川水系では, 河口付近に古墳群が点在し, 調査地北側の独立丘陵上には, 直径11m~20mの円墳5



第3図 調査地位置図

基からなる中越古墳群があり、また鳥田川対岸には、一部削平されてしまったが、円墳10基からなる九反目古墳群が所在する。これらのほとんどは未調査のために詳しいことはわからないが、木更津市域を含めた東京湾東岸地域は、古式古墳が多く分布することでよく知られている。調査地周辺では鳥田川水系左岸の湾岸に面する台地突端にあった手古塚古墳が、古式の古墳として著名である¹⁾。現在手古塚古墳は土取り工事によって消滅してしまったが、全長60mの前方後円墳で、副葬品には三角縁神獸鏡・碧玉製石劍などがあり、立地からしても、当地域の中心的な墳墓であることがわかる。

手古塚古墳周辺の小浜地区は、土地区画整理事業に伴って、(財)君津都市文化財センターが約18,000m²の発掘調査を実施した²⁾。調査結果によると、おもに弥生時代後期から奈良時代にいたる350軒を超える集落が、丘陵の傾斜面に展開する。また墓域としては古墳時代前期と後期の古墳群があった。また古墳時代中期の2か所の祭祀遺構は、多量の土器群とともに、石製模造品・白玉・鉄製品が出土しており、集落内における祭祀のありかを知ることができる貴重な資料である。

調査地に隣接した2地点で(財)君津都市文化財センターが発掘調査を実施している。平成8年度の調査では、調査面積が169m²と小さいが、それでも旧石器時代石器集中か所1か所、縄文時代の陥穴1基、古墳時代前期の竪穴住居1軒、奈良・平安時代竪穴住居3軒を調査している³⁾。平成12年度の調査も196m²という小面積ではあったが、古墳時代中期の竪穴住居1軒、平安時代の竪穴住居1軒を確認している。古墳時代中期の竪穴住居からは、TK47型式段階に相当すると考えられる甕が出土しており、5世紀第4四半期に帰属するものと考えられている⁴⁾。

なお今回報告する中越遺跡は、出土例が少ない小銅鏃が出土したことから、小銅鏃も含めて調査の概要がすでに『研究連絡誌』第42号(以下「連絡誌」という。)に掲載されている⁵⁾。今回の報告書作成にあたっても、その内容を援用しながら記述することとする。

注1 ベッセル椭円体((社)日本測量協会の精密測地網一次基準点測量作業規程)における基点の緯度経度値は、北緯3°5'20" 52.8857", 東經139°55'27.2006"になる。また世界測地系(日本測地系2000)による座標値は、X=-71,963.743 6. Y=7,966.2407になり、緯度経度値は、北緯35°21'04.70423", 東經139°55'15.53907"になる。

2 高梨友子 2001 「四房遺跡」(財)千葉県文化財センター

3 杉山晋作 1973 「千葉県木更津市手古塚古墳の調査速報」「古代」第56号

4 小沢 洋 1988 「小浜遺跡群I 俵ヶ谷古墳群」(財)君津都市文化財センター

小沢 洋ほか 1988 「小浜遺跡群II マミヤク遺跡」(財)君津都市文化財センター

酒巻忠史 1995 「桜ヶ丘遺跡群発掘調査報告書—鶴岡1号墳・鶴岡遺跡・俵ヶ谷遺跡」(財)君津都市文化財センター

5 山形美智子 1997 「中越遺跡」(財)君津都市文化財センター

6 斎藤礼次郎 2001 「中越遺跡」木更津市内遺跡発掘調査報告書—平成12年度一 木更津市教育委員会

7 麻生正信ほか 1994 「木更津市中越遺跡出土の小銅鏃について」『研究連絡誌』第42号 (財)千葉県文化財センター

第2章 遺構・遺物

第1節 旧石器時代

1 概要

(1) 基本層序 (第4図)

IIc層 (黒褐色土) いわゆる「新期テフラ」と呼ばれている層の直下の層である。

III層 (暗黄褐色土) 本層が立川ローム最上層に相当する。いわゆる「ソフトローム層」である。色調は均質ではない。ソフト化の著しい箇所では、IV層～VI層付近までソフト化する場合がある。

IV層 (黄褐色) 硬質のローム層で、いわゆる「ハードローム層」である。IV層の下部の方が、色調が暗い。細分可能な地点もあったが、全地点において細分することができなかった。

V層 (暗褐色土) 第1黒色帯に相当する褐色から黄褐色の硬質ローム。ATの上位への拡散により、少し火山ガラスを含む。

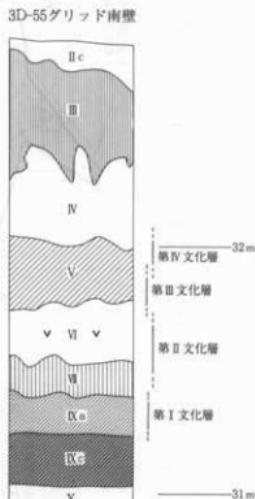
VI層 (明黄褐色土) AT (姶良丹沢火山灰) が集中的に包含される。白色火山ガラスのブロック (直径5～10cm) を多く含む。

VII層 (暗褐色) 第2黒色帯上部に相当する。赤褐色、暗青褐色スコリアを含む。

IXa層 (暗褐色土) 第2黒色帯下部の上半である。赤色、黒色、暗緑色スコリアを含む。

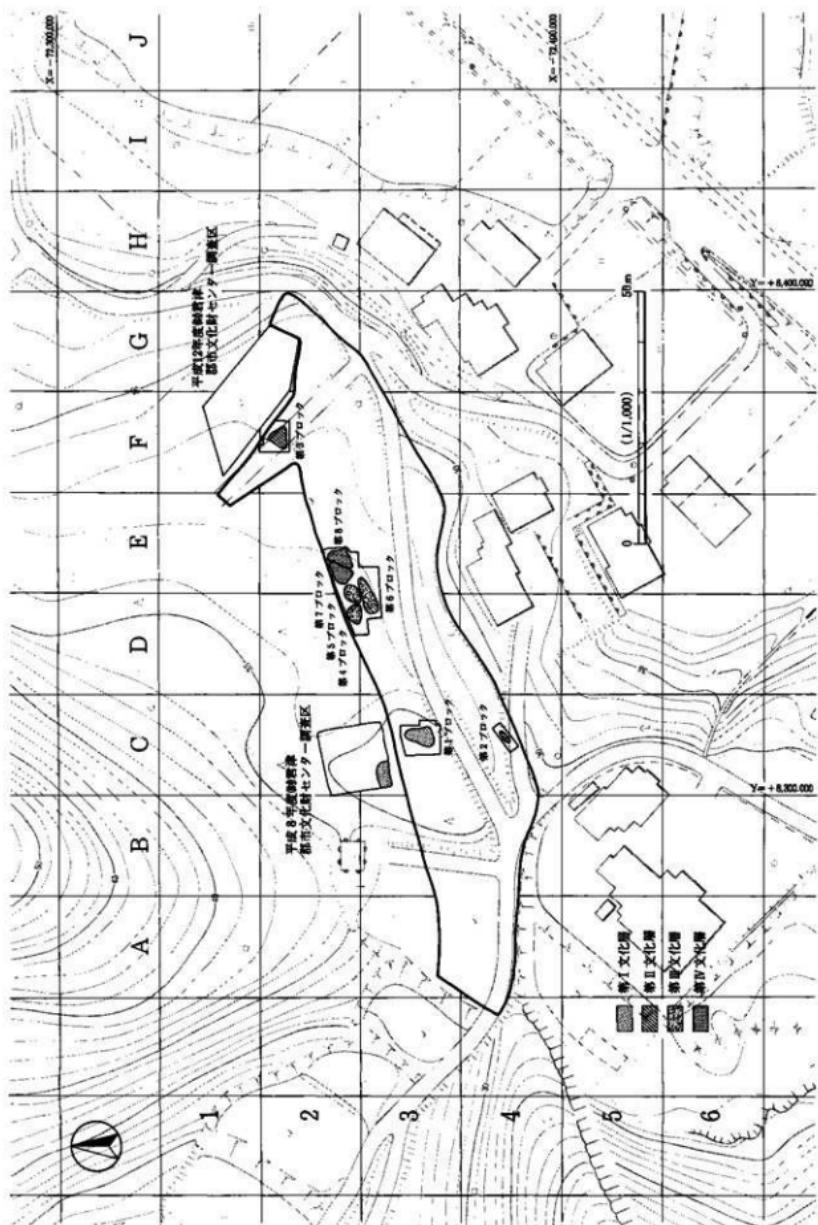
IXc層 (暗褐色土) 第2黒色帯下部の下半である。IXa層に似るが、色調はさらに暗色で、暗緑色スコリアがかなり目立つ。

X層 (暗茶褐色土) 立川ローム最下層で、IXc層に比べてスコリアの量が極端に少なくなる。X層の細分は本遺跡では行っていないが、X層以下は粘性を帯びた灰褐色ロームとなり、それを武藏野ローム最上層 (XI層) と識別した。



第4図 基本層序

第5図 下層本調査範囲とプロックの位置



(2) 文化層概要 (巻頭図版2, 第5図, 第1~3・16表)

旧石器時代の文化層は、第Ⅰ文化層～第IV文化層の4文化層に分離できた。そのほかに、これらの文化層に所属しないものは、単独出土石器として取り扱った。

出土層位については、第4図のとおりである。文化層別の出土分布とブロックの位置は、第5図のとおりである。各文化層とも出土層位に上下の幅をもつが、各文化層の出土層位と出土集中層位から生活面を推定すると以下のとおりとなる。

① 第Ⅰ文化層：IX c 層上部からⅧ層下部にかけて出土。石器の集中する層位は、IX a 層である。IX a 層に生活面をもつ文化層と推定できる。第1ブロックが相当する。調査区北西部に3 C グリッドに位置し、第1ブロックと平成8年度に（財）君津郡市文化財センターで調査した地点の石器群も同じ文化層の所産のものと考えられる。地形的には、平坦面に分布している。

② 第Ⅱ文化層：Ⅶ層からⅥ層にかけて出土。石器の集中する層位は、出土点数が少ないので明確ではない。おそらく、Ⅷ層に生活面を持つ文化層と推定できる。第2・3ブロックが相当する。調査区南西部と北東部に位置する。地形的には、やや傾斜した面に分布する。

③ 第Ⅲ文化層：Ⅶ層下部からⅣ層下部にかけて出土し、比較的出土層位に幅がある。石器の集中する層位は、Ⅵ層上部からⅣ層下部である。本文化層は、出土層位の上下幅も大きいことから、ひとつの文化層としてまとめられない可能性もある。しかしながら、本報告では、石器群の様相と出土状況から、Ⅶ層上部からⅥ層下部に生活面を持つ文化層と推定して、取り扱うことにする。第4～6ブロックが相当する。調査区中央北側に位置する。地形的には、比較的平坦面に分布する。

第1表 中越遺跡文化層別器種組成表

| 文化層 | ブロック | ナイフ形石器 | 鏡形石器 | 素器 | 研磨 | 磨石 | 二次加工のある斜片 | 微細削離のある斜片 | 石核 | 剥片 | 片持 | 縫片 | 縫 | 統計 |
|-----------|-------|---------|---------|---------|---------|----------|-----------|-----------|---------|----------|-----------|----------|-----------------|-------------------------|
| I | 1 | | | | | 3 | 2 | 1 | 3 | 5 | 5 | 7 | | 34 4.64 |
| | | | | | | 276.00 | 26.05 | 5.00 | 63.26 | 102.70 | 1.55 | 353.05 | | 942.27 4.79 |
| I 合計 | | | | | | 3 | 2 | 1 | 3 | 5 | 5 | 7 | | 34 4.64 |
| | | | | | | 276.00 | 26.05 | 5.00 | 63.26 | 102.70 | 1.55 | 353.05 | | 942.27 4.79 |
| II | 2 | | | | | | | | | 2 | 2 | | | 4 0.77 |
| | 3 | | | | | | | | | 9.06 | 2.90 | | | 11.76 0.05 |
| II 合計 | | | | | | | | | | | | 5 | | 5 0.97 |
| | | | | | | | | | | | | 9.06 | | 46.36 0.44 |
| III | 4 | 12.00 | | | | | 1 | | | 13 | 16 | 2 | | 36 7.35 |
| | 5 | 2 12.10 | 3 2.81 | 1 55.84 | 1 12.00 | 4 534.95 | 1 0.30 | 1 1.51 | 1 68.03 | 1 12 | 3 | 1 | | 30 5.60 |
| | 6 | 2 7.65 | | 1 5.04 | 1 4.00 | | 2 5.05 | 2 49.40 | 1 10.04 | 1 14.16 | 1 0.32 | 1 11.83 | 750.00 | 745.00 3.85 |
| III 合計 | | 4 19.75 | 7 15.71 | 4 61.68 | 2 16.71 | 4 534.95 | 2 14.25 | 4 55.85 | 7 97 | 228.00 | 2.95 | 5 103.33 | 750.00 | 1,075.95 9.45 |
| IV | 7 | 2.30 | | | | | 2 | 2 | 8 | 5 | 145 | 20 | | 181 35.01 |
| | 8 | | | | | | 9.75 | 30.19 | 132.12 | 7 106.32 | 1 11.21 | 1 171 | 16 | 203 39.27 |
| IV 合計 | | 2.30 | | | | | 3 | 1 | | | | | 3,815.97 | 1,800.00 5,619.85 55.95 |
| 单體出土 | 9 | | | | | | 3 | 3 | 2 | 35 | 35 | 36 | | 394 14.38 |
| | | | | | | 27.00 | | 13.00 | 8.43 | 92.01 | | | | 10 1.93 |
| 单體出土 合計 | | | | | | 27.00 | | 13.00 | 8.43 | 92.01 | | | | 72.43 0.37 |
| 縫合点出現率(%) | 5 | 7 | 5 | 5 | 6 | 11 | 10 | 6 | 65 | 30 | 355 | 57 | 517 10.00 | |
| | 22.04 | 16.71 | 16.71 | 16.71 | 910.05 | 66.56 | 79.95 | 201.32 | 600.75 | 14.36 | 11,451.04 | 6,382.00 | 18,804.40 10.00 | |
| 縫合点出現率(%) | 0.97 | 1.35 | 0.97 | 0.97 | 1.16 | 2.13 | 1.55 | 1.16 | 1.57 | 5.90 | 64.41 | 7.16 | 100.00 | |
| 縫合点出現率(%) | 0.11 | 0.08 | 0.45 | 0.05 | 4.50 | 0.20 | 0.40 | 1.02 | 3.08 | 0.07 | 87.70 | 32.00 | 100.00 | |

(上級：点数、下級：重量(克))

④ 第Ⅳ文化層：Ⅴ層上部からⅣ層にかけて出土し、第Ⅲ文化層と同様に、比較的出土層位の幅がある。一部Ⅴ層上部に集中するものがあるものの、Ⅴ層上部からⅣ層下部に石器が集中する。第7・8ブロックが相当する。調査区中央部北側に位置する。地形的には、比較的平坦面に分布する。

第15図のとおり第Ⅲ文化層と第Ⅳ文化層の石器群と近接して分布するが、第Ⅲ文化層の石器群はほとんど疊を伴わない。それに対して、第Ⅳ文化層の石器群は疊を集中的に伴うという点でも相違点がみられる。

第2表 中原遺跡文化層別石材組成表

| 文化層 | ブロック | ガラス質 黑色安山岩 等 | チャート 等（安山岩） | トロトロ 石（安山岩） | 安山岩 | ホルンフェルス | 隕灰岩 | 玉髓（J ナラ合む） | 珪化木 | 結晶灰岩 | 珊瑚石 | 砂岩 | 流紋岩 | 緑色凝灰岩 質灰岩 | 板岩 | 総計 | 総計の 割合 |
|--------------|-------|--------------------|-----------------|----------------|------------|--------------|-----|---------------|-----|------------|-------------|-------------|-----|--------------|-------------|----------------|-----------|
| I | 1 | 3 33.82 | 3 66.85 | 5 90.16 | | | | 2 1.82 | | 2 0.24 | 1 172.00 | 1 603.50 | | | 3 948.27 | 34 4.64 | |
| | II 合計 | 3 33.82 | 3 66.85 | 5 90.16 | | | | 2 1.82 | | 2 0.24 | 1 172.00 | 1 603.50 | | | 3 948.27 | 34 4.64 | |
| II | 2 | | | | 2 2.30 | | | | | | | | | | | 4 11.75 | 9.06 |
| | 3 | | 1 8.00 | | 1 24.00 | | | | | | | | | | | 5 46.85 | 0.44 |
| III 合計 | | | 1 8.00 | | 3 32.80 | | | | | | | | | | | 9 94.62 | 1.74 |
| | 4 | 31 36.77 | 1 13.00 | 5 8.70 | | | | | | | | | | | | 36 164.30 | 0.76 |
| IV | 5 | 3 18.86 | 1 1.81 | 10 244.41 | | 3 24.79 | | | | | | | | | | 30 750.41 | 5.80 |
| | 6 | 2 7.10 | 2 14.12 | 3 11.05 | | 1 81.84 | | 2 10.04 | | 2 21.82 | | 1 17.06 | | | | 25 704.43 | 4.43 |
| IV 合計 | 7 | 37 89.43 | 4 26.73 | 41 266.57 | | 17 76.43 | | 4 10.04 | | 1 21.82 | | 4 56.90 | | 1 58.15 | | 40 1,875.88 | 9.46 |
| | 8 | 2 12.96 | 37 1,125.64 | 51 1,791.28 | | 4 17.36 | | | | | | | | | | 5 119.24 | 35.81 |
| V | 9 | 8 163.67 | 45 1,001.65 | 7 319.40 | | 5 335.84 | | 1 5.48 | | | | | | | | 5 37.50 | 39.28 |
| | 10 合計 | 10 176.85 | 150 2,323.20 | 38 2,110.65 | | 10 353.20 | | 1 5.48 | | | | | | | | 10 166.47 | 56.19 |
| VII | 11 | 4 16.30 | | 1 27.09 | | | | | | | | | | | | 4 22.13 | 10.95 |
| | 12 合計 | 4 16.30 | | 1 27.09 | | | | | | | | | | | | 4 22.13 | 72.42 |
| VI | 13 | 132 226.39 | 2 25.53 | 2 0.39 | | 22 4.08 | | 43 8.12 | | 14 3.98 | | 3 0.18 | | 38 0.19 | | 15 46.85 | 100.00 |
| | 14 合計 | 132 226.39 | 2 25.53 | 2 0.39 | | 22 4.08 | | 43 8.12 | | 14 3.98 | | 3 0.18 | | 38 0.19 | | 15 46.85 | 100.00 |
| 総計の点数割合 (%) | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 総計の重量割合 (%) | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 総計の点数組成比 (%) | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 総計の重量組成比 (%) | | | | | | | | | | | | | | | | | |

[上段: 点数、下段: 重量(g)]

第3表 全文化層石器組成表

| 石 材 | ナイフ形 石器 | 楔形石器 | 刮削器 | 棒器 | 籠石 | 二次加工 のある石 器 | 鉄質鐵 質のあら わし | 石核 | 剥片 | 碎片 | 縫 隙 | 繊片 | 合計 | 組成 比 (%) | | |
|--------------------|------------|------------|------------|------------|-------------|-------------------|-------------------|-------------|--------------|--------------|--------------------|------------------|--------------|------------------|--------|--|
| 風磨石 | 4 19.75 | 1 2.81 | | 2 16.71 | | 3 11.88 | 3 4.95 | | | 5 7.36 | 11 2.50 | | | 28 55.96 | 5.42 | |
| 安山岩 | 5 9.75 | 3 48.79 | | 2 59.00 | | 1 17.33 | | | 2 6.68 | 8 1.94 | | | 22 355.78 | 1.79 | | |
| ガラス質黒色安山岩 | 1 3.20 | | | | | 1 9.29 | | | | 24 121.17 | 10 5.62 | 1 97.00 | | 37 236.28 | 1.19 | |
| トロトロ石(安山岩) | | | | | | | | 1 34.00 | 1 22.85 | | | | | 2 56.85 | 0.39 | |
| ホルンフェルス | | 1 27.09 | | | | | 1 2.05 | | 2 8.86 | | 5 571.80 | 42 1,560.80 | | 42 2,170.60 | 10.94 | |
| 流紋岩 | | | | | 2 376.00 | | 1 7.70 | | 1 55.69 | 1 0.06 | 25 5,183.00 | 139 5,672.41 | | 139 11,294.86 | 56.94 | |
| 結晶灰岩 | | | | | | | 1 31.62 | | | | | | | 1 31.62 | 0.16 | |
| 樹脂質灰岩 | | | | | | 2 10.29 | 1 5.75 | 2 39.19 | 10 130.27 | | | | | 15 185.80 | 2.90 | |
| 珪化木 | 1 2.29 | | 1 5.84 | | | | | 1 10.04 | | 1 7 | 3 3.00 | 8 110 | | 1 139 | 0.94 | |
| チャート | 5 0.71 | | | | | 4 29.77 | 3 26.05 | | 63.93 | 1 1.16 | 245.00 1,943.97 | | 2,309.02 | | 11.64 | |
| 玉髓(メノウ含む) | | | | | | | | | | 1 1.43 | 0 0.39 | 1 5.48 | | 7.20 | 0.04 | |
| 砂岩 | | | | | 2 435.95 | | | | 4 4.20 | | 266.00 1,924.92 | | 2,631.07 | | 13.27 | |
| 隕灰岩 | | | 1 7.05 | | | | 1 1.84 | | 77.47 | 2 2.90 | | 343.46 432.72 | | 2.18 | | |
| 緑色凝灰岩 | | | | | | | | | | 1 46.85 | | | | 1 46.85 | 0.24 | |
| 点数合計 | 5 22.04 | 7 15.75 | 5 88.77 | 2 16.71 | 6 910.95 | 11 69.56 | 10 79.96 | 6 201.52 | 65 609.75 | 6 14.59 | 37 6,362.90 | 333 11,451.04 | | 517 19,843.45 | 100.00 | |
| 重量合計 | | | | | | | | | | | | | | 16 100.00 | | |
| 点数割合 (%) | 0.97 | 1.35 | 0.97 | 0.39 | 1.16 | 2.13 | 1.93 | 1.16 | 12.97 | 5.80 | 7.16 | 64.41 | | 100.00 | | |
| 重量割合 (%) | 0.11 | 0.08 | 0.45 | 0.08 | 0.49 | 0.38 | 0.40 | 1.02 | 3.03 | 0.07 | 2.98 | 57.73 | | 100.00 | | |
| [上段: 点数、下段: 重量(g)] | | | | | | | | | | | | | | | | |

2 文化層各説

(1) 第Ⅰ文化層 (第4表)

IX a層に生活面を持つと推定される。第1ブロックが相当する。北西に隣接して平成8年度に(財)君津都市文化財センターが調査して出土した石器群と出土層位や石器組成が共通することから、おそらく同一文化層の石器群と捉えることができる。また、両石器群とも、地形的には、この台地の中では最高位面に分布し、平坦面に形成されるという共通性もみられる。

① 第1ブロック (第6~9図、第4表、図版15)

出土状況 平面分布は、約6m×3mの長方形の範囲に、散漫に分布する。ブロックのほぼ中央部に、接合資料の4a~dが小範囲に集中して分布し、この接合資料に近接して、敲石が分布している。出土層位は、IX c層からVII層にかけて分布するが、ほとんどのものがIX a層から出土している。

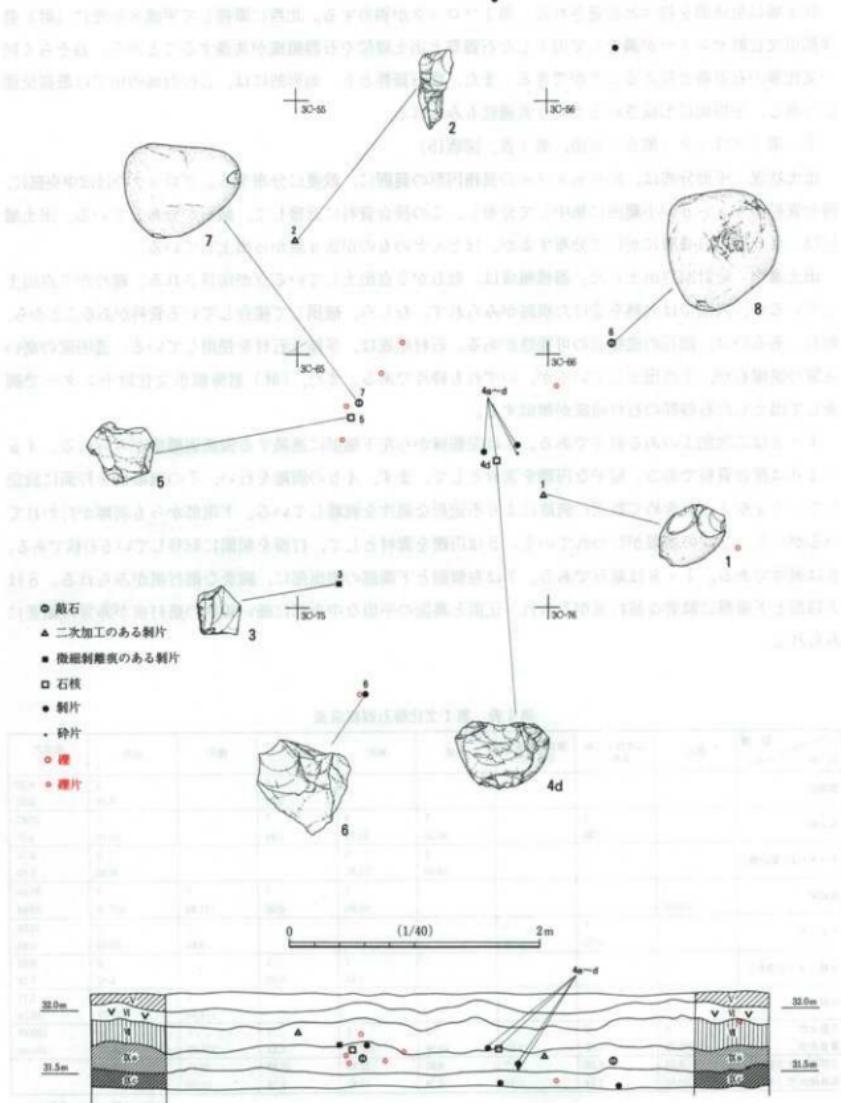
出土遺物 総計24点出土した。器種組成は、敲石が2点出土している点が注目される。礫片が7点出土しているが、肉眼では火熱を受けた痕跡がみられず、むしろ、破損して接合している資料があることから、敲石、あるいは、敲石の破損品の可能性がある。石材組成は、多様な石材を使用している。透明度の高い良質の黒曜石が、2点出土しているが、いずれも碎片である。また、(財)君津都市文化財センターで調査して出土した石器群の石材組成が類似する。

1・2は二次加工のある剥片である。3は左側縁から左下端部に連続する微細剥離痕がみられる。4a~4dは接合資料である。扁平な円礫を素材として、まず、4bの剥離を行い、その剥離面を打面に設定して、4aや4cを含めて数回の剥離により不定形な剥片を剥離している。下端部からも剥離が行われているが、2・3回の剥離が行われている。5は円礫を素材として、打面を頻繁に転移している石核である。6は剥片である。7・8は敲石である。7は右側面と下端部の突出部に、顕著な敲打痕がみられる。8は上端部と下端部に顕著な敲打痕がみられ、正面と裏面の平坦な中央部に細い線状の敲打痕が非常に顕著にみられる。

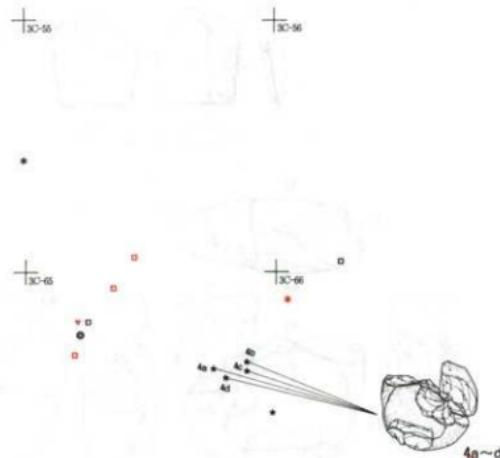
第4表 第Ⅰ文化層石器組成表

| 石 材 | 磨石 | 二次加工のあ る剥片 | 微細剥離痕の ある剥片 | 石核 | 剥片 | 碎片 | 礫片 | 合計 | 組成比 (%) |
|------------|-------------|---------------|----------------|------------|------------|-----------|-------------|-------------|----------------|
| 黒曜石 | | | | | | 2 0.24 | | 2 0.24 | 8.33 0.03 |
| 安山岩 | | 1 17.33 | | 1 49.26 | 2 22.73 | 1 0.84 | | 5 90.16 | 20.83 9.51 |
| トロトロ石(安山岩) | | | | 1 34.00 | 1 22.85 | | | 3 56.85 | 8.33 6.00 |
| 流紋岩 | 2 376.00 | | | | 1 55.69 | 1 0.06 | 5 171.83 | 9 603.58 | 37.50 63.64 |
| チャート | | 1 8.70 | 1 5.09 | | | | 1 9.83 | 3 23.62 | 12.50 2.49 |
| 玉髓(メノウ含む) | | | | | 1 1.43 | 1 0.39 | | 2 1.62 | 8.33 0.19 |
| 砂岩 | | | | | | | 1 172.00 | 1 172.00 | 1.17 18.14 |
| 点数合計 | 2 | 2 | 1 | 2 | 5 | 5 | 7 | 24 | 100.00 |
| 重量合計 | 376.00 | 26.03 | 5.09 | 63.26 | 102.70 | 1.53 | 353.06 | 948.27 | 100.00 |
| 点数組成比(%) | 8.33 | 8.33 | 4.17 | 8.33 | 20.83 | 20.83 | 29.17 | 100.00 | |
| 重量組成比(%) | 39.65 | 2.74 | 0.54 | 8.78 | 10.83 | 0.16 | 37.30 | 100.00 | |

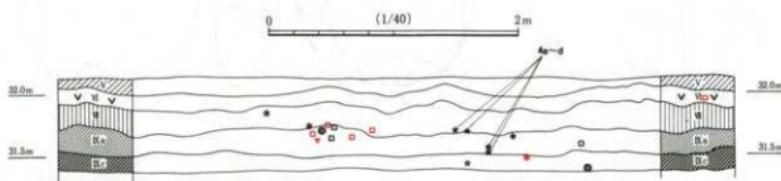
〔上段：点数、下段：重量(g)〕



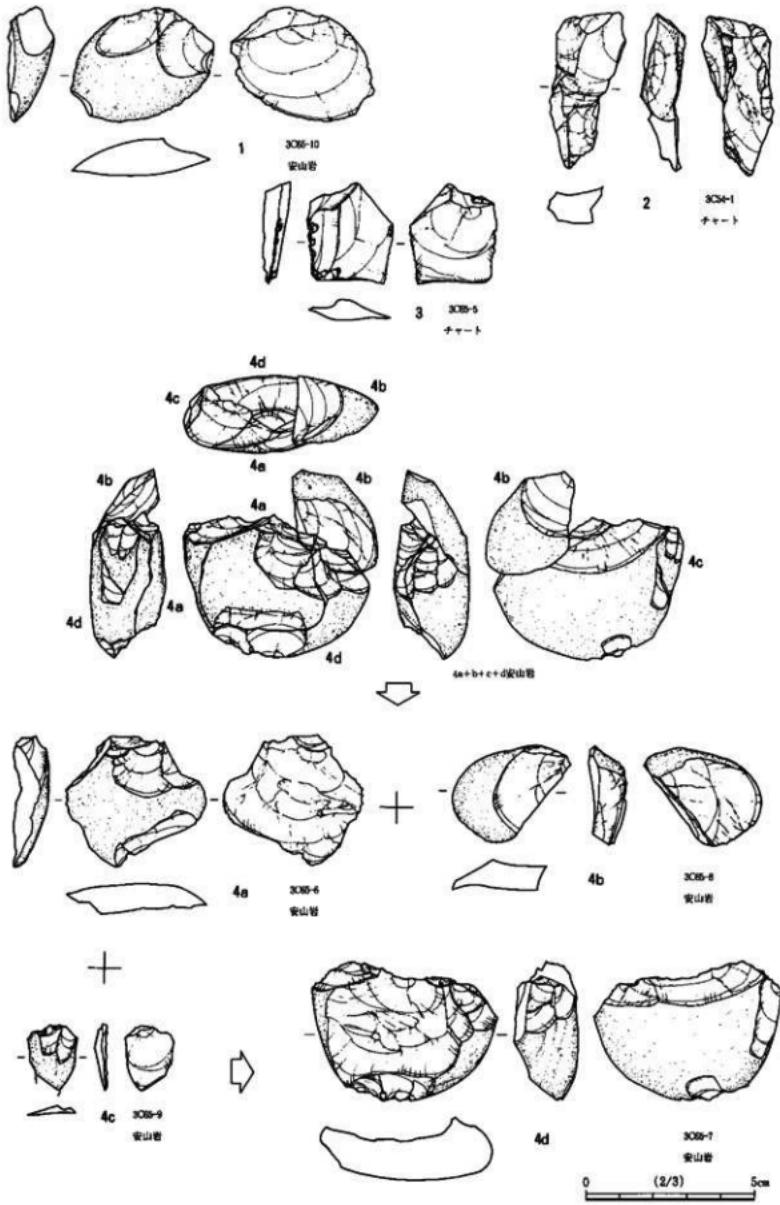
第6図 第I文化層 第1ブロック器種別分布



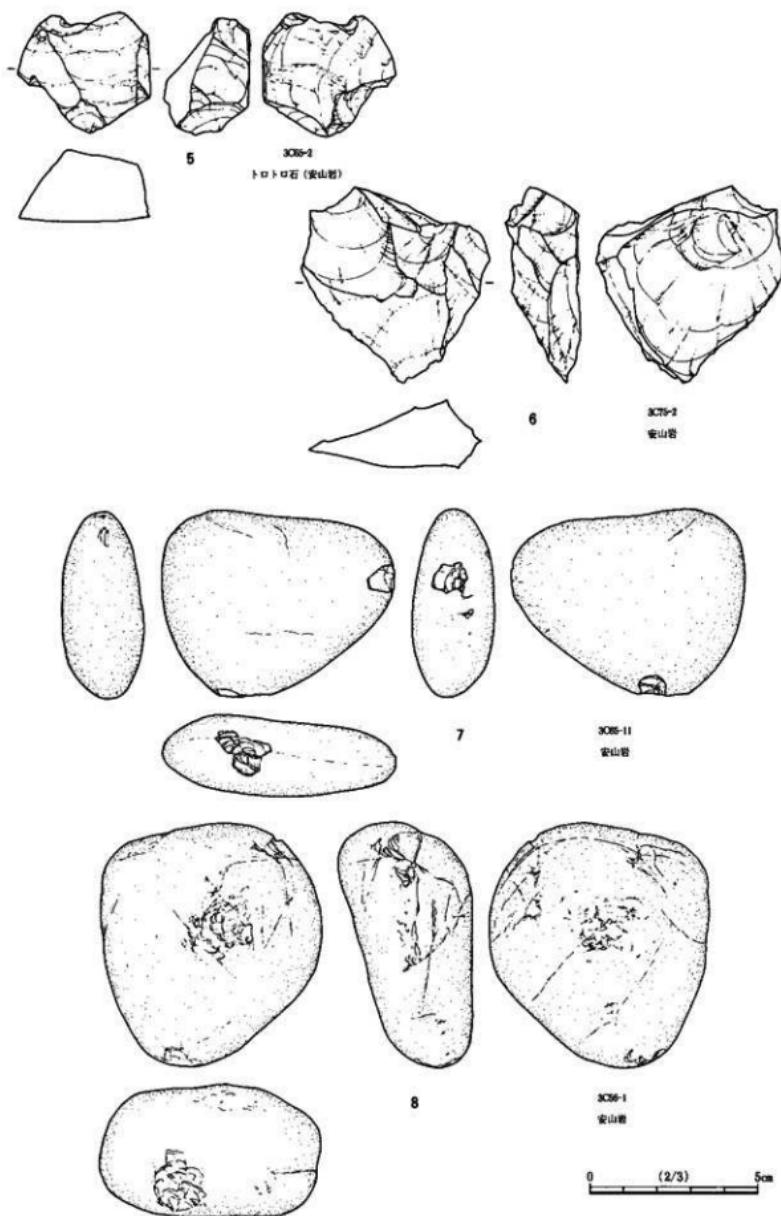
- 黒曜石
- ★ 安山岩
- トロトロ石（安山岩）
- 流紋岩
- チヤート
- 玉髓（メノウ含む）
- 流紋岩
- チヤート
- ▼ 砂岩



第7図 第I文化層 第1ブロック石材別分布



第8図 第I文化層 第1ブロック出土石器（1）



第9図 第I文化層 第1ブロック出土石器（2）

(2) 第Ⅱ文化層(第5表)

VII層に生活面を持つと推定される。石器群の内容は、出土点数が少なく、製品も出土していないことから、明確ではない。第2・3ブロックが相当する。第2ブロックは調査区南西部、第3ブロックは調査区北東部に位置し、両ブロックの距離が離れている。両ブロックの同時性や同一文化層であるかについては、石器群の内容が明確でないので、厳密に言えば同一文化層として取扱うことは困難である可能性もあるが、ここでは、出土層位のVI層下部からVII層にかけて出土し、VII層に集中することから、同一文化層として捉えた。

第5表 第Ⅱ文化層石器組成表

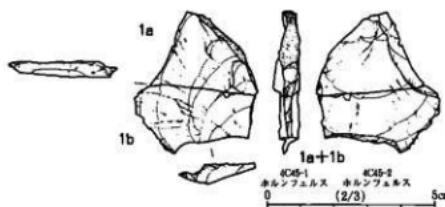
| 石 材 | 剥片 | 鉈片 | 縫片 | 合計 | 組成比 (%) |
|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------------|
| カルンフェルス | 2 8.86 | | 1 24.00 | 3 33.86 | 33.34 33.33 |
| 泥灰岩 | | | 1 47.00 | 1 47.00 | 11.11 47.56 |
| チャート | | | 1 8.00 | 1 8.00 | 11.11 8.11 |
| 砂岩 | | | 2 7.86 | 2 7.86 | 22.22 7.97 |
| 矽灰岩 | | 2 2.90 | | 2 2.90 | 22.22 2.94 |
| 点数合計 | 2 8.86 | 2 2.90 | 5 86.86 | 9 98.62 | 100.00 100.00 |
| 重量合計 | 22.22 | 22.22 | 55.56 | 100.00 | |
| 点数組成比 (%) | 8.86 | 2.94 | 86.86 | 100.00 | |
| 重量組成比 (%) | | | | | |

[上段: 点数、下段: 重量(g)]

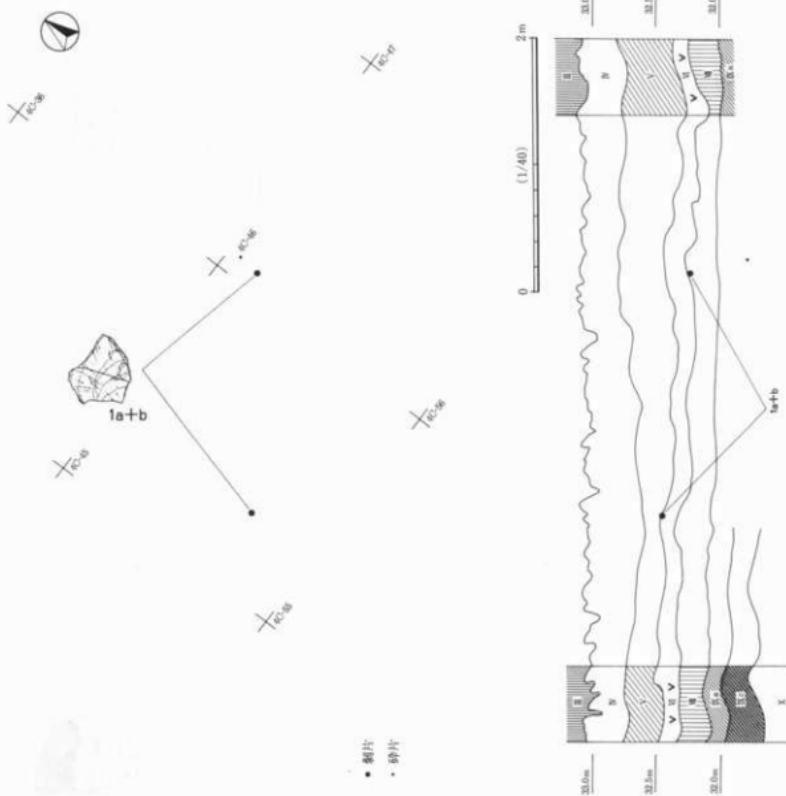
① 第2ブロック(第10~12図、第6表、図版15)

出土状況 約2mの範囲から4点出土した。

出土遺物 1aと1bは接合資料である。右側面に自然面を持ち、打面が狭い剥片である。1aと1bとの折断面のほか、下端部にも折断面がみられる。



第10図 第Ⅱ文化層 第2ブロック出土石器



第11図 第II文化層 第2ブロック器種別分布

第6表 第II文化層 第2ブロック石器組成表

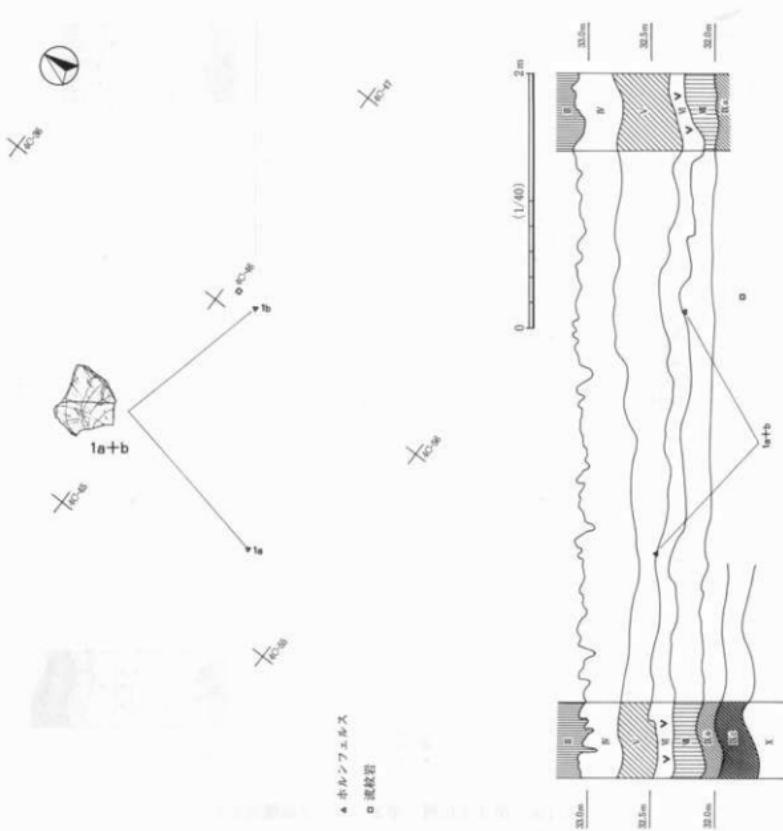
| 石 材 | 刮片 | 鋸片 | 合計 | 組成比 (%) |
|-----------|-------|-------|--------|---------|
| ホルンフェルス | 2 | | 2 | 50.00 |
| | 2.86 | | 2.86 | 49.65 |
| 礫状岩 | | 2 | 2 | 50.00 |
| | | 2.90 | 2.90 | 50.35 |
| 点数合計 | 2 | 2 | 4 | 100.00 |
| 重量合計 | 2.86 | 2.90 | 5.76 | 100.00 |
| 点数組成比 (%) | 50.00 | 50.00 | 100.00 | |
| 重量組成比 (%) | 49.65 | 50.35 | 100.00 | |

[上段：点数、下段：重量(g)]

第7表 第II文化層 第3ブロック石器組成表

| 石 材 | 刮片 | 合計 | 組成比 (%) |
|-----------|--------|--------|---------|
| ホルンフェルス | 1 | 1 | 20.00 |
| | 24.00 | 24.00 | 27.63 |
| 流紋岩 | 1 | 1 | 20.00 |
| | 47.00 | 47.00 | 54.11 |
| チャート | 1 | 1 | 20.00 |
| | 8.00 | 8.00 | 9.21 |
| 砂岩 | 2 | 2 | 40.00 |
| | 7.86 | 7.86 | 9.05 |
| 点数合計 | 5 | 5 | 100.00 |
| 重量合計 | 86.86 | 86.86 | 100.00 |
| 点数組成比 (%) | 100.00 | 100.00 | |
| 重量組成比 (%) | 100.00 | 100.00 | |

[上段：点数、下段：重量(g)]



第12図 第Ⅲ文化層 第2ブロック石材別分布

③ 第3ブロック（第13・14図、第7表）

出土状況 約3.5m×3.5mの範囲に散漫に出土している。VI層からVII層にかけて出土しているが、VII層に集中している。

出土遺物 総計5点出土しているが、すべて礫片である。すべて円礫を素材としている。数点は、肉眼観察によって火熱を受けたと思われるものもみられる。礫群として捉えることも可能であるが、判然としない。

12P-04



12P-14

12P-15

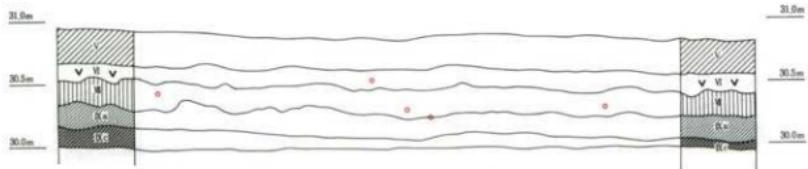
12P-24

12P-25

12P-26

0 (1/40) 2m

● 鏽片



第13図 第II文化層 第3ブロック器種別分布

+ 2P-04



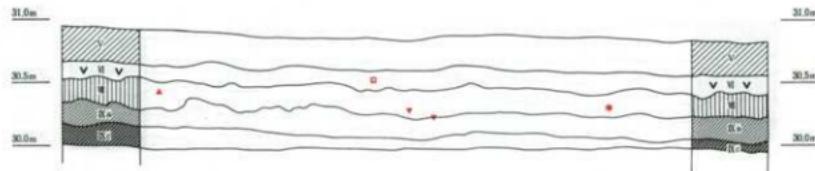
+ 2P-14

+ 2P-15

+ 2P-26

- ▲ ホルンフェルス
- 流紋岩
- ★ チャート
- ▼ 砂岩

0 (1/40) 2m



第14図 第Ⅱ文化層 第3ブロック石材別分布

(3) 第Ⅲ文化層(第15図、第8表、図版15・16)

V層上部からVI層下部に生活面を持つと推定される。第IV文化層と近い段階の石器群の可能性もある。第4～6ブロックが相当し、これらのブロックは、調査区中央部西側に接して出土している。接合資料は、ブロック間ではみられなかった。器種組成の特徴は、ナイフ形石器4点、楔形石器7点、削器4点、搔器2点で製品の比率が比較的高く、礫・礫片が6点(6.67%)で礫群と捉えることができないほど数量が少ない。石材組成の特徴は、黒曜石が25点(27.78%)で占める割合が比較的高く、ナイフ形石器と搔器は、すべて黒曜石で占められていることが、この文化層の大きな特徴となっている。黒曜石は、比較的の良質ではあるが、気泡が多く含まれ、黒色でやや透明度のある石質をしている。ガラス質黒色安山岩(30.01%)・安山岩(18.89%)で安山岩の占める割合が非常に高い。その他、数量は少ないが流紋岩・チャート・砂岩・凝灰岩など比較的多様な石材を用いている。第IV文化層との大きな相違点は、礫・礫片の量が極めて少ないと、黒曜石の占める割合が高く、ナイフ形石器と搔器が黒曜石で構成されることがあげられる。

第8表 第Ⅲ文化層石器組成表

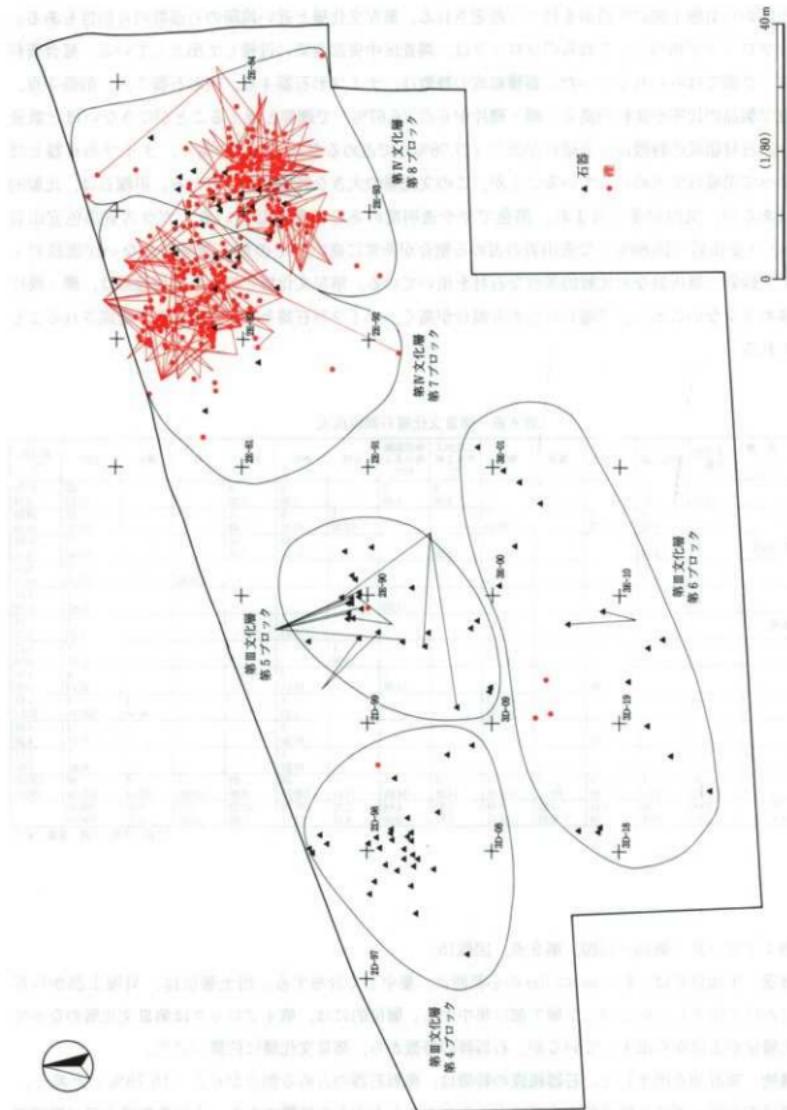
| 石 材 | ナイフ 形 石 器 | 楔形石器 | 削器 | 搔器 | 礫石 | 二次加工 のある剥 片 | 微細剥 片のある 剥片 | 石核 | 剥片 | 碎 片 | 礫 片 | 合計 | 組成比 (%) | |
|-----------|--------------------|-----------|------------|------------|-------------|-------------------|-------------------|------------|-------------|------------|-------------|--------------|----------------|---------------|
| 黒曜石 | 4 19.75 | 3 2.81 | | 2 16.71 | | 2 5.06 | 2 4.95 | | 5 7.36 | 9 2.26 | | 28 58.90 | 27.78 3.14 | |
| 安山岩 | | 5 9.70 | 2 46.79 | | 2 99.00 | | | 1 69.03 | 6 37.95 | 1 1.10 | | 17 265.57 | 18.89 14.16 | |
| ガラス質黒色安山岩 | | 1 3.20 | | | | 1 9.29 | | | 15 41.32 | 10 5.62 | | 27 50.43 | 30.01 3.17 | |
| 流紋岩 | | | | | | | | | | | 1 739.00 | 4 13.23 | 5 752.23 | 40.10 |
| 珪質頁岩 | | | | | | | 1 31.62 | | | | | | 1 31.62 | 1.11 1.69 |
| 巖屑質頁岩 | | | | | | | | | | 1 6.63 | | | 1 6.63 | 1.11 0.35 |
| 珪化木 | | | | | | | | 1 10.04 | | | | | 1 10.04 | 1.11 0.54 |
| チャート | | | 1 5.84 | | | | 1 19.26 | | 2 14.81 | | | | 4 38.73 | 4.44 2.06 |
| 砂岩 | | | | | 2 435.95 | | | | 1 4.39 | | | 1 89.00 | 4 529.15 | 4.44 28.11 |
| 凝灰岩 | | | | 1 7.05 | | | | | 3 69.38 | | | | 4 76.43 | 4.44 4.08 |
| 緑色巖灰岩 | | | | | | | | | 1 46.85 | | | | 1 46.85 | 1.11 2.56 |
| 支数合計 | 4 | 7 | 4 | 2 | 4 | 3 | 4 | 2 | 34 | 20 | 1 | 5 | 90 | 100.00 |
| 重量合計 | 19.75 | 15.71 | 61.60 | 16.71 | 534.95 | 14.35 | 54.86 | 79.07 | 228.30 | 5.98 | 739.00 | 102.23 | 1,875.58 | 100.00 |
| 点数組成比(%) | 4.44 | 7.78 | 4.44 | 2.22 | 4.44 | 3.33 | 4.44 | 2.22 | 37.78 | 22.22 | 1.11 | 5.56 | 100.00 | |
| 重量組成比(%) | 1.05 | 0.84 | 3.29 | 0.89 | 28.52 | 0.77 | 2.92 | 4.22 | 12.17 | 0.48 | 39.40 | 5.45 | 100.00 | |

[上段：点数、下段：重量(g)]

① 第4ブロック(第16～18図、第9表、図版15)

出土状況 平面分布は、約3m×2.5mの小範囲に、集中して分布する。出土層位は、VI層上部からIV層下部にかけて出土しているが、V層下部に集中する。層位的には、第4ブロックは第Ⅲ文化層のなかでは、出土層位が上位から出土しているが、石器群の特徴から、第Ⅲ文化層に位置づけた。

出土遺物 総計38点出土した。石器組成の特徴は、楔形石器の占める割合が6点(15.79%)と高く、楔形石器は安山岩・ガラス質黒色安山岩で占められることが大きな特徴である。1は左側縁上部に微細剥離の剥片である。先端部が、破損、あるいは、折断されているので全体形状は不明だが、左側縁上部の剥離をプランティング加工とみなすことも可能のことと、石材が黒曜石で第Ⅲ文化層のナイフ形石器

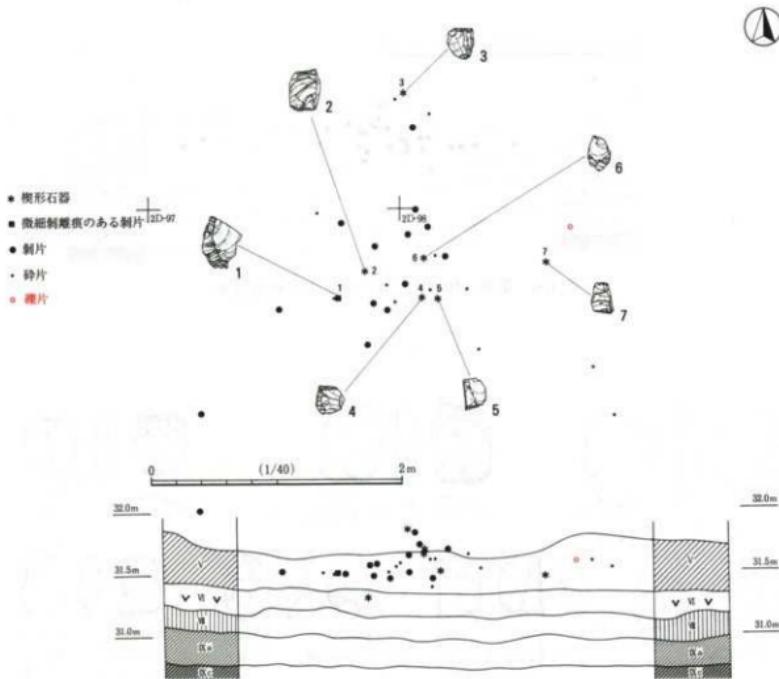


第15図 第III・N文化層分布状況

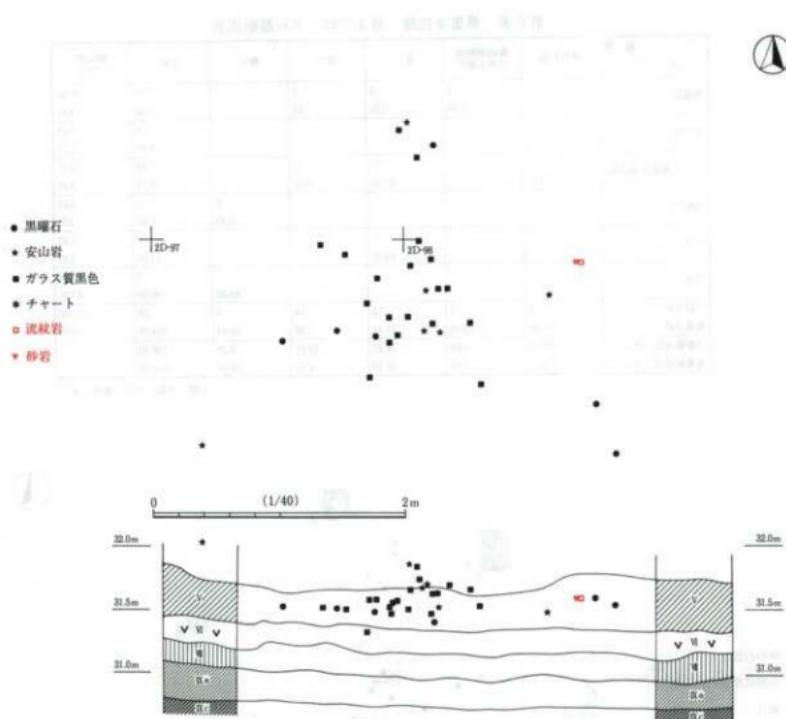
第9表 第Ⅲ文化層 第4ブロック石器組成表

| 石材 | 楔形石器 | 微細剝離痕 のある剥片 | 剥片 | 砂片 | 礫片 | 合計 | 組成比 (%) |
|-----------|-----------|----------------|-------------|------------|------------|--------------|------------------|
| 黒曜石 | | 1 3.44 | 2 0.26 | 6 1.58 | | 9 5.28 | 23.68 3.42 |
| 安山岩 | 5 9.70 | | | | | 5 9.70 | 13.16 6.29 |
| ガラス質黑色安山岩 | 1 3.20 | | 10 27.95 | 10 5.62 | | 21 36.77 | 55.27 23.85 |
| 流紋岩 | | | | | 1 0.45 | 1 0.45 | 2.63 0.29 |
| チャート | | | 1 13.00 | | | 1 13.00 | 2.63 8.43 |
| 砂岩 | | | | | 1 89.00 | 1 89.00 | 2.63 57.72 |
| 点数合計 | 6 | 1 3.44 | 13 41.21 | 16 7.20 | 2 89.45 | 38 154.20 | 100.00 100.00 |
| 重量合計 | 12.90 | | | | | | |
| 点数組成比 (%) | 15.79 | 2.63 | 34.21 | 42.11 | 5.96 | 100.00 | |
| 重量組成比 (%) | 8.37 | 2.23 | 26.73 | 4.67 | 58.01 | 100.00 | |

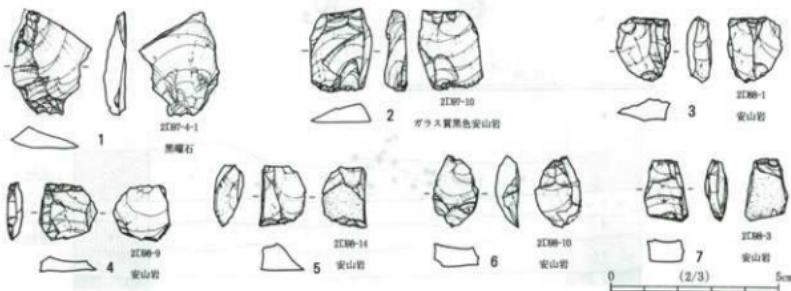
〔上段：点数、下段：重量(g)〕



第16図 第Ⅲ文化層 第4ブロック器種別分布



第17図 第III文化層 第4ブロック石材別分布



第18図 第III文化層 第4ブロック出土石器

が黒曜石で構成されることから、ナイフ形石器の可能性が高い。2～7は楔形石器である。石材はすべて安山岩・ガラス質黑色安山岩である。5・7は一部自然面を残すが、ほとんどの楔形石器には、自然面が残っておらず、比較的大きな剥離面が残されている。また、両極端で剥離された安山岩・ガラス質黑色安山岩の剥片・碎片も同様なことが見られることから、比較的大きな円錐を素材として、荒削りした剥片を素材としたと推察される。

② 第5ブロック（第19～24図、第10表、図版15）

出土状況 平面分布は、約3m×3mの小範囲に、集中して分布する。出土層位は、Ⅶ層下部からV層上部にかけて出土しているが、Ⅶ層上部に集中する。第4ブロックの東側に隣接して出土している。北側に遺物が集中部がみられる。安山岩のほとんどが、ここに集中し、接合資料（9a+b, 10a+b, 11a-f）も多い。また、大型の敲石もこの集中部から出土している。この集中部の周辺から、黒曜石が多く出土し、ナイフ形石器や搔器などの製品が出土している。

出土遺物 総計30点出土した。石器組成の特徴は、黒曜石のナイフ形石器・楔形石器・搔器の占める割合が高く、安山岩・ガラス質黑色安山岩の削器や横長不定形剥片で構成される接合資料で構成される。

1・2は黒曜石のナイフ形石器である。1は幅広の剥片を素材として、打面を基部に設定し、主軸を主要剥離面方向に設置している。打面は残置している。両側縁を大きく折断し、左側縁下部にやや粗い急角度の調整加工、右側縁下部は非常に粗い調整加工、裏面右側縁上部にはやや入念な細かい加工が施されている。右側縁上部のみ一次剥離面が残されている。2は器体の中央部から大きく破損していることから全体形状が不明な石器である。基部を素材剥片の先端部に設定し、主軸方向と主要剥離面方向が一致している。左側縁下部に急角度の調整加工が入念に施され、右側縁は折断後下端部にやや細かい調整加工が施されている。これらの加工により、基部の形状は、やや尖った形状をしている。

3は削器である。裏面は概理面により平坦に剥離されたものである。左側縁は折断されており、右側縁は裏面に面的な加工の後に、表面に階段状の加工が施されている。

4は搔器である。左側縁は表面に急角度の加工、右側縁は裏面に急角度の加工、下端部は表面に平坦な

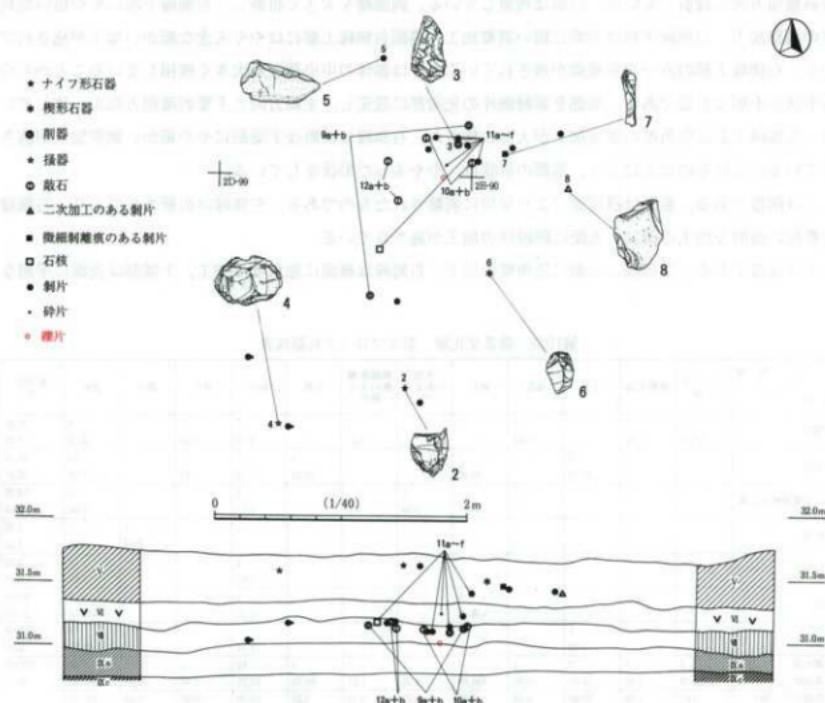
第10表 第Ⅲ文化層 第5ブロック石器成表

| 石 材 | ナイフ形 石器 | 楔形石器 | 削器 | 儀器 | 磨耗 | 二次加工 のある剥 片 | 裏面剥離 面のある 剥片 | 石核 | 剥片 | 碎片 | 禮片 | 合計 | 構成比 (%) |
|-----------|------------|-----------|------------|------------|-------------|-------------------|--------------------|------------|------------|-----------|-----------|--------------|------------------|
| 黒曜石 | 2 12.10 | 1 2.81 | | | 1 12.69 | | 1 1.51 | | 2 6.19 | 2 0.36 | | 9 35.66 | 30.00 4.67 |
| 安山岩 | | | 2 48.79 | | 2 99.00 | | | 1 69.03 | 4 26.92 | 1 1.10 | | 10 244.84 | 33.34 32.07 |
| ガラス質黑色安山岩 | | | | | | 1 9.29 | | | 2 6.27 | | | 3 15.56 | 10.00 2.04 |
| 流紋岩 | | | | | | | | | | | 1 0.95 | 1 0.95 | 3.33 0.17 |
| チャート | | | | | | | | | 1 1.61 | | | 1 1.61 | 3.33 0.21 |
| 砂岩 | | | | | 2 430.96 | | | | 1 4.20 | | | 3 440.15 | 10.00 37.64 |
| 礫灰岩 | | | 1 7.05 | | | | | | 2 17.74 | | | 3 24.79 | 10.00 3.25 |
| 点数合計 | 2 12.10 | 1 2.81 | 3 55.84 | 1 12.69 | 4 534.95 | 1 9.29 | 1 1.51 | 1 69.03 | 3 62.93 | 3 1.46 | 1 0.95 | 30 763.56 | 100.00 100.00 |
| 点数構成比 (%) | 6.67 | 3.33 | 10.00 | 3.33 | 12.33 | 3.33 | 3.33 | 3.33 | 40.00 | 16.00 | 3.33 | 100.00 | |
| 重量構成比 (%) | 1.58 | 0.37 | 7.31 | 1.06 | 70.06 | 1.22 | 0.30 | 9.04 | 8.34 | 0.19 | 0.12 | 100.00 | |

【上段：点数、下段：重量 (g)】

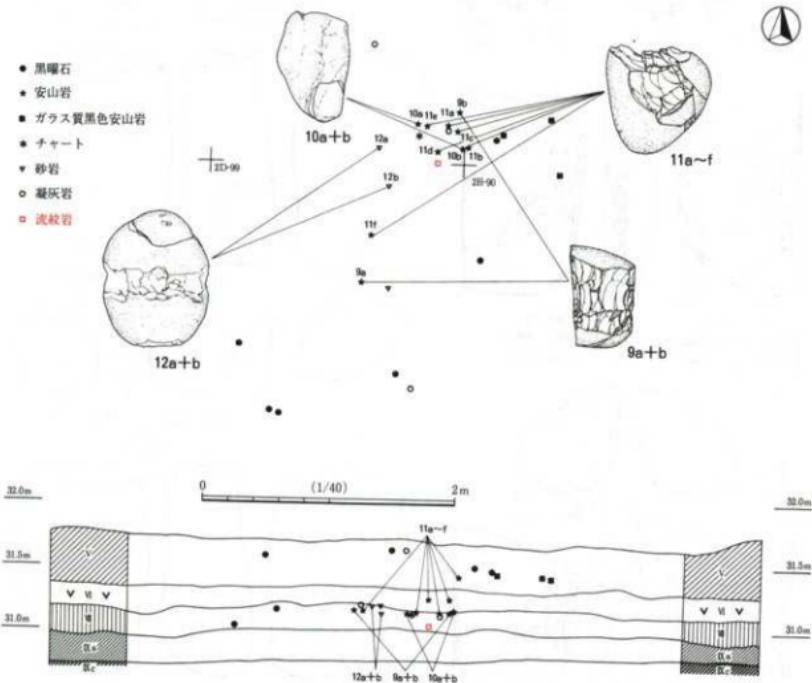
加工が施されている。上端部は、切断されている。全体形状から、円形状、あるいは、拇指状搔器と捉えることも可能であるが、それぞれの部位の調整加工の方法が大きく異なるので通常の円形状・拇指状の搔器とは異なる。5は打面部側を大きく切削された剥片である。6は楔形石器である。両極剥離により、右側縁と裏面下端部が剥離されている。7は微細剥離痕のある剥片である。主要剥離面の形状から、素材は石刃状の剥片と考えられ、石刃状の剥片の小口から剥離された剥片である。右側縁下半部の微細剥離痕は、石刃状の剥片の時に剥離(使用)された痕跡と考えられる。主要剥離面の右側縁上部の微細剥離痕は、小口から剥離された細長剥片の時の剥離痕である。8は二次加工のある剥片である。表面に自然面を大きく残す横長剥片を素材として、左側面の上部と下部に粗い調整加工が施されている。右側縁上部は第一次剥離面を残している。このような形状から、ナイフ形石器と識別することも可能であるが、二次加工が入念でなく、折断に近いことから二次加工のある剥片として識別した。

9 a + b は削器の接合資料である。扁平な円錐を素材として、右側縁は表面・裏面の両面に細かい加工が施されている。その剥離の際に 9 a が剥離されている。この後の調整加工はないようである。左側縁は大きく折断されているが、折断後も縁辺に細かい加工が施されている。9 a + b の接合した状態では削器

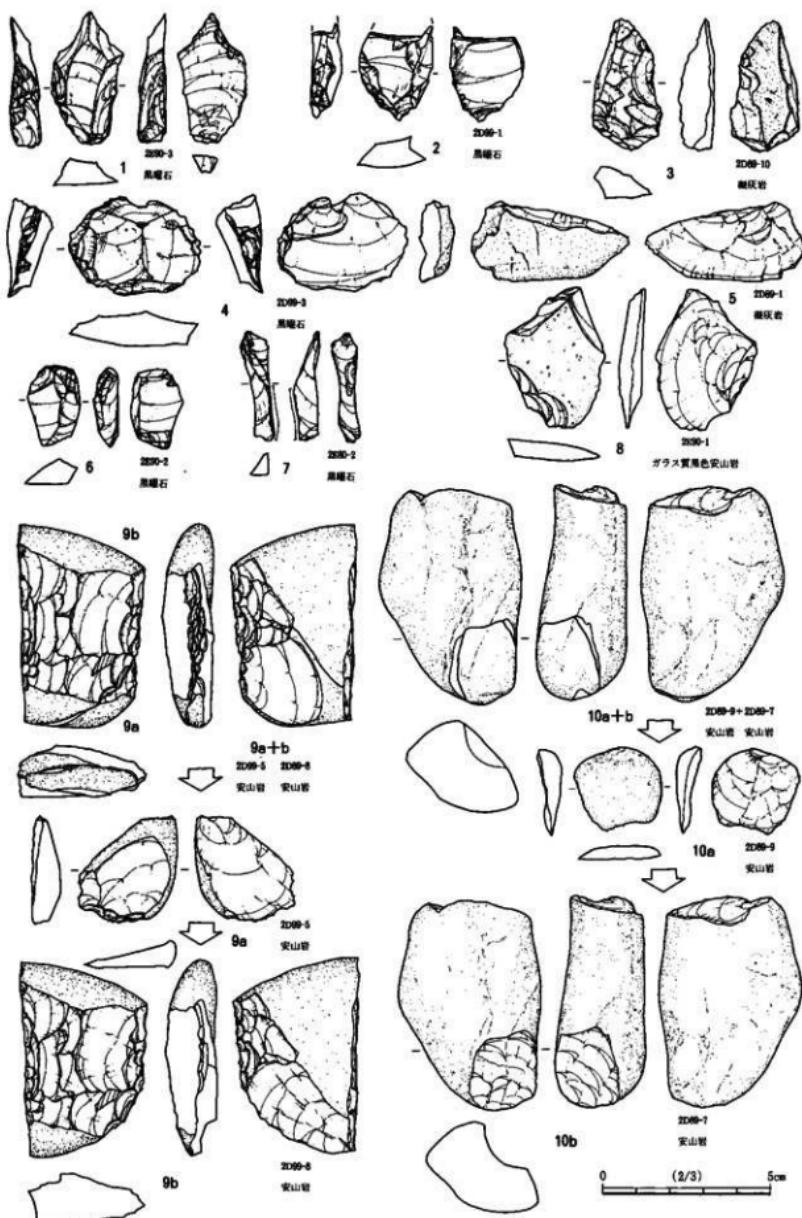


第19図 第III文化層 第5ブロック器種別分布

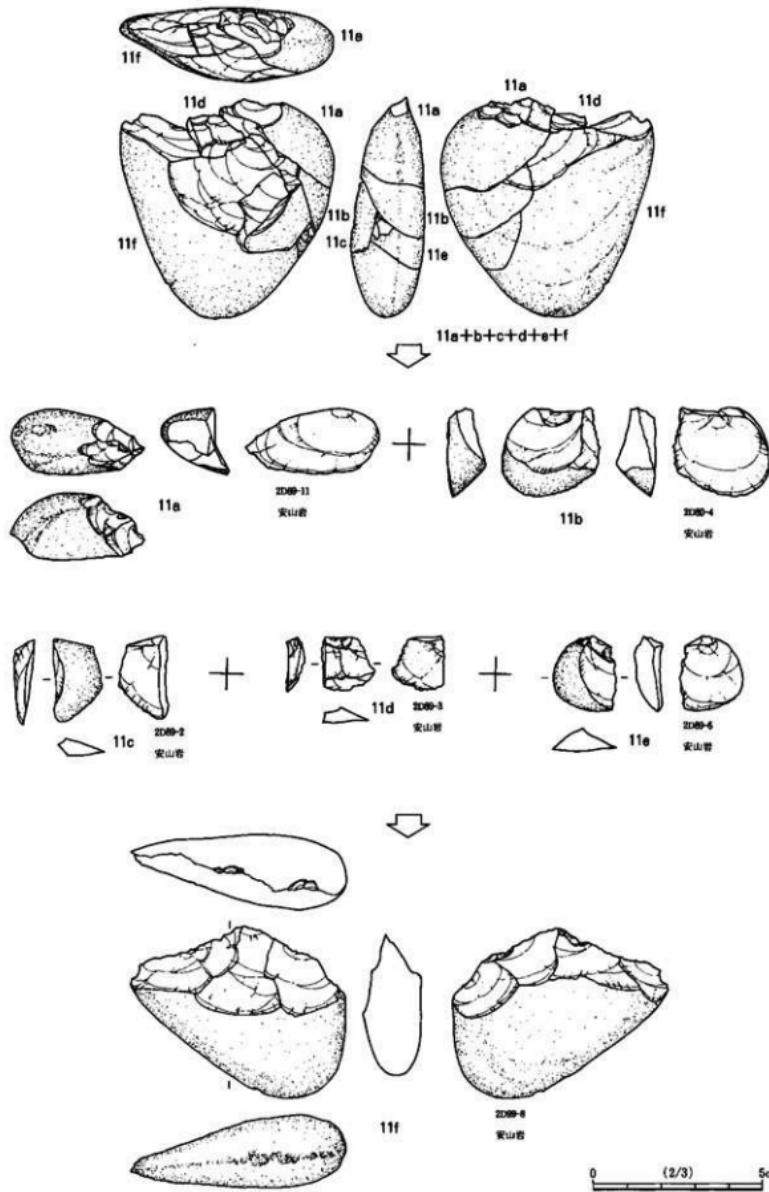
として機能したと思われる。ただし、左側縁の切断面から折断以前の全体形状を復原してみると、折断以前は、右側縁を刃部として設定して石斧として機能した可能性もある。10a+bは敲石の接合資料である。長楕円形の先端が突出した円鏃を素材として、下端部に敲打痕が顕著である。その敲打の際に10aが剥離されている。上端部もおそらく敲打によって破損したものと考えられる。11a-fは扁平な円鏃を素材として、上端部側から、横長の貝殻状の剥片を交互剥離によって生産している。12a+bは敲石である。大型の楕円形の鏃を素材として、器体中央部のほぼ全周に深さ1mm~3mmの深さの敲打痕がめぐっている。また、上下端部においては、非常に顕著な敲打痕がみられる。上端部の敲打によって、12bが剥離されている。



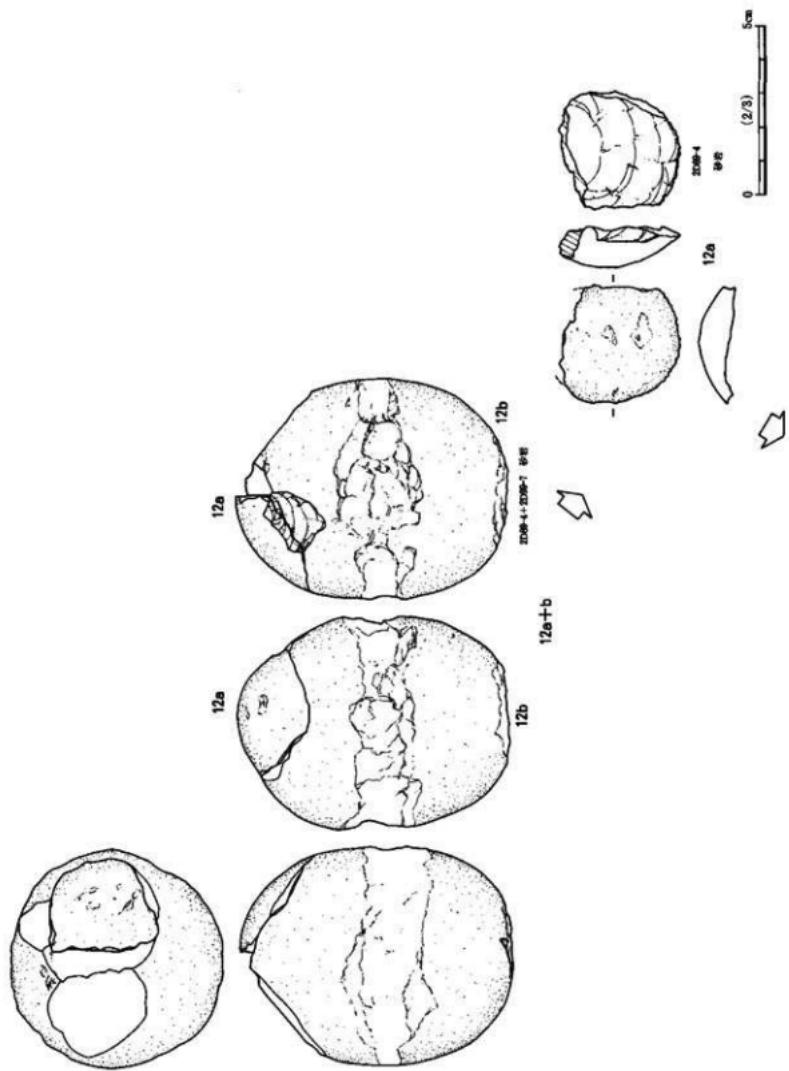
第20図 第Ⅲ文化層 第5ブロック石材別分布



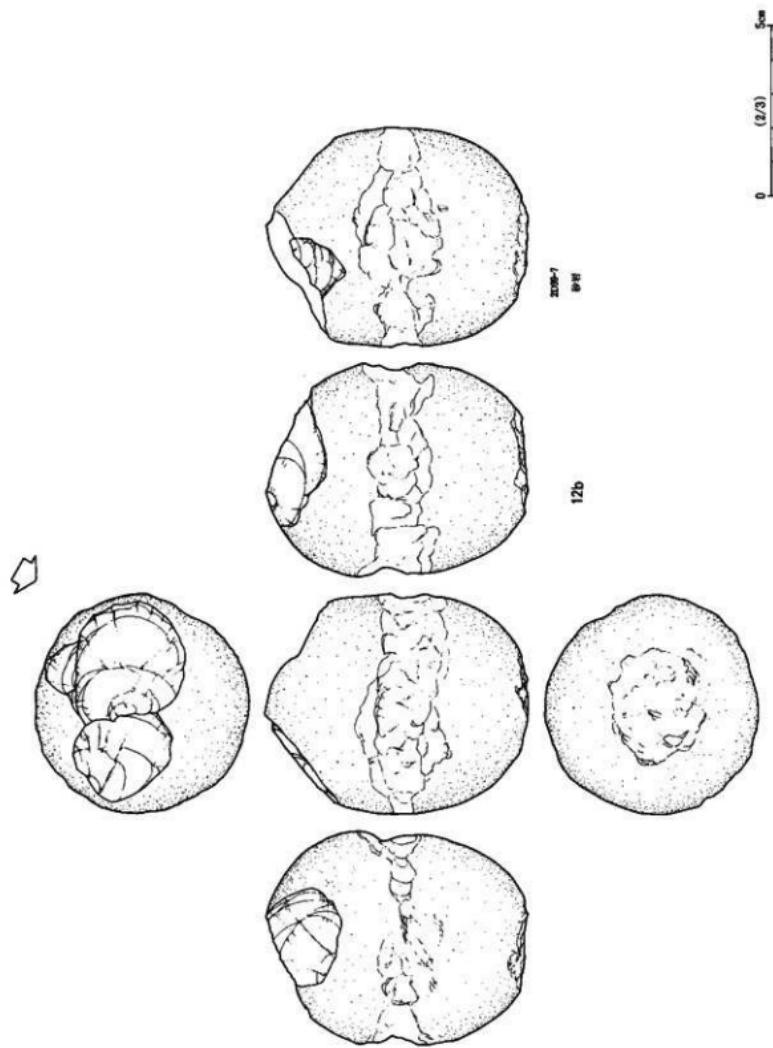
第21図 第III文化層 第5ブロック出土石器（1）



第22図 第Ⅲ文化層 第5ブロック出土石器（2）



第23図 第III文化層 第5ブロック出土石器（3）



第24図 第III文化層 第5ブロック出土石器（4）

③ 第6ブロック（第25~27図、第11表、図版16）

出土状況 平面分布は、約6m×3mの長辯円形の範囲に、散漫に分布する。出土層位は、VI層上部からV層上部にかけて出土しているが、VI層上部からVI層下部に集中する。第4・5ブロックの南側に隣接して出土している。黒曜石がブロックの外側に分布し、安山岩・ガラス質黒色安山岩がブロックの中央部に分布する。ブロックの北東隅に黒曜石製のナイフ形石器・搔器がまとめて出土している。この傾向は、第5ブロックの出土状況と類似している。

出土遺物 総計22点出土した。石器組成の特徴は、黒曜石製のナイフ形石器・搔器・二次加工のある剥片の占める割合が高く、安山岩・ガラス質黒色安山岩が横長不定形剥片で構成される。疊・疊片は3点しか出土しておらず、いずれも肉眼では、火熱を受けた痕跡がみられる。疊は拳大の大きさのものである。

1・2はナイフ形石器である。1は幅広の剥片を素材として、打面を基部に設置し、主軸を主要剥離面と方向に設置している。打面は残置している。右側縁を粗い加工で整形し、左側縁下部は細かい調整加工が入念に施されている。先端部は破損している。この製作の方法は、第5ブロックの1のナイフ形石器と共通する点が多い。2は器体中央部から大きく破損している。打面を基部に設置し、右側縁下部にやや粗い調整加工が施され、左側縁下部に細かい調整加工が施されている。全体形状は不明だが、素材の用い方と調整加工に共通することから、1と同様の形状をしていたと推察される。

3は搔器である。発掘時の破損により全体形状が不明であるが、下端部の刃部は非常に急角度の調整加工が入念に施されている。全体形状が不明であることから、下端部の調整を重視して搔器として器種認定したが、1のナイフ形石器の基部の調整加工と類似する点からナイフ形石器の可能性もある。

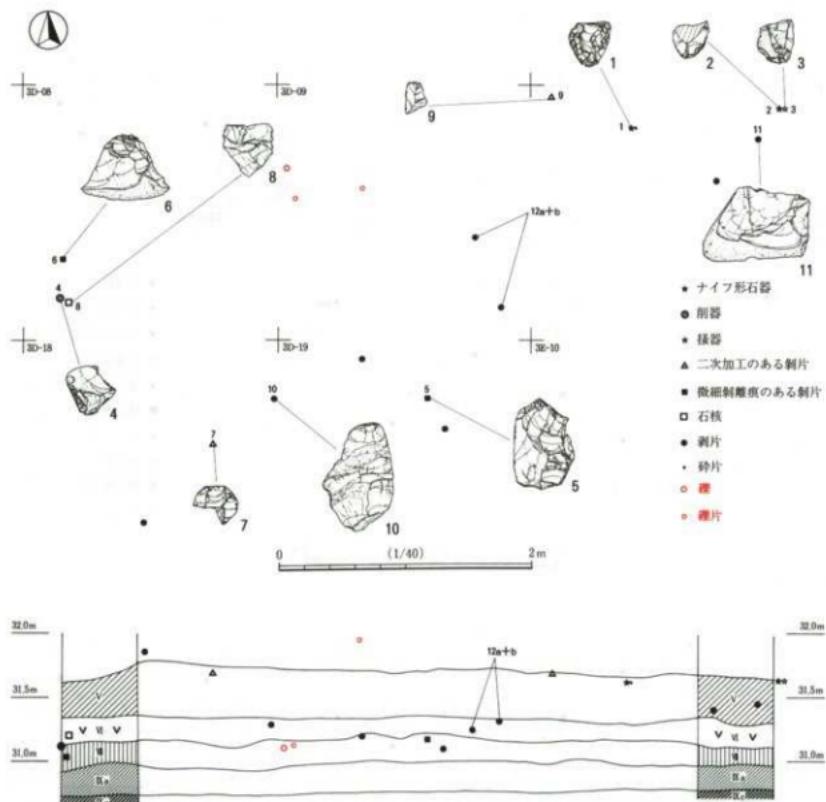
4は削器である。幅広の剥片を素材として、打面を基部に設置して、左側縁下部に表裏両面からやや平坦な調整加工が入念に施されている。右側縁上部は破損している。4についても、全体形状が不明であることから、削器と器種認定したが、ナイフ形石器の可能性もある。

第11表 第Ⅲ文化層 第6ブロック石器組成表

| 石 材 \ 器 様 | ナイフ形 石器 | 削器 | 搔器 | 二 次 加 工 の あ る 剥 片 | 調 整 加 工 の あ る 剥 片 | 石 片 | 剥 片 | 疊 | 疊片 | 合 计 | 組成比 (%) |
|-----------|------------|-----------|-----------|----------------------------|----------------------------|------------|-------------|-------------|-------------|-------------|------------------|
| 黒曜石 | 2 7.65 | | 1 4.02 | 2 5.06 | | | 1 0.91 | 1 0.82 | | 7 17.96 | 31.79 1.86 |
| 安山岩 | | | | | | 2 11.03 | | | | 2 11.03 | 9.09 1.15 |
| ガラス質黒色安山岩 | | | | | | 3 7.10 | | | | 3 7.10 | 13.64 0.74 |
| 流紋岩 | | | | | | | | 1 739.00 | 2 11.83 | 3 750.83 | 13.64 78.39 |
| 珪質頁岩 | | | | | 1 31.62 | | | | | 1 31.62 | 4.55 3.30 |
| 板岩珪質頁岩 | | | | | | 1 6.63 | | | | 1 6.63 | 4.55 0.69 |
| 珪化木 | | | | | 1 10.04 | | | | | 1 10.04 | 4.55 1.05 |
| チャート | 1 5.84 | | | 1 19.28 | | | | | | 2 24.12 | 9.09 2.55 |
| 礁灰岩 | | | | | | 1 51.64 | | | | 1 51.64 | 4.55 5.39 |
| 緑色礁灰岩 | | | | | | 1 46.85 | | | | 1 46.85 | 4.55 4.89 |
| 点数合計 | 2 7.65 | 1 5.84 | 1 4.02 | 2 5.06 | 2 49.90 | 1 10.04 | 1 124.16 | 1 0.32 | 2 739.00 | 22 11.83 | 100.00 957.83 |
| 点数組成比 (%) | 9.09 | 4.55 | 4.55 | 9.09 | 9.09 | 4.55 | 40.91 | 4.55 | 9.09 | 100.00 | |
| 重量組成比 (%) | 0.86 | 0.61 | 0.43 | 0.53 | 0.21 | 1.05 | 12.96 | 0.03 | 77.15 | 1.34 | 100.00 |

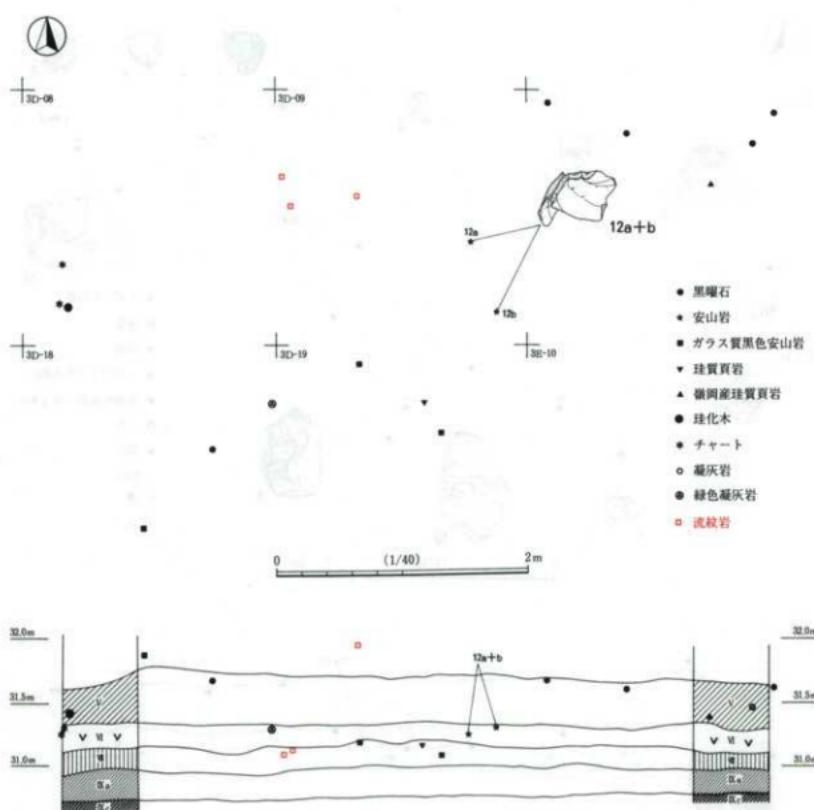
[上段：点数、下段：重量(g)]

5は、微細剥離痕のある剥片である。第6ブロックでは、珪質頁岩が1点のみの出土であるが、チョコレート色の良質な石材である。大型の石刃を素材としている。右側面に数回の剥離がみられ、彫刻刀形石器として機能した可能性が高い。右側縁上部の先端部の微細剥離痕が顕著である。また、上端部は、折断後に、鋸歯状の加工が施され、縁辺部の微細剥離痕も顕著である。下端部も数回切断し、切断面の縁辺に微細剥離痕が顕著である。このように、刃部再生を繰り返し行った形跡がみられるところから、いわゆる、「下総型石刃再生技法」によるものと考えられる。6は微細剥離痕のある剥片である。下端部に微細剥離痕がみられる。7は二次加工のある剥片である。器体が中央部から大きく破損している。左側縁上部にや

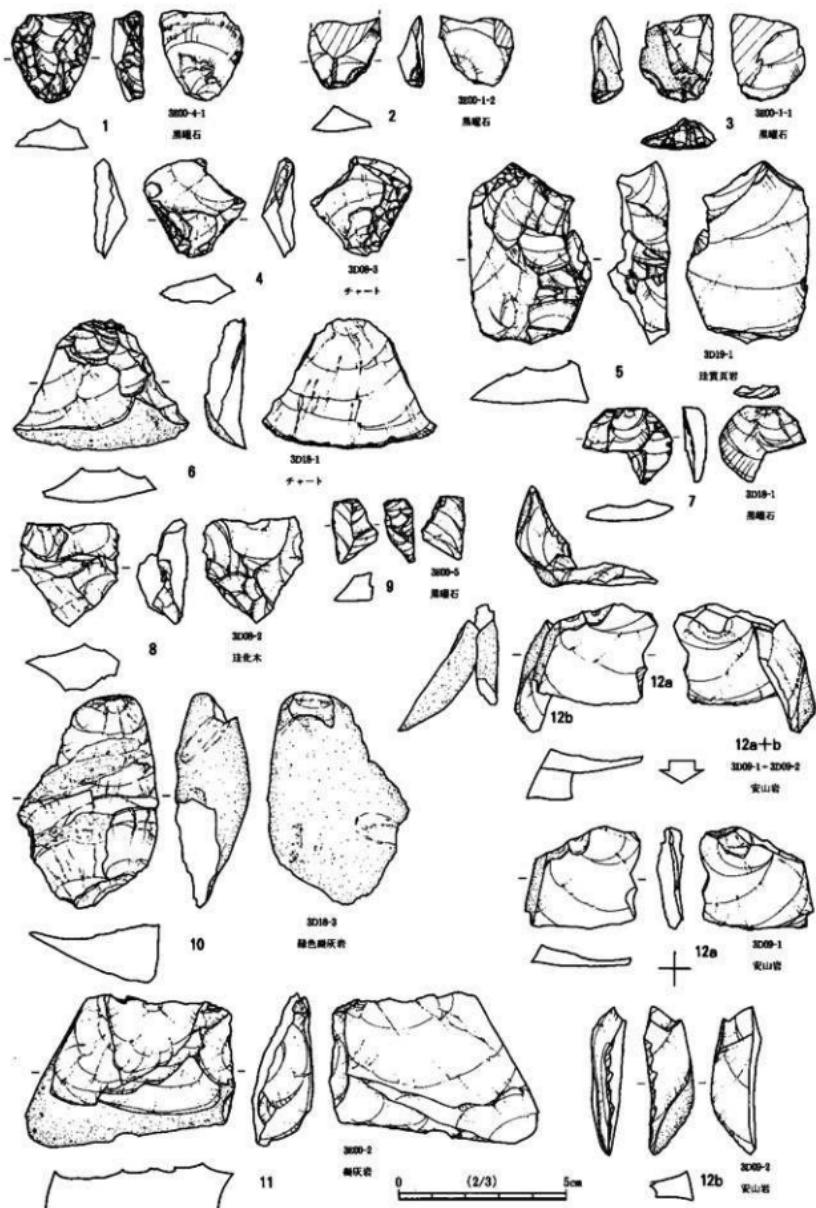


第25図 第III文化層 第6ブロック器種別分布

や粗い調整加工が施され、右側縁に微細剥離痕がみられる。ナイフ形石器の可能性もある。8は石核である。珪化木製で、単品で出土している。やや厚みのある剥片を素材として、不定形の小型の剥片を両面から剥離している。9は黒曜石製の二次加工のある剥片である。10・11は凝灰岩製の大型剥片である。10は相模野台地でよく出土する緑色凝灰岩に類似する。11も緑色凝灰岩の可能性がある。12a+bは安山岩製の不定形剥片の接合資料である。自然面が左側面にみられ、橢円形の円礫を分割して、分割面を打面として、12aと12bを剥離している。



第26図 第Ⅲ文化層 第6ブロック石材別分布



第27図 第III文化層 第6ブロック出土石器

(4) 第IV文化層 (第15図、第12表、図版16)

V層上部からIV層下部に生活面を持つと推定される。第III文化層と近い段階の石器群の可能性がある。第7・8ブロックが相当し、これらのブロックは、調査区中央部東側に近接している。本文化層の最大の特徴は、第15図・第12表で示したように、礫（礫片含む）の比率が圧倒的に高く、点数比率で91.67%、重量比率では98.18%で圧倒的な高さであり、礫（礫片含む）の接合関係が頻繁で、ブロック間接合もみられることがある。また、肉眼観察で、ほとんどすべて火熱を受けたと思われる痕跡がみられる。礫・礫片の素材は、すべて円礫で、接合状況から、約3cm～10cm前後の円礫を用いている。器種組成の特徴は、前述の礫・礫片の占める割合が圧倒的に高いことと、ナイフ形石器も1点（二次加工のある剥片と識別することも可能）出土しているが、定型的な製品が出土していないことがあげられる。石材組成の特徴は、礫・礫片の石材が、流紋岩・チャート・ホルンフェルス・砂岩を主に用いていることと、礫・礫片以外の石器の石材が、横岡産珪質頁岩・ガラス質黑色安山岩・チャートを主に用いており、黒曜石が1点も含まれないことがある。これらの、器種組成・石材組成の特徴は、第III文化層の特徴と大きく異なる。

① 第7ブロック (第28～30図、第13表、図版16)

出土状況 平面分布は、約3.5m×2.5mの小範囲に、密集して分布する。出土層位は、IXa層上部からIV層下部にかけて出土しているが、V層下部からIV層下部に集中する。礫・礫片のブロック内での接合関係が頻繁で、第8ブロックとの接合関係もみられる。礫・礫片以外の石器の分布は、散漫に分布しており、第15図でみられるように、第8ブロックとの境界を区別することができないような分布を示しているが、礫・礫群との供伴関係を重視して、石器のブロック区分を行った。

第12表 第IV文化層石器組成表

| 器種 石 材 | ナイフ形 石器 | 二次加工の ある剥片 | 無縫制離度の ある剥片 | 石核 | 剥片 | 砂片 | 礫 | 礫片 | 合計 | 組成比 (%) |
|-----------|------------|---------------|----------------|------------|-------------|-----------|----------------|-----------------|-----------------|----------------|
| ガラス質黑色安山岩 | | | | | 9 79.85 | | 1 97.00 | | 10 176.85 | 2.60 1.05 |
| ホルンフェルス | | | 1 2.06 | | | | 5 571.80 | 32 1,536.80 | 38 2,110.65 | 9.90 12.53 |
| 流紋岩 | | | 1 7.70 | | | | 24 4,444.00 | 129 5,646.35 | 154 9,892.05 | 40.11 58.75 |
| 横岡産珪質頁岩 | | 2 10.29 | | 2 39.19 | 6 107.26 | | | | 10 156.74 | 2.60 0.93 |
| チャート | 1 2.29 | 1 5.00 | | | 4 42.66 | 3 1.18 | 3 245.00 | 106 1,996.14 | 120 2,222.29 | 31.25 13.20 |
| 玉髓(メノウ含む) | | | | | | | | | 1 5.48 | 0.36 0.03 |
| 砂岩 | | | | | | | 3 296.00 | 38 1,856.06 | 41 1,922.06 | 10.68 11.41 |
| 繊灰岩 | | | 1 1.94 | | 1 8.09 | | | | 8 343.46 | 2.60 2.10 |
| 点数合計 | 1 | 3 | 3 | 2 | 20 | 3 | 36 | 316 | 384 | 100.00 |
| 重量合計 | 2.29 | 15.29 | 11.59 | 39.19 | 237.88 | 1.18 | 5,653.80 | 10,906.29 | 16,839.51 | 100.00 |
| 点数組成比(%) | 0.26 | 9.78 | 9.78 | 0.62 | 5.21 | 0.78 | 9.38 | 82.29 | 100.00 | |
| 重量組成比(%) | 0.01 | 0.09 | 0.07 | 0.23 | 1.41 | 0.01 | 33.40 | 54.78 | 100.00 | |

[上段：点数、下段：重量(g)]

出土遺物 総計181点出土した。石器組成の特徴は、流紋岩・チャート・ホルンフェルス製の礫・礫片ではほとんどを占める。石器では、チャート（嶺岡産珪質頁岩の可能性もある）製のナイフ形石器が1点、微細剥離痕のある剥片が2点出土しており、定型的な石器がなく、黒曜石が1点も含まれていないことが特徴である。1はチャート（嶺岡産珪質頁岩の可能性もある）製のナイフ形石器である。不定形な剥片を素材として、左側縁に急角度の粗い調整が施され、下端部から右側縁下部にかけて粗い階段状の加工が施されている。右側縁上半部に、第一次剥離面が残されていることから、ナイフ形石器と器種識別したが、二次加工のある剥片と識別することもできる。

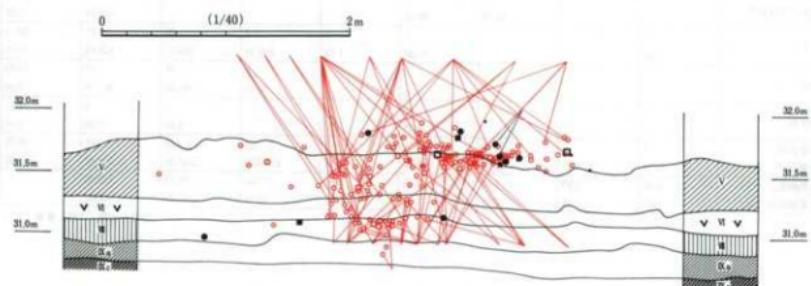
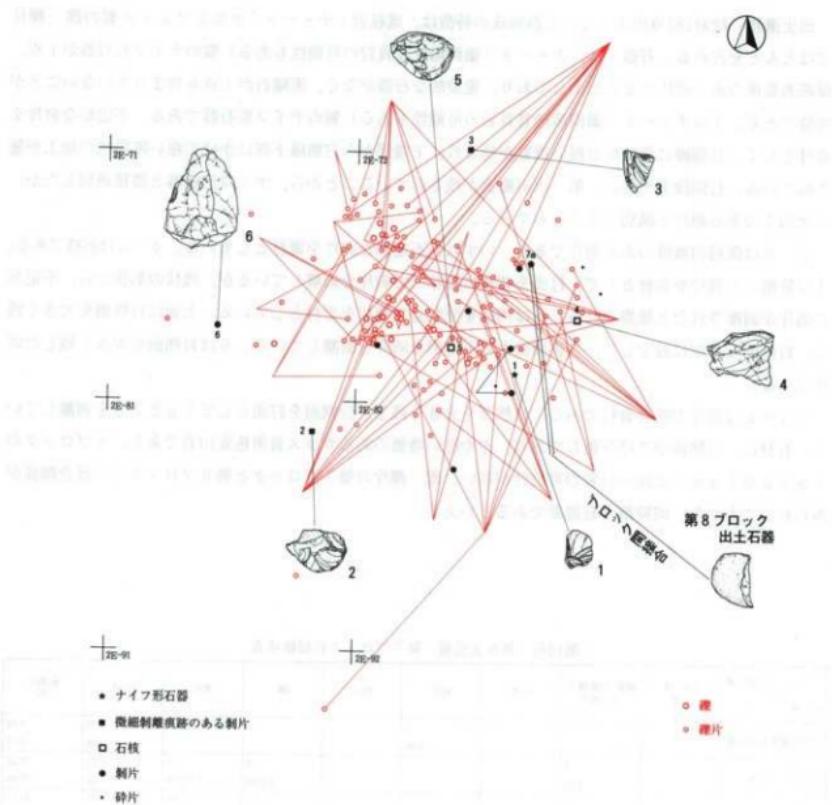
2・3は微細剥離痕のある剥片である。いずれも不定形な剥片を素材としている。4・5は石核である。4は分割した剥片を素材として、打面を頻繁に転移して剥片を剥離しているが、残核の形状から、不定形の剥片が剥離されたと推察される。5は円礫を分割した剥片を素材としている。上面に自然面を大きく残し、自然面を打面に設定して、表裏両面から不定形な剥片を剥離している。6は自然面を大きく残した剥片である。

7a+bは剥片の接合資料である。自然面を大きく残し、分割面を打面として7aと7bを剥離している。石材は、自然面がこげ茶色しており、やや脆い特徴のあるガラス質黑色安山岩であり、8ブロックの4a+bや5a+bと同一母岩の可能性が高い。礫・礫片の第7ブロックと第8ブロックとの接合関係がみられることから、同時期の石器群であるといえる。

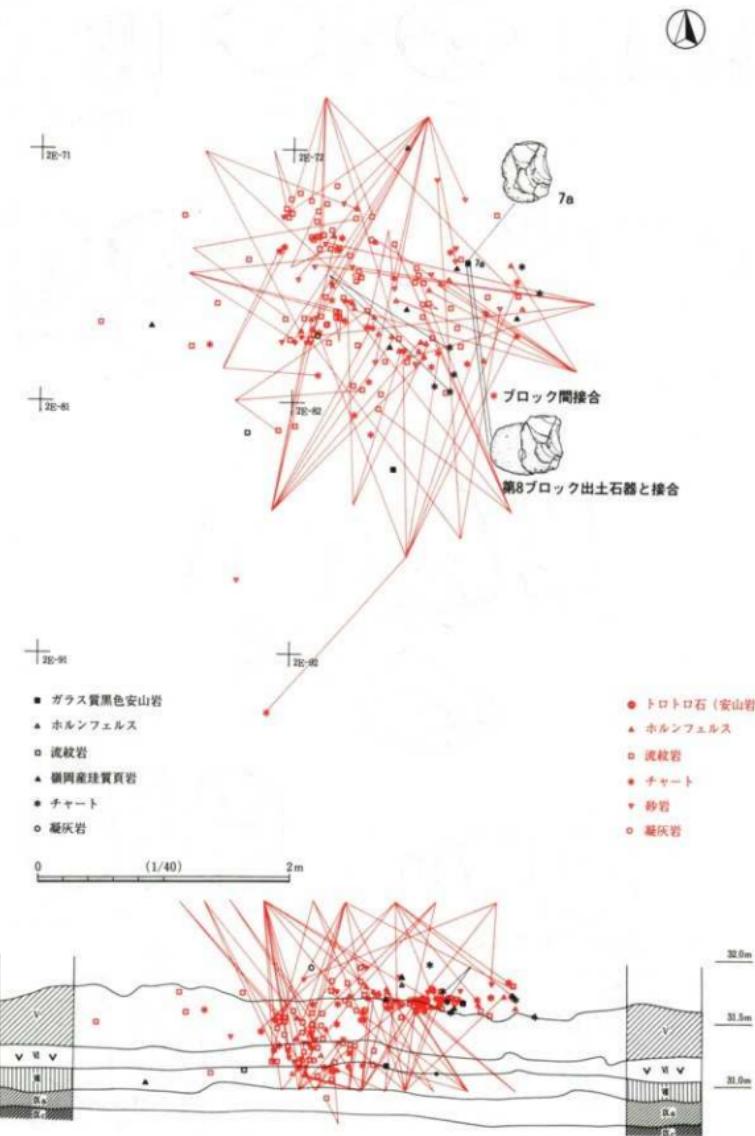
第13表 第IV文化層 第7ブロック石器組成表

| 器種 石片 | ナイフ形 石器 | 微細剥離痕 のある剥片 | 石核 | 剥片 | 片片 | 礫 | 礫片 | 合計 | 組成比 (%) |
|-----------|------------|----------------|------------|------------|-----------|----------------|----------------|----------------|----------------|
| ガラス質黑色安山岩 | | | | 2 12.98 | | | | 2 12.98 | 1.10 0.12 |
| ホルンフェルス | | 1 2.05 | | | | 3 379.00 | 27 1,140.20 | 31 1,791.25 | 17.13 15.97 |
| 流紋岩 | | 1 7.70 | | | | 13 2,339.00 | 63 3,842.49 | 77 7,080.19 | 42.55 33.17 |
| 嶺岡産珪質頁岩 | | | 2 38.19 | 3 80.05 | | | | 5 119.24 | 2.76 1.05 |
| チャート | 1 2.29 | | | 2 31.00 | 3 1.18 | 3 245.00 | 28 849.17 | 37 1,128.64 | 20.44 10.06 |
| 砂岩 | | | | | | 1 80.00 | 24 981.00 | 25 1,061.00 | 13.81 9.46 |
| 闊沃岩 | | | | 1 8.09 | | | 3 9.46 | 4 17.55 | 2.31 0.16 |
| 点数合計 | 1 | 2 | 2 | 8 | 3 | 20 | 145 | 181 | 100.00 |
| 重量合計 | 2.29 | 9.75 | 38.19 | 132.12 | 1.18 | 3,943.00 | 7,091.23 | 11,219.85 | 100.00 |
| 点数組成比 (%) | 0.55 | 1.10 | 1.10 | 4.42 | 1.66 | 11.05 | 80.11 | 100.00 | |
| 重量組成比 (%) | 0.02 | 0.09 | 0.36 | 1.18 | 0.01 | 35.14 | 63.21 | 100.00 | |

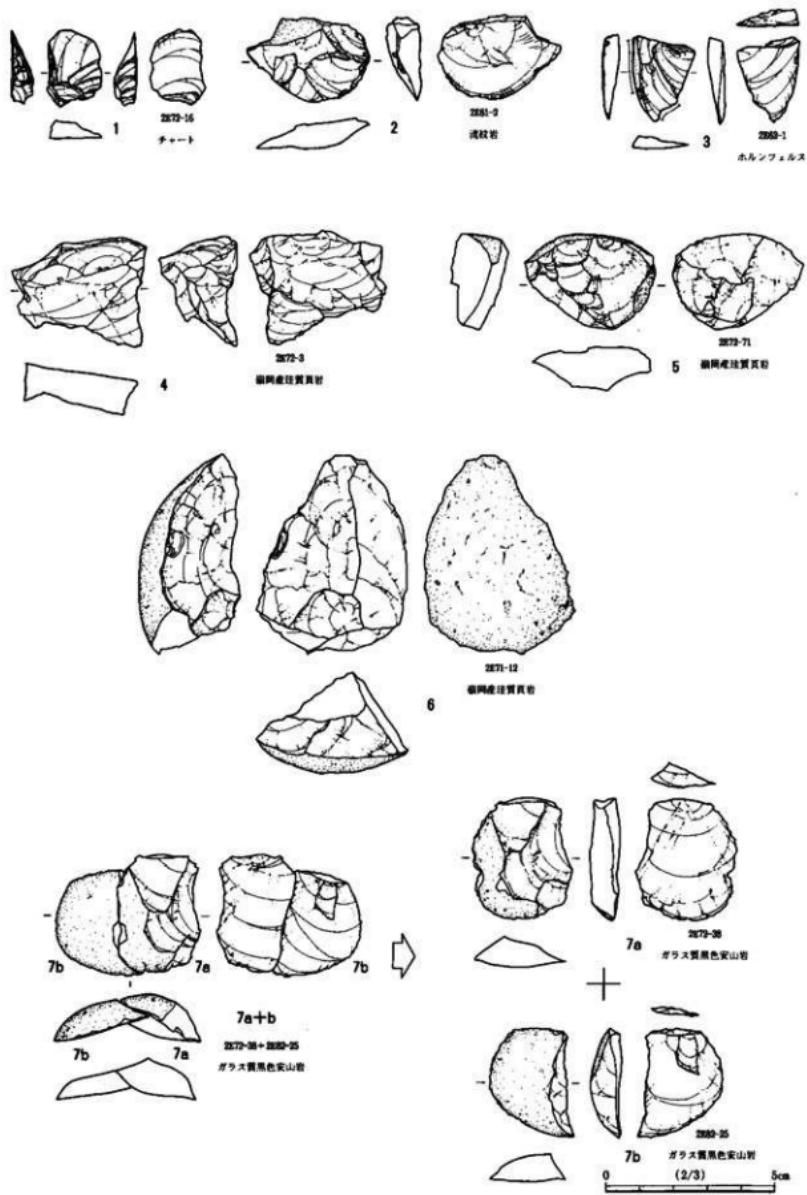
[上段：点数、下段：重量(g)]



第28図 第N文化層 第7ブロック 器種別分布



第29図 第N文化層 第7ブロック石材別分布



第30図 第IV文化層 第7ブロック出土石器

② 第8ブロック（第31～33図、第14表、図版16）

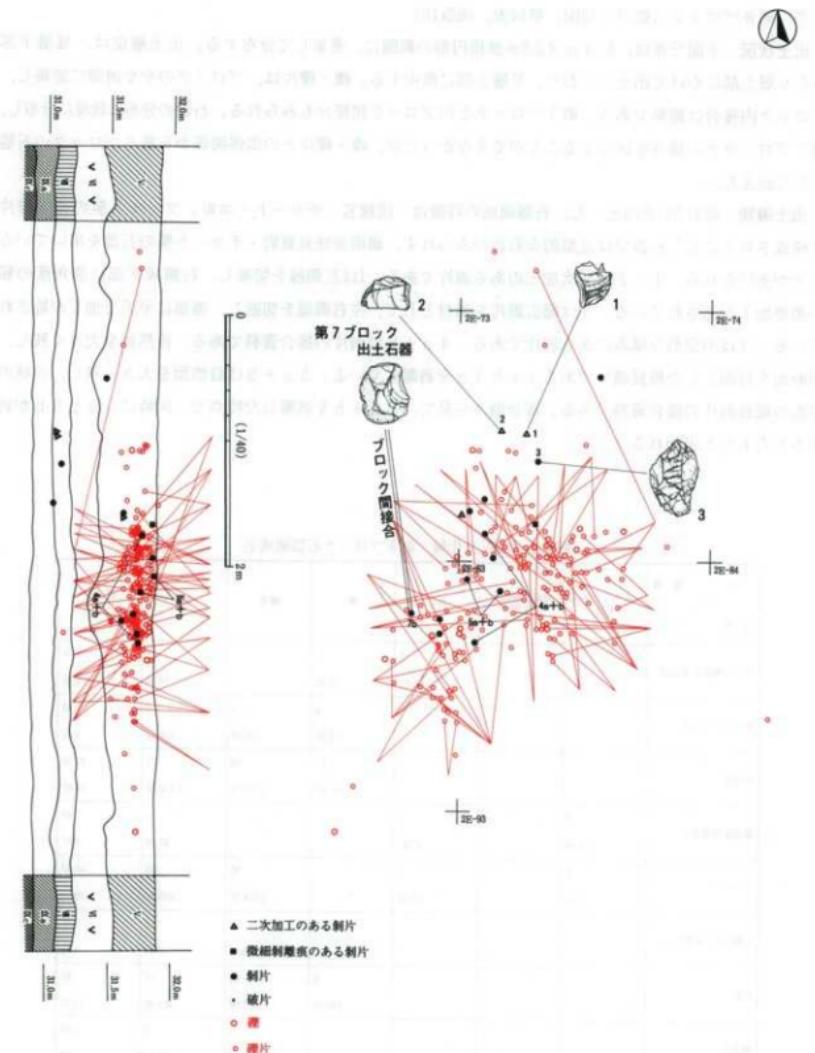
出土状況 平面分布は、約4m×2.5m長辺円形の範囲に、密集して分布する。出土層位は、Ⅳ層下部からV層上部にかけて出土しており、V層上部に集中する。砾・礫片は、ブロックのやや南側に密集し、ブロック内接合は頻繁である。第7ブロックとのブロック間接合もみられる。石器の分布は散漫に分布し、第7ブロックとの境界を区分することができなかったが、砾・礫片との供伴関係から第8ブロックの石器として捉えた。

出土遺物 総計203点出土した。石器組成の特徴は、流紋岩・チャート・ホルンフェルス製の砾・礫片で構成されることと石器では定型的な石器がみられず、嶺岡産珪質頁岩・チャート製の石器を用いていることがあげられる。1・2は二次加工のある剥片である。1は左側縁を切断し、右側縁下部に急角度の粗い調整加工が施されている。2は幅広剥片を素材として、左右両端を切断し、裏面に平坦な加工が施されている。3は不定形な厚みのある剥片である。4a+bは剥片の接合資料である。自然面を大きく残し、折断面を打面とした横長剥片である4aと4bを剥離している。5a+bは自然面を大きく残し、点状の打面の縱長剥片の接合資料である。接合面から見て、5a+bを剥離した時点で、同時に5aと5bが剥離されたものと思われる。

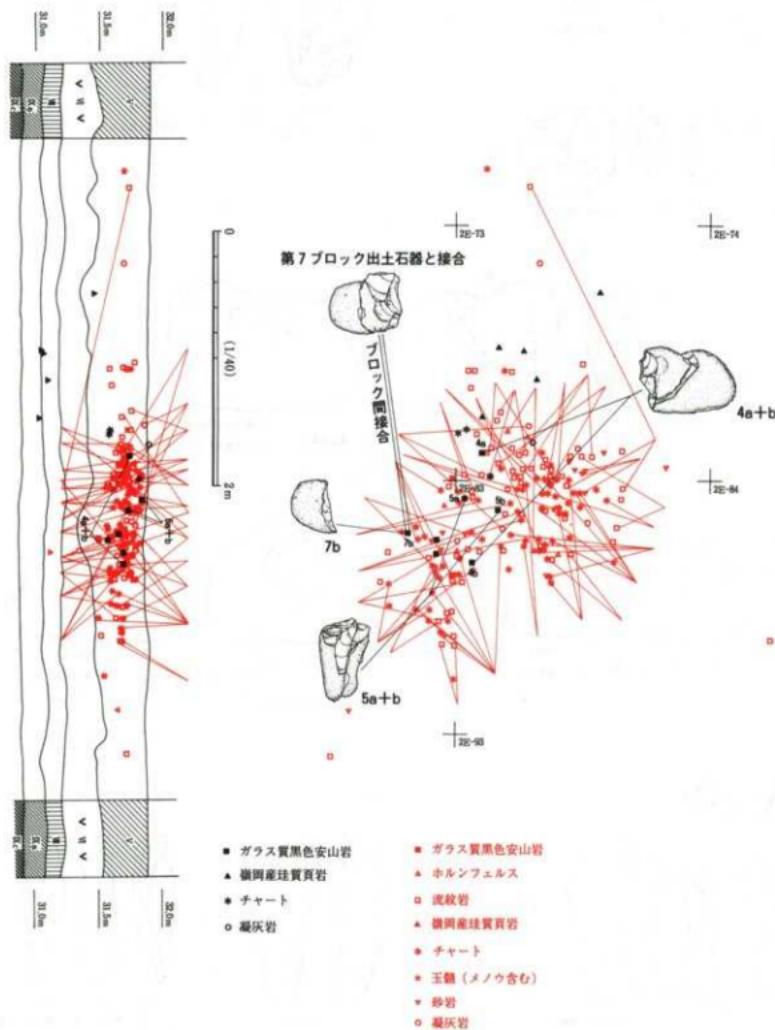
第14表 第IV文化層 第8ブロック石器組成表

| 石 材 | 器 形 △ | 二次加工のある 剥片 | 微細割離度の ある剥片 | 剥片 | 砾 | 礫片 | 合計 | 組成比 (%) |
|-----------|------------|---------------|----------------|------------|----------------|----------------|-----------------|----------------|
| ガラス質黒色安山岩 | | | | 7 66.87 | 1 97.00 | | 8 163.8 | 3.94 2.92 |
| ホルンフェルス | | | | | 2 192.80 | 5 136.60 | 7 319.40 | 3.45 5.68 |
| 流紋岩 | | | | | 11 1,205.00 | 66 1,597.86 | 77 2,802.86 | 37.93 49.87 |
| 嶺岡産珪質頁岩 | 2 10.29 | | 3 27.21 | | | | 5 37.50 | 2.46 0.87 |
| チャート | 1 5.00 | | 2 11.88 | | 40 1,976.97 | 83 1,093.66 | 103 1,969.63 | 40.89 19.46 |
| 玉髓(メノウ含む) | | | | | | 1 5.48 | 1 5.48 | 0.49 0.10 |
| 砂岩 | | | | | 2 186.00 | 14 875.06 | 16 861.06 | 7.88 15.32 |
| 凝灰岩 | | | 1 1.84 | | | 5 334.00 | 6 335.84 | 2.96 5.98 |
| 点数組成比 (%) | 3 | 1 | 12 | 16 | 171 | 203 | 100.00 | |
| 重量組成比 (%) | 15.29 | 1.84 | 105.76 | 1,680.80 | 3,815.97 | 5,619.66 | 100.00 | |
| 点数組成比 (%) | 1.48 | 0.49 | 5.91 | 7.88 | 84.24 | 100.00 | | |
| 重量組成比 (%) | 0.27 | 0.03 | 1.88 | 29.91 | 67.90 | 100.00 | | |

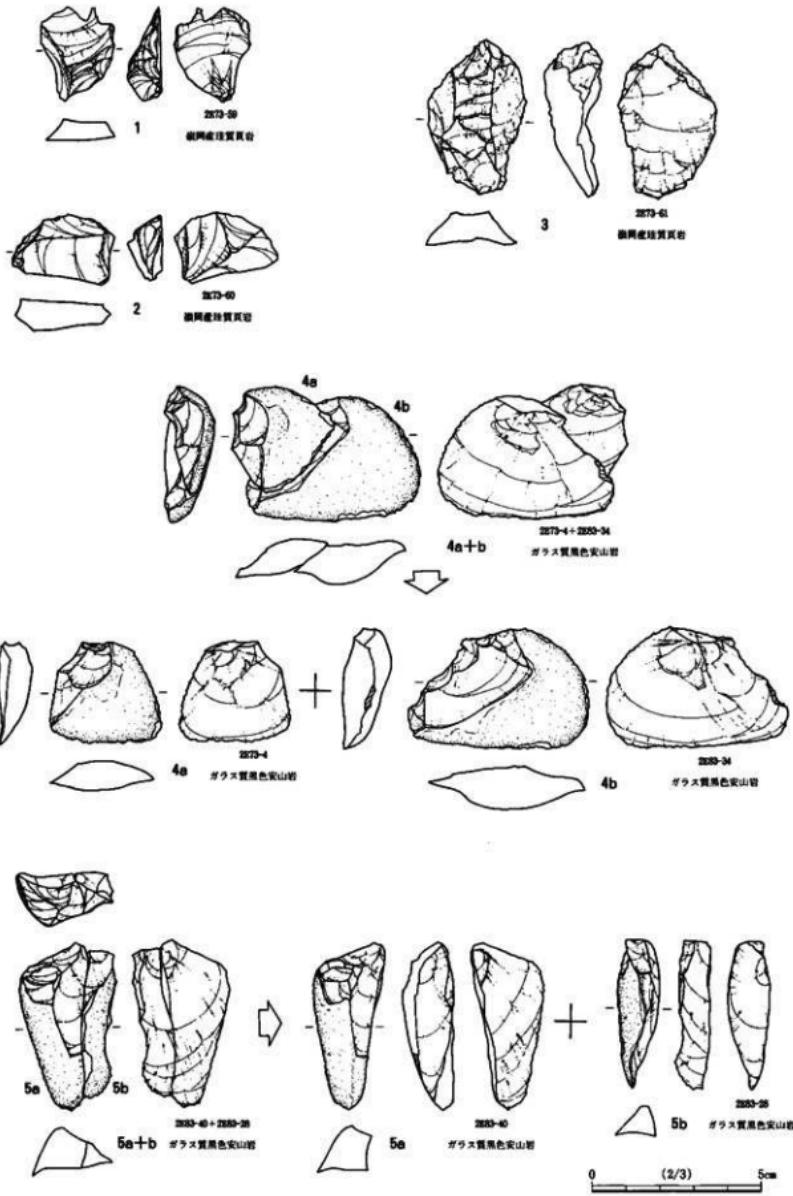
【上段：点数、下段：重量(g)】



第31図 第Ⅳ文化層 第8ブロック器種別分布



第32図 第N文化層 第8ブロック石材別分布



第33図 第IV文化層 第8ブロック出土石器

(5) 単独出土石器（第34図、図版16）

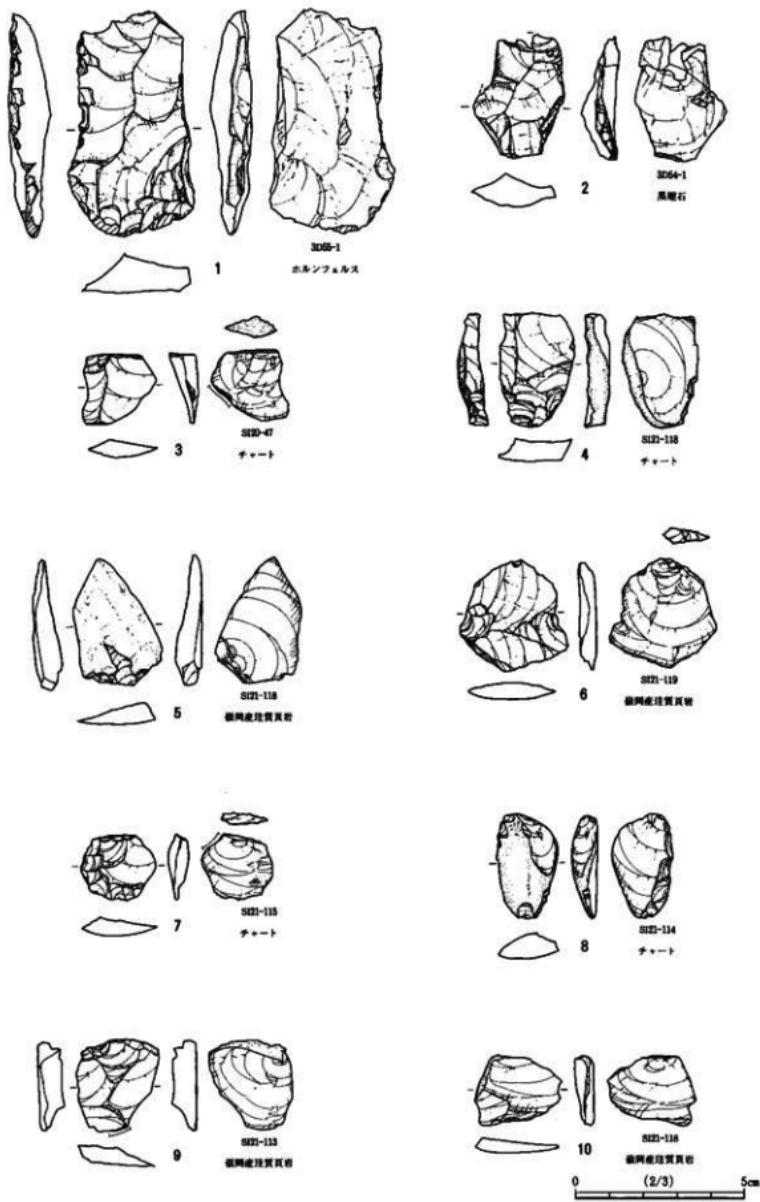
出土状況 上層調査時に出土した石器で、石器製作技術・石材・平面分布・出土状況からみて、旧石器時代の所産の石器と思われるものを単独出土石器として取扱った。出土状況は、主に、3D-54・55出土のものとSI21から出土した石器である。

出土遺物 石器組成は、SI21から出土したものは、横岡産珪質頁岩・チャートの石材を用いており、定型的な石器はみられない。1は削器である。横長剥片を素材として、右側縁に折断後調整加工が施され、左側縁に調整加工が施されている。2は二次加工のある剥片である。縦長剥片を素材として、右側縁に急角度の調整加工が施されている。調査時の破損により全体形状が不明だが、ナイフ形石器の可能性もある。3～10はSI21からまとめて出土したものである。上層の遺構によって、本来分布していた遺物集中地点が搅乱され、上層から出土したものと思われる。3は縦長剥片を素材とした微細剥離痕のある剥片である。4～6は縦長の剥片である。7・8は二次加工のある剥片である。9は下端部に微細剥離痕のある剥片である。10は横長剥片である。

第15表 単独出土石器組成表

| 石材\器種 | 削器 | 二次加工のある剥片 | 飛鏢剥離痕のある剥片 | 剥片 | 合計 | 組成比(%) |
|----------|------------|-----------|------------|------------|------------|----------------|
| 鳥嘴石 | | 1 6.82 | | | 1 6.82 | 10.00 9.42 |
| ホルンフェルス | 1 27.09 | | | | 1 27.09 | 10.00 37.40 |
| 横岡産珪質頁岩 | | | 1 5.75 | 3 16.38 | 4 22.13 | 40.00 30.56 |
| チャート | | 2 7.07 | 1 2.68 | 1 6.63 | 4 16.38 | 40.00 22.62 |
| 点数組成比(%) | 1 | 3 | 2 | 4 | 10 | 100.00 |
| 重量組成比(%) | 27.09 | 13.89 | 8.43 | 33.01 | 72.41 | 100.00 |
| 点数組成比(%) | 10.00 | 30.00 | 20.00 | 40.00 | 100.00 | |
| 重量組成比(%) | 37.41 | 19.18 | 11.64 | 31.77 | 100.00 | |

[上段：点数、下段：重量(g)]



第34図 単独出土石器

第16表 全文化層属性表

| 文化層 | プロック | 神園番号 | グリッド | 遺物番号 | 枚番号 | 複合番号 | 図 | 石材 | 長さ (mm) | 幅 (mm) | 厚さ (mm) | 重量 (g) | 出土層位 |
|-----|------|-------|-------|------|-----|------|-----------|------------|------------|-----------|------------|-----------|-------|
| I | I | 1-01 | SC-65 | 10 | | | 二次加工のある片 | 安山岩 | 43.90 | 30.00 | 13.80 | 17.33 | V~K |
| I | I | 1-02 | SC-64 | 1 | | | 二次加工のある片 | チャート | 45.80 | 21.20 | 10.30 | 8.70 | Mb |
| I | I | 1-03 | SC-65 | 5 | | | 微細刻痕のある片 | チャート | 28.60 | 26.30 | 7.30 | 5.09 | V |
| I | I | 1-04a | SC-65 | 6 | 6 | | 片 | 安山岩 | 65.20 | 41.50 | 12.20 | 13.28 | V |
| I | I | 1-04b | SC-65 | 8 | 6 | | 片 | 安山岩 | 31.20 | 22.50 | 12.80 | 9.45 | Ka |
| I | I | 1-04c | SC-65 | 9 | 6 | | 片 | 安山岩 | 19.20 | 14.00 | 4.30 | 0.84 | Ka |
| I | I | 1-04d | SC-65 | 7 | 6 | | 石核 | 安山岩 | 40.20 | 56.40 | 17.50 | 49.26 | V |
| I | I | 1-05 | SC-65 | 2 | | | 石核 | トロトロ石(安山岩) | 36.60 | 40.00 | 24.00 | 34.00 | V |
| I | I | 1-06 | SC-75 | 2 | | | 片 | 魔眼岩 | 60.70 | 55.40 | 21.20 | 55.69 | V |
| I | I | 1-07 | SC-65 | 11 | | | 魔眼岩 | 68.10 | 57.90 | 23.80 | 122.00 | V | |
| I | I | 1-08 | SC-56 | 1 | | | 魔眼岩 | 74.00 | 64.80 | 36.00 | 254.00 | V | |
| I | I | | SC-43 | 1 | | | 魔眼岩 | 8.80 | 5.70 | 1.30 | 0.03 | | |
| I | I | | SC-45 | 1 | 1 | | 玉髓(メノウ含む) | 23.20 | 16.20 | 14.00 | 1.43 | Ka | |
| I | I | | SC-45 | 1 | 2 | | 玉髓(メノウ含む) | 17.00 | 9.00 | 2.30 | 0.39 | Ka | |
| I | I | | SC-46 | 1 | | | 片 | トロトロ石(安山岩) | 44.90 | 30.40 | 24.40 | 22.85 | Ka |
| I | I | | SC-53 | 1 | | | 片 | 魔眼岩 | 14.90 | 7.00 | 3.50 | 0.21 | Ka |
| I | I | | SC-53 | 2 | | | 片 | 魔眼岩 | 10.10 | 4.30 | 2.00 | 0.06 | |
| I | I | | SC-55 | 1 | 46 | | 片 | 魔眼岩 | 67.80 | 15.90 | 30.00 | 41.00 | Ka~Ke |
| I | I | | SC-65 | 1 | 46 | | 片 | 魔眼岩 | 55.80 | 17.40 | 30.80 | 51.00 | V |
| I | I | | SC-65 | 3 | 46 | | 片 | 魔眼岩 | 14.40 | 26.90 | 11.40 | 10.00 | V |
| I | I | | SC-65 | 4 | 46 | | 片 | 砂岩 | 60.50 | 56.70 | 39.20 | 172.00 | V |
| I | I | | SC-66 | 1 | | | 片 | チャート | 32.50 | 25.20 | 10.00 | 9.83 | N |
| I | I | | SC-66 | 2 | | | 片 | 魔眼岩 | 34.60 | 28.00 | 16.30 | 3.83 | Mb |
| I | I | | SC-75 | 1 | | | 片 | 魔眼岩 | 68.40 | 63.60 | 15.80 | 66.00 | V |
| ■ | 2 | 2-01a | 4C-45 | 1 | | 27 | 片 | ホルンフェルス | 22.70 | 30.90 | 7.50 | 4.33 | V |
| ■ | 2 | 2-01b | 4C-45 | 2 | | 27 | 片 | ホルンフェルス | 10.10 | 35.40 | 6.00 | 4.31 | V~VII |
| ■ | 2 | | 4C-46 | 1 | 1 | | 片 | 魔眼岩 | 16.70 | 29.90 | 8.80 | 2.02 | V |
| ■ | 2 | | 4C-46 | 1 | 2 | | 片 | 魔眼岩 | 12.90 | 13.00 | 4.10 | 0.88 | V~VII |
| ■ | 3 | | 2F-05 | 1 | | | 片 | 魔眼岩 | 44.60 | 53.80 | 15.30 | 47.00 | Mb |
| ■ | 3 | | 2F-15 | 1 | | | 片 | 砂岩 | 19.00 | 19.90 | 5.00 | 1.71 | V |
| ■ | 3 | | 2F-15 | 2 | | | 片 | 砂岩 | 16.90 | 40.40 | 12.50 | 6.15 | V |
| ■ | 3 | | 2F-34 | 1 | | | 片 | ホルンフェルス | 28.00 | 29.30 | 22.90 | 24.00 | V~VII |
| ■ | 3 | | 2F-36 | 1 | | | 片 | チャート | 14.90 | 34.50 | 10.00 | 8.00 | VII |
| ■ | 4 | 4-01 | 2D-97 | 4 | 1 | | 微細刻痕のある片 | 黒曜石 | 25.80 | 22.60 | 5.80 | 3.44 | V |
| ■ | 4 | 4-02 | 2D-97 | 10 | | | 微形石器 | ガラス質黑色安山岩 | 17.30 | 25.00 | 5.70 | 3.20 | V |
| ■ | 4 | 4-03 | 2D-98 | 1 | | | 微形石器 | 安山岩 | 18.70 | 16.30 | 7.10 | 2.31 | V |
| ■ | 4 | 4-04 | 2D-98 | 9 | | | 微形石器 | 安山岩 | 15.80 | 16.50 | 4.10 | 1.42 | V |
| ■ | 4 | 4-05 | 2D-98 | 14 | | | 微形石器 | 安山岩 | 17.90 | 12.90 | 6.80 | 1.98 | V |
| ■ | 4 | 4-06 | 2D-98 | 10 | | | 微形石器 | 安山岩 | 21.20 | 13.70 | 6.10 | 1.87 | V |
| ■ | 4 | 4-07 | 2D-98 | 3 | | | 微形石器 | 安山岩 | 18.70 | 14.30 | 6.90 | 2.12 | V |
| ■ | 4 | | 2D-97 | 1 | | | 片 | ガラス質黑色安山岩 | 12.00 | 15.70 | 1.80 | 0.40 | V |
| ■ | 4 | | 2D-98 | 2 | | | 片 | ガラス質黑色安山岩 | 14.50 | 19.80 | 5.00 | 1.30 | V |
| ■ | 4 | | 2D-98 | 3 | | | 片 | 黒曜石 | 12.40 | 12.30 | 2.10 | 0.26 | V |
| ■ | 4 | | 2D-97 | 1 | | | 片 | ガラス質黑色安山岩 | 10.50 | 12.20 | 2.80 | 0.33 | V |
| ■ | 4 | | 2D-97 | 2 | | | 片 | ガラス質黑色安山岩 | 19.40 | 18.90 | 5.00 | 1.75 | V |
| ■ | 4 | | 2D-97 | 3 | | | 片 | ガラス質黑色安山岩 | 18.80 | 18.60 | 4.40 | 1.42 | V |
| ■ | 4 | | 2D-97 | 4 | 2 | | 片 | 黒曜石 | 8.20 | 11.10 | 4.30 | 0.31 | V |
| ■ | 4 | | 2D-97 | 5 | | | 片 | ガラス質黑色安山岩 | 9.50 | 33.40 | 10.00 | 3.84 | V |
| ■ | 4 | | 2D-97 | 6 | 1 | | 片 | ガラス質黑色安山岩 | 15.80 | 11.80 | 2.20 | 0.57 | V |
| ■ | 4 | | 2D-97 | 6 | 2 | | 片 | ガラス質黑色安山岩 | 9.10 | 10.60 | 5.30 | 0.60 | V |
| ■ | 4 | | 2D-97 | 6 | 3 | | 片 | ガラス質黑色安山岩 | 7.90 | 4.60 | 1.80 | 0.04 | V |
| ■ | 4 | | 2D-97 | 7 | | | 片 | 黒曜石 | 16.20 | 10.60 | 1.50 | 0.20 | V |
| ■ | 4 | | 2D-97 | 8 | | | 片 | ガラス質黑色安山岩 | 9.40 | 17.90 | 3.10 | 0.56 | V |
| ■ | 4 | | 2D-97 | 9 | | | 片 | ガラス質黑色安山岩 | 28.00 | 25.30 | 4.80 | 3.93 | V |
| ■ | 4 | | 2D-97 | 11 | | | 片 | 黒曜石 | 14.40 | 6.00 | 1.00 | 0.06 | V |
| ■ | 4 | | 2D-97 | 12 | | | 片 | チャート | 22.60 | 34.30 | 13.40 | 13.00 | V |
| ■ | 4 | | 2D-98 | 1 | 2 | | 片 | 黒曜石 | 11.20 | 10.40 | 1.80 | 0.09 | V |
| ■ | 4 | | 2D-98 | 1 | 1 | | 片 | 黒曜石 | 7.80 | 11.00 | 3.60 | 0.13 | V |
| ■ | 4 | | 2D-98 | 2 | 1 | | 片 | 黒曜石 | 11.20 | 9.90 | 4.50 | 0.56 | V |
| ■ | 4 | | 2D-98 | 2 | 2 | | 片 | 黒曜石 | 9.40 | 10.30 | 2.20 | 0.13 | V |
| ■ | 4 | | 2D-98 | 4 | 2 | | 片 | 魔眼岩 | 7.80 | 20.80 | 3.30 | 0.45 | V |
| ■ | 4 | | 2D-98 | 4 | 1 | | 片 | 砂岩 | 109.60 | 46.30 | 16.50 | 89.00 | V |

| 文化層 | ブローラ | 神御番号 | グリッド | 遺物番号 | 枚番号 | 地番号 | 器種 | 石材 | 長さ (mm) | 幅 (mm) | 厚さ (mm) | 重量 (g) | 出土層位 |
|-----|------|-------|-------|------|-----|-----|-----------|-----------|------------|-----------|------------|-----------|------|
| Ⅲ | 4 | | 2D-98 | 5 | | | 碎片 | ガラス質黒色安山岩 | 19.80 | 11.90 | 3.50 | 0.95 | V |
| Ⅲ | 4 | | 2D-98 | 6 | | | 碎片 | ガラス質黒色安山岩 | 23.10 | 9.00 | 6.90 | 0.88 | V |
| Ⅲ | 4 | | 2D-98 | 7 | | | 碎片 | ガラス質黒色安山岩 | 29.50 | 20.60 | 6.70 | 4.75 | V |
| Ⅲ | 4 | | 2D-98 | 8 | | | 碎片 | ガラス質黒色安山岩 | 14.70 | 18.00 | 5.50 | 1.81 | V |
| Ⅲ | 4 | | 2D-98 | 11 | | | 碎片 | ガラス質黒色安山岩 | 26.80 | 12.60 | 6.90 | 1.89 | V |
| Ⅲ | 4 | | 2D-98 | 12 | | | 碎片 | ガラス質黒色安山岩 | 20.80 | 10.40 | 4.60 | 0.87 | V |
| Ⅲ | 4 | | 2D-98 | 13 | | | 碎片 | ガラス質黒色安山岩 | 17.10 | 7.90 | 5.30 | 0.40 | V |
| Ⅲ | 4 | | 2D-98 | 15 | | | 碎片 | ガラス質黒色安山岩 | 17.70 | 29.10 | 7.70 | 3.54 | V |
| Ⅲ | 4 | | 2D-98 | 16 | | | 碎片 | ガラス質黒色安山岩 | 23.40 | 25.70 | 8.10 | 3.91 | V |
| Ⅲ | 5 | 5-01 | 2E-90 | 3 | | | ナイフ形石器 | 黒曜石 | 36.30 | 20.70 | 8.00 | 6.71 | V |
| Ⅲ | 5 | 5-02 | 2E-90 | 1 | | | ナイフ形石器 | 黒曜石 | 29.70 | 20.60 | 8.80 | 5.39 | V |
| Ⅲ | 5 | 5-03 | 2E-90 | 10 | | | 研磨器 | 黒曜石 | 39.40 | 20.60 | 9.00 | 7.05 | V~V |
| Ⅲ | 5 | 5-04 | 2D-99 | 3 | | | 研磨器 | 黒曜石 | 29.70 | 38.50 | 12.60 | 12.69 | V |
| Ⅲ | 5 | 5-05 | 2D-99 | 1 | | | 碎片 | 黒曜石 | 20.30 | 47.30 | 10.10 | 10.74 | V |
| Ⅲ | 5 | 5-06 | 2E-90 | 2 | | | 楔形石器 | 黒曜石 | 24.20 | 15.00 | 8.40 | 2.81 | V |
| Ⅲ | 5 | 5-07 | 2E-90 | 2 | | | 鏡面研磨のある碎片 | 黒曜石 | 33.80 | 7.30 | 9.40 | 1.51 | V |
| Ⅲ | 5 | 5-08 | 2E-90 | 1 | | | 二次加工のある碎片 | ガラス質黒色安山岩 | 29.70 | 29.20 | 6.00 | 9.29 | V |
| Ⅲ | 5 | 5-09a | 2D-99 | 5 | | | 研磨器 | 安山岩 | 28.90 | 32.10 | 7.60 | 7.21 | V |
| Ⅲ | 5 | 5-09b | 2D-99 | 8 | | | 研磨器 | 安山岩 | 57.80 | 38.60 | 14.40 | 41.58 | V~V |
| Ⅲ | 5 | 5-10a | 2D-99 | 9 | 58 | | 研磨器 | 安山岩 | 12.50 | 24.80 | 6.00 | 15.00 | V~V |
| Ⅲ | 5 | 5-10b | 2D-99 | 7 | 58 | | 研磨器 | 安山岩 | 64.30 | 44.50 | 38.20 | 84.00 | V~V |
| Ⅲ | 5 | 5-11a | 2D-99 | 11 | 4 | | 碎片 | 安山岩 | 23.80 | 40.20 | 19.80 | 12.86 | V~V |
| Ⅲ | 5 | 5-11b | 2E-90 | 4 | 4 | | 碎片 | 安山岩 | 26.00 | 30.70 | 10.70 | 8.97 | V~V |
| Ⅲ | 5 | 5-11c | 2D-99 | 2 | 4 | | 碎片 | 安山岩 | 23.60 | 14.00 | 5.20 | 2.04 | V |
| Ⅲ | 5 | 5-11d | 2D-99 | 3 | 4 | | 碎片 | 安山岩 | 14.80 | 16.10 | 4.60 | 1.10 | V |
| Ⅲ | 5 | 5-11e | 2D-99 | 6 | 4 | | 碎片 | 安山岩 | 22.50 | 18.80 | 8.40 | 3.05 | V~V |
| Ⅲ | 5 | 5-11f | 2D-99 | 8 | 4 | | 石核 | 安山岩 | 51.60 | 66.00 | 21.70 | 68.03 | V |
| Ⅲ | 5 | 5-12a | 2D-99 | 4 | 3 | | 砂岩 | 砂岩 | 37.40 | 35.19 | 12.30 | 14.95 | V |
| Ⅲ | 5 | 5-12b | 2D-99 | 7 | 3 | | 砂岩 | 砂岩 | 75.30 | 66.40 | 63.20 | 421.00 | V |
| Ⅲ | 5 | | 2D-99 | 5 | 57 | | 鏡面研磨 | 安山岩 | 16.60 | 23.00 | 3.60 | 0.95 | V |
| Ⅲ | 5 | | 2D-99 | 12 | | | 碎片 | チャート | 12.80 | 25.50 | 5.50 | 1.61 | V~V |
| Ⅲ | 5 | | 2D-99 | 2 | | | 鏡面研磨 | 砂岩 | 13.70 | 32.70 | 13.60 | 7.00 | V |
| Ⅲ | 5 | | 2D-99 | 4 | | | 碎片 | 砂岩 | 24.50 | 33.40 | 4.90 | 4.20 | V |
| Ⅲ | 5 | | 2D-99 | 6 | 1 | | 碎片 | 黒曜石 | 33.90 | 24.00 | 9.10 | 4.41 | V |
| Ⅲ | 5 | | 2D-99 | 6 | 2 | | 碎片 | 黒曜石 | 8.10 | 13.30 | 2.60 | 0.20 | V |
| Ⅲ | 5 | | 2D-99 | 9 | 1 | | 碎片 | 黒曜石 | 18.60 | 22.20 | 6.50 | 1.78 | V |
| Ⅲ | 5 | | 2D-99 | 9 | 2 | | 碎片 | 黒曜石 | 16.30 | 5.30 | 2.70 | 0.16 | V |
| Ⅲ | 5 | | 2E-90 | 1 | | | 碎片 | ガラス質黒色安山岩 | 17.60 | 16.80 | 3.20 | 1.45 | V |
| Ⅲ | 5 | | 2E-90 | 3 | | | 碎片 | ガラス質黒色安山岩 | 26.90 | 23.00 | 7.50 | 4.81 | V~V |
| Ⅲ | 6 | 6-01 | 3E-00 | 4 | 1 | | ナイフ形石器 | 黒曜石 | 26.60 | 24.30 | 10.10 | 5.49 | V~V |
| Ⅲ | 6 | 6-02 | 3E-00 | 1 | 2 | | ナイフ形石器 | 黒曜石 | 19.30 | 21.70 | 7.20 | 2.16 | V~V |
| Ⅲ | 6 | 6-03 | 3E-00 | 1 | 1 | | 研磨器 | 黒曜石 | 34.30 | 22.60 | 9.10 | 4.02 | V~V |
| Ⅲ | 6 | 6-04 | 3D-98 | 3 | | | 研磨器 | チャート | 26.90 | 25.60 | 9.10 | 5.84 | V |
| Ⅲ | 6 | 6-05 | 3D-19 | 1 | | | 鏡面研磨のある碎片 | 珪質頁岩 | 53.50 | 35.60 | 18.80 | 31.82 | V |
| Ⅲ | 6 | 6-06 | 3D-98 | 1 | | | 鏡面研磨のある碎片 | チャート | 38.00 | 51.80 | 11.30 | 18.28 | V~V |
| Ⅲ | 6 | 6-07 | 3D-18 | 1 | | | 二次加工のある碎片 | 黒曜石 | 23.40 | 26.60 | 6.40 | 3.07 | V |
| Ⅲ | 6 | 6-08 | 3D-98 | 2 | | | 石核 | 化粧木 | 30.70 | 30.20 | 14.80 | 10.04 | V |
| Ⅲ | 6 | 6-09 | 3E-00 | 5 | | | 二次加工のある碎片 | 黒曜石 | 14.70 | 20.40 | 10.00 | 1.99 | V~V |
| Ⅲ | 6 | 6-10 | 3D-18 | 3 | | | 碎片 | 綠色化粧岩 | 64.80 | 44.70 | 22.80 | 46.85 | V |
| Ⅲ | 6 | 6-11 | 3E-00 | 2 | | | 鏡面研磨 | 安山岩 | 44.60 | 61.10 | 15.70 | 51.64 | V |
| Ⅲ | 6 | 6-12a | 3D-09 | 1 | 12 | | 碎片 | 安山岩 | 30.10 | 30.70 | 6.00 | 5.40 | V~V |
| Ⅲ | 6 | 6-12b | 3D-09 | 2 | 12 | | 碎片 | 安山岩 | 44.10 | 14.10 | 8.80 | 5.63 | V~V |
| Ⅲ | 6 | | 2E-91 | 2 | | | 碎片 | 黒曜石 | 22.20 | 12.60 | 3.70 | 0.91 | V |
| Ⅲ | 6 | | 3D-09 | 3 | | | 碎片 | 成紋岩 | 22.80 | 32.00 | 14.20 | 9.82 | V |
| Ⅲ | 6 | | 3D-09 | 4 | | | 碎片 | 成紋岩 | 10.80 | 19.60 | 7.60 | 2.01 | V |
| Ⅲ | 6 | | 3D-09 | 5 | | | 砂 | 成紋岩 | 100.40 | 108.80 | 53.00 | 739.00 | V |
| Ⅲ | 6 | | 3D-18 | 2 | | | 碎片 | ガラス質黒色安山岩 | 29.90 | 13.40 | 7.40 | 3.04 | V |
| Ⅲ | 6 | | 3D-19 | 2 | | | 碎片 | ガラス質黒色安山岩 | 22.30 | 16.40 | 3.80 | 1.46 | V |
| Ⅲ | 6 | | 3D-19 | 3 | | | 碎片 | ガラス質黒色安山岩 | 32.00 | 9.80 | 9.30 | 2.80 | V |
| Ⅲ | 6 | | 3E-00 | 3 | | | 碎片 | 鐵鋼質珪質頁岩 | 19.20 | 45.30 | 8.00 | 6.63 | V |
| Ⅲ | 6 | | 3E-00 | 4 | 2 | | 砂片 | 黒曜石 | 11.60 | 11.40 | 2.80 | 0.22 | V~V |
| N | 7 | 7-01 | 2E-72 | 16 | | | ナイフ形石器 | チャート | 18.30 | 22.30 | 8.40 | 2.29 | N~V |
| N | 7 | 7-02 | 2E-61 | 2 | | | 鏡面研磨のある碎片 | 流紋岩 | 25.60 | 37.50 | 10.30 | 7.70 | N~V |
| N | 7 | 7-03 | 2E-62 | 1 | | | 鏡面研磨のある碎片 | ホルンフェルス | 23.80 | 19.80 | 5.20 | 2.05 | N~V |

| 文化層 | ブロック | 神保番号 | グリッド番号 | 遺物番号 | 枚番号 | 集合番号 | 器種 | 石材 | 長さ (mm) | 幅 (mm) | 厚さ (mm) | 重量 (g) | 出土層位 |
|-----|------|-------|--------|------|-----|------|----|-----------|------------|-----------|------------|-----------|------|
| N | T | 7-04 | 2E-72 | 3 | | | 石核 | 飯岡産珪質頁岩 | 31.50 | 38.30 | 27.30 | 21.00 | N~V |
| N | T | 7-05 | 2E-72 | 71 | | | 石核 | 飯岡産珪質頁岩 | 27.40 | 37.30 | 16.40 | 18.19 | N~V |
| N | T | 7-06 | 2E-71 | 12 | | | 剥片 | 飯岡産珪質頁岩 | 61.10 | 42.00 | 32.90 | 63.42 | M~M |
| N | T | 7-07a | 2E-72 | 36 | 8 | | 剥片 | ガラス質風化安山岩 | 35.60 | 29.70 | 19.70 | 10.94 | N~V |
| N | T | | 2E-71 | 1 | | | 剥片 | 虎紋岩 | 8.30 | 26.70 | 17.60 | 4.00 | N~V |
| N | T | | 2E-71 | 2 | | | 剥片 | 虎紋岩 | 11.50 | 21.10 | 18.80 | 5.00 | N~V |
| N | T | | 2E-71 | 3 | | | 剥片 | チャート | 49.30 | 33.00 | 21.60 | 55.00 | N~V |
| N | T | | 2E-71 | 4 | | | 剥片 | 虎紋岩 | 50.10 | 35.00 | 28.70 | 56.00 | N~V |
| N | T | | 2E-71 | 5 | | | 剥片 | 虎紋岩 | 12.80 | 37.10 | 5.40 | 3.19 | N~V |
| N | T | | 2E-71 | 6 | 1 | 111 | 剥片 | 虎紋岩 | 26.80 | 25.40 | 25.30 | 23.00 | N~V |
| N | T | | 2E-71 | 6 | 2 | | 剥片 | 虎紋岩 | 7.70 | 15.90 | 6.80 | 1.28 | N~V |
| N | T | | 2E-71 | 7 | | | 剥片 | 虎紋岩 | 44.10 | 68.00 | 57.10 | 219.00 | N~V |
| N | T | | 2E-71 | 8 | | 114 | 剥片 | 砂岩 | 30.70 | 75.00 | 28.70 | 90.00 | M~V |
| N | T | | 2E-71 | 9 | | 115 | 剥片 | 虎紋岩 | 48.20 | 49.40 | 43.10 | 154.00 | N~V |
| N | T | | 2E-71 | 10 | | 115 | 剥片 | 虎紋岩 | 45.30 | 93.60 | 44.10 | 236.00 | N~V |
| N | T | | 2E-71 | 11 | | 116 | 剥片 | 虎紋岩 | 31.10 | 42.90 | 3.40 | 13.00 | M~V |
| N | T | | 2E-71 | 13 | | | 剥片 | 虎紋岩 | 40.90 | 33.80 | 16.50 | 29.00 | M~M |
| N | T | | 2E-72 | 1 | 4 | | 剥片 | 虎紋岩 | 70.80 | 47.10 | 27.00 | 105.00 | N~V |
| N | T | | 2E-72 | 1 | 10 | | 剥片 | 虎紋岩 | 38.20 | 20.50 | 12.80 | 10.34 | N~V |
| N | T | | 2E-72 | 1 | 7 | | 剥片 | チャート | 28.40 | 31.40 | 26.20 | 32.00 | N~V |
| N | T | | 2E-72 | 1 | 8 | | 剥片 | チャート | 19.80 | 37.40 | 20.00 | 22.00 | N~V |
| N | T | | 2E-72 | 1 | 2 | | 剥片 | 砂岩 | 38.30 | 72.70 | 38.80 | 89.00 | N~V |
| N | T | | 2E-72 | 1 | 9 | | 剥片 | 礫灰岩 | 21.30 | 20.10 | 12.30 | 4.07 | N~V |
| N | T | | 2E-72 | 1 | 3 | | 剥片 | ホルンフェルス | 63.70 | 35.00 | 33.30 | 102.00 | N~V |
| N | T | | 2E-72 | 1 | 6 | | 剥片 | ホルンフェルス | 40.80 | 53.70 | 33.30 | 61.00 | N~V |
| N | T | | 2E-72 | 1 | 5 | | 剥片 | 虎紋岩 | 55.50 | 41.80 | 28.50 | 75.00 | N~V |
| N | T | | 2E-72 | 2 | | 126 | 剥片 | チャート | 12.80 | 18.10 | 2.20 | 3.00 | N~V |
| N | T | | 2E-72 | 4 | | 111 | 剥片 | 虎紋岩 | 13.50 | 22.40 | 37.30 | 70.00 | N~V |
| N | T | | 2E-72 | 5 | | 126 | 剥片 | チャート | 16.90 | 24.30 | 17.50 | 7.00 | N~V |
| N | T | | 2E-72 | 6 | | | 砂片 | チャート | 7.00 | 14.00 | 3.80 | 0.22 | N~V |
| N | T | | 2E-72 | 7 | | | 砂片 | チャート | 8.70 | 18.60 | 3.20 | 0.39 | N~V |
| N | T | | 2E-72 | 8 | | 132 | 砂片 | ホルンフェルス | 12.60 | 14.60 | 17.40 | 5.00 | N~V |
| N | T | | 2E-72 | 9 | | | 砂片 | 虎紋岩 | 24.50 | 39.10 | 5.40 | 5.22 | N~V |
| N | T | | 2E-72 | 10 | 1 | 126 | 砂片 | チャート | 34.30 | 44.40 | 14.00 | 17.00 | N~V |
| N | T | | 2E-72 | 10 | 2 | | 砂片 | チャート | 30.30 | 47.70 | 11.40 | 16.88 | N~V |
| N | T | | 2E-72 | 11 | | | 砂片 | ホルンフェルス | 14.70 | 21.00 | 14.10 | 2.85 | N~V |
| N | T | | 2E-72 | 12 | | | 砂片 | チャート | 15.50 | 32.00 | 10.30 | 6.00 | N~V |
| N | T | | 2E-72 | 13 | | 137 | 剥片 | チャート | 14.60 | 30.00 | 8.40 | 11.00 | N~V |
| N | T | | 2E-72 | 14 | | | 剥片 | 虎紋岩 | 29.20 | 36.70 | 23.60 | 33.00 | N~V |
| N | T | | 2E-72 | 15 | | | 砂片 | チャート | 16.00 | 14.80 | 2.70 | 0.57 | N~V |
| N | T | | 2E-72 | 17 | | | 砂片 | チャート | 20.50 | 18.00 | 3.00 | 1.00 | N~V |
| N | T | | 2E-72 | 18 | | | 砂片 | 虎紋岩 | 50.30 | 45.20 | 31.40 | 70.00 | N~V |
| N | T | | 2E-72 | 19 | | | 砂片 | 虎紋岩 | 50.00 | 61.40 | 21.40 | 56.00 | N~V |
| N | T | | 2E-72 | 20 | | 137 | 剥片 | チャート | 17.20 | 38.20 | 17.00 | 20.00 | N~V |
| N | T | | 2E-72 | 21 | | 138 | 砂片 | チャート | 15.20 | 24.30 | 1.80 | 3.00 | N~V |
| N | T | | 2E-72 | 22 | | | 砂片 | 虎紋岩 | 108.40 | 66.60 | 66.20 | 503.00 | M~V |
| N | T | | 2E-72 | 23 | | 145 | 砂片 | ホルンフェルス | 22.00 | 47.30 | 18.20 | 30.00 | N~V |
| N | T | | 2E-72 | 24 | | 146 | 砂片 | ホルンフェルス | 21.50 | 76.60 | 10.30 | 35.00 | N~V |
| N | T | | 2E-72 | 25 | | | 砂片 | 砂岩 | 40.00 | 53.70 | 20.40 | 47.00 | N~V |
| N | T | | 2E-72 | 26 | | 138 | 砂片 | チャート | 19.00 | 21.20 | 24.30 | 17.00 | N~V |
| N | T | | 2E-72 | 27 | 1 | 148 | 砂片 | ホルンフェルス | 38.10 | 81.70 | 19.20 | 150.00 | N~V |
| N | T | | 2E-72 | 27 | 2 | 111 | 砂片 | 虎紋岩 | 14.00 | 23.50 | 12.00 | 15.00 | N~V |
| N | T | | 2E-72 | 28 | | 149 | 砂片 | 虎紋岩 | 37.00 | 75.50 | 25.00 | 122.00 | N~V |
| N | T | | 2E-72 | 29 | | 150 | 砂片 | 虎紋岩 | 29.30 | 34.20 | 35.80 | 46.00 | N~V |
| N | T | | 2E-72 | 30 | | 150 | 砂片 | 虎紋岩 | 27.60 | 39.20 | 25.50 | 25.00 | N~V |
| N | T | | 2E-72 | 31 | | | 剥片 | 飯岡産珪質頁岩 | 13.00 | 34.50 | 18.00 | 9.00 | N~V |
| N | T | | 2E-73 | 32 | 2 | 132 | 砂片 | ホルンフェルス | 23.00 | 25.00 | 9.00 | 8.00 | N~V |
| N | T | | 2E-73 | 32 | 4 | | 砂片 | ホルンフェルス | 17.20 | 14.70 | 12.70 | 3.25 | N~V |
| N | T | | 2E-73 | 32 | 3 | 132 | 砂片 | ホルンフェルス | 16.80 | 23.20 | 12.50 | 6.00 | N~V |
| N | T | | 2E-73 | 33 | | 132 | 砂片 | ホルンフェルス | 15.30 | 15.90 | 17.30 | 5.00 | N~V |
| N | T | | 2E-73 | 34 | | | 砂片 | 虎紋岩 | 77.20 | 44.30 | 29.20 | 128.00 | M~V |
| N | T | | 2E-73 | 35 | | 149 | 砂片 | 虎紋岩 | 6.20 | 50.40 | 35.30 | 17.00 | N~V |
| N | T | | 2E-73 | 36 | | | 砂片 | 砂岩 | 43.40 | 51.90 | 31.10 | 69.00 | N~V |
| N | T | | 2E-73 | 37 | | 132 | 砂片 | ホルンフェルス | 11.10 | 26.40 | 20.30 | 15.00 | N~V |

| 文化層 | ブロック | 標識番号 | グリッド | 遺物番号 | 枚番号 | 堆積番号 | 器種 | 石材 | 長さ (mm) | 幅 (mm) | 厚さ (mm) | 重量 (g) | 出土部位 |
|-----|------|-------|------|------|-----|------|----|---------|------------|-----------|------------|-----------|------|
| N | T | ZE-72 | 39 | | | | 縦片 | 砂岩 | 56.90 | 35.00 | 27.70 | 89.00 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 40 | 114 | | 114 | 縦片 | 砂岩 | 16.70 | 29.00 | 20.60 | 18.00 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 41 | 150 | | 150 | 縦片 | 砂岩 | 12.90 | 76.50 | 30.80 | 38.00 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 42 | | | | 縦片 | 泥紋岩 | 21.00 | 32.70 | 21.00 | 18.00 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 43 | 114 | | 114 | 縦片 | 砂岩 | 13.90 | 14.40 | 14.60 | 15.00 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 44 | | | | 縦片 | 泥紋岩 | 18.60 | 25.60 | 10.20 | 7.00 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 45 | 161 | | 161 | 縦片 | 泥紋岩 | 56.50 | 65.80 | 52.80 | 222.00 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 46 | 146 | | 146 | 縦片 | ホルンフェルス | 20.60 | 45.80 | 21.00 | 39.00 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 47 | 111 | | 111 | 縦片 | 泥紋岩 | 9.80 | 24.60 | 17.40 | 5.00 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 48 | 132 | | 132 | 縦片 | ホルンフェルス | 20.70 | 19.50 | 12.50 | 7.00 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 49 | 149 | | 149 | 縦片 | 泥紋岩 | 16.80 | 19.10 | 38.60 | 18.00 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 50 | 162 | | 162 | 縦片 | チャート | 23.20 | 24.80 | 20.20 | 7.00 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 51 | 163 | | 163 | 縦片 | 泥紋岩 | 77.50 | 55.30 | 41.10 | 219.00 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 52 | | | | 縦片 | 泥紋岩 | 21.30 | 37.50 | 13.40 | 11.00 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 53 | 114 | | 114 | 縦片 | 砂岩 | 20.40 | 28.60 | 38.50 | 25.00 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 54 | | | | 縦片 | 泥紋岩 | 20.00 | 42.80 | 21.00 | 37.00 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 55 | | | | 縦片 | チャート | 12.80 | 17.50 | 4.30 | 1.00 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 56 | 149 | | 149 | 縦片 | 泥紋岩 | 8.30 | 32.30 | 29.80 | 15.00 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 57 | 163 | | 163 | 縦片 | 泥紋岩 | 30.30 | 27.50 | 16.20 | 10.00 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 58 | 132 | | 132 | 縦片 | ホルンフェルス | 27.40 | 25.00 | 4.00 | 8.00 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 59 | 148 | | 148 | 縦片 | ホルンフェルス | 14.70 | 19.70 | 13.60 | 8.00 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 60 | 148 | | 148 | 縦片 | ホルンフェルス | 17.70 | 17.80 | 10.10 | 7.00 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 61 | | | | 縦片 | 鰐灰岩 | 31.70 | 33.60 | 8.50 | 8.00 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 62 | 158 | | 158 | 縦片 | 砂岩 | 19.70 | 56.30 | 30.60 | 35.00 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 63 | 116 | | 116 | 縦片 | 泥紋岩 | 32.60 | 55.70 | 14.40 | 29.00 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 64 | | | | 縦片 | チャート | 10.70 | 13.40 | 7.90 | 0.96 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 65 | 132 | | 132 | 縦片 | ホルンフェルス | 9.90 | 9.20 | 11.10 | 3.00 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 66 | | | | 縦片 | 鰐灰岩 | 10.30 | 14.30 | 22.60 | 4.00 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 68 | 148 | | 148 | 縦片 | ホルンフェルス | 22.30 | 41.40 | 15.50 | 12.00 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 69 | 170 | | 170 | 縦片 | 砂岩 | 16.60 | 32.00 | 21.70 | 15.00 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 70 | 111 | | 111 | 縦片 | 泥紋岩 | 25.10 | 29.30 | 27.50 | 39.00 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 72 | | | | 縦片 | 泥紋岩 | 17.30 | 41.30 | 30.00 | 22.00 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 73 | | | | 縦片 | チャート | 10.30 | 18.20 | 10.60 | 3.00 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 74 | 158 | | 158 | 縦片 | 砂岩 | 16.70 | 28.70 | 36.80 | 25.00 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 75 | 172 | | 172 | 縦片 | 泥紋岩 | 13.40 | 31.90 | 17.70 | 10.00 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 76 | | | | 縦片 | ホルンフェルス | 102.00 | 93.30 | 48.20 | 498.00 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 77 | | | | 縦片 | 泥紋岩 | 21.80 | 27.30 | 10.10 | 6.00 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 78 | 114 | | 114 | 縦片 | 砂岩 | 12.10 | 29.30 | 7.00 | 10.00 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 79 | | | | 縦片 | 成紋岩 | 8.40 | 11.60 | 8.10 | 0.83 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 80 | 145 | | 145 | 縦片 | ホルンフェルス | 9.50 | 46.20 | 11.20 | 15.00 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 81 | | | | 縦片 | 鰐灰岩 | 9.90 | 14.50 | 8.00 | 1.39 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 82 | 128 | | 128 | 縦片 | チャート | 19.00 | 18.30 | 10.60 | 5.00 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 83 | | | | 縦片 | 泥紋岩 | 27.20 | 45.30 | 2.80 | 15.00 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 84 | 114 | | 114 | 縦片 | 砂岩 | 27.10 | 26.70 | 15.10 | 45.00 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 85 | | | | 縦片 | 鰐河崖柱質頁岩 | 15.50 | 36.30 | 15.60 | 7.63 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 86 | 148 | | 148 | 縦片 | ホルンフェルス | 14.30 | 16.40 | 13.00 | 7.00 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 87 | | | | 縦片 | チャート | 7.30 | 14.40 | 11.40 | 1.39 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 88 | | | | 縦片 | 泥紋岩 | 15.30 | 17.30 | 4.30 | 1.21 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 89 | 111 | | 111 | 縦片 | 泥紋岩 | 11.30 | 9.00 | 7.50 | 1.00 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 90 | 162 | | 162 | 縦片 | チャート | 65.10 | 54.50 | 34.30 | 178.00 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 91 | | | | 縦片 | チャート | 73.00 | 44.30 | 33.70 | 189.00 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 92 | | | | 縦片 | 泥紋岩 | 73.40 | 35.90 | 30.40 | 125.00 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 93 | | | | 縦片 | 泥紋岩 | 115.40 | 51.80 | 26.80 | 246.00 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 94 | | | | 縦片 | 泥紋岩 | 74.80 | 47.40 | 43.10 | 231.00 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 95 | 111 | | 111 | 縦片 | 泥紋岩 | 19.30 | 34.20 | 24.30 | 30.00 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 96 | 146 | | 146 | 縦片 | ホルンフェルス | 48.40 | 74.10 | 27.40 | 91.00 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 97 | 184 | | 184 | 縦片 | チャート | 27.80 | 37.30 | 29.10 | 36.00 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 98 | | | | 縦片 | 泥紋岩 | 17.70 | 16.50 | 4.50 | 1.32 | N~V |
| N | T | ZE-72 | 99 | 114 | | 114 | 縦片 | 砂岩 | 10.60 | 48.20 | 20.00 | 33.00 | M~V |
| N | T | ZE-72 | 100 | | | | 縦片 | 泥紋岩 | 74.40 | 69.80 | 40.20 | 292.00 | M~V |
| N | T | ZE-72 | 101 | | | | 縦片 | チャート | 67.50 | 74.00 | 29.50 | 169.00 | M~V |
| N | T | ZE-72 | 102 | 145 | | 145 | 縦片 | ホルンフェルス | 50.50 | 58.50 | 31.80 | 114.00 | M~V |
| N | T | ZE-72 | 104 | 188 | | 188 | 縦片 | 泥紋岩 | 26.00 | 61.40 | 37.10 | 81.00 | M~V |
| N | T | ZE-72 | 105 | 114 | | 114 | 縦片 | 砂岩 | 15.54 | 38.30 | 25.30 | 45.00 | M~V |

| 文化層 | プロック | 神田番号 | アリット | 遺物番号 | 枝番号 | 標示番号 | 器種 | 石材 | 長さ (mm) | 幅 (mm) | 厚さ (mm) | 重量 (g) | 出土層位 |
|-----|------|-------|-------|------|-----|------|-----------|-----------|------------|-----------|------------|-----------|------|
| N | 7 | 25-72 | 106 | | | | 板 | 流紋岩 | 78.10 | 74.00 | 47.20 | 382.00 | V-VI |
| N | 7 | 25-72 | 107 | | | | 板 | 流紋岩 | 111.40 | 62.50 | 44.20 | 391.00 | V-VI |
| N | 7 | 25-72 | 108 | 2 | 111 | | 板片 | 流紋岩 | 13.20 | 25.30 | 42.60 | 35.00 | V-VI |
| N | 7 | 25-72 | 108 | 1 | 114 | | 板片 | 砂岩 | 7.80 | 42.30 | 22.60 | 25.00 | M-VI |
| N | 7 | 25-72 | 109 | | | | 板片 | 流紋岩 | 43.00 | 65.00 | 31.00 | 61.00 | V-VI |
| N | 7 | 25-72 | 110 | | | | 板片 | 流紋岩 | 37.50 | 66.50 | 29.50 | 70.00 | V-VI |
| N | 7 | 25-72 | 111 | 1 | 146 | | 板片 | ホルンフェルス | 11.80 | 23.50 | 21.80 | 10.00 | V-VI |
| N | 7 | 25-72 | 111 | 2 | 148 | | 板片 | ホルンフェルス | 24.80 | 25.70 | 25.70 | 23.00 | M-VI |
| N | 7 | 25-72 | 112 | | 148 | | 板片 | ホルンフェルス | 14.00 | 49.00 | 34.00 | 40.00 | V-VI |
| N | 7 | 25-72 | 113 | | | | 板 | 流紋岩 | 68.00 | 35.30 | 27.10 | 93.00 | V |
| N | 7 | 25-72 | 114 | | 132 | | 板片 | ホルンフェルス | 50.00 | 66.10 | 35.80 | 167.00 | V |
| N | 7 | 25-72 | 115 | | | | 板片 | 砂岩 | 48.30 | 62.10 | 37.80 | 115.00 | V |
| N | 7 | 25-72 | 116 | | | | 板 | ホルンフェルス | 89.70 | 43.80 | 34.00 | 216.00 | V |
| N | 7 | 25-72 | 117 | | 194 | | 板片 | 流紋岩 | 29.80 | 57.20 | 54.40 | 189.00 | V |
| N | 7 | 25-72 | 118 | | 170 | | 板片 | 砂岩 | 7.90 | 26.70 | 35.40 | 15.00 | V |
| N | 7 | 25-72 | 119 | | 115 | | 板片 | 流紋岩 | 52.80 | 88.70 | 43.50 | 300.00 | V |
| N | 7 | 25-72 | 120 | | 170 | | 板片 | 砂岩 | 30.40 | 40.30 | 54.30 | 86.00 | V |
| N | 7 | 25-72 | 121 | | | | 板 | 流紋岩 | 97.80 | 64.30 | 37.90 | 277.00 | V |
| N | 7 | 25-72 | 122 | | 161 | | 板片 | 流紋岩 | 49.00 | 53.00 | 59.00 | 210.00 | V |
| N | 7 | 25-72 | 123 | | 170 | | 板片 | 砂岩 | 33.60 | 46.10 | 41.60 | 45.00 | V |
| N | 7 | 25-72 | 124 | | | | 板 | 流紋岩 | 63.00 | 81.70 | 41.80 | 245.00 | V |
| N | 7 | 25-72 | 125 | | 111 | | 板片 | 流紋岩 | 24.30 | 30.20 | 35.50 | 55.00 | V |
| N | 7 | 25-72 | 126 | | | | 板 | 流紋岩 | 59.00 | 80.10 | 48.20 | 254.00 | V |
| N | 7 | 25-72 | 127 | | 148 | | 板片 | ホルンフェルス | 24.80 | 81.80 | 45.00 | 120.00 | V |
| N | 7 | 25-72 | 128 | | | | チャート | | 50.30 | 32.20 | 36.30 | 188.00 | V |
| N | 7 | 25-72 | 129 | 2 | 161 | | 板片 | 流紋岩 | 18.20 | 24.80 | 3.00 | 5.00 | V |
| N | 7 | 25-72 | 129 | 1 | 115 | | 板片 | 流紋岩 | 6.00 | 34.60 | 24.80 | 7.00 | V |
| N | 7 | 25-72 | 129 | 5 | | | チャート | | 16.00 | 18.50 | 8.20 | 2.72 | V |
| N | 7 | 25-72 | 129 | 6 | | | チャート | | 4.40 | 17.00 | 9.30 | 1.04 | V |
| N | 7 | 25-72 | 129 | 4 | | | チャート | | 17.50 | 11.00 | 6.40 | 1.27 | V |
| N | 7 | 25-72 | 129 | 7 | | | チャート | | 9.30 | 14.50 | 5.30 | 0.78 | V |
| N | 7 | 25-72 | 130 | | | | チャート | | 72.80 | 41.60 | 27.80 | 134.00 | V |
| N | 7 | 25-72 | 131 | | 194 | | 板片 | 流紋岩 | 20.60 | 58.50 | 55.70 | 150.00 | V |
| N | 7 | 25-72 | 132 | | 194 | | 板片 | 流紋岩 | 22.20 | 46.20 | 28.50 | 50.00 | V |
| N | 7 | 25-72 | 133 | | 184 | | 板片 | チャート | 34.40 | 62.70 | 31.10 | 70.00 | V |
| N | 7 | 25-72 | 134 | | 184 | | 板片 | チャート | 22.70 | 56.50 | 29.80 | 58.00 | V |
| N | 7 | 25-72 | 135 | | | | 板片 | 流紋岩 | 43.70 | 89.60 | 44.60 | 166.00 | V |
| N | 7 | 25-72 | 136 | | 114 | | 板片 | 砂岩 | 20.40 | 31.90 | 19.90 | 30.00 | V |
| N | 7 | 25-72 | 137 | | 172 | | 板片 | 流紋岩 | 20.00 | 34.00 | 20.10 | 16.00 | V |
| N | 7 | 25-72 | 138 | | | | 板片 | 流紋岩 | 31.50 | 82.80 | 58.50 | 206.00 | V |
| N | 7 | 25-72 | 139 | | 114 | | 板片 | 砂岩 | 33.70 | 41.10 | 23.30 | 40.00 | V |
| N | 7 | 25-72 | 140 | | 170 | | 板片 | 砂岩 | 18.90 | 55.60 | 35.40 | 25.00 | V |
| N | 7 | 25-81 | 1 | | | | 板片 | 砂岩 | 17.00 | 18.30 | 19.00 | 4.00 | V-VI |
| N | 7 | 25-81 | 3 | 163 | | | 板片 | 流紋岩 | 15.10 | 34.20 | 28.10 | 15.00 | V-VI |
| N | 7 | 25-82 | 40 | | | | 板片 | 流紋岩 | 41.10 | 51.00 | 42.60 | 87.00 | V-VI |
| N | 7 | 25-82 | 41 | | | | チャート | | 13.30 | 7.70 | 5.60 | 0.55 | V-VI |
| N | 7 | 25-82 | 42 | 149 | | | 板片 | 流紋岩 | 24.70 | 60.80 | 26.50 | 27.00 | V-VI |
| N | 7 | 25-82 | 43 | | | | チャート | | 20.50 | 18.80 | 9.90 | 3.48 | V-VI |
| N | 7 | 25-82 | 44 | | | | 板片 | ガラス質黒色安山岩 | 25.90 | 18.80 | 3.20 | 2.04 | V-VI |
| N | 7 | 25-81 | 1 | 138 | | | チャート | | 10.20 | 24.50 | 19.50 | 14.00 | V |
| N | 8 | 7-07b | 25-82 | 25 | 8 | | 板片 | ガラス質黒色安山岩 | 34.60 | 25.20 | 8.70 | 7.33 | N-V |
| N | 8 | 8-01 | 25-73 | 59 | | | 二次加工のある板片 | 織岡式質貢石 | 22.10 | 27.60 | 12.00 | 4.83 | M-V |
| N | 8 | 8-02 | 25-73 | 60 | | | 二次加工のある板片 | 織岡式質貢石 | 16.60 | 30.00 | 11.10 | 5.48 | M-V |
| N | 8 | 8-03 | 25-73 | 61 | | | 板片 | 織岡式質貢石 | 44.60 | 28.10 | 17.10 | 17.53 | M-V |
| N | 8 | 8-04a | 25-73 | 4 | 7 | | 板片 | ガラス質黒色安山岩 | 32.40 | 34.90 | 9.90 | 9.55 | N-V |
| N | 8 | 8-04b | 25-83 | 34 | 7 | | 板片 | ガラス質黒色安山岩 | 38.40 | 52.40 | 12.90 | 23.95 | N-V |
| N | 8 | 8-05a | 25-83 | 40 | 9 | | 板片 | ガラス質黒色安山岩 | 49.20 | 18.90 | 2.20 | 15.18 | N-V |
| N | 8 | 8-05b | 25-83 | 28 | 9 | | 板片 | ガラス質黒色安山岩 | 44.20 | 9.60 | 12.00 | 5.26 | N-V |
| N | 8 | 25-83 | 1 | 104 | | | 板片 | 流紋岩 | 52.90 | 49.00 | 29.60 | 100.00 | N-V |
| N | 8 | 25-83 | 2 | | | | チャート | | 18.30 | 55.20 | 28.50 | 28.00 | N-V |
| N | 8 | 25-72 | 1 | 1 | | | 二次加工のある板片 | ガラス質黒色安山岩 | 50.60 | 39.40 | 27.40 | 97.00 | N-V |
| N | 8 | 25-73 | 1 | | | | チャート | | 11.00 | 28.40 | 15.40 | 5.00 | N-V |
| N | 8 | 25-73 | 2 | | | | 板片 | チャート | 14.60 | 27.00 | 12.20 | 3.90 | N-V |
| N | 8 | 25-73 | 3 | | | | 板片 | 流紋岩 | 18.70 | 32.70 | 7.30 | 6.00 | N-V |

| 文化層 | ブロック | 辨別番号 | グリッド番号 | 遺物番号 | 枝番号 | 集合番号 | 形態 | 石材 | 長さ (mm) | 幅 (mm) | 厚さ (mm) | 重量 (g) | 出土層位 |
|-----|------|-------|--------|------|-----|------|----|---------|------------|-----------|------------|-----------|------|
| N | S | 2E-73 | 5 | 209 | | | 泥片 | 泥紋岩 | 6.60 | 28.00 | 5.70 | 3.00 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 6 | 210 | | | 泥片 | 泥紋岩 | 21.00 | 48.00 | 23.00 | 26.00 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 7 | 210 | 1 | | 泥片 | チャート | 30.20 | 18.80 | 16.80 | 8.68 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 7 | 2 | 215 | | 泥片 | 泥紋岩 | 18.30 | 27.90 | 16.90 | 9.00 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 8 | | | | 泥片 | 泥紋岩 | 23.20 | 37.80 | 17.60 | 13.00 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 9 | | | | 泥片 | 泥紋岩 | 15.40 | 26.80 | 10.70 | 4.00 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 10 | | | | 泥片 | 泥紋岩 | 15.00 | 19.20 | 4.80 | 1.23 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 11 | 215 | | | 泥片 | 泥紋岩 | 38.00 | 26.00 | 20.20 | 8.00 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 12 | | | | 泥片 | 泥紋岩 | 15.30 | 30.10 | 6.50 | 1.84 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 13 | 217 | | | 泥片 | ホルンフェルス | 33.40 | 54.30 | 27.60 | 73.00 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 14 | | | | 泥片 | 泥紋岩 | 19.30 | 23.60 | 22.40 | 11.00 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 15 | 215 | | | 泥片 | 泥紋岩 | 22.80 | 56.30 | 22.10 | 46.00 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 16 | | | | 泥片 | 泥紋岩 | 18.70 | 71.00 | 3.00 | 0.44 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 17 | | | | 泥片 | 泥紋岩 | 22.50 | 27.50 | 16.90 | 8.00 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 18 | 128 | | | 泥片 | チャート | 26.30 | 21.00 | 12.70 | 7.00 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 19 | | | | 泥片 | 泥灰岩 | 55.80 | 75.20 | 27.50 | 97.00 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 20 | 1 | | | 泥片 | 泥紋岩 | 20.00 | 29.80 | 21.40 | 19.00 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 20 | 2 | | | 泥片 | 泥紋岩 | 14.10 | 23.60 | 6.20 | 2.76 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 20 | 3 | | | 泥片 | 泥紋岩 | 7.80 | 13.60 | 5.50 | 0.61 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 21 | 226 | | | 泥片 | 泥灰岩 | 28.80 | 41.30 | 9.80 | 30.00 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 22 | | | | 泥片 | 泥紋岩 | 52.50 | 35.50 | 26.40 | 63.00 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 23 | 228 | | | 泥片 | チャート | 35.00 | 47.20 | 27.80 | 83.00 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 24 | | | | 泥片 | 泥紋岩 | 57.50 | 36.40 | 30.00 | 96.00 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 25 | | | | 泥片 | 泥紋岩 | 57.70 | 56.90 | 16.80 | 79.00 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 26 | | | | 泥片 | 泥紋岩 | 68.90 | 39.20 | 27.80 | 92.00 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 27 | | | | 砂岩 | 砂岩 | 80.70 | 41.60 | 17.20 | 93.00 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 28 | 223 | | | 砂片 | 砂岩 | 25.20 | 22.50 | 25.20 | 22.00 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 29 | 223 | | | 砂片 | 砂岩 | 25.80 | 42.00 | 30.20 | 22.00 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 30 | 234 | | | 砂片 | 泥紋岩 | 38.70 | 25.50 | 17.20 | 8.00 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 31 | | | | 砂片 | 砂岩 | 34.20 | 19.80 | 12.40 | 7.68 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 32 | | | | 砂片 | 泥紋岩 | 50.00 | 36.00 | 26.00 | 69.00 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 33 | | | | 砂片 | 砂岩 | 19.70 | 14.80 | 34.40 | 16.00 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 34 | 228 | | | 砂片 | 泥紋岩 | 34.60 | 23.60 | 23.60 | 29.00 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 35 | | | | 砂片 | 砂岩 | 55.20 | 24.40 | 31.20 | 54.00 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 36 | | | | 砂片 | 泥紋岩 | 21.10 | 58.50 | 19.30 | 30.00 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 37 | | | | 砂片 | ホルンフェルス | 57.30 | 35.80 | 28.80 | 72.00 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 38 | | | | 砂片 | チャート | 48.20 | 29.20 | 158.00 | 25.00 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 39 | 228 | | | 砂片 | チャート | 35.50 | 43.40 | 28.00 | 50.00 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 40 | | | | 砂片 | 泥紋岩 | 32.90 | 32.30 | 18.90 | 54.00 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 41 | | | | 砂片 | チャート | 18.70 | 18.80 | 5.40 | 2.89 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 42 | | | | 砂片 | 泥紋岩 | 48.10 | 48.20 | 15.60 | 55.00 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 43 | 224 | | | 砂片 | 泥紋岩 | 22.30 | 21.70 | 30.80 | 6.00 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 44 | | | | 砂片 | ホルンフェルス | 11.90 | 22.30 | 4.10 | 1.01 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 45 | 1 | 243 | | 泥片 | 泥紋岩 | 20.50 | 15.50 | 16.90 | 4.00 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 45 | 2 | 234 | | 泥片 | 泥紋岩 | 4.50 | 9.60 | 6.60 | 2.00 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 46 | | | | 泥片 | チャート | 13.10 | 25.40 | 7.00 | 2.54 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 47 | | | | 泥片 | 泥紋岩 | 19.80 | 21.70 | 7.20 | 3.06 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 48 | 226 | | | 泥片 | 泥灰岩 | 31.40 | 53.40 | 30.80 | 73.00 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 49 | 251 | | | 泥片 | 泥紋岩 | 13.30 | 30.40 | 19.50 | 20.00 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 50 | | | | 泥片 | 泥紋岩 | 6.30 | 5.00 | 4.60 | 0.40 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 51 | | | | 泥片 | 泥紋岩 | 66.90 | 39.50 | 31.80 | 116.00 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 52 | 254 | | | 泥片 | チャート | 15.50 | 36.60 | 14.60 | 10.00 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 53 | 210 | | | 泥片 | 泥紋岩 | 27.60 | 31.80 | 18.70 | 22.00 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 54 | 209 | | | 泥片 | 泥紋岩 | 15.70 | 31.00 | 31.20 | 15.00 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 55 | 255 | | | 泥片 | チャート | 26.50 | 27.70 | 22.10 | 23.00 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 56 | | | | 泥片 | 泥紋岩 | 29.60 | 30.30 | 16.50 | 11.00 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 57 | | | | 粘片 | 板岩質頁岩 | 22.30 | 30.00 | 8.00 | 5.19 | N~V |
| N | S | 2E-73 | 58 | | | | 粘片 | 板岩質頁岩 | 23.50 | 24.00 | 8.70 | 4.49 | N~V |
| N | S | 2E-82 | 1 | | | | 粘片 | チャート | 17.60 | 12.30 | 8.60 | 2.38 | N~V |
| N | S | 2E-82 | 2 | 365 | | | 粘片 | 泥紋岩 | 33.20 | 57.00 | 39.80 | 81.00 | N~V |
| N | S | 2E-82 | 3 | | | | 粘片 | 砂岩 | 40.50 | 51.10 | 40.80 | 96.00 | N~V |
| N | S | 2E-82 | 4 | 267 | | | 粘片 | チャート | 27.30 | 36.70 | 33.10 | 25.00 | N~V |
| N | S | 2E-82 | 5 | | | | 粘片 | 泥紋岩 | 53.80 | 45.40 | 44.40 | 140.00 | N~V |
| N | S | 2E-82 | 6 | 265 | | | 粘片 | 泥紋岩 | 28.70 | 51.70 | 37.60 | 50.00 | N~V |

| 文化層 | ブロック | 碑面番号 | グリッド番号 | 遺物番号 | 核番号 | 複合番号 | 器種 | 石材 | 長さ (mm) | 幅 (mm) | 厚さ (mm) | 重量 (g) | 出土層位 |
|-----|------|-------|--------|------|-----|------|-----------|-------|------------|-----------|------------|-----------|------|
| N | S | 25-82 | 7 | | 270 | 繊片 | 流紋岩 | 19.00 | 19.10 | 7.70 | 2.30 | N~V | |
| N | S | 25-82 | 8 | | 267 | 繊片 | チャート | 24.00 | 12.80 | 34.50 | 10.00 | N~V | |
| N | S | 25-82 | 9 | | 267 | 繊片 | チャート | 11.30 | 10.30 | 16.90 | 4.00 | N~V | |
| N | S | 25-82 | 10 | 2 | 267 | 繊片 | チャート | 11.70 | 38.80 | 11.40 | 9.00 | N~V | |
| N | S | 25-82 | 11 | | | 繊片 | 流紋岩 | 55.70 | 72.50 | 42.20 | 226.00 | N~V | |
| N | S | 25-82 | 12 | | | 繊片 | 流紋岩 | 50.80 | 38.70 | 25.00 | 85.00 | N~V | |
| N | S | 25-82 | 13 | | | 繊片 | チャート | 36.00 | 27.80 | 7.40 | 7.67 | N~V | |
| N | S | 25-82 | 14 | | 280 | 繊片 | チャート | 17.30 | 18.00 | 8.70 | 4.00 | N~V | |
| N | S | 25-82 | 15 | | | 繊片 | 砂岩 | 14.00 | 23.10 | 6.40 | 2.02 | N~V | |
| N | S | 25-82 | 16 | | | 羽片 | ガラス質黒色安山岩 | 14.90 | 31.70 | 6.00 | 3.19 | N~V | |
| N | S | 25-82 | 17 | | | 繊片 | 流紋岩 | 67.50 | 32.80 | 35.60 | 105.00 | N~V | |
| N | S | 25-82 | 18 | 2 | 278 | 繊片 | 流紋岩 | 17.50 | 36.30 | 12.80 | 10.00 | N~V | |
| N | S | 25-82 | 18 | 1 | 277 | 繊片 | チャート | 27.70 | 45.50 | 30.00 | 30.00 | N~V | |
| N | S | 25-82 | 19 | | | 繊片 | 砂岩 | 47.70 | 65.20 | 31.50 | 117.00 | N~V | |
| N | S | 25-82 | 20 | | 280 | 繊片 | チャート | 15.80 | 19.40 | 9.30 | 5.00 | N~V | |
| N | S | 25-82 | 21 | | | 繊片 | 流紋岩 | 22.00 | 40.40 | 17.30 | 13.00 | N~V | |
| N | S | 25-82 | 22 | | 282 | 繊片 | 流紋岩 | 71.00 | 48.20 | 43.50 | 130.00 | N~V | |
| N | S | 25-82 | 23 | | 277 | 繊片 | チャート | 26.80 | 26.80 | 14.60 | 22.00 | N~V | |
| N | S | 25-82 | 24 | 2 | 267 | 繊片 | チャート | 9.20 | 9.20 | 9.20 | 4.00 | N~V | |
| N | S | 25-82 | 24 | 1 | 267 | 繊片 | チャート | 24.70 | 24.30 | 3.80 | 6.00 | N~V | |
| N | S | 25-82 | 25 | | 270 | 繊片 | チャート | 31.80 | 46.40 | 31.00 | 25.00 | N~V | |
| N | S | 25-82 | 27 | | 269 | 繊片 | チャート | 11.80 | 10.00 | 18.20 | 6.00 | N~V | |
| N | S | 25-82 | 28 | | 278 | 繊片 | 流紋岩 | 16.00 | 34.50 | 13.90 | 10.00 | N~V | |
| N | S | 25-82 | 29 | | 267 | 繊片 | 流紋岩 | 45.50 | 33.80 | 28.80 | 54.00 | N~V | |
| N | S | 25-82 | 30 | | 270 | 繊片 | チャート | 52.30 | 33.10 | 34.00 | 64.00 | N~V | |
| N | S | 25-82 | 31 | | | 繊片 | 砂岩 | 50.70 | 68.30 | 30.40 | 95.00 | N~V | |
| N | S | 25-82 | 32 | 2 | 280 | 繊片 | チャート | 10.50 | 16.00 | 6.90 | 2.00 | N~V | |
| N | S | 25-82 | 32 | 1 | 280 | 繊片 | チャート | 19.00 | 20.40 | 7.40 | 3.00 | N~V | |
| N | S | 25-82 | 33 | | | 繊片 | ホルンフェルス | 13.10 | 14.40 | 2.60 | 0.99 | N~V | |
| N | S | 25-82 | 34 | | 280 | 繊片 | チャート | 16.00 | 23.90 | 10.40 | 6.00 | N~V | |
| N | S | 25-82 | 35 | | | 繊片 | 玉髓(メノウ含む) | 24.70 | 18.30 | 12.00 | 5.48 | N~V | |
| N | S | 25-82 | 36 | | | 羽片 | ガラス質黒色安山岩 | 21.20 | 19.70 | 8.10 | 2.41 | N~V | |
| N | S | 25-82 | 37 | | | 繊片 | チャート | 11.60 | 12.00 | 8.00 | 1.10 | N~V | |
| N | S | 25-82 | 38 | | | 繊片 | 流紋岩 | 21.30 | 20.40 | 6.20 | 2.35 | N~V | |
| N | S | 25-82 | 39 | | 267 | 繊片 | チャート | 16.00 | 15.20 | 16.00 | 6.00 | V~M | |
| N | S | 25-83 | 1 | | | 繊片 | 流紋岩 | 20.90 | 25.60 | 14.30 | 6.92 | N~V | |
| N | S | 25-83 | 2 | | 294 | 繊片 | チャート | 24.30 | 37.90 | 16.60 | 12.00 | N~V | |
| N | S | 25-83 | 3 | | 298 | 繊片 | 流紋岩 | 41.30 | 31.80 | 21.20 | 27.00 | N~V | |
| N | S | 25-83 | 4 | | 111 | 繊片 | 流紋岩 | 18.20 | 30.10 | 24.60 | 15.00 | N~V | |
| N | S | 25-83 | 5 | | | 繊片 | チャート | 19.40 | 18.70 | 7.90 | 3.01 | N~V | |
| N | S | 25-83 | 6 | | 104 | 繊片 | 流紋岩 | 18.50 | 36.40 | 24.50 | 20.00 | N~V | |
| N | S | 25-83 | 7 | | 255 | 繊片 | チャート | 27.20 | 35.20 | 40.00 | 25.00 | N~V | |
| N | S | 25-83 | 8 | | | 繊片 | チャート | 19.40 | 38.00 | 18.00 | 14.00 | N~V | |
| N | S | 25-83 | 9 | | | 繊片 | チャート | 29.30 | 38.40 | 14.60 | 16.00 | N~V | |
| N | S | 25-83 | 10 | | | 繊片 | 流紋岩 | 10.10 | 20.70 | 9.50 | 3.30 | N~V | |
| N | S | 25-83 | 11 | | | 繊片 | チャート | 25.30 | 38.30 | 19.30 | 13.35 | N~V | |
| N | S | 25-83 | 12 | 1 | 301 | 繊片 | 流紋岩 | 25.20 | 38.00 | 26.20 | 15.00 | N~V | |
| N | S | 25-83 | 12 | 3 | 301 | 繊片 | 流紋岩 | 18.20 | 21.00 | 10.40 | 5.00 | N~V | |
| N | S | 25-83 | 12 | 2 | 301 | 繊片 | 流紋岩 | 9.70 | 13.20 | 13.80 | 3.00 | N~V | |
| N | S | 25-83 | 12 | 1 | 301 | 繊片 | 流紋岩 | 20.40 | 31.00 | 20.90 | 13.00 | N~V | |
| N | S | 25-83 | 13 | 2 | | 繊片 | チャート | 9.80 | 28.20 | 10.30 | 3.85 | N~V | |
| N | S | 25-83 | 14 | | | 繊片 | 砂岩 | 29.10 | 66.00 | 27.90 | 69.00 | N~V | |
| N | S | 25-83 | 15 | | 294 | 繊片 | チャート | 28.50 | 33.10 | 25.30 | 30.00 | N~V | |
| N | S | 25-83 | 16 | | | 繊片 | チャート | 16.50 | 7.90 | 3.30 | 0.42 | N~V | |
| N | S | 25-83 | 17 | | 306 | 繊片 | チャート | 16.30 | 17.30 | 10.90 | 8.00 | N~V | |
| N | S | 25-83 | 18 | | 217 | 繊片 | ホルンフェルス | 29.20 | 31.20 | 34.50 | 45.00 | N~V | |
| N | S | 25-83 | 19 | | | 繊片 | チャート | 18.20 | 28.20 | 5.40 | 4.00 | N~V | |
| N | S | 25-83 | 20 | | 308 | 繊片 | チャート | 3.00 | 13.40 | 23.00 | 5.00 | N~V | |
| N | S | 25-83 | 21 | | | 繊片 | 流紋岩 | 10.20 | 13.00 | 11.60 | 1.30 | N~V | |
| N | S | 25-83 | 22 | | 294 | 繊片 | チャート | 22.20 | 25.60 | 25.00 | 12.00 | N~V | |
| N | S | 25-83 | 23 | | 310 | 繊片 | チャート | 15.00 | 18.20 | 14.30 | 4.00 | N~V | |
| N | S | 25-83 | 24 | | 311 | 繊片 | チャート | 16.30 | 14.60 | 18.10 | 4.00 | N~V | |
| N | S | 25-83 | 25 | | | 繊片 | 流紋岩 | 25.30 | 10.20 | 6.00 | 1.50 | N~V | |
| N | S | 25-83 | 27 | | 313 | 繊片 | チャート | 29.90 | 37.80 | 17.00 | 36.00 | N~V | |

| 文化層 | ブローラ | 埠頭番号 | グリッド番号 | 遺物番号 | 性質番号 | 複合番号 | 器種 | 石材 | 長さ (mm) | 幅 (mm) | 厚さ (mm) | 重量 (g) | 出土場所 |
|-----|------|-------|--------|------|------|------|------------|---------|------------|-----------|------------|-----------|------|
| N | 8 | ZE-83 | 29 | | | | 鏡片 | 流紋岩 | 12.40 | 13.20 | 16.20 | 2.04 | N~V |
| N | 8 | ZE-83 | 30 | 226 | | | 鏡片 | 麻灰岩 | 58.80 | 47.20 | 32.70 | 121.00 | N~V |
| N | 8 | ZE-83 | 31 | 267 | | | 鏡片 | チャート | 5.80 | 13.60 | 21.30 | 4.00 | N~V |
| N | 8 | ZE-83 | 32 | 277 | | | 鏡片 | チャート | 22.80 | 30.60 | 11.90 | 15.00 | N~V |
| N | 8 | ZE-83 | 33 | | | | 鏡片 | 流紋岩 | 58.30 | 37.80 | 23.00 | 63.00 | N~V |
| N | 8 | ZE-83 | 35 | | | | 鏡片 | チャート | 13.30 | 20.20 | 0.00 | 3.34 | N~V |
| N | 8 | ZE-83 | 36 | 2 | | | 鏡片 | 流紋岩 | 42.80 | 13.70 | 11.10 | 6.23 | N~V |
| N | 8 | ZE-83 | 36 | 1 | | | 鏡片 | ホルンフェルス | 59.00 | 51.20 | 35.00 | 120.80 | N~V |
| N | 8 | ZE-83 | 36 | | | | 砂岩 | | 23.20 | 40.20 | 16.40 | 14.00 | N~V |
| N | 8 | ZE-83 | 39 | 320 | | | 鏡片 | チャート | 17.00 | 34.70 | 27.00 | 27.00 | V~V |
| N | 8 | ZE-83 | 41 | 308 | | | 鏡片 | チャート | 17.50 | 38.00 | 18.00 | 17.00 | N~V |
| N | 8 | ZE-83 | 42 | | | | 砂岩 | | 80.30 | 38.30 | 20.00 | 93.00 | N~V |
| N | 8 | ZE-83 | 43 | 308 | | | 鏡片 | チャート | 11.10 | 20.80 | 23.00 | 10.00 | N~V |
| N | 8 | ZE-83 | 44 | 4 | 313 | | 鏡片 | チャート | 27.40 | 32.20 | 29.80 | 20.00 | N~V |
| N | 8 | ZE-83 | 44 | 3 | 313 | | 鏡片 | チャート | 20.30 | 15.50 | 30.00 | 17.00 | N~V |
| N | 8 | ZE-83 | 44 | 1 | 313 | | 鏡片 | チャート | 17.30 | 33.50 | 28.00 | 23.00 | N~V |
| N | 8 | ZE-83 | 44 | 5 | 313 | | 鏡片 | チャート | 24.40 | 18.00 | 14.00 | 20.00 | N~V |
| N | 8 | ZE-83 | 44 | 6 | 313 | | 鏡片 | チャート | 8.00 | 20.00 | 5.50 | 5.00 | N~V |
| N | 8 | ZE-83 | 44 | 2 | 313 | | 鏡片 | チャート | 34.00 | 37.10 | 6.00 | 28.00 | N~V |
| N | 8 | ZE-83 | 45 | 308 | | | 鏡片 | チャート | 11.20 | 30.00 | 5.80 | 5.00 | N~V |
| N | 8 | ZE-83 | 46 | | | | 鏡片 | 流紋岩 | 7.50 | 23.80 | 16.20 | 2.66 | N~V |
| N | 8 | ZE-83 | 47 | 320 | | | 鏡片 | チャート | 31.10 | 53.20 | 28.00 | 55.00 | N~V |
| N | 8 | ZE-83 | 48 | 2 | 255 | | 鏡片 | チャート | 9.10 | 20.60 | 9.30 | 3.00 | N~V |
| N | 8 | ZE-83 | 48 | 1 | | | 砂岩 | | 17.80 | 35.30 | 30.10 | 21.00 | N~V |
| N | 8 | ZE-83 | 49 | 254 | | | 鏡片 | チャート | 15.80 | 21.20 | 14.00 | 5.00 | N~V |
| N | 8 | ZE-83 | 50 | 267 | | | 鏡片 | チャート | 18.10 | 16.50 | 10.40 | 5.00 | N~V |
| N | 8 | ZE-83 | 51 | 282 | | | 鏡片 | 流紋岩 | 54.20 | 71.60 | 29.60 | 80.00 | N~V |
| N | 8 | ZE-83 | 52 | | | | 砂岩 | | 62.80 | 39.80 | 37.50 | 121.36 | N~V |
| N | 8 | ZE-83 | 53 | 253 | | | 鏡片 | 砂岩 | 20.60 | 29.10 | 14.90 | 17.00 | N~V |
| N | 8 | ZE-83 | 54 | | | | 鏡片 | 流紋岩 | 27.50 | 46.00 | 30.70 | 41.00 | N~V |
| N | 8 | ZE-83 | 55 | | | | 鏡片 | チャート | 17.30 | 18.40 | 11.60 | 5.06 | N~V |
| N | 8 | ZE-83 | 56 | 310 | | | 鏡片 | チャート | 15.10 | 16.20 | 20.20 | 6.00 | N~V |
| N | 8 | | ZE-83 | 57 | | | 鏡片 | | 12.00 | 29.00 | 9.20 | 3.41 | N~V |
| N | 8 | | ZE-83 | 58 | | | 鏡片 | 流紋岩 | 7.20 | 6.20 | 11.30 | 0.48 | N~V |
| N | 8 | | ZE-83 | 59 | 313 | | 鏡片 | チャート | 17.80 | 20.20 | 5.00 | 3.00 | N~V |
| N | 8 | | ZE-83 | 60 | 331 | | 鏡片 | 流紋岩 | 19.40 | 46.50 | 29.00 | 20.00 | N~V |
| N | 8 | | ZE-83 | 61 | | | 鏡片 | チャート | 14.90 | 28.80 | 13.50 | 17.00 | N~V |
| N | 8 | | ZE-83 | 62 | 251 | | 鏡片 | 流紋岩 | 54.60 | 48.40 | 34.00 | 118.00 | N~V |
| N | 8 | | ZE-83 | 63 | | | 鏡片 | 流紋岩 | 38.40 | 43.10 | 33.20 | 38.00 | N~V |
| N | 8 | | ZE-83 | 64 | | | 鏡片 | 流紋岩 | 43.30 | 56.30 | 45.20 | 145.00 | N~V |
| N | 8 | | ZE-83 | 65 | 270 | | 鏡片 | チャート | 40.40 | 21.50 | 18.00 | 20.00 | N~V |
| N | 8 | | ZE-83 | 65 | 2 | 255 | 鏡片 | チャート | 7.10 | 9.40 | 7.30 | 3.00 | N~V |
| N | 8 | | ZE-83 | 66 | 1 | 255 | 鏡片 | チャート | 8.30 | 20.50 | 6.50 | 5.00 | N~V |
| N | 8 | | ZE-83 | 67 | 1 | 255 | 鏡片 | チャート | 8.80 | 12.80 | 9.00 | 0.86 | N~V |
| N | 8 | | ZE-83 | 67 | 1 | 311 | 鏡片 | チャート | 12.80 | 17.20 | 15.10 | 6.00 | N~V |
| N | 8 | | ZE-83 | 68 | | | 鏡片 | チャート | 15.50 | 17.20 | 17.50 | 5.83 | N~V |
| N | 8 | | ZE-83 | 69 | 306 | | 鏡片 | チャート | 6.40 | 16.90 | 11.80 | 2.00 | N~V |
| N | 8 | | ZE-83 | 70 | 2 | | 鏡片 | 流紋岩 | 5.80 | 8.30 | 7.20 | 0.39 | N~V |
| N | 8 | | ZE-83 | 70 | 1 | 255 | 鏡片 | チャート | 13.10 | 14.70 | 4.50 | 3.00 | N~V |
| N | 8 | | ZE-83 | 71 | | | 鏡片 | 流紋岩 | 12.30 | 15.30 | 20.30 | 4.27 | N~V |
| N | 8 | | ZE-83 | 72 | | | 鏡片 | チャート | 12.60 | 22.70 | 20.50 | 6.00 | N~V |
| N | 8 | | ZE-83 | 73 | 104 | | 鏡片 | 流紋岩 | 16.50 | 24.20 | 21.20 | 8.00 | N~V |
| N | 8 | | ZE-83 | 74 | 255 | | 鏡片 | チャート | 25.00 | 19.40 | 12.20 | 12.00 | N~V |
| N | 8 | | ZE-83 | 75 | 331 | | 鏡片 | 流紋岩 | 31.00 | 18.90 | 8.40 | 14.00 | N~V |
| N | 8 | | ZE-83 | 76 | | | 鏡片 | チャート | 28.40 | 34.70 | 8.00 | 8.36 | N~V |
| N | 8 | | ZE-83 | 77 | | | 鏡片 | チャート | 13.80 | 23.80 | 15.80 | 5.00 | N~V |
| N | 8 | | ZE-83 | 78 | | | 鏡片 | 流紋岩 | 28.10 | 51.40 | 21.90 | 39.00 | N~V |
| N | 8 | | ZE-83 | 79 | 282 | | 鏡片 | チャート | 12.10 | 22.60 | 21.10 | 45.00 | V~E |
| N | 8 | | ZE-83 | 80 | | | 鏡片 | ホルンフェルス | 18.40 | 23.70 | 11.70 | 7.00 | N~V |
| N | 8 | | ZE-84 | 1 | | | 鏡片 | 流紋岩 | 27.20 | 34.50 | 14.00 | 14.00 | N~V |
| N | 8 | | ZE-83 | 1 | | | 鏡片 | 流紋岩 | 71.60 | 51.20 | 37.90 | 168.00 | N~V |
| 外 | 9-01 | SD-55 | 1 | | | | 所器 | ホルンフェルス | 68.50 | 35.50 | 12.20 | 27.09 | V |
| 外 | 9-02 | SD-54 | 1 | | | | 二次加工のある片片 | 黑曜石 | 36.80 | 27.30 | 8.10 | 6.82 | V |
| 外 | 9-03 | SD-20 | 47 | | | | 黒曜石表面のある片片 | チャート | 22.10 | 22.40 | 8.60 | 2.68 | |
| 外 | 9-04 | SD-21 | 118 | 3 | | | 片片 | チャート | 22.60 | 34.70 | 7.70 | 6.63 | |
| 外 | 9-05 | SD-21 | 118 | 2 | | | 片片 | 銀岡産珪質頁岩 | 36.50 | 29.20 | 8.40 | 7.41 | |
| 外 | 9-06 | SD-21 | 119 | | | | 片片 | 銀岡産珪質頁岩 | 30.60 | 30.20 | 5.40 | 5.84 | |
| 外 | 9-07 | SD-21 | 115 | | | | 二次加工のある片片 | チャート | 19.50 | 22.50 | 4.80 | 2.18 | |
| 外 | 9-08 | SD-21 | 114 | | | | 二次加工のある片片 | チャート | 31.40 | 28.90 | 8.30 | 4.89 | |
| 外 | 9-09 | SD-21 | 113 | | | | 黒曜石表面のある片片 | 銀岡産珪質頁岩 | 27.40 | 27.20 | 8.60 | 5.75 | |
| 外 | 9-10 | SD-21 | 118 | 1 | | | 片片 | 銀岡産珪質頁岩 | 22.30 | 28.60 | 4.90 | 3.13 | |

Y = 8,260,000

Y = 8,300,000

Y=8,340,000

Y=8,380,000

A

B

C

D

E

F

G

= -72,320.000

1

2

3

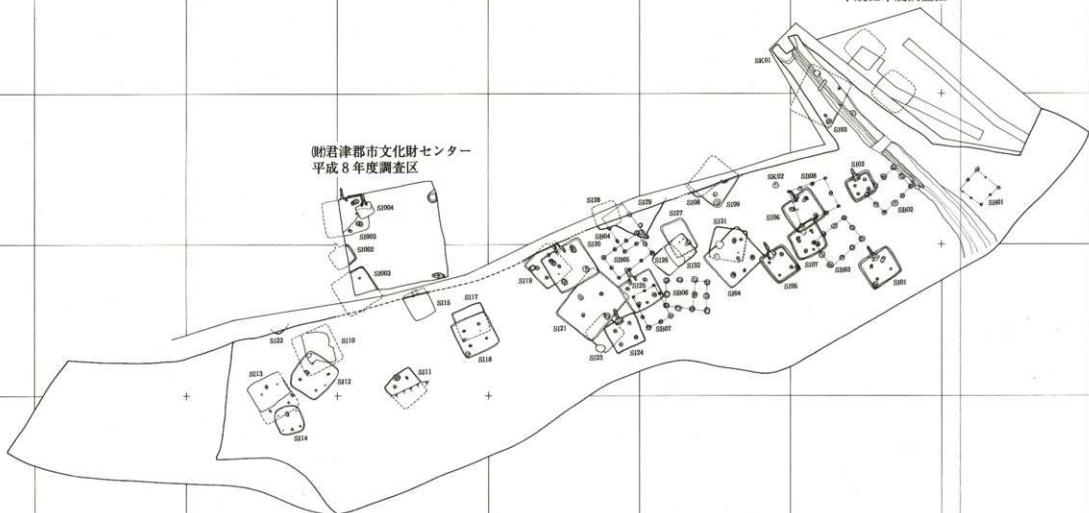
4

$$x = -72,400,000$$

5

(財)君津郡市文化財センター
平成8年度調査区

(財)君津郡市文化財センター
平成12年度調査区



第35図 上層遺構位置図

第2節 繩文時代

繩文時代の遺構としては、中期の埋甕を1基（SK02）を調査した。他に撲糸文系土器を中心とする包含層が広がっている。またそれと重なるように縄群も広範囲にわたって分布している。なお平成9年度に北側隣接地を調査した（財）君津都市文化財センターの成果でも、少ないながらも縄群が出土している。平成12年度の東側隣接地の調査ではとくに報告されていないので、東側にいくにつれ縄群の分布は希薄になるので、縄群の分布の中心は調査地のほぼ中央部になるようである。

埋甕SK02（第36図、図版14・18）

調査地東部のE-E'69に位置する。掘方は長軸長69cm、副軸長は62cmで、南北に長いやや寸詰まりの卵形で、体部下半を欠く深鉢1個体をその北側に正位にたてて埋置していた。埋甕の深さは確認面から27cmあり、壇り鉢状で、深鉢の下端面があたる部分だけが少し深くなっている。深鉢内部には焼土粒を少し含み、ソフトローム粒を多く含む黒褐色土を主体とする土が充填されており、裏込め土もほぼ同質の土で充填されていた。したがって坑を掘って、深鉢を設置し、空隙を土で埋めるという一連の作業が連続して行われたことをうかがわせる。

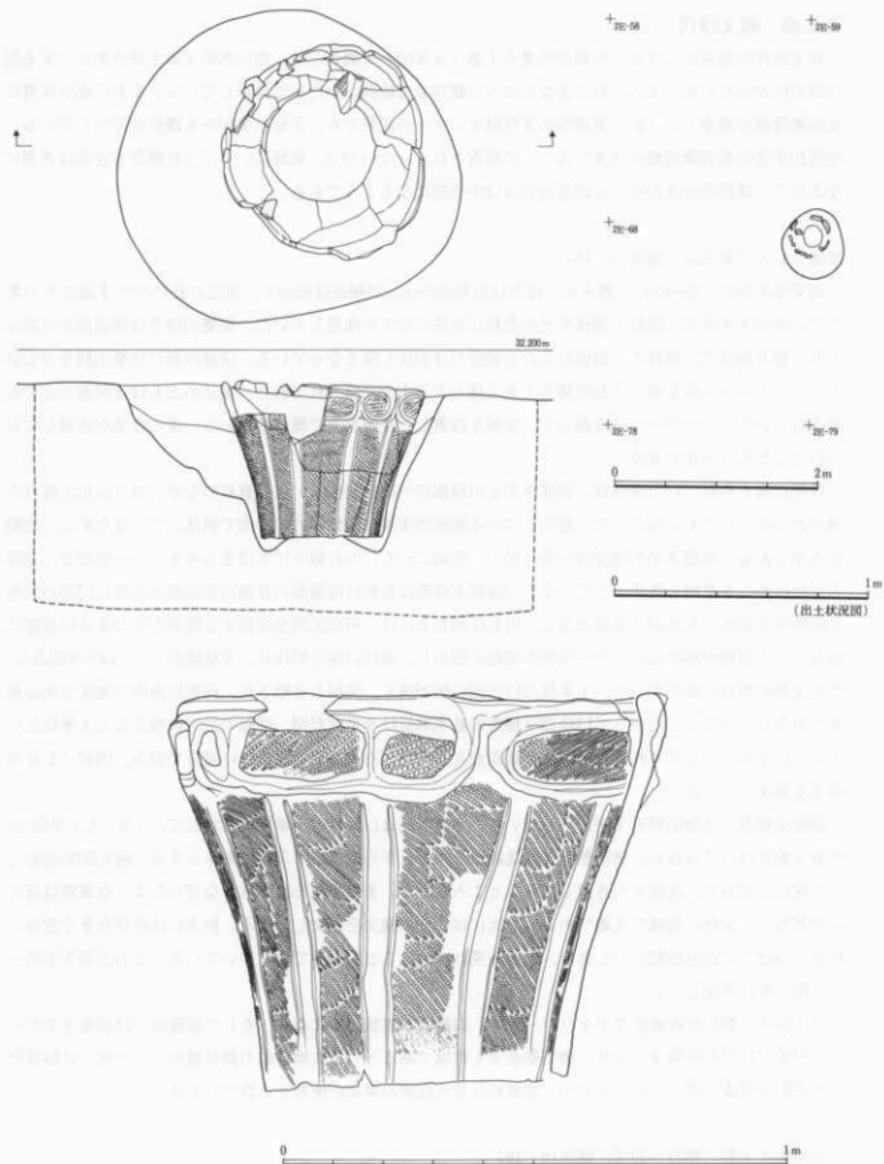
埋甕に据えられていた深鉢は、胴部下半と口縁部の一部を欠損し、接合資料のなかには2m以上離れた地点から出土したものもあった。遺存している胴部の末端は輪積みの接合面で剥落しているために、比較的水平である。体部下半が幾分外へ張り出し、底部にいくにつれ徐々にすぼまるキャリバー形だが、全体の形状はかなり直線を基調としている。口縁部文様帯は左側に砲弾型の長楕円形区画と右側に円形の区画を配置する組み合わせが1単位となる。円形区画右上には、円形区画を区画する隆帯がそのまま口唇部に融合し、上面観が据の広がった三角形の突起を創出し、波状口縁を形作り、文様構成としては5単位ある。ただ文様の割付の関係からか、1単位だけ区画の幅が狭く、突起も省略され、円形区画内の地文である繩文も消失している。したがって口縁部文様帯の基本単位は5単位だが、突起の数だけ数えると4単位ということになる。そしてそれぞれの区画を断面が丸みを帯びた逆台形の貼り付け隆帯で囲み、内部にL Rの繩文を施文している。

胴部文様帯には磨消懸垂文が垂下している。その単位は口縁部の1単位にたいして、2ないし3単位で、均等な割り付けではない。磨消懸垂文の沈線はそれぞれ平行に描出するのを基本とする。施文自体は浅く、やや蛇行しており、沈線を引き直しているところもある。また沈線を繰り返しなぞったような痕跡はほとんどなく、全体に粗雑な沈線である。地文にはL Rの繩文を施文している。胎土には砂粒を多く含み、粒径2mmほどの白色砂粒を少し含み、器面の荒れていることもあってざらついている。なお土器下半の一部は明らかに赤変している。

以上から、器形が直線的なキャリバー形で、口縁部が波状口縁になり、そして前段階では渦巻き文だったのがすでに円形区画となり、磨消懸垂文も粗雑であるという文様構成の諸特徴から、一部には加曾利E II式的な要素も残しているものの、加曾利E III式段階の要素が優勢な土器といえよう。

包含層出土土器（第37～39図、図版18・19）

調査地の中央よりやや東に寄った範囲を中心に、かなり広範囲にわたって出土したが、小破片が多く良好な資料は少ない。量的には撲糸文系土器群が群を抜いている。



第36図 SK02と出土土器

撲糸文系土器群（第37・38図、図版18）

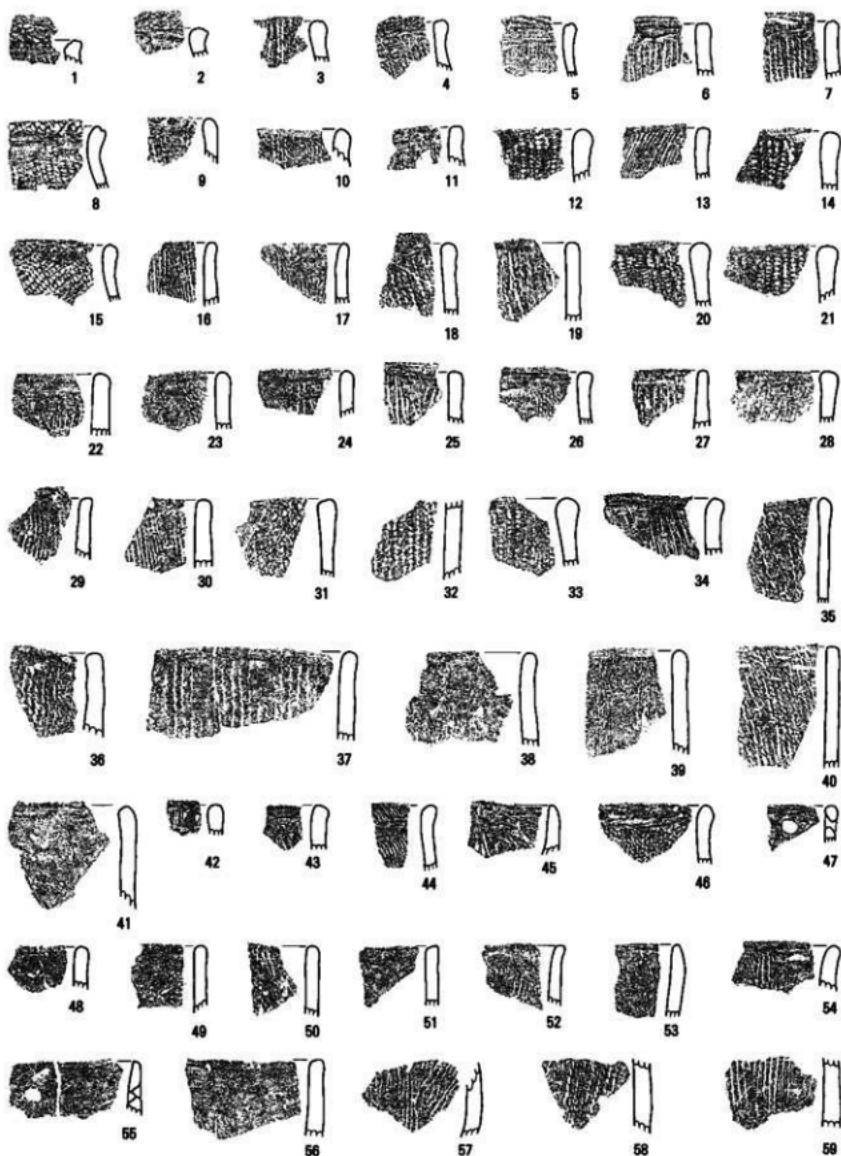
1～70の70点を図示した。器表面はいずれも比較的丁寧なナデ調整を行っており、平滑に仕上げている。胎土には砂粒を多く含み、一部に白色のやや大きい砂礫を含むものがある。1～9は口唇端部にも撲糸文を施文するものである。

1・2は口唇端部が厚くなり、突端がやや鋭く外へ反り返る。口縁端部に2回施文を行っており、口縁部のかなり内側まで、やや条の間隔が広い撲糸文Rが施文されている。口唇部は横方向のナデを行い、撲糸文はその調整後に施文されている。3も口唇端部が緩やかに厚くなる。胴部から連続する撲糸文Rが口唇端部にも及ぶ。4・5は口唇端部の厚みがやや厚くなる程度で、緩やかな曲線を描いて体部にいたる。口唇部の突端にも撲糸文を施文し、体部の撲糸文との境はヨコナデを行っている。6・7・8は口唇部から体部まで直線に近く、口唇端部が撲糸文Rを施文した際に平らになって、口唇部の断面は箱形に近い。なお6では口唇端部のヨコナデの際に生じた余剰の生地が体部にもたれかかっている。8では口唇部直下をヨコナデして、撲糸文が一部磨り消されている。

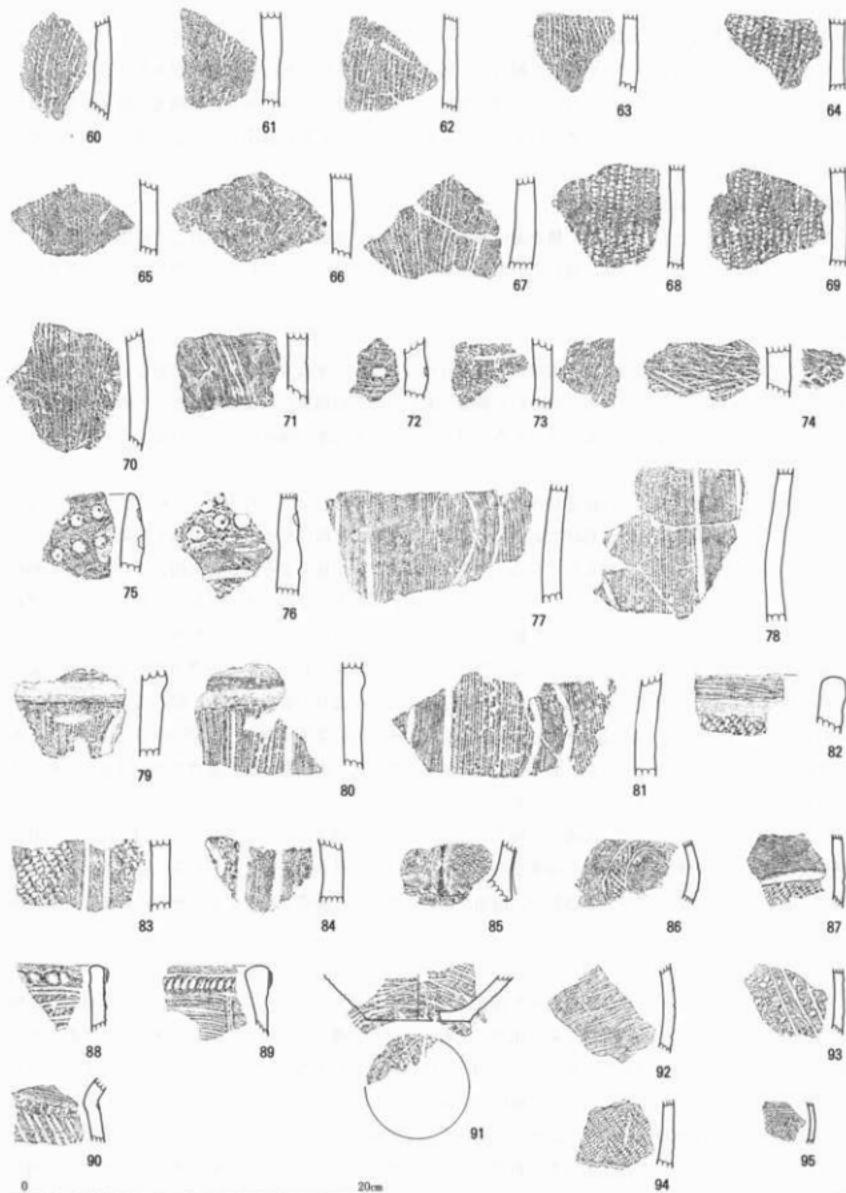
9・10・12・14・15・16は断面が丸棒状になり、口唇部の撲糸文は磨り消され、体部にだけ撲糸文が残る。10は胎土に砂礫を多く含むのが特徴である。11は断面が箱形になり、口唇部をヨコナデした後に撲糸文Rが施文される。16は断面がやや角張った丸棒状である。条の間隔が狭く、細かい撲糸文Rが口唇部直下から施文される。17・18・19・20は断面が丸棒状で、口縁部が緩やかな曲線を描いて反り返る。17の内面にはヘラ削り状の擦痕が横方向に確認できる。20・21は口唇端部の厚みがかなり厚くなり、撲糸原体の一粒が大きくなる。22の断面はやや角張った丸棒状で、口縁部に幅の広いナデ調整を施し、その下に撲糸文が施されている。23・24は断面が丸みを帯びた山形で、内面の器壁はかなり荒れている。25・26は断面がやや丸みを箱形で、口唇部から撲糸文Rが施文されている。26は緩やかに外方へ反り返る。撲糸文はほとんど施文後の調整でかなり不鮮明になっている。27はやや間隔のあいた撲糸文Rを施文しており、断面の形状は25・26に近い。

28・29・30・31・33・34は口唇部がやや肉厚で、口唇部から体部へは直線的で、器形は寸胴に近いであろう。28の撲糸文は疎らで、29・30・31・33・34は密に施文されている。32は体部だけが残る資料で、小破片ということもあって、曲率はほとんどない。35・36は口唇部から体部まではほとんど同じ厚さで、撲糸文Rを疎らに施文している。36は口縁部の内側をナデしているために帯状にくぼんでいる。37は今回報告するなかでは比較的大型な破片資料である。断面は丸棒状で、やや間隔のあいた撲糸文Rを口唇部から施文している。内面は荒れて、調整痕跡は不明である。38・39は口縁部がわずかに外反し、断面は丸棒状になる。38の撲糸は磨り消されてほとんど筋状にしか残っていない。39は撲糸文Lを施文している。40は口唇部から体部にかけて徐々に厚みを増す。口縁部の断面は箱形に近い。内側は器面が剥落している。41は口唇部がやや内反し、撲糸はほとんど磨り消されて痕跡程度にしか残っていない。内面の器面の剥落が著しい。42・43・44は細かい撲糸文を施文する。42・43では施文方向が垂直なのにたいして、44では斜方向になる。45の断面は40に近い。口縁部に撲糸文Rを横方向に施文する。これらは井草式から夏島式段階に相当するであろう。

47～56はナデなどによって撲糸文が磨り消され、ほとんど無文になってしまった口縁部が残る資料である。断面形態には2種類あり、丸棒状のものと箱形の2者がある。前者は48・49・50・54・56で、後者は51・52・53・55・56になる。47と55に補修孔がある。48は焼き締まっており、硬質に仕上がっている。こ



第37図 繩文土器(1)



第38図 繩文土器（2）

れらは撚糸文後葉段階の土器群であろう。

57~70は体部のみの資料で、いずれも縦方向に施文している。57は縦方向に曲率があり、67も下端部が肉厚になっており、いずれもかなり底部に近い資料であることがわかる。細かい撚糸文で施文するのは、57・59・62・63・65・67・70で、撚糸はすべてRである。そのうち密に施文しているのは62・70で、施文の重複が著しい。

早期沈線文系土器（第38図、図版19）

71の1点のみが出土した。破片の横断面の曲率から、かなり底部に近いと思われる。器壁を平滑にしてから、浅い沈線をヘラミガキ状に施している。胎土に粒径2mmほどの赤色粒を多く含む。かなり硬質に焼き上がってている。

早期条痕文系土器群（第38図、図版19）

72~74の3点の土器を図示した。口縁部の残る資料はなく、いずれも体部の資料である。胎土に纖維を含み、粒径1mmほどの赤色粒を多く含むのが特徴である。器面の調整には文様構成としての要素がなく、外面とも粗い擦痕が確認できるだけである。74は器表面にも細かい纖維の圧痕が残る。

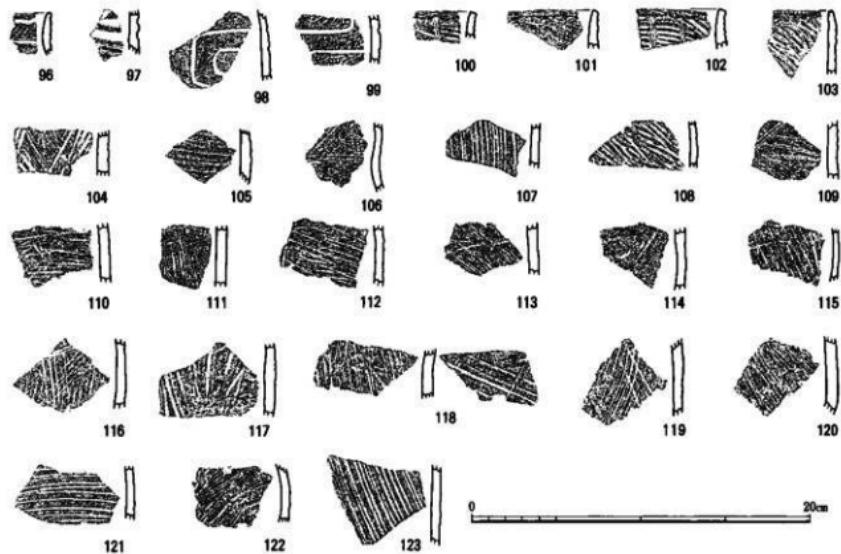
中期土器群（第38図、図版19）

75・76は同一個体で、75に口縁部が残る。75では口縁部に平行に2列の竹管による刺突が行われている。口縁部の断面は丸みを帯びた山形状である。76では刺突文列の下段にややカーブを描く低い隆帯があり、隆帯の下端は幅広の沈線で区切られている。さらに下には文様が続くようだが、欠損しているためにわからない。内面はかなり平滑に仕上げてある。77~81は細い条線を主文様とする土器の1群である。いずれも破片としては大型である。77は図の左側に浅い沈線で区画された垂下する磨消懸垂文があり、右側には沈線で2重の渦巻き文の一部がみえている。78は浅い沈線で区画された垂下する磨消懸垂文と渦巻き文の一部を構成する沈線がわずかに残る。79は口縁部区画文帯の下部分の資料である。幅の広い沈線が横方向と斜め方向に残っている。80は垂下する磨消懸垂文帯と横方向の隆帯が残り、隆帯の両脇には幅が広く浅い沈線が施文されている。81は78とおそらく同一個体と思われ、磨消懸垂文と渦巻き文が残る。これらは加曾利EⅢ式段階の土器群に相当するであろう。

82は深鉢の口縁部の資料で、沈線で区画されたなかを地文の繩文が埋めている。83・84は幅の狭い磨消懸垂文が残る資料である。横断面の曲率からかなり底部に近い部分の資料と思われる。85は底部近くの資料で、底部より上が若干くびれる器形で、断面が山形の貼り付け隆帯が垂下する。その両側まで繩文が施文されている。

後期土器群（第37図、図版19）

86は体部が屈曲する部分に2条の沈線を描き、そのなかを繩文で施文して充填している。器外面は丁寧なミガキ調整を行っている。87は1条の沈線で区画したなかに繩文を充填している。図示した下端にも沈線があるが、文様の構成は不明である。88・89は口縁の残る資料である。口縁部を折り返し、そこに連続する刻み目を施文している。それ以下に横位の条線を施文し、89ではさらに刻み目を加えている。90は底部の残る資料で、文様は沈線のみで、水平と斜め方向を組み合わせて文様としている。なお底面に木葉压痕が残る。91は頸部から上の体部上半が角度をもって屈曲しながら外反する資料である。屈曲部に半截竹管文を刺突後に押し引きしている。92・93は斜方向の条線を主文様とし、93では条線間に小さい刻みを刺突している。92では内面は平滑に仕上げているだけだが、93では入念なミガキ調整を施している。94は区



第39図 縄文土器（3）

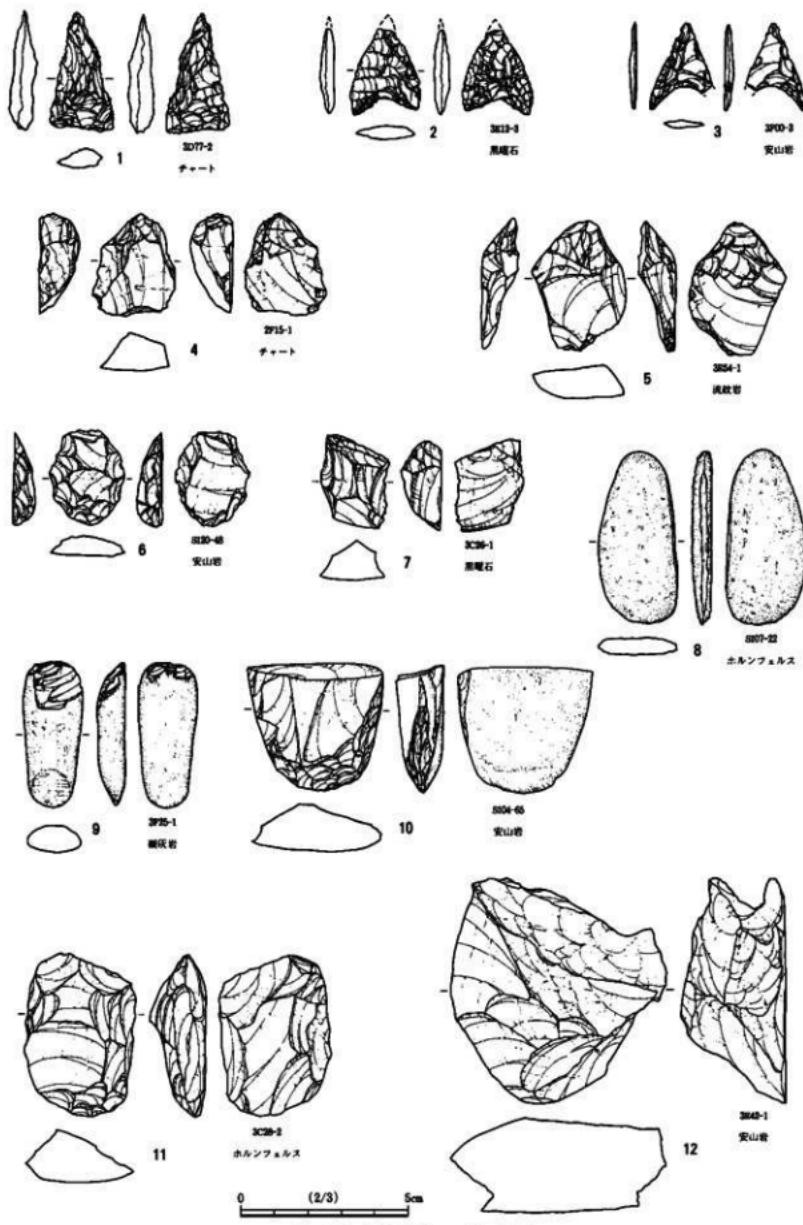
画文のなかに縄文を施文している。内面は平滑である。

晩期土器群（第38・39図、図版19）

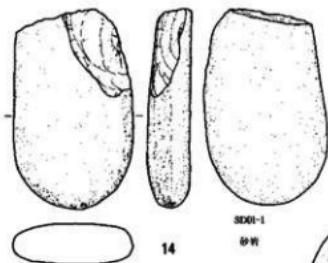
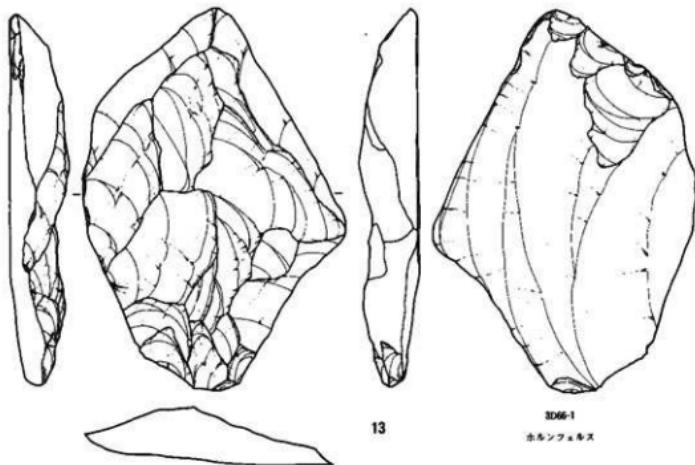
全体に薄手の土器が多い。95～97は非常に薄手の土器で、ミニチュア土器の一部であろう。95は横位の沈線と細縄文が施されており、内面は丁寧に磨かれている。96は口縁部が残り、口縁部に上下2本の沈線をめぐらし、なかに細かい縄文を施文している。97は横位の沈線が数条施文されている。胎土に雲母粒を多く含むのが特徴である。98・99は同一個体で、2重の沈線で方形に区画したなかのもっとも内側だけに縄文を施文する。100・101・102・103は口縁部の残る資料で、条痕文を口縁部と口唇部に施したものである。そのために口唇部の断面はやや箱形になっている。103は口唇部に刻みをつけている。104・105・107・108・109・113・114・115・116・117・118・119・120は条痕文を施文した体部のみの資料である。104では施文方向を変えて施文している。105は胎土に雲母粒を多く含んでいる。109は内面に黒色処理を行っており、黒光りしている。106はミニチュア土器の体部のみの資料である。頸部より上に沈線と縄文を施文している。111・118は縦位の沈線を施している。110・112は横位の沈線で施文し、112には縦の沈線が加わる。121～123は横位の条痕を施した資料で、121と123は同一個体の資料である。

石器（第40～42図、図版17）

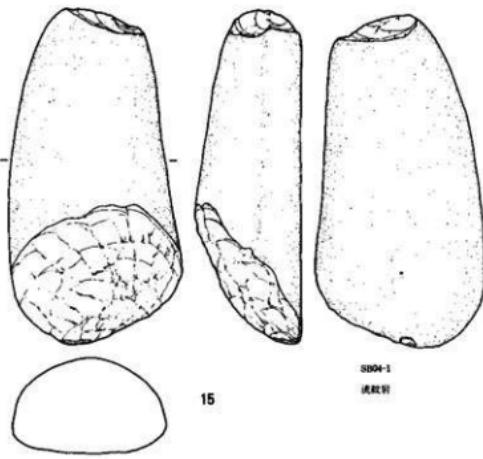
1～3は石礫である。1は全体形状が二等辺三角形を呈し、脚部の抉りがほとんど見られない。厚みのある剥片を素材として、全面に階段状の加工が入念に施されている。左右がやや非対称で、主軸がやや左側にずれている。表面の右側縁が最終調整加工が施されていることから、再生加工が主に表面の右側面に施されたと推定される。左脚部も同様に、再生が行われた可能性が高い。4.15 g。2は良質で透明度の高い黒色の黒曜石を石材に用いている。全体形状は、正三角形を呈し、脚部の抉りは比較的深い。平坦剥離



第40図 縄文時代の石器（1）

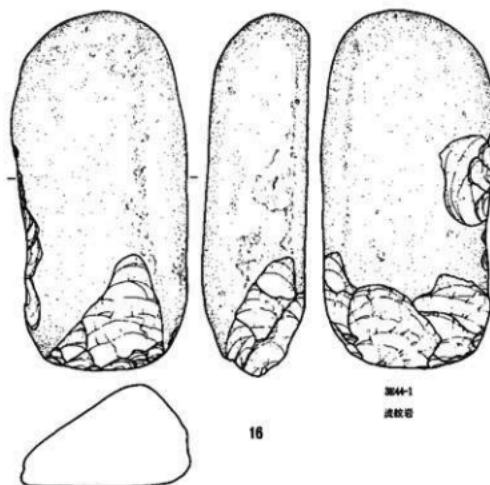


14



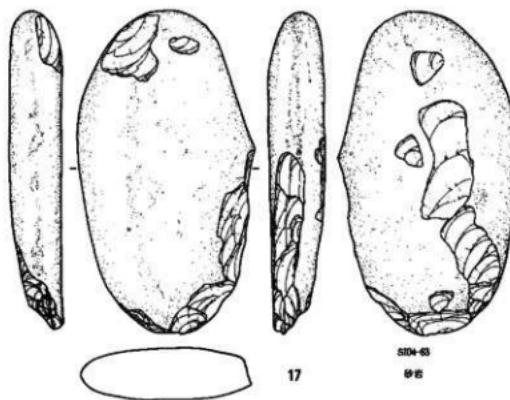
0 (2/3) 5cm

第41図 繩文時代の石器（2）



16

第44-1
波紋石



17

第44-2
波紋石

0 (2/3) 5cm

第42図 繩文時代の石器（3）

Y=8,260,000

Y=8,300,000

Y=8,34,000

Y=8,380,000

A

B

C

D

E

F

G

X = -72,320,000

1

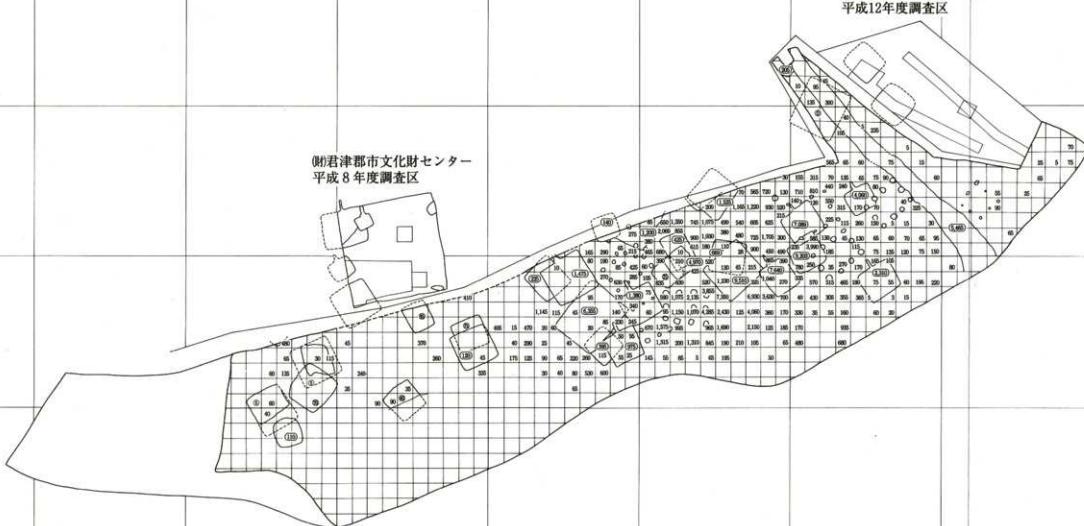
2

3

4

X = -72,400,000

財君津都市文化財センター
平成12年度調査区



※丸印の数・字は、遺構一括で取り
上げた砾の点数

第43図 碎群の分布

5

が全面に施されており、断面形もレンズ状を呈している。先端部が破損している。左右がやや非対称であり、脚部も右脚部がやや短い。最終調整加工が表面右側縁と裏面左脚部に施されていることから、これらの調整加工が再生加工の可能性が高い。2.21 g。3は薄い剥片を素材として、周縁部に調整加工が施され、器体の中央部には素材面が残されている。全体形状は正三角形を呈し、脚部の抉りは深い。右脚部は破損している。左右は対称的であることから、再生加工は行われていないようである。最終調整加工は、表面左側縁に施されている。1.04 g。

4～7は、楔形石器である。器種識別としては、石鎚、あるいは、石鎚の未製品と捉えることも可能である。4・5は厚みのある剥片を素材として、両極剥離によって厚みを減らして、上端部が尖頭状に調整加工されている。4は9.91 g。5は10.81 g。6はやや薄手の剥片を素材として、両極剥離が全周に施されている。5.41 g。7は厚みのある剥片を素材として、左右両端を両極剥離によって折断後、左上端部に調整加工が施されている。7.05 g。

8～11は磨製石斧である。8は厚みのない表面が凹凸のある扁平な楕円形礫を素材として、全面を研磨している。特に、右側縁の研磨は顕著である。12.21 g。9は扁平な楕円形礫を素材として、上端部を交互剥離によって加工後研磨し、全面を研磨している。特に、下端部の研磨は非常に研磨が顕著で、鋭利な刃部になるように整形されている。11.08 g。10はやや大型の厚みのある剥片を素材として、裏面に自然面を残し、表面に器体中央まで入る調整加工により成形し、右側縁下部と下端部に調整加工を入念に施して整形した後に、ほぼ全面に研磨している。特に、裏面下端部と表面の剥離面の境界線で盛り上がった部分の研磨は非常に顕著である。器体は中央部から破損している。29.4 g。11は厚みのある剥片を素材として、全面に階段状の粗い調整加工が施されている。表裏両面の器体の中央部にわずかに研磨痕がみられる。おそらく、数回の刃部再生を行った結果、不定形な形態になったものと思われる。31.3 g。

12・13は打製石斧である。12は非常に厚みのある剥片を素材として、階段状の非常に粗い加工が施されている。器体中央部から大きく破損している。129.71 g。13は大型の扁平な剥片を素材として、表面左縁下半部から器体の奥まで入る調整加工が施され、裏面右上部に平坦剥離が施されている。全体形状は、菱形を呈する。154.01 g。14～17は礫器である。14は扁平な円礫を素材として、上端部を折断後、表面右上部に加工が施されている。46.01 g。15は大型の楕円形礫を素材として、上下両端部に加工が施されている。229.29 g。16は大型の楕円形礫を素材として、下端部の表裏両面と左側縁表裏両面に加工が施されている。263.03 g。17は扁平な楕円形礫を素材として、下端部から右側縁下半部にかけて加工が施され、表面上部に加工が施されている。122.98 g。

礫群（第43図）

礫は調査地のほぼ全域からテン箱（54cm×33cm×15cm）で約60箱出土した。それらを整理するにあたって、まず計測する前に一部を抜き出して観察してみた。その結果、ほとんどの礫が被熱しているはずだが、痕跡はまちまちで、タール等が付着した形跡も確認できなかったので、とりあえず被熱痕跡の状態については観察項目から除外することとした。なお計測時にあらためて観察したが、観察項目に追加するような痕跡はとくになかった。そこで調査時に礫を取り上げた遺構・グリッドごとに、完形の礫と破損した礫とをわけて、それぞれ個数と重量を計測した。これらの作業は、基本的には接合等の作業を省略して実施した。その結果、完形礫は総個数6,421点、同総重量194,029 g、破損礫では総個数25,940点、同総重量は464,608 gになり、礫全体の総重量は660kg近くにもなった。そして平均重量は完形礫で30.22 gになり、破損

礫の平均重量は17.91 g になった。単純に両者の数字だけを比較すると、破損率は完形の礫が約半分の大きさに割れたものが標準的だったことになる。なお平均重量の30.22 g という礫1個の大きさは、長さが5 cmで、厚さが1 cm程度のものになり、礫としてはかなり小さく、いわゆる「小礫」の類に属す。ただ小さいからこそ破損せずに残りやすかったともいえるかもしれない。たしかになかには300 g を越えるような大型の礫も存在するので、一概に平均重量がすべてを代表するとは言い切れない側面もある。しかし出土点数の少ないグリッド出土のもので再度検証しても、平均値を大きくはずれる礫の集合体はなかったので、母集団の平均重量としてはそれなりに有効と考えている。

計測結果をもとに、重量だけを抜き出して図に示したのが、第43図である。これをみると全体の傾向として、密集度は調査地中央付近が高く、そこから周辺に広がるように散布していることがわかる。そして個々のグリッドでみていっても、とくに際立った例ではなく、内容的にはほぼ均質と判断した。そこで礫が分布するほぼ中央に位置する、古墳時代の堅穴住居S I 20出土の礫について、個数と重量を石材ごとに計測した。対象とした資料は出土総重量の約3 %になる。計測結果は以下のとおりである。

| 石材の種類 | 重量(g) | 個数 | 重量(g) | 百分比 | 個数百分比 |
|---------|--------|-----|--------|--------|-------|
| 砂 岩 | 2,970 | 102 | 14.77 | 15.60 | |
| チャート | 9,628 | 375 | 47.88 | 57.34 | |
| 流紋岩 | 5,945 | 143 | 29.57 | 21.87 | |
| 安山岩 | 155 | 3 | 0.77 | 0.46 | |
| 泥 岩 | 200 | 6 | 0.99 | 0.91 | |
| ホルンフェルス | 1,065 | 19 | 5.30 | 2.91 | |
| 不 明 | 145 | 6 | 0.72 | 0.91 | |
| 合 計 | 20,108 | 654 | 100.00 | 100.00 | |

集計結果をみると、石材としてはチャートが抜きんでており、次に流紋岩が続いている。ただし個々のグリッド単位でみていくと、順位が逆転している場合もあった。しかしいずれにしても両者を合わせれば80%近くになるので、チャートと流紋岩が主要な石材であったことに変わりはない。ただし今回は重量と個数を整合させるために完形礫だけを抽出して計測しているので、被熱等によって破損しやすいものがあった場合、この数値が変わる可能性もある。木更津市金二矢台遺跡の報告では、チャートの破損率が他の石材に比べて高いことが指摘されている¹¹。金二矢台遺跡は、中越遺跡と同じ水系の上流に位置し、2遺跡は2,600mほど離れているが、地勢的にはほぼ同じ環境下にあるといえってよいだろう。石材構成比も中越遺跡とほとんど同じで、チャートが52.0%、流紋岩が16.3%になり、この2種が石材の大半をしめている。礫の平均重量が35.2 g と小粒なものの中越遺跡と共通する。中越遺跡ではチャートの破損率が高いという事実までは確認していないが、金二矢台遺跡と様相がこれだけ共通し、地勢上の両遺跡の距離を勘案すれば、中越遺跡出土のチャートも同じような性状をもっていたことは想像に難くない。しかしそれを考慮に入れれば入れるほど、石材構成比にしめるチャートの割合が高くなることになる。したがって先に提示した、チャートが石材構成比において50%前後しめるという数値も、低く見積もっての数値と理解しておいたほうがよいだろう。

礫群の時期については、時期のわかる遺構・遺物がみつからなかったので時期の特定はむずかしい。しかしもっとも多く出土した縄文時代早期の撚糸文土器の分布と礫群の分布範囲がほぼ重なるようなので、

礫群も縄文時代早期と考えておいてよいだろう。

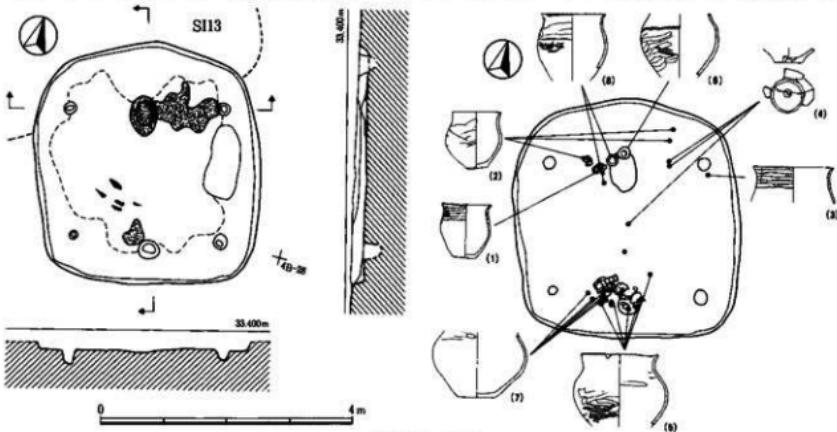
なお出土した礫は遺跡の周辺の露頭面等で採取されて、遺跡に持ち込まれたものと思われる。しかしそれにしては下層の礫と、異なる点があるのが気になる。まず石材の構成比で、チャートと流紋岩でその占有率が逆転する。つまり上層ではチャートが6割近くをしめるのにたいして、下層では流紋岩が6割近い。また石材の1個当たりの重量も、下層では100gを越えるものが大半であり、明らかに下層の礫は上層に比べて大型である。礫の採取地点が異なるのか、礫の使用目的が異なるために選別された礫に違いが生じたのか、ほかにも理由があったのか、今回の資料だけではわからない。とりあえず中越遺跡では旧石器時代と縄文時代とで、礫群の内容に違いがあるという事実だけは指摘しておきたい。

第3節 弥生時代

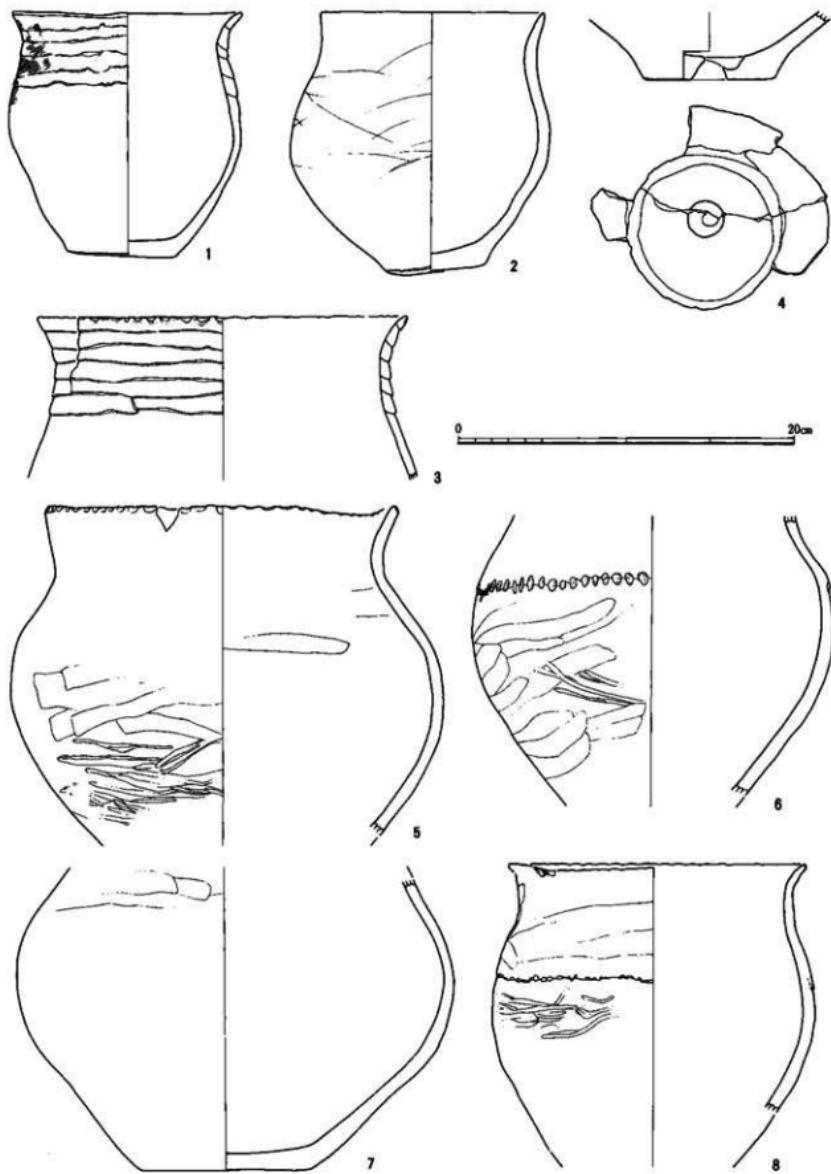
遺構としては調査地の西部で竪穴住居を1軒調査しただけで、土器片の出土も少なかった。その散布範囲も限定的で、調査地中央部の竪穴住居S I 19・S I 20の覆土中から出土したものだけであった。とくに竪穴住居S I 20から出土した広口壺の破片資料は、ほとんどが同一個体で、全体に出土量が少ないなかにあって、ややまとまって出土した。あるいは調査区を越えた北側に弥生時代の遺構が存在するのかもしれない。ただ隣接地を調査した（財）君津都市文化財センターの調査成果をみても、弥生時代の出土資料自体が僅少なので、たとえ広がるにしても、極めて散漫な状況であったろうと思われる。

竪穴住居S I 14（第44・45図、図版7・20）

調査地西部の4B-16を中心位置し、南に向かって谷を臨むため、やや標高が低い。平面形態はやや胴張りの隅丸長方形で、長軸長は3.77m、副軸長が3.57mになる。比較的小型な住居である。住居の主軸はN-18°-Wにとる。住居北側の一部は古墳時代の竪穴住居S I 13に切られ、壁高も10数cm程度と低く、遺構の遺存状態はあまりよくない。屋内施設としては主柱穴4本をそれぞれ住居の隅近くに配置し、出入り口と思われる位置にも1本柱穴を配置している。そして出入り口ピットの対向位置には炉を掘っている。



第44図 S I 14



第45図 SI14出土土器

主柱穴は深さ20cm～30cm程度で、掘方の直径も25cm～30cm内外で、全体に掘込みが小さい。出入り口ピットは最大径35cm程度と柱穴の直径に比べてやや大きい。床面は主柱穴に囲まれた範囲が硬化していた。炉は長径64cm、短径43cmの南北に長い長円形で、炉の主軸は住居の主軸方向とほぼ一致する。整溝はない。覆土は焼土粒・炭化粒を含む黒褐色土を主体とするが、床面等には顕著な焼失痕跡は認められなかった。

出土土器

土器は炉の周辺と出入り口ピット周辺の2か所にまとまって出土した。図示した土器の器種は壺だけである以外の破片資料もすべて壺で、壺といえる資料はなかった。壺はいずれも体部中位に最大径がある。1・2は高さ15cmほどの小振りの壺になる。1・3は口縁部から肩部にかけて、幅1cm～2cmで5～6段の粘土紐の接合痕跡を器表面に残し、1では刷毛目調整痕を残し、刷毛で調整した部分だけ粘土紐接合痕は消えている。なお3・5・8では口唇部に棒状工具で交互に押捺して、波状口縁を作り出しており、口縁部を欠損した6にもおそらく波状口縁があったのであろう。1・2の小振りの壺には波状口縁がなく、素縁に仕上げてある。6は有段部の下端に繩文を押捺し、8では棒状工具による押捺を行っている。4は壺の底部の資料で、底面中央附近に焼成後に表裏から工具を回転して穿孔した痕跡が残っていた。ただ両方向の穿孔位置がずれたために、外側からの穿孔は貫通したもの、内側から穿孔した孔は貫通する直前で止まっている。

第4節 古墳時代

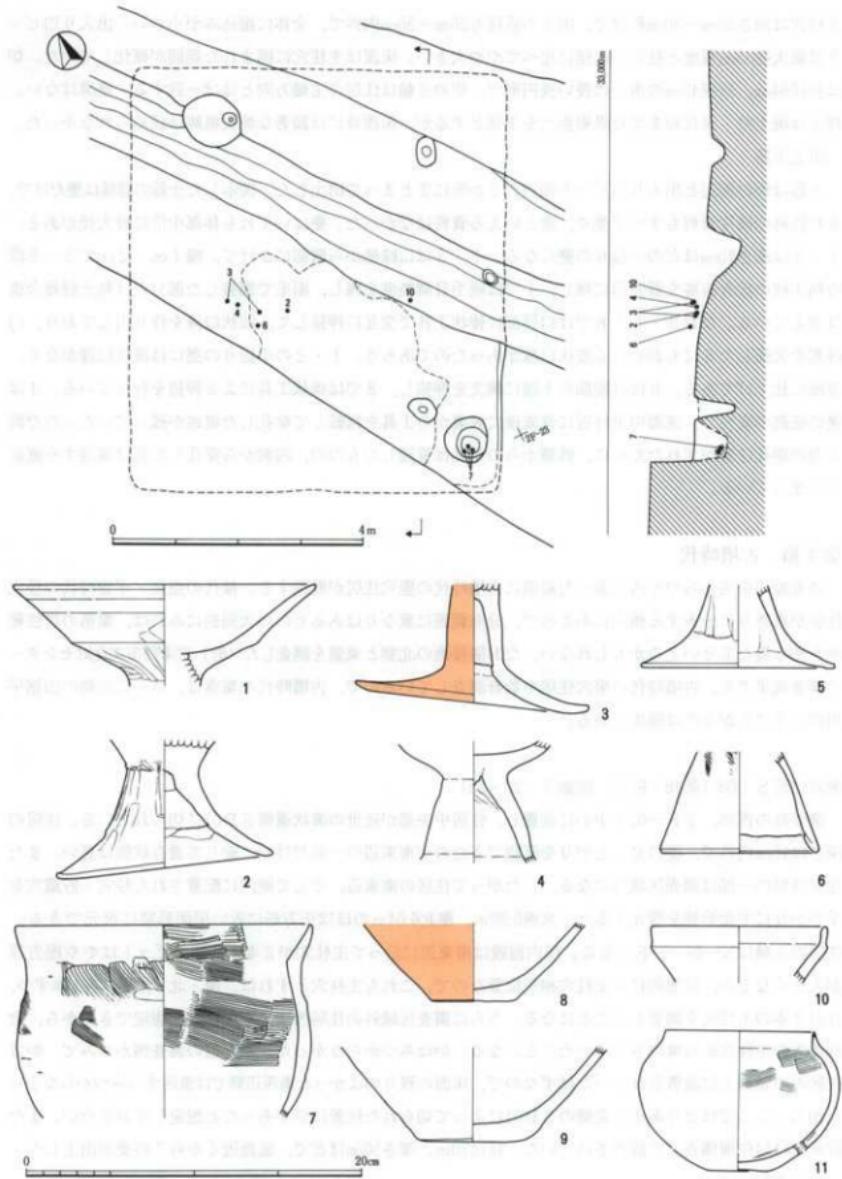
調査地の中央からやや西に寄った範囲に古墳時代の堅穴住居が展開する。後代の奈良・平安時代の堅穴住居が東寄りに分布する傾向があるので、分布範囲に重なりはあるものの大別にみれば、集落の居住範囲がやや異なるといえるかもしれない。なお隣接地の北側と東側を調査した(財)君津都市文化財センターの調査成果でも、古墳時代の堅穴住居を数軒調査しているので、古墳時代の集落は、さらに北側の山裾平坦部にまで広がるのは確実である。

堅穴住居S I 03(第46・87図、図版3・20・28)

調査地の西部、2F-02を中心に位置し、住居中央部が近世の溝状遺構SD01に切られている。住居の深さは15cm内外で、壁の立ち上がりを確認できたのが南東辺の一部だけで、総じて遺存状態は悪い。また住居西側の一部は調査区域外になる。したがって住居の南東辺、そして屋内に配置された柱穴・貯蔵穴を手がかりに平面形態を復元すると、東西5.98m、南北6.64mのほぼ正方形に近い平面形態に復元できる。住居の主軸はN-26°-Eになる。屋内施設は南東辺に沿って主柱穴が2本、北隅のピットはやや掘方径が大きくなるが、位置的にも主柱穴相当位置なので、これも主柱穴とすれば、南・北・東隅に各1本ずつ、合計4本の主柱穴から構成されていたことになる。炉はみつかなかった。ただ他の調査例からみて、炉は住居の中軸線上に設置されていたはずなので、床面の残りのよかつた南西辺側では痕跡すらみつからなかつたから、ここではとりあえず北側のSD01によって切られた位置に炉があったと想定しておきたい。また貯蔵穴は居住南隅近くに設置されていた。径は70cm、深さ50cmほどで、底面近くから7の壺が出土した。

出土土器

土器は住居中央部を中心に出土した。1～5は高壺の部分資料で、壺部の全体がわかる資料は1だけ



第46図 SI03と出土土器

ある。1は緻密な胎土を使用しており、器面も平滑に仕上げているのが特徴である。ただ被熱しているためか、器面に痘瘍状に剥落しているところがある。坏部の体部中位に段をもつ。脚部の資料は柱状部が細く円筒形のものと、逆ハの字状に聞くものの二者がある。3が前者で据部が外へ大きく広がる。2・4・5が後者になる。2・3は脚の中軸線と接地面が斜めになる。6は台付壺の脚部のみの資料である。外面には刷毛目を残すが調整でほとんど消されている。また端部は内側に折り返して、厚みをもたせている。7は壺の体部上半の資料で、全体に厚手の作りである。内外面とも刷毛目調整を施しているが、粘土を掻き取るように深く食い込ませて調整しているのが特徴である。刷毛目はかなり粗い単位のものを使用している。8・9は底部が残る壺である。ただ8は外面に赤色塗彩らしい痕跡をわずかに残し、被熱した痕跡もなく、内面を平滑に仕上げていることから、正しくは壺かもしれない。9の内面はかなり炭化しており、土器の厚みの半分ほどまで及んでいる。10・11は小型の土器で、10は小破片のため定かではないが、椀状の器形になるのかもしれない。11は小型の広口壺で、小さな底部は平底になっている。最大径は体部中位よりやや上にあり、口縁部ですらまつて、低い立ち上がりの口縁部へと続く。内側には若干刷毛目調整の痕跡を残す。なお覆土からはほかに奈良・平安時代の土器類が数点出土しており、住居の深さが浅いこともあるが、覆土がかなり攪乱されていることを物語っている。

堅穴住居 S I 08・09（第47・48図、図版5・20・22）

調査地のほぼ中央、2E—65を中心位置し、2軒の堅穴住居が重複するので、2軒まとめて報告する。S I 08はその大半が調査区域外になり、S I 09も約半分近くが調査区域外になる。調査区域の断面から判断する限り、S I 08がS I 09を切って構築されていることが確認できた。S I 08は南隅だけが遺存しており、南東壁の延長で住居の主軸をみると、およそN—45°—Eになる。深さは20cmほどある。壁溝はなかった。覆土は焼土粒を多く含む黒褐色土である。

S I 09は住居の東隅から西隅へ対角線を引いた三角形になる南側半分を調査したことになる。住居の主軸方位はS I 08とはほぼ同じ方向の、N—38°—Eになる。住居南隅がやや鋭角なカーブを描くので、住居全体の平面形態は北側がややすらまる台形か、平行四辺形に近い平面形態と想定される。主柱穴は2本調査し、北側の1本は半分が調査区域外になる。それぞれ深さは60cmほどある。そして南隅には貯蔵穴があり、深さ20cmほどで、径は70cm～80cmになる。炉は貯蔵穴の位置から、調査区域外の北側に設置されていたと思われる。床面は住居中央部を中心に硬化していた。壁溝はない。覆土は焼土粒・炭化粒を多く含む黒褐色土で、住居北側で焼土が散乱していたので、焼失住居の可能性がある。

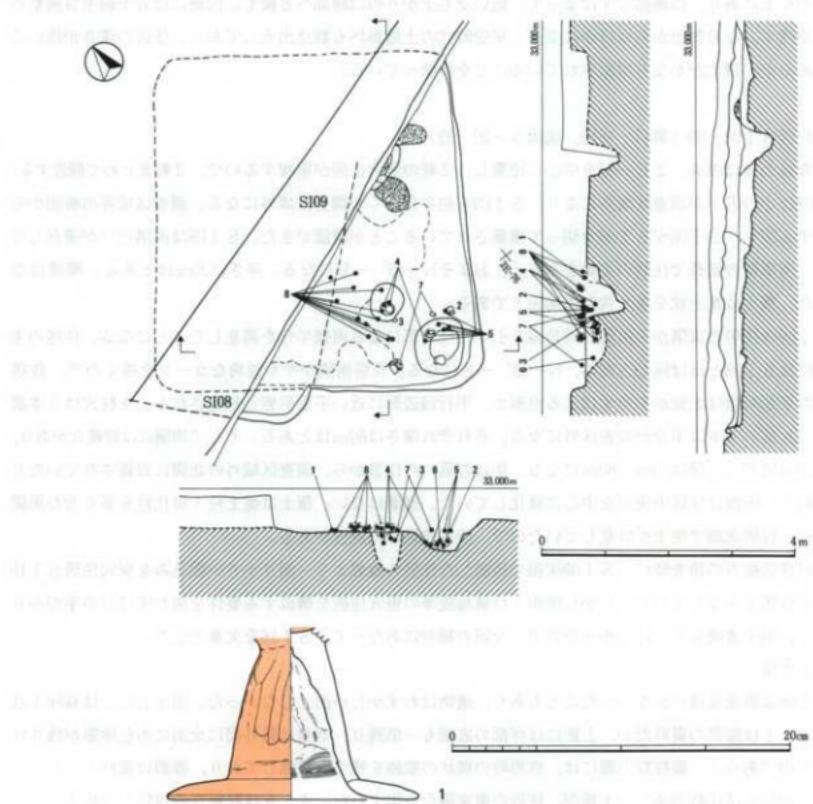
なお住居掘方の精査時に、S I 09床面で確認した住居の輪郭より一回り小さい掘込みを堅穴住居S I 16として住居とみなしていた。しかし床面・付属施設等の堅穴住居を構成する要件を満たすほどの手がかりもなく、出土遺物もとくになかったので、今回の報告にあたって、S I 16を欠番とした。

出土土器

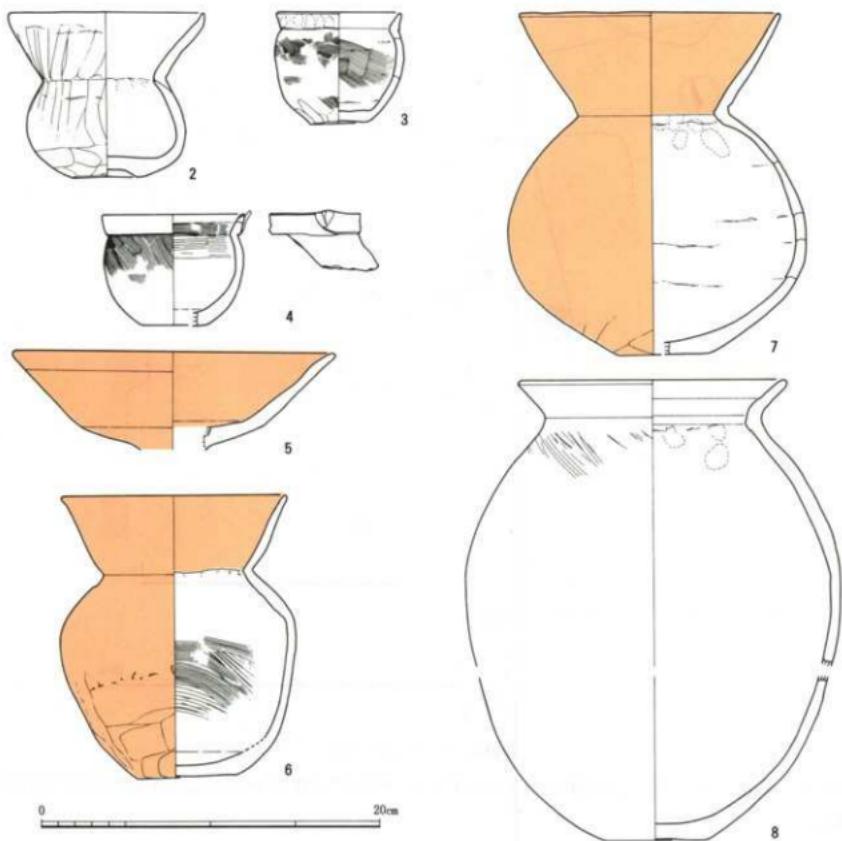
S I 08は調査面積が少なかったこともあり、遺物はわずかしか出土しなかった。図示したのは高坏1点である。1は脚部の資料だが、上面には坏部の底面も一部残り、本来は器外面に全面に赤色塗彩が施されていたのであろう。脚柱部内面には、成形時の襞状の痕跡を残す。被熱しており、器面は荒れている。

S I 09からは比較的多くの土器が、住居の南東隅から出土した。4・5は貯蔵穴の中位から出土し、8の壺は主柱穴の周囲に散乱していた破片資料である。2～4が小型の土器である。1はやや粗製の壺で、

口縁部の立ち上がりには一部粘土紐の接合痕を残す。体部の最大径が下半にあり、重心が低い。底部外面をやや上げ底に成形している。2・3はそれぞれ粘土紐を付け足して口縁部を折り返した広口壺で、3は粘土紐の継ぎ目をつまみ上げて突起させている。どちらも基本的には刷毛目調整で仕上げ、2は底部周囲をヘラ削りして整えている。5は高坏の坏部のみの資料で胎土・調整は1によく似ているが、坏部と脚部の接合方法が異なるようである。坏部下半に緩やかな稜をもち、内面もその高さでやや平底になっている。内外面とも赤色に塗彩している。6は体部の最大径が体部上半にあり、やや肩が張る器形である。口縁部の高さと体部の高さとの比は、7と同じようにおよそ3:7になるが、5のほうが体部の丸みがないために器形としてはかなり異なる印象をうける。口縁部はなかほど外にやや張り出し、口唇部をやや外方につまみ上げて成形している。底面を除く器外面と口縁部内側まで赤色塗彩を施す。被熱しているためか、器面はかなり荒れている。7は体部の最大径が下半にあり、体部にかなり丸みをもつ。口縁部はほぼ直線的に逆ハの字状に外傾する。頸部内側には指頭圧痕が残り、体部内面には一部粘土紐接合痕が残る。8は



第47図 SI08・09と出土土器

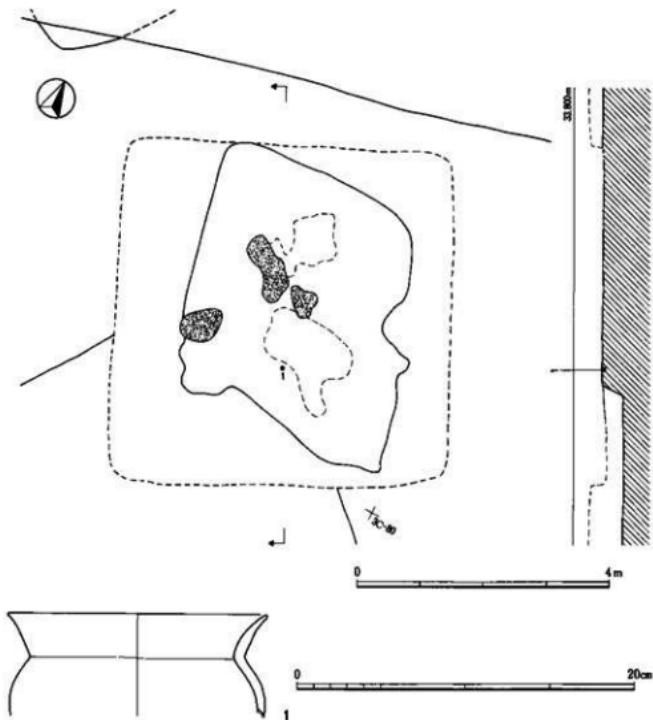


第48図 SI09出土土器

壺だが、体部上半と下半で直接接合しなかったので個別に図示したために、器高がかなり高くなっている。本来の器高はもう少し低くなつて球形に近くなり、体部の最大径の位置もかなり下がるはずである。ヘラ削りで全体を成形し、頸部だけさらにミガキ調整を行つてゐる。被熱して、体部下半の器面はかなり剥落している。

堅穴住居 S I 10（第49図、図版 5）

調査地西部の3B-68を中心に位置し、ほとんど住居の床面しか残らず、一部は堅穴住居 S I 12とも重複しているものの新旧関係も不明である。また柱穴・貯藏穴も確認できなかった。焼土の散布範囲が3地点あり、そのうち西側の1か所は数cmくぼんだところに焼土が堆積していたので、あるいは炉の一部だったのかもしれない。なお S I 10として取り上げた遺物のなかには、奈良・平安時代の土師器もかなり多く



第49図 SI10と出土土器

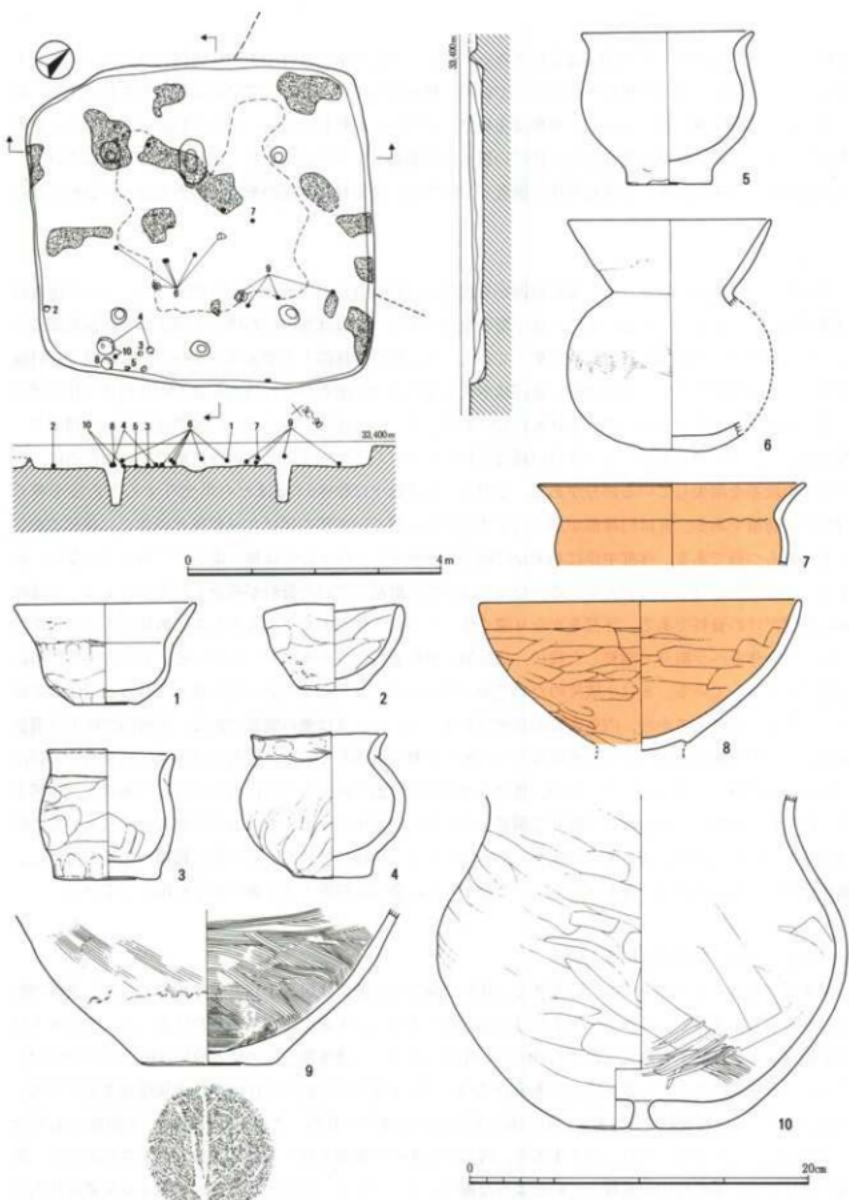
含んでいる。ここでは炉らしい痕跡があるいっぽうで、カマドの痕跡がなかったことから当該期に含めて報告する。

出土土器

1点だけ図示した。1は推定口径で15cmほどになる、広口壺の口縁部が残る資料で、体部はおそらく球胴になるであろう。比較的薄手に仕上がっており、とくに口縁部はシャープな作りをしている。なお同一個体資料が、住居の推定範囲を超えた3C-40からも出土しており、また出土土器のなかには奈良時代の土師器も含むなど、遺物が相当擾乱されていることを物語っている。なお図示していないが全体に煤が付着した、刷毛目調整を施した壺のやや大型な破片資料が1点あった。

堅穴住居 S I 12 (第50図、図版 6・20・21)

堅穴住居 S I 10 の南側に重複し、3B-88を中心位置する。住居の規模は主軸長5.08m、副軸長5.35mで、副軸方向にいくぶん長い住居になる。住居の各隅はやや丸みを帯びるもの、住居四辺の壁はほぼ直線的である。主軸方向はN-52°-Wで、かなり西に振れている。主柱穴に囲まれた範囲を中心床面が硬化していた。深さは25cmほどで、整溝は確認できなかった。主柱穴は4本で、上面径の最大は35cmと



第50図 SI12と出土土器

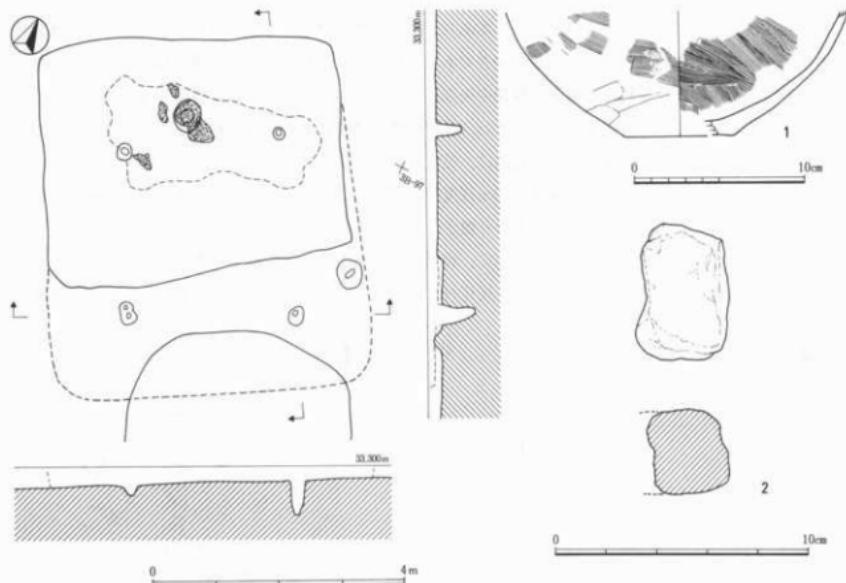
比較的小さく、深さはどれも60cmほどにそろっている。また南東壁ほぼ中央の住居内には出入り口ピットが1本あり、深さ18cmで住居外方に向かって斜めに掘り込んでいた。そして対向位置に炉を敷設する。炉の軸方向は住居主軸に沿っていて、規模は主軸方向で70cm、副軸長で42cm、深さは10cmほどになる。炉の南半分で焼土の厚い堆積を確認した。住居の覆土は黒褐色土を主体に焼土粒・炭化粒が多く含んでいた。住居西側半分の床面に焼土と炭化材片が散乱していたが、炭化材は本来の形状のわかるほどの資料ではなかった。

出土土器

住居南半分の焼土が散乱していない範囲から比較的良好な資料が床面近くから出土した。とくに南西の墻際ではややまとまっている。1~5は小型の土器である。2は鉢型のいわゆる手捏土器で、器表面にかなり凹凸がある。内面はヘラで削って整えている。1は壺で、体部上半が大きく逆ハの字状に開く。口縁部から内面全体にかけてヨコナデし、体部は中位を横にヘラで削り、それ以外を縁のヘラ削りで仕上げている。底面はヘラで削りだして、上げ底にしてある。3~5は体部の最大径が口縁部径に近く、頸部で一端すぼまる広口の壺である。3・4は口縁部を折り返しているが、3ではその後に擦でているために、折り返しの段差を消失している部分がある。なお2~5は胎土に粒径0.5mmほどの黒光りする黒色粒を多く含むのが特徴である。6は口縁部が逆ハの字状に大きく開く。底部の径は3cm前後と小さく、体部にかなり丸みをもつ壺である。体部中位にわずかに刷毛目を残すが、ほとんどは擦で消されて残っていない。胎土にはやはり黒色粒を多く含んでいる。なお6はかなり散乱していた資料が接合したものである。7は高壊の壊部だけの資料である。壊部をかなり深く作っており、体部もやや丸みをもち、碗状に近い形状をしている。全体をヘラ削りで調整した後に、部分的に放射状のミガキ調整を行っている。器面の外面には赤色塗彩を施している。8は小破片のため定かではないが、おそらく丸底の碗と考えられる。器面は下地を丁寧に磨いて整えてから、外面に赤色塗彩を施している。9は壺の底部である。外面に刷毛目調整痕が残り、器外面の底部近くではその後のヘラ削り調整で消されている。底面には木葉圧痕を残す。10は口縁部の途中から上を欠損しているが、体部のほぼ中位に最大径をもつ広口の壺になるであろう。体部上半は刷毛目で調整し、下半はヘラ削りで調整している。底部中央に焼成後にあけた穿孔がある。おもに外側からあけられており、補足的に内側からもあけている。全体に被熱し、部分的に器面の赤化が進行し、器面はかなり荒れている。なお図示していないが、他に壺の比較的大きな破片が2点出土している。

堅穴住居S I 13(第51図、図版7)

調査地西部の3B-95を中心に位置する。住居の輪郭では堅穴住居S I 14と重複する。しかし遺構の掘込みがもともと浅かったようで、S I 13は北半分がかろうじて床面が残っているだけだった。またS I 14と重複する南側は削平されて床面すら残っていないかったので、遺構覆土での切り合いは確認できなかった。したがって床面の残っている範囲と、南半分については主柱穴の位置から住居全体の規模を推定すると、主軸長5.70m、副軸長4.93mの南北に長い長方形の住居と考えられる。また主柱穴間の心々距離でもやはり南北方向に長くなる。主柱穴は4本あり、残りのよかつた北側の柱穴では50cmほどの深さがあった。南西の主柱穴は2本の柱穴が重複していたような掘方になっている。なお出入り口に相当する位置に柱穴は確認できなかった。床面の硬化範囲は北側の柱穴周囲で確認できたが、本来の硬化範囲はさらに広がっていたのである。北側2本の主柱穴の間に炉がある。炉は長径で50cmほどの卵形である。なお壁溝は北側



第51図 SI13と出土土器・土製品

の床面の残っている範囲でも確認していないので、当初から壁溝はなかったのであろう。

出土土器

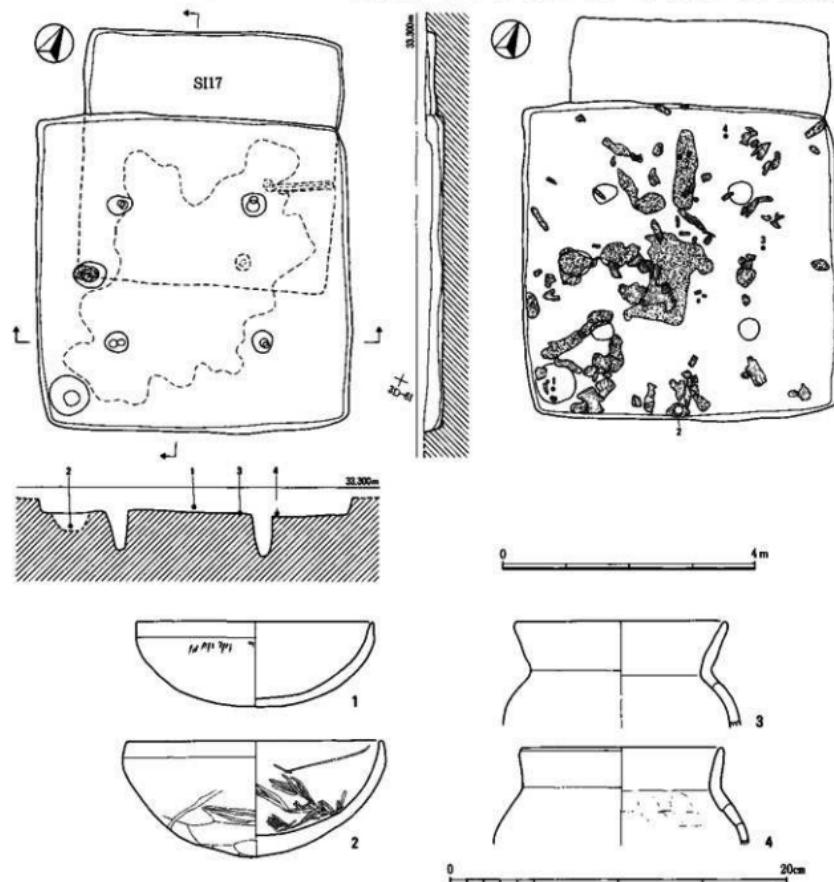
住居の遺存状態が悪かったために土器の出土量は少なく、出土地点を押された資料もない。1は球胴の壺の体部下半である。器面に刷毛目調整痕を残し、底部近くではその後にヘラ削りを行っている。なお小破片だったために図示していないが、同一個体と思われる口縁部資料も存在する。それによると口縁部は頸部でくの字状に反り返って外傾し、刷毛目調整は頸部にまで及ぶ。比較的薄手の作りで、胎土にはかなり大粒の砂粒が多く含む。接合資料もしくは同一個体と思われる資料が、3B-74・3B-84・3B-85の一括資料のなかにもあり、かなり資料が散乱していたようである。2は粗い砂粒が凝固した砂岩で、砂どうしの結合が非常に弱いために崩壊しやすい。重量は466.7gである。一部に面取りのような痕跡があったために図化したが、かりに製品としても用途ははっきりしない。

堅穴住居SI17・18（第52図、図版8・21）

調査地のはば中央より西に寄った地点、3C-58を中心に位置する。SI17は住居の北東壁がSI18の北東壁のはば延長になるから、住居の平面を重ね合わせると、SI17をSI18の付属施設ともみてとれる。しかし覆土断面の切り合いからSI18がSI17を壊しているのは確かなので、それぞれを独立した遺構として、先にSI18から報告することにする。

SI18の主軸方位はN-118°-Wで、今回報告するなかでは唯一炉を住居の南寄りに敷設している例による。主軸長・副軸長とも長さはどちらも4.98mになり、かなり正確な正方形の平面形態である。主柱

穴は竪穴住居のほぼ対角線上の4隅近くに4本あり、上面の掘方はそれぞれ40cm程度である。深さは北隅の1本が80cmほどと深い以外は60cmほどの深さである。柱穴埋土の断ち割では直径10数cmの柱痕跡を確認した。また南と西の柱穴を結んだ線より外側中央部に炉が設置されていた。炉は長径60cm、短径42cmのややいびつな卵形をしている。貯蔵穴は炉に近い、住居南隅の壁際にある。直径約60cmで、深さ30cmの断面が逆台形になる掘方である。床面の硬化範囲は、竪穴住居のなかをほぼ南北方向に、主柱穴で囲まれた範囲の外にまで広がっている。住居の深さは20cm程度で、壁溝は確認できなかった。覆土は焼土粒・炭化粒を多く含む黒褐色土で、床面直上からもかなり焼土と炭化材の散布が確認できた。炭化材が住居の中央部に向かって床面全体から出土したのにたいして、焼土は住居の南北の対角線より西側に集中する傾向があり、両者の散布範囲が必ずしも重ならない。炭化材はそれなりに厚みがあるので、板材というよりは角材



第52図 SI17・18と出土土器

状の断面形態のようである。なお床面の貼床除去後に、北の主柱穴付近から北東方向へのびる、幅10cm、長さ95cmほどの根太痕跡が1条みつかった。

S I 17の主軸方向はN-114°-Wで、S I 18の主軸方向とほとんど同じである。住居の1辺が残る北壁の長さは4.00mである。残っている住居2隅の角度がほぼ直角になり、S I 18と重複するあたりの壁がわずかに丸みを帯びるので、その近くに住居の東隅を想定すれば、一辺4mの方形の堅穴住居と考えられる。遺構の深さはS I 18より一段浅く、10cmほどしかない。柱穴・貯蔵穴・壁溝等の諸施設は確認できなかつた。また床面もあまり硬化していないので、使用痕跡は希薄である。

出土土器

S I 17・18と2軒の堅穴住居が重複していても、遺物台帳に登録して取り上げた遺物はS I 18出土のものだけだ、S I 17出土として登録された出土資料はなかった。1・2は赤色塗彩を施した丸底の壺である。1は貯蔵穴の底面付近から出土したが、3分の1程度しか遺存せず、他の同一個体資料もない。もともと欠けていたものを、住居の廃棄に伴って貯蔵穴に投棄したものであろうか。口縁部直下に縱方向の櫛齒状の刻みがめぐる。一見刷毛目のようにみえるが、器面への切り込みは鋭く、そしてやや深く食い込んでいる。2はほぼ完形で、南東壁ほぼ中央の壁際から出土した。外面は口縁部をヨコナデ、それ以下をヘラ削り後にミガキ調整を行っている。3・4は壺または甕の上半部の資料である。3の口縁部はくの字状に屈曲しているが、4の口縁部は直立気味に立ち上がっている。口縁部の厚みはいずれもやや厚く、ぱつたりしている。

堅穴住居 S I 19（第53～55図、巻頭図版1、図版8・9・21・22・23）

S I 19は調査時に小銅鐸が出土したことから、今回の報告に先行してすでに『連絡誌』で概要が報告されている。しかし今回の報告にあたって、遺構の復元に関わる部分で理解が異なる部分があったため、住居の平面形態や計測値等に若干相違するところがある。それについてはその都度ふれることにする。

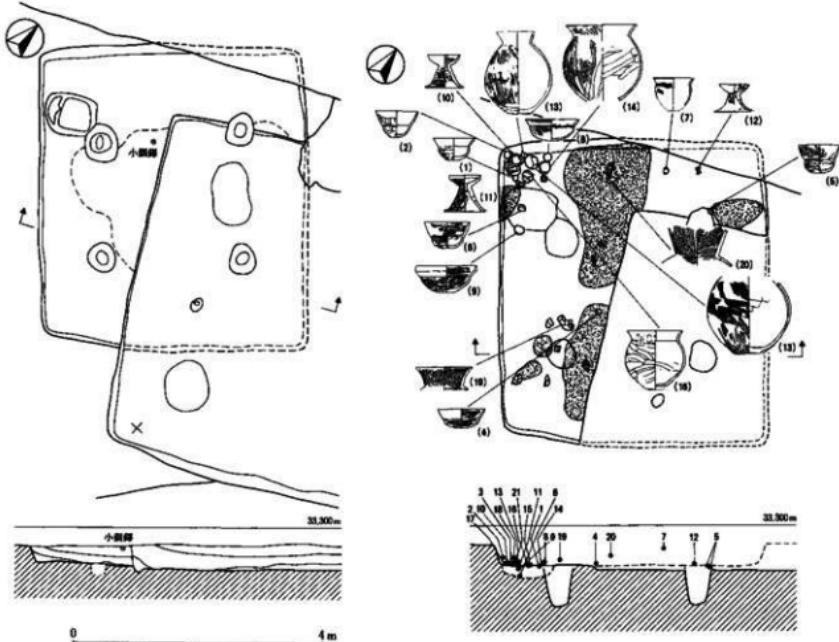
S I 19は調査地ほぼ中央北側の調査区の境界に接しており、3D-13を中心に位置する。住居の東半分は堅穴住居S I 20に切られ、北側の一部も調査区域外になり、遺構の調査条件はよくなかった。住居の主軸は西壁を基線に測ると、N-43°-Wになる。そして『連絡誌』では住居の規模を「遺存長4.8m、副軸長は4.4mの東側がやや開いたいびつな隅丸方形」と想定した。いびつな寸法は、『連絡誌』に掲載された図面から計測して、西壁長が4.5mにたいして東壁長が5.2mという数値で表せばさらにわかりやすい。確かに調査した壁の線をそのまま延長すると、こうした復元になるのもやむを得ないかもしれない。しかし方形もしくは長方形を基調とする、同時代の堅穴住居の平面形態に照らしたときに、やや異質な印象をうけるのも事実であろう。

そこで今回の報告するにあたって、改めて以下のように推定復元してみた。その際着目したのは、主柱穴が比較的整然とした柱配りがなされているということである。これは単に柱位置だけの問題ではなく、住居の上屋構造にも関わる問題でもあり、整然とした柱配りにはそれに見合う上屋構造を想定する必要がある。これが結果として住居の平面形態を左右することになる。このことを踏まえて、南壁と北壁の推定線を少し外へ膨らませた。これは西壁の線がかなり直線的なのにたいして、残っていた東壁の一部はやや住居の外方に向かっていることから、すべての壁線が直線を基調とするものではなかつたのではないかと考えたからである。その結果、図示したように主軸長4.85m、副軸長4.28mの南北にやや長い長方形の平

面形態に推定した。主柱穴の柱間距離もほぼ各軸長に対応する。ただこの数値だけでは『連絡誌』の復元値と大差ないが、北隅と南隅をやや中央に寄せたことで『連絡誌』の西壁復元長が44cmも短くなり、同時代の住居形態と比べたときの違和感はかなり緩和できたと考えている。

主柱穴は4本あり、今回の復元では住居の対角線上の、各隅から住居のなかほどに寄った位置に配置されていたとなる。深さはS I 19の床面から70cmほどになる。また東主柱穴に近いところにあるピットはS I 20の貼床除去後にみつかったために、遺構の帰属がはっきりしないが、S I 19の床面からは40cmほどの深さなので、あるいは出入り口のピットに相当する可能性もあるので平面図に掲載した。『連絡誌』では示していないピットになる。炉はみつからなかったが、炉は北・西柱穴の間か北・東柱穴の間とすれば、S I 20が重複する部分なので、S I 20構築時に消滅した可能性が高い。先のピットを出入り口ピットとすれば、炉は前者の北・西主柱穴の間にあった可能性が高い。貯蔵穴は住居の北西隅にあり、掘方の一部は北主柱穴と接していた。長径84cm、短径66cmのやや丸みを帯びた長方形である。深さは15cmほどで、貯蔵穴周辺から土器が多く出土したことによって、貯蔵穴内からも6の堆が底面近くから出土した。床は主柱穴に囲まれた範囲を中心に硬化していた。焼土と炭化材もかなり広範囲に住居内に散乱していた。整溝は確認できなかった。覆土はソフトローム粒・焼土粒・炭化粒を多く含む黒褐色土を主体としていた。出土土器

今回報告するなかではもっと多くの土器が出土し、完形のものも多かった。ほとんどが住居北西隅の



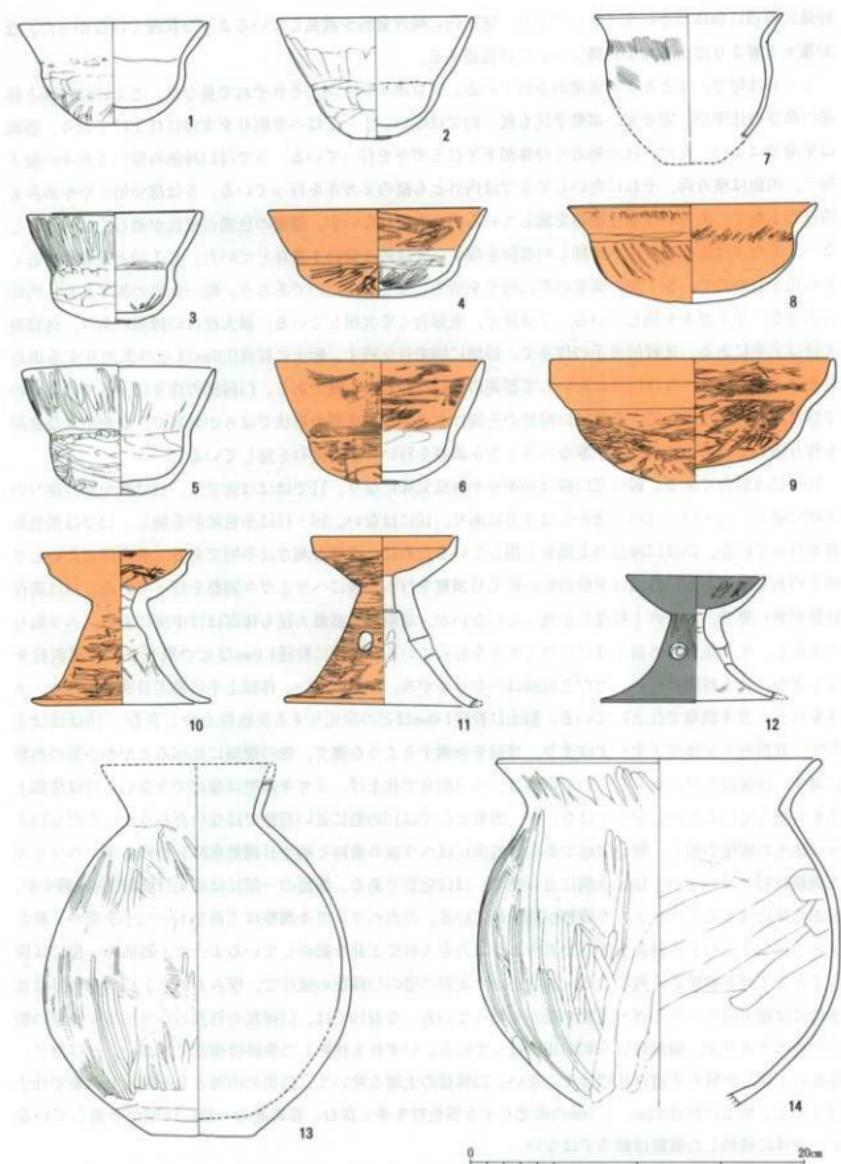
第53図 S I 19

貯蔵穴周辺に個体ごとにまとまっており、住居内に破片資料が散乱しているような状況ではなかった。なお覆土上層より出土した小銅鐸については後述する。

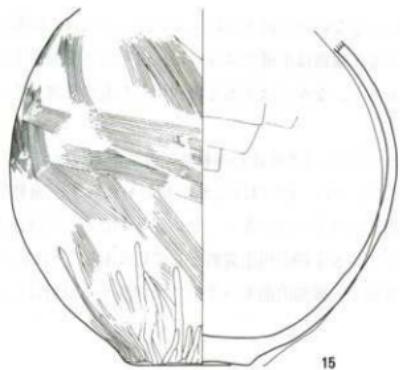
1~6は壠で、4と6が赤色塗彩されている。プロポーションがそれぞれで異なり、とくに口縁部と体部の高さの比率が一定せず、調整手法も統一的ではない。1・2はヘラ削りを主体に仕上げており、器面は平滑ではない。ただ1は底部近くの体部下半にミガキを行っている。3では口縁部外側のミガキが縱方向で、内面は横方向、それにたいして5では内外とも縱のミガキを行っている。5は部分的にやや赤みを帯びた土器で、あるいは赤色塗彩を施しているのかもしれないが、器面の色調の変化が激しくはっきりしない。また3は底部内面にヘラ押しの痕跡を残す。4は約2分の1遺存していた。S I 20と重複する近くから出土したので、S I 20の構築の際に残りを消失してしまったのであろう。唯一丸底の例である。内面に入念なヘラミガキを施している。7は鉢で、底部近くを欠損している。最大径は口縁部にあり、体部最大径は上半にある。比較的薄手の作りで、器面に刷毛目を残す。胎土に粒径0.5mmほどの黒光りする黒色粒を多く含む。8・9は口径にたいして器高の低い、いわゆる椀である。口縁部の作りは、8では逆ハの字状に開くのにたいして、9では口縁部の先端は直立する。底部の形状では8が丸底で、9が小さな底部を作り出している。いずれも丁寧なヘラミガキ調整を行い、赤色塗彩を施している。

10~12は器台である。器受部口縁は10がやや外反気味になり、11ではほぼ直立し、12は緩やかに逆ハの字状に開く。11・12では円孔透かしは3方にあり、10にはない。10・11は赤色塗彩を施し、12では黒色処理を行っている。13は口縁部の上端を欠損しているために、正確な高さは不明である。最大径にたいして高さのある壠である。外面は単位の粗い刷毛目調整を行った後にヘラミガキ調整を行っている。14は遺存状態が悪い壠で、4分の1程度しか残っていないが、球胴で体部最大径も体部ほぼ中央にある。ヘラ削りで成形し、その後に器外面全体にヘラミガキを行っている。胎土に粒径1.0mmほどの黒光りする黒色粒を少し含む。15も球胴に近い。ただ上面観はかなりゆがみ、卵形に近い。体部上半に刷毛目調整が残り、下半をヘラミガキ調整で仕上げている。胎土に粒径1.0mmほどの黒光りする黒色粒を少し含む。16はほぼ完形で、底部近くで体部下半がすぼまり、球胴を強調するような壠で、他の壠類に比べるとやや小型の部類に属す。口縁部をヨコナデしている以外は、ヘラ削りで仕上げ、ミガキ調整は確認できない。17は体部上半を欠損しているために定かではないが、器形としては13の壠に近い形態ではないだろうか。ただし13よりは胎土の密度が粗く、軽い質感である。器面にはヘラ削り痕跡と刷毛目調整痕跡しか残らず、ヘラミガキ調整は行っていない。18は球胴に近い壠で、ほぼ完形である。器面の一部には刷毛目調整痕跡を残すが、器面全体はほとんどヘラミガキ調整が施されている。ただヘラミガキ調整は工具をもった手を細かく動かすのではなく、むしろ器面を押しつぶすように力を入れて工具を動かしているよう、器面の一部には抉るようなミガキ痕跡さえ残る。19・20はかなり大型の壠の口縁部の破片で、厚みもある。口縁部内外は基本的に縱方向のヘラミガキ調整を細かく行っている。なお19では、口縁部の外面のヘラミガキ調整の際の工具のアタリが、頸部側にも刺突状に残っている。いずれも被熱した痕跡は確認できない。21は壠で、体部の上半しか残らず遺存状態はよくない。口縁部の上端を除いて、器面の内外ともに刷毛目調整で仕上げている。胎土に粒径0.5mm~1.0mmの黒光りする黒色粒を多く含む。器外面の一部には煤が吸着しているが、全体に被熱した痕跡は顕著ではない。

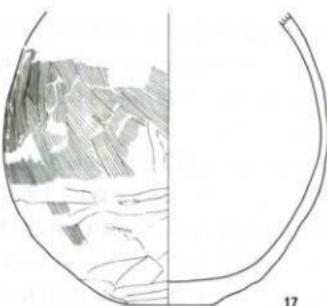
なおこれらの壠・壠類は住居北西隅の土器がまとめて出土したにもかかわらず、その遺存状態はまちまちである。完形に近かったのは13・16・18だけで、それら以外の遺存状態は決してよくない。出土状況



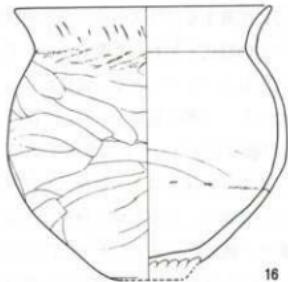
第54図 SI19出土土器（1）



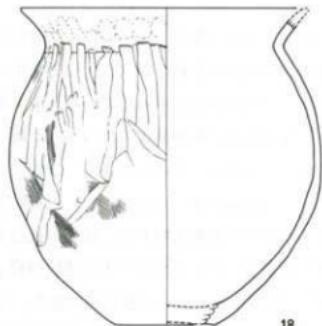
15



17



16



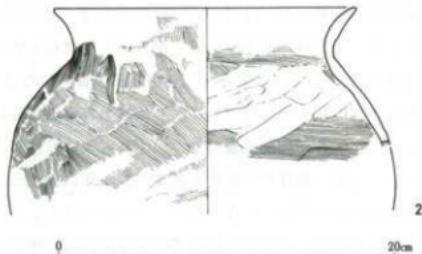
18



19

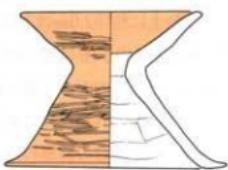


20



21

0 20cm



22

第55図 SI19出土土器（2）

のなかで土器の破碎面がどの位置にあったのかまで検証できないので何ともいえないが、調査前に擾乱されて破損していた可能性は十分にある。また21は遺存する下端面は平滑ではないが、遺存状態を勘案すると、口縁部を下にして置台のように使っていた可能性もあり、なかには土器を再利用したものを含んでいるのかもしれない。

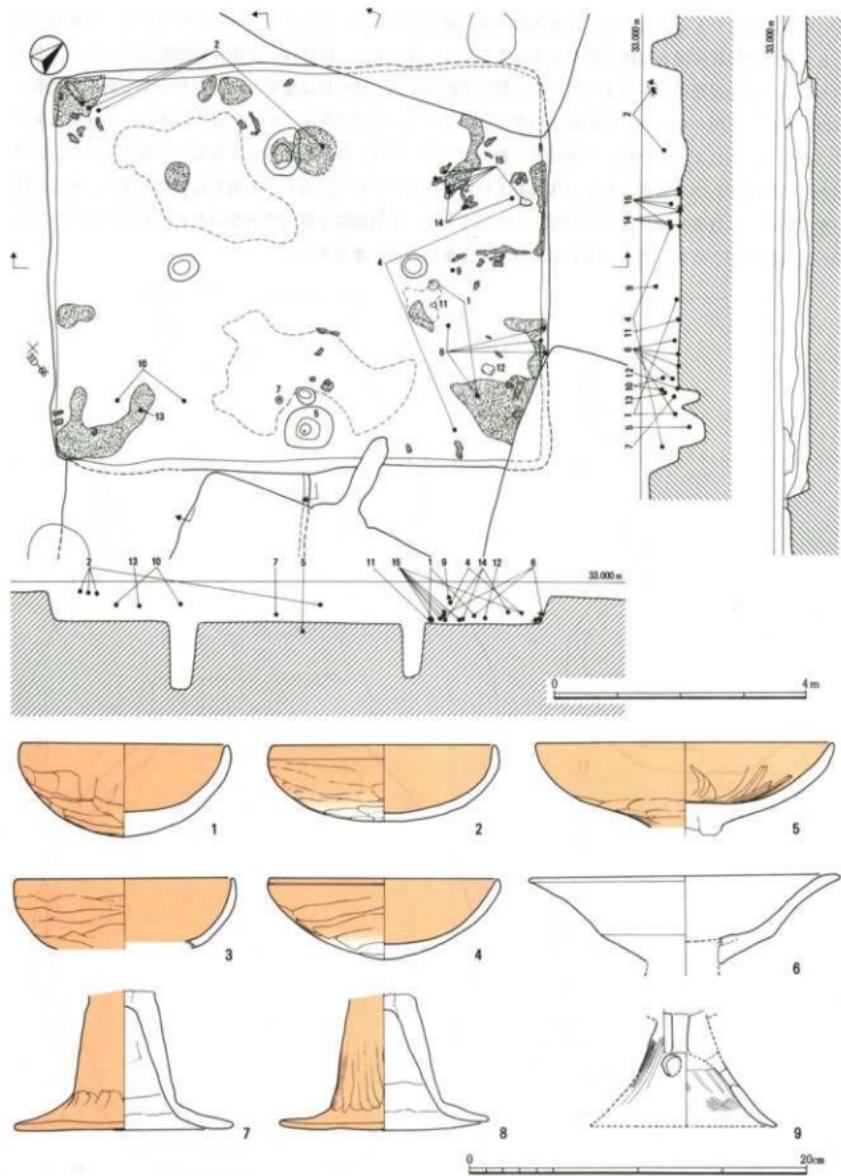
なお22の器台は「連絡誌」に掲載された8の土器にあたるが、「連絡誌」掲載時に混乱があったようで、土器本体には「008」という重複する遺物番号が注記されていた。またほぼ完形にもかかわらず、遺物取り上げ図面や記録写真からも個体を特定できず、結局出土位置すらはっきりしない。しかしあつて「連絡誌」にS I 19出土として掲載されたという経緯に基づいて、S I 19の出土資料として報告することにした。22はかなり肉厚な器台で、脚部内面を除いて赤色塗彩を施す。脚部内面をヘラ削りで調整する以外は、入念なヘラミガキ調整で仕上げている。

豎穴住居S I 21（第56・57・87図、図版10・23・24）

調査地中央部の数軒の豎穴住居が密集する、3D-46を中心に位置する。住居の北・東・南隅が奈良・平安時代の豎穴住居と重複している。南東壁の一部にはおそらく同時代と思われる豎穴住居S I 23とともに重複し、覆土断面の観察結果ではS I 21が新しい。調査条件としてはよくなかったが、遺構が45cmほどと比較的深い掘込みだったこともあって、住居の全容はほぼ把握できた。主軸方位はN=50°-Wで、主軸長で6.42m、副軸長は7.90mになり、今回調査したなかでは平面の縦横比がもっとも大きい平面形態の住居になる。柱穴の配置も特異で、住居の長辺で2分した線上に2本あり、深さは1m前後にも達する。そして炉・貯蔵穴・出入り口ピットが住居の短辺を2分したほぼ線上にある。炉が北側に位置し、長径0.80m、短径0.64mで卵形に近い平面形態である。貯蔵穴は南壁際にあり、底面近くから5の土師器高坏部の大形破片が出土した。そして貯蔵穴の住居内側の床面で、出入り口ピットと思われる掘込みを確認した。深さは40cmほどで、ほぼ垂直に掘り込まれている。焼土は住居の四隅に散乱し、炭化材が混じっていた。ただし炭化材は資料が小さく使用部位を特定できるようなものではなかった。覆土は焼土粒・炭化粒を多く含む黒褐色土を主体としていた。

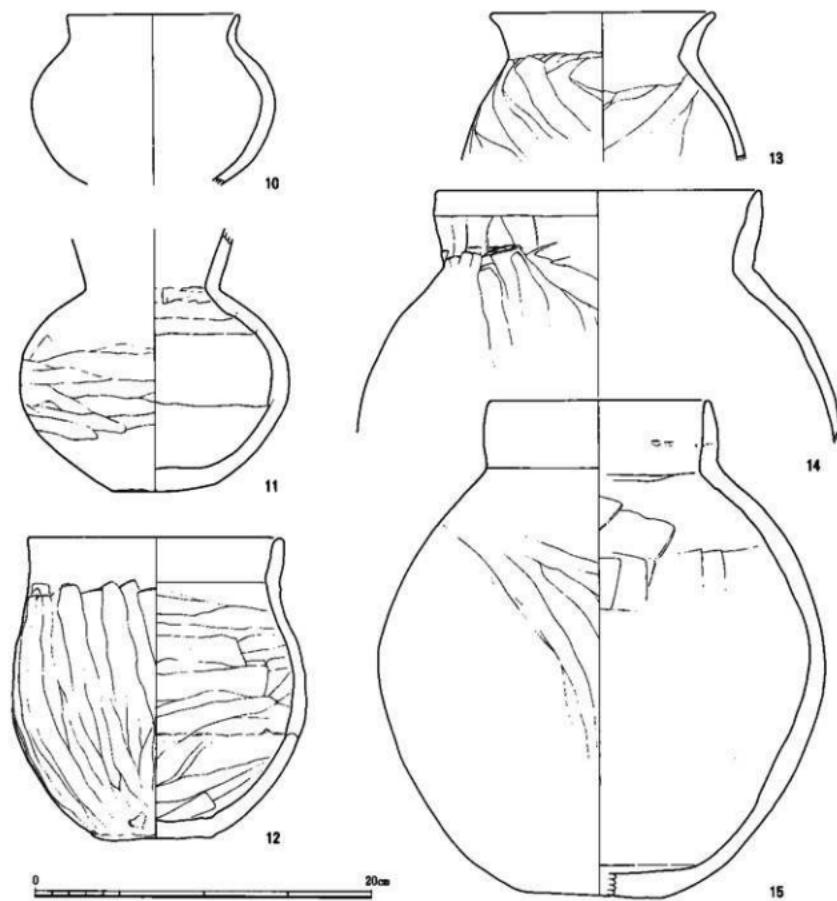
出土土器

土器は住居の北東壁と南東壁の壁に近い床面から多く出土している。器種としても比較的そろっている。1~4は丸底の壺だが、断面をみると2のようにやや扁平なものと、1・4のようにやや尖底気味なもの2者がある。口径は12cm~13cmになる。内外面に赤色塗彩を施すが、3については底面を残さないために不明だが、1では内外の器面全体に赤色塗彩を施し、2・4では体部下半を除く部分に赤色塗彩を施している。2は胎土に粒径2.0mmほどの赤茶色粒を多く含む。5~8は高壺で、5・6が壺部の資料になる。5は体部に丸みがあり、6は逆ハの字状に開き、体部下半には緩やかな稜がある。6は被熱のためか器面が荒れており、とくに内面の下部は瘤痕状になっている。7・8が脚部の資料で、いずれも太い脚柱部に短い裾部がとりつく。外面だけに赤色塗彩を施す。8は5と同一個体の可能性もあるが、破面に接点がなく不明である。9は器台の脚部のみの資料だが、出土状況も住居覆土のかなり浅いところから出土していることもある。遺存状態は極めて悪く、本来S I 21に伴うものではない。円孔透かしは3方向にある。外面は縦方向のミガキ調整で仕上げている。やや薄手の作りである。10・11は赤色塗彩を施した壺である。10は緩やかに肩が張り、口縁部の立ち上がりが低い器形である。底部は欠損しているが、おそらく径の小



第56図 SI21と出土土器（1）

さい平底に復元できるであろう。11は体部中央に最大径があり、体部下半がやや直線的になって底部にいたる。12は体部最大径と口縁部径があまり変わらない鉢である。体部はヘラ削りで調整しているが、工具の入れはじめを器面にめり込ませている。被熱痕跡はない。13~15は壺で、13がやや小型である。頸部から斜め下にヘラ削りを行う。口唇部は肉厚に作ってある。14は体部上半だけの資料である。口縁部上半をヨコナデし、それより下を粗いヘラ削りで整えている。15は、体部が2分の1程度しか残らないが、口縁部から底部までわかる資料である。体部最大径は中位よりやや下にあり、底面も比較的大きく、重心の低い壺である。口唇部を除けば全体に厚手の土器である。なお部位を特定できないために図示していないが、壺の大型破片が2点あった。いずれも肉厚で、重量感のある壺である。



第57図 SI21出土土器（2）

竪穴住居 S I 23 (第58図、図版25)

竪穴住居 S I 21と竪穴住居 S I 24が重複している隙間に、顔をのぞかせるようにみつかった竪穴住居である。覆土断面の観察の結果、S I 21より古いので古墳時代の竪穴住居とした。遺存状態は悪く、南西側の壁は線で確認しただけで、壁の立ち上がりまでは確認できなかった。北西側の壁は、立ち上がりは確認できたが一部しか残らず、しかも南隅は直径 1 m ほどの搅乱坑で破壊されていた。とりあえず壁がわかる壁間で長さを測ると 3.86 m になる。平面形態が方形であれば、軸長はその数値の前後と考えられる。柱穴等の付属施設は確認できなかった。

出土土器

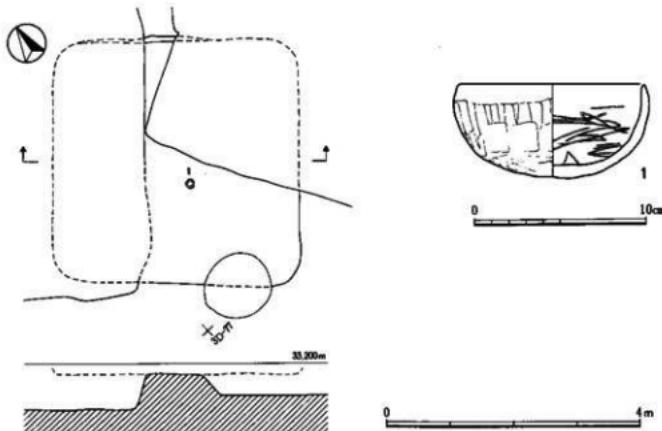
住居中央部で 1 の土師器坏が 1 点出土しただけである。1 は完形で、底面はやや扁平な丸底だが、上面観はかなりいびつである。口縁部はヨコナデしており、わずかな稜がある。体部は横方向のヘラ削りを行っている。ヘラ削りは工具を鋭角に入れてからあまり引きずらないですぐ抜いているために、それが波板状に残っている。器面は荒れており、ざらつき、赤色塗彩を施しているのかどうかもはっきりしない。

竪穴住居 S I 26 (第59・60図、図版11・24・25)

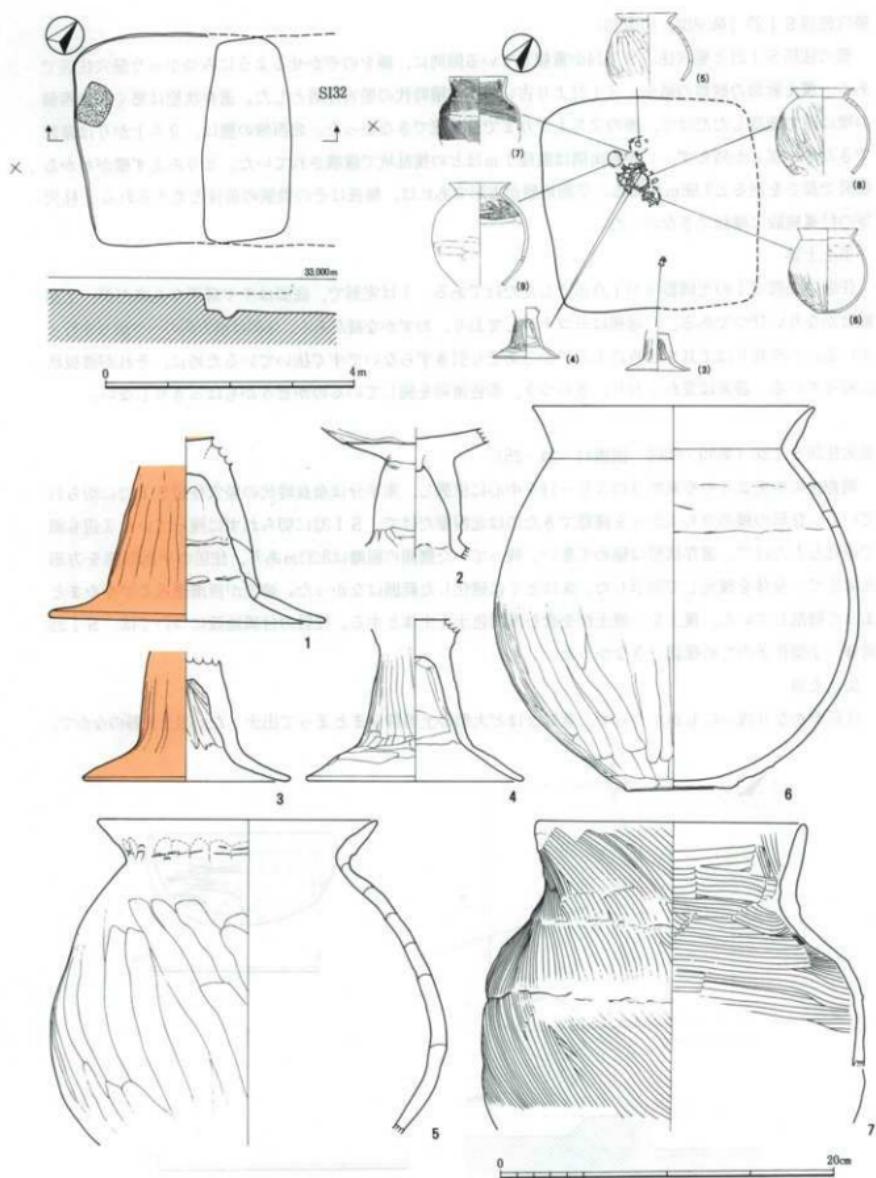
調査地の中央よりやや東寄りの 3 E-11を中心位置し、東半分は奈良時代の竪穴住居 S I 32に切られている。住居の壁の立ち上がりを確認できたのは北西壁だけで、S I 32に切られずに残っていた 2 辺も線で確認しただけで、遺存状態は極めて悪い。残っていた壁間の距離は 3.33 m あり、住居の平面形態を方形と考えて、全体を復元して図示した。床はとくに硬化した範囲はなかった。焼土が西南壁近くでややまとまって散乱していた。覆土を、焼土粒を含む黒褐色土を主体とする。住居の付属施設については、S I 23 同様、小型住居のため確認できなかった。

出土土器

住居がかなり浅いにもかかわらず、意外なほど大型の土器群がまとめて出土した。出土土器のなかで、

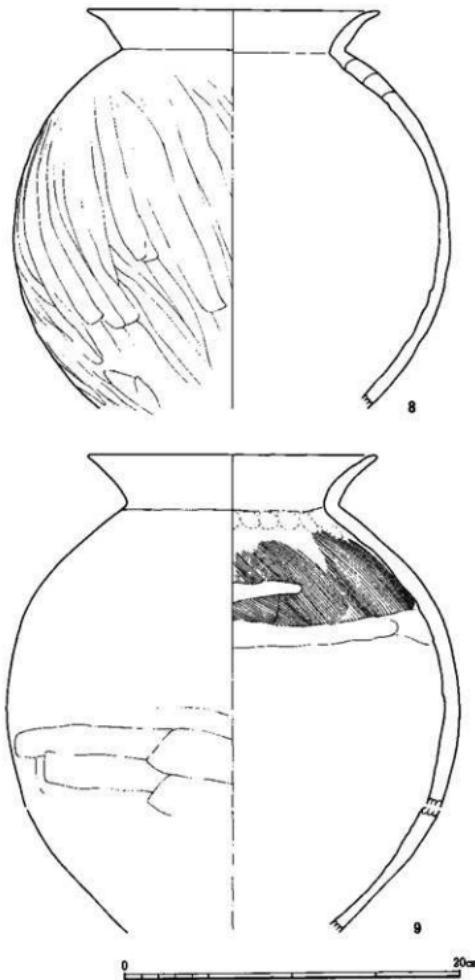


第58図 SI23と出土土器



第59図 SI32と出土土器（1）

小型の器種は高壺のみで、図示していない破片資料でもほとんどが高壺である。1～4が高壺の脚部である。中空の脚柱部はハの字状に開き、裾部との変換点がやや高い位置にあるために、裾部は押しつぶされたようになっている。1がもっとも大型の高壺で、外面には赤色塗彩を施している。2は裾部を欠損しているが、脚柱部はやや丸みを帯び、裾部との境界でくびれ、4点の資料のなかではやや異質である。そしてわずかに残る壺部から、壺部は平らな底面で、後のあたりから角度をもって体部が立ち上がるようであ



第60図 SI26出土土器（2）

る。3は脚柱部内面に、縦に長い断面三角形の腰状痕跡を残す。外面はヘラで削っている。4は坏部との接合部に、断面三角形に粘土紐を付け足して接合を補強している。5から9が壺で、7を除く4点がいずれも口縁部がくの字状に屈曲し、体部はかなり球形である。基本的な調整はヘラで縦もしくは、それに近い斜方向に削っている。ただし遺存状態は必ずしもよくなく、全体のわかる資料は、6の壺だけである。6は体部の最大径が体部のやや下方にある。底部は体部の大きさに比べてかなり薄手を作り、器面は鈍い光沢を放つほど平滑に仕上がっている。胎土に粒径2.0mm～4.0mmの大粒の砂を多く含むのが特徴で、赤色系に焼き上がっている。5・8・9は器形・各部寸法ともかなり似通った土器である。8がもっとも球胴に近く、頸部の屈曲具合がもっともきつい。9は器面の表層がかなり剥落しており、調整痕跡をあまり残していないが、体部中位だけは横方向にヘラで削っている。7は体部の上半しか残らないが、口縁部は直線的に外傾し、肩がやや張る。そして体部中位で直線的になって、下半部でまた屈曲して底部にいたるようである。また肩直下の外面には、成型時の粘土紐接合痕が、帯状に段差で残る。調整方法も他の壺とは異なる。内外面の調整とも単位の粗い刷毛目を使用している。器面は下半にいくにつれ被熱の痕跡を多く留めている。

堅穴住居S I 28・29（第61・87図、図版11・25・28）

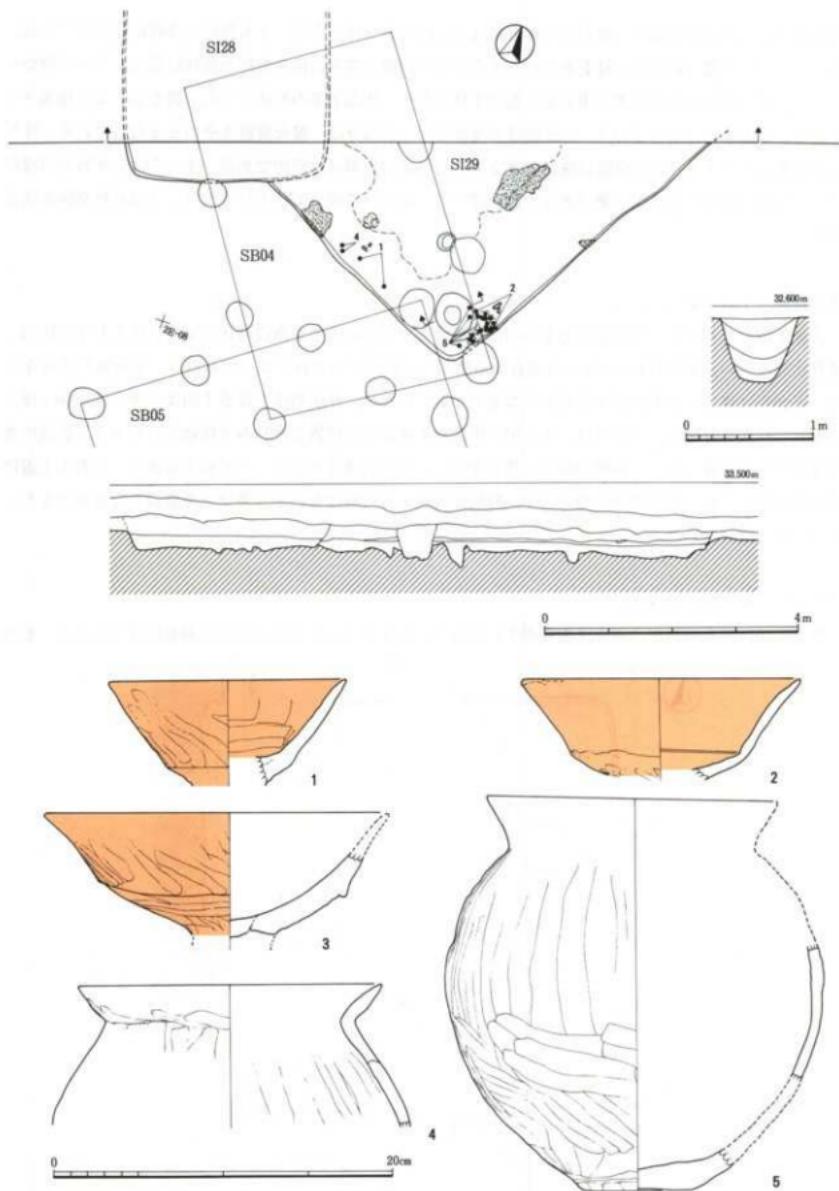
調査地中央より東よりの調査区の境界にまたがっており、2D-89を中心位置する。S I 28・29は重複しており、調査区境界線上の覆土断面を観察した結果、S I 28がS I 29を切っていることが判明した。ただしS I 28はほとんどが調査区域外になり、出土資料もほとんどなく、時期決定はむずかしい。S I 28の規模が小さく、壁溝もないことから、S I 23・26と同様の住居形態とみなして当該期に含めた。なお2軒の住居にはさらに奈良・平安時代の掘立柱建物S B04・05が重複し、S B04の1本の柱穴はS I 28と重なるが、新旧関係までは確認できなかった。

S I 28は壁の1辺長が3.15mで、隅がやや丸みを帯びた方形の住居と推定される。その数値をもとに実際に調査した床面積を算出すると、全体の20%ほどになる。住居の深さは調査区境界の覆土の断面ではおよそ30cmあるが、実際の調査ではわずかな立ち上がりしか確認していない。また住居の西隅についてはS I 29の覆土に粉れて判然としなかった。住居の軸方位は南壁で、N-70°-Eになる。

S I 29は住居の南隅を調査しただけなので、全体の規模は不明である。ただし柱穴が規則的に配置されていたと仮定すると、東壁の5.4mという長さがほぼ住居の1辺長になるであろう。南東壁辺での方位は、N-30°-Eになる。住居の深さは10cm～15cmしかない。内部施設には、住居南隅に貯蔵穴、そしてそのやや中央寄りに主柱穴を1本調査した。貯蔵穴は長軸66cm、副軸60cmと円形に近い。深さは55cmほどやや深いのが特徴である。主柱穴はS B04の柱穴と接する。柱穴の径は30cm内外で、深さは60cmほどある。住居覆土は黒褐色土を主体にレンズ状に堆積し、上層には山砂を含む。床は主柱穴に囲まれた範囲で硬化し、焼土が3か所に散乱していた。

出土土器

図示した土器は、おもにS I 29の南隅の貯蔵穴周辺から出土したものである。器種は高壺と壺である。1～3が高壺壞部の資料である。いずれも赤色塗彩を施し、3だけは外面に塗彩痕跡がある。口径には大小があるが、深さにそれほど出入りがないので、口径が小さいものほど深く、口径の大きいものは浅いといえよう。いずれも細部まで平滑に仕上げていないので、作りそのものは雑な印象をうける。1は体部が



第61図 SI28・29と出土土器

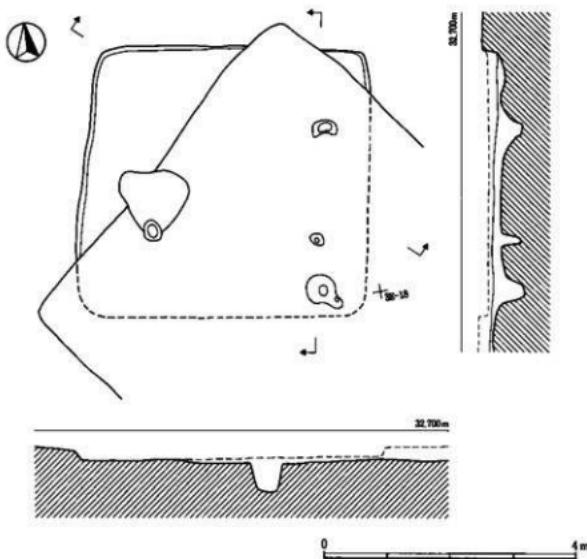
直線的に逆ハの字状に開き、脚部との接合部近くに緩やかな稜を作る。2も体部が直線的に逆ハの字状に開く。やはり下部に緩やかな稲があり、ちょうどその内側の高さに接合痕跡が筋状に残る。3は下側からみると、脚部のとりつく位置が中心をかなりずれており、体部下半の形状が左右で異なる。また体部下半の稜は、生地を付け足しており、ヘラ削りの及ばなかった部分は、接合痕跡をそのまま残している。坏部内面はかなり黒ずみ、塗彩痕跡は確認できない。内外面の色調は対照的である。4・5はいずれも口縁部がぐの字状に外反する球脇の壺である。器面は内外ともヘラで削って仕上げており、5は被熱痕跡を顕著に残す。

堅穴住居 S I 31 (第62図)

調査地中央より東よりの3E-05を中心位置する。住居の大半を奈良時代の堅穴住居S I 04に切られ、遺存状態は悪い。東西長4.56mという遺存する壁長が、住居の一辺長になるであろう。北西隅が鈍角なので、平面形は隅にやや丸みがある台形になるのかもしれない。住居の深さはS I 04より少し浅い16cmほどになる。柱穴と貯蔵穴については、S I 04の床面除去後に相当位置で掘込みを確認したものを平面図に書き加えたが、確証はない。規模が小さい住居なので、内部の施設がなかった可能性もある。なお出土遺物は土師器の小片が10数点出土しただけで、時期を特定する材料はないが、カマドを煮設した痕跡がなかったので当該期に含めた。

3C-40 (第63図、図版25)

3C-40は調査地西部の調査区境界線上に位置し、グリッドの3分の2以上が調査区域外になる。その

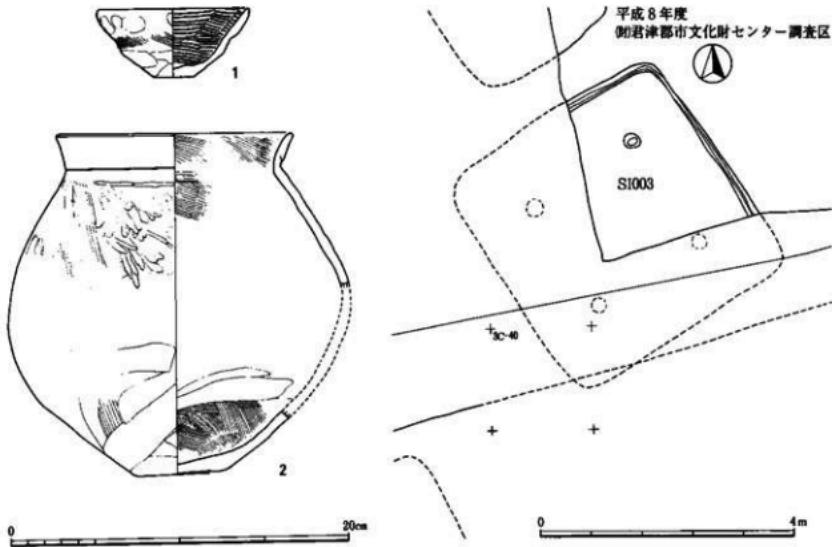


第62図 S I 31

狭い調査範囲から、単独の出土資料とするには保存状態がかなり良好な資料が出土している。正確な出土状態等は不明なもの、後述するように遺構出土の可能性も捨てきれないで、以下の解説を付して報告しておく。図示した出土資料はいずれも遺存状態が50%前後の土師器の壺と手捏土器である。

3C-40の北側は、平成8年度に（財）君津都市文化財センターが発掘調査を実施しており、4軒の竪穴住居を調査したなかで、3C-40にもっとも近いのが竪穴住居S I 003である。以下、「報告」をもとにS I 003の概要を記すと、S I 003は古墳時代前期の竪穴住居で、調査区の西南に位置するために、調査したのは住居の東北隅を中心とした範囲である。報告では調査した床面積を7.9m²とし、それを全体の4分の1程度の面積と見込んでいる。壁の高さは20cm～40cmで、床面はII層の中位から低位にかけて掘り込んでいたようである。また主柱穴に囲まれた範囲の床面が硬化していた。調査範囲には壁溝がめぐることから、壁溝は全周すると推定している。主柱穴は住居北東隅に1本あり、深さを65cmとする。住居中央部から、土師器の壺・鉢・壺・高壺などがやまとまって出土した。

以上を踏まえて、S I 003の規模をどう見込むかで、3C-40出土遺物の評価は分かれる。「報告」ではS I 003の調査面積を全体の4分の1程度と見込みながらも、範囲までは図示していないので想像の域を出ないが、調査面積を7.9m²とし、それを全体の約4分の1と見込めば、総面積は計算上31.6m²になる。さらに住居を正方形の平面形態と想定すれば、1辺長を5.6m前後に想定していたことになる。その数値を検証するために図示したのが、第63図である。図示にあたっては、平面形態は単純に正方形とした。南の主柱穴の位置を調査区の境界を越えた至近に想定し、柱間距離をもとに残りの主柱穴の位置を決定した。また壁の位置については、北の主柱穴との位置関係をもとに想定した。その結果、住居の1辺長は4.8m前後になる。先の数値よりずいぶん少ないが、これは炉・出入り口ピットの位置までは考慮に入れていない



第63図 3C-40出土土器

いからである。調査した範囲では炉の痕跡も確認していないので、炉はさらに西寄りにあったことになる。そこで炉の位置を調査区の境界を越えた、住居中軸線上の対向位置に想定して、炉の主軸を住居の中軸線にみなして壁からの距離を折り返すと、1辺長が5.5mになる。先の1辺長5.62m前後という数値を説明することができる。

以上から判断して、住居の推定範囲を少なく見積もっても、住居の南隅の一部は3C-40にかかる。住居の構成要素をさらに加味すると、住居の輪郭はさらに広く3C-40へのびて、出土した壺・壠がS I 003に帰属する可能性もあることを指摘しておきたい。

出土土器

1は手捏の壺で、口縁部内側は粗い刷毛目調整、外面はヘラ削りを主体に調整し、口縁部だけ指頭で押さえながら仕上げている。作りは粗く、器面に調整の凹凸が顕著に認められる。2は球胴型の壺で、体部上半までは丸みを帯びるが、下半は直線的に底部にいたる。口縁部は折り返している。ミガキ調整の及ばなかった部分には刷毛目調整が残る。全体に薄手である。また体部下半には被熱痕跡が顕著で、煤が付着し、器面も赤化している。

第5節 奈良・平安時代

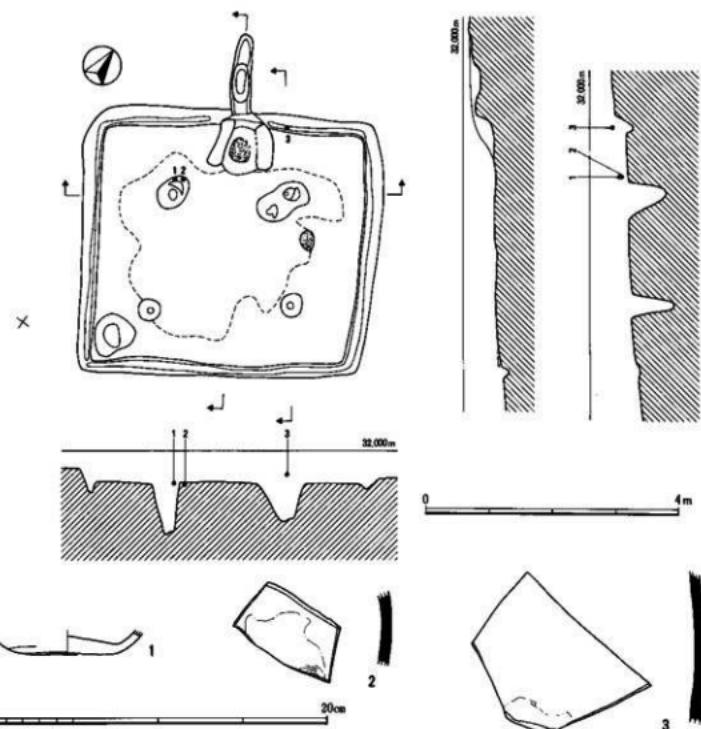
調査地のほぼ全域に遺構が広がっている。遺構には竪穴住居に加えて掘立柱建物もあり、一部では重複もしている。なお『連絡誌』では掘立柱建物の8棟のうち6棟を古墳時代後期とし、平安時代・中世を各1棟ずつとする。しかし古墳時代後期の遺構・遺物がほとんどないなかで、古墳時代の集落景観からいえば、あまりにも掘立柱建物の占有率が高すぎるというくらいがある。少なくともSB03は奈良・平安時代の竪穴住居S I 07より新しいことが重複関係ではっきりしている。この1棟を平安時代と考えたのかもしれないが、SB03の柱筋の延長線上に位置するSB02もほぼ同時期と考えなければならないだろう。さらにこれらと似た建築方位をもつSB04・SB05・SB07も奈良・平安時代の掘立柱建物と考えてよいだろう。これら以外の主軸方位が異なる建物については帰属時期を特定する根拠はもちあわせないが、ここではとりあえず奈良・平安時代に含めて報告することとする。

なお隣接地を調査した(財)君津都市文化財センターの調査成果でも、奈良・平安時代の竪穴住居を調査しているので、古墳時代の集落同様、集落はさらに北側の山裾平坦部まで広がるのである。

竪穴住居S I 01(第64・87図、図版3・28)

調査地の南東部の3F-15を中心に位置する。主軸方位はN-32°-Wである。主軸長は4.18m、副軸長は4.68mで、東西にやや長い。東隅の角度が鈍角なので、平面形態はいくぶん台形になる。また緩斜面に位置するためか、南側の壁は立ち上がりを消滅するが、床面自体も傾斜に沿って緩やかに傾斜していた。住居の北側での深さは20cmほどになる。そして主柱穴に開まれた範囲を中心に床が硬化していた。主柱穴は4本あり、ほぼ住居の対角線上に配置している。北の主柱穴はさらに隣接して内側にもさらに掘方の輪郭があり、8の字状の輪郭を描く。あるいは柱の建て替え等の痕跡かもしれないが、他の柱穴ではみられなかった痕跡である。深さは60cm~80cmで、比較的掘込みの深い柱穴である。住居南隅には貯蔵穴と考えられる掘込みがあった。最大径65cmのやや不定型な掘込みで、深さは32cmほどである。

カマドは北西壁のほぼ中央に設置されており、煙道部が長いのが特徴で、1.22mも壁の外へのびる。比



第64図 SI01と出土土器・転用硯

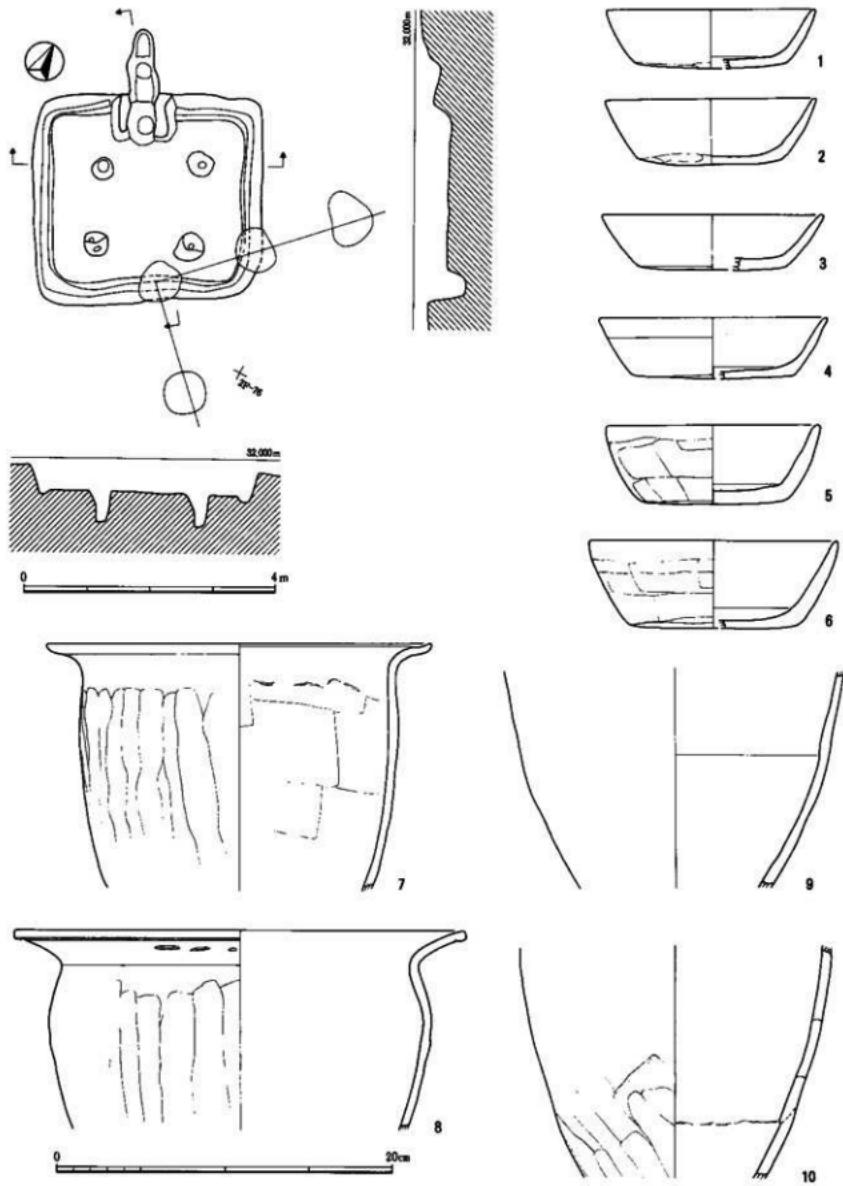
較的保存状態はよく、両袖も確認できた。袖部は山砂と黄褐色粘土を混合して構築材としていた。火床部には焼土がマドの機能を停止するにあたって、カマド周辺も含めてかなり整理した様子がうかがえる。壁溝はやや幅広く、カマドを除いて全周していた。住居覆土は住居の保存状態がよくなかったこともあって、黒褐色土の1層が堆積していった。カマドは比較的保存状態はよかったにもかかわらず土器等の出土遺物がほとんどなかった。

出土土器

出土遺物は少なく、個体を形作るものはなかった。1は非ロクロで成形した土器器坏の底部の資料である。底面と体部の境がはっきりしており、底面をその円周に沿って、手持ちヘラ削りで細かく調整したものである。底面中央の器壁がやや厚くなる。2・3は須恵器壺の破片を利用した、いわゆる転用硯と考えられる資料である。墨痕はかなり淡くなっている。

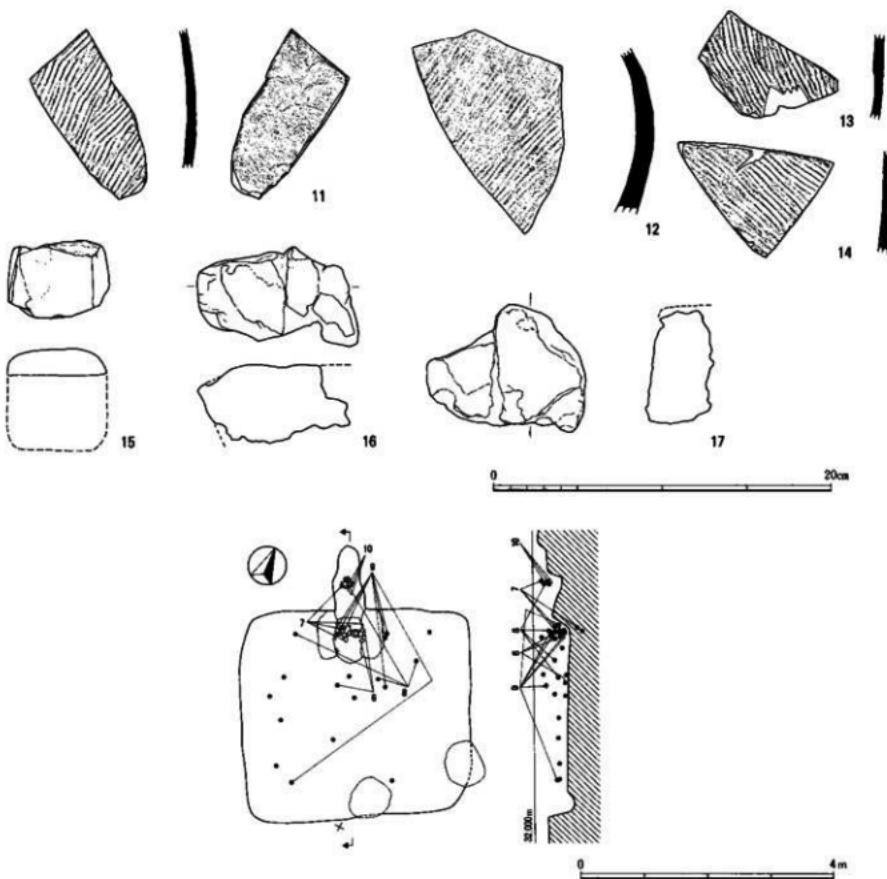
豎穴住居 S I 02 (第65・66・87図、図版3・25・28)

調査地東部の2F-64を中心位置し、SB02の2本の柱穴と重複するが、新旧関係は不明である。主軸方位はN-29°-Wになる。主軸長は3.31m、副軸長が3.63mで、豎穴住居SI01同様、東西方向がや



第65図 SI02と出土土器

や長く、各隅はかなり丸みを帯びる。住居の深さは40cmほどで、床面自体もほぼ水平になっていた。主柱穴は4本で、住居のはば対角線上に配置してあった。柱穴掘方の直径は30cm~50cmで、大小で若干の開きがある。深さは40cm~50cmになる。壁の直下には溝の幅広い壁溝が、カマドを除いて全周していた。カマドは北壁のはば中央より西側に設置されており、SI 01同様に煙道部が住居外に長くのびる。この煙道部からは13・14・15の壺の破片が出土しており、煙道部の補強に使用されたと考えられなくもない。しかし煙道部全体から出土しているわけではないし、13・14の接合資料がカマド内や住居内にも散乱していることから、住居廃棄時の土器の投棄行為に間わる可能性のほうが強い。カマドの両袖は比較的保存状態がよく、袖の内側が被熱して硬化しているのを確認できた。また袖は基礎部分に山砂を含む黒褐色土を使用し、



第66図 SI 02出土須恵器・土師器

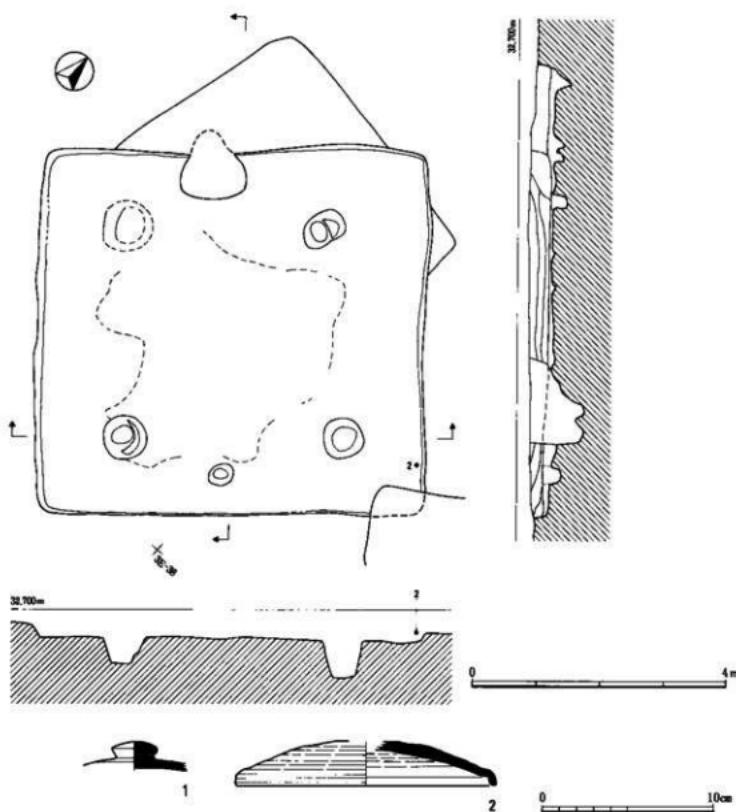
その上に山砂と黄褐色土を混合して袖部分を構築していた。左袖の内側から8の土製支脚の破片が出土した。なおS I 01でみられた貯蔵穴は、この住居には敷設されていなかった。覆土のはほとんどが黒褐色土のみで、分層できなかったことから自然堆積の可能性がある。

出土土器・土製品

比較的多くの土器がカマドを中心に出土した。土師器壺を6点図示した。2・5がカマド内から出土した壺である。口径は6が14.6cmになる以外は、12.0cm~13.0cmに大体おさまる。これらは大きく径高指数から2種類に分けられる。1~4の径高指数は31以下になる。それにたいして5・6の径高指数は35を超える。5・6は作りも深く、体部の立ち上がりもやや急になる。また1~4が比較的薄手に作るのに対しして、5・6はやや厚手という違いもある。いずれも内面に暗文は確認できないし、他の破片資料でも暗文のある例は確認できなかった。7~10が長胴壺で、7は寸胴に近く、口縁部は直角に近く屈曲する。8の口縁部はくの字状に屈曲し、体部最大径が体部のかなり上方にある形態である。9・10は壺の体部下半の資料である。10がカマドの煙道部から出土したものである。7はカマド内と煙道部から出土したもののが接合した。11~14は比較的大型な須恵器の破片資料を図示したが、図示したものも含めて須恵器の破片資料はおよそ90点出土した。破片の湾曲が少ないとから、いずれもかなり大型の壺の破片資料のようである。大別すると、硬質に焼き締めたものと胎土に砂粒を多く含む軟質なものとがあり、前者は64点、後者は26点であった。図示した資料はいずれも硬質の資料である。外面に平行叩き目があり、内側には同心円の細かい筋がある。當て具で押された痕跡を残す。平行叩き目には叩き板の形状から最低でも2種類ある。つまり叩き目を水平にみた場合、叩き板の木理が平行目にたいして右下がりになると、左下がりになるとの2種類を観察できた。軟質の須恵器壺の破片資料は、内外とも器面も荒れており観察しにくいが、少なくとも外面は平行叩き目で成形されている。15~17は土製品で、15は方柱状の土製支脚の一部と思われる。ただ断面には粘板岩にみられるような節理を観察でき、あるいは砂岩に似た石材を加工したものかもしれない。雲母粒を含む。17・18は本来の形狀のごく部分のため全体の形狀はよくわからないが、一部に面取は残る。やはり断面に節理らしきものが確認できる。いずれもカマド内から出土した。

堅穴住居S I 04（第67図、図版4）

調査地東部の中央よりの3E-16を中心に位置し、住居の北側が古墳時代の堅穴住居S I 31と重複する。東隅のごく一部も堅穴住居S I 05と重複するが、新旧関係は不明である。主軸方位はN-40°-Wである。主軸長は5.68m、副軸長が6.11mで、副軸のほうがやや長い堅穴住居で、今回調査したなかでは大型の部類に属す。住居の深さは15cm~20cmで、搅乱も多く保存状態はさほどよくなかった。主柱穴は住居のほぼ対角線上に4本配置してあったが、西の主柱穴は搅乱されてほとんど残っていなかった。柱穴掘方の直径は60~70cmで、北・南の主柱穴で底面の掘方が2段になっていた。深さは50cm~60cmである。東・南主柱穴のほぼ中央に出入り口ピットと思われるピットを確認した。径は主柱穴より小さく40cmほどで、深さも40cmほどしかない。ピットの掘込みはほぼ垂直である。壁溝はなかった。カマドは北西壁のほぼ中央よりやや西側に設置されており、煙道部は重複する堅穴住居S I 31の覆土に粉れて不明だが、カマド自体の遺存状態はよくなかったためにカマド構造は不明だが、覆土に山砂を含む層があるから山砂を主体とした構築材であったのであろう。床面は、搅乱のために寸断しているが、ほぼ主柱穴に囲まれた範囲が硬化していた範囲になる。覆土は山砂と焼土粒の含有度の違いから3層程度に分層したが、黒褐色土が主体である。



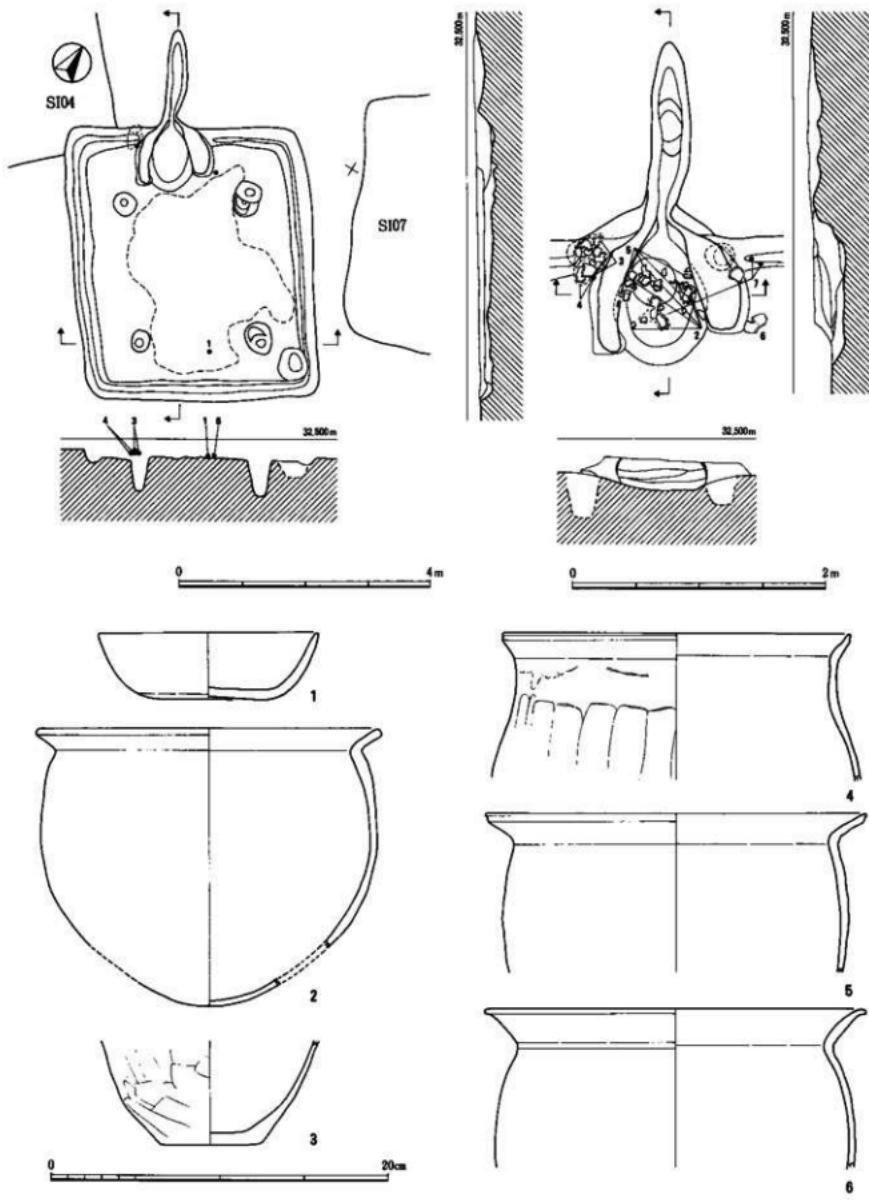
第67図 SI04と出土土器

出土土器

出土したものがほとんど長胴壺の破片資料だったために、それらについては図示できなかった。1・2は須恵器の蓋だが、同一個体ではない。1は扁平なつまみ部分である。灰白色で、白色粒を少し含む。2は推定口径が15.2cmになる蓋である。天井部外側だけを回転ヘラ削りで調整し、口縁端部を低く折り返している。また10点ほど暗文を施した土師器壊の破片資料があった。暗文はいずれも放射状暗文で斜格子暗文は認められなかった。

堅穴住居 S I 05 (第68・69図、図版4)

調査地東部のやや中央より3E-19を中心位置する。先述のS I 04と重複するが、新旧関係は不明である。また堅穴住居S I 07とは隣接する。主軸方位はN-37°-Wになる。主軸長は4.28m、副軸長が3.80mと主軸長方向に長く、住居の各隅が直角でないためにやや平行四辺形になる堅穴住居である。住居



第68図 SI05と出土土器

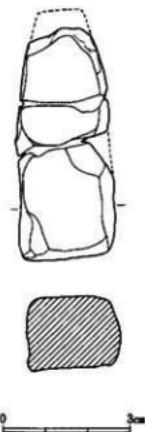
の深さは10cm～20cmであった。主柱穴は住居のはば対角線上に4本配置してあったが、北柱穴は柱を据ええたためか柱穴掘方の輪郭が重複して8の字状になっていた。柱穴掘方の直径は35cm～50cmで、東主柱穴で底面が2段掘りになっていた。深さは50cm～80cmになる。住居東隅に貯蔵穴と思われる掘込みを確認した。長径53cm、深さ30cmで掘り鉢状になっていた。壁溝はカマドを除く四周に、幅広くめぐる。カマドは北西壁のはば中央のやや西寄りに設置されており、素掘りの煙道部は住居外に150cmも長くのびていた。カマドは比較的保存状態が良好で、両袖の内側が熱をうけて赤変していた。両袖はカマド構築材である山砂と黄褐色粘土に黒褐色土を混ぜた土を袖の基礎にして、その上に山砂と黄褐色粘土で袖を構築してあった。なおカマドの掘方では、両袖の付け根部分に左右にそれぞれ1基ずつピットを穿っていた。これらのピットがカマドの構造とどう関係するのかは不明である。二つのピットは左側が深さ28cm、右側が12cmほどになる。カマドの周囲や火床部から多くの土器片が出土したが、土器以外にも7の方柱状の土製支脚がほぼ中央から横倒しになって出土した。床は主柱穴に囲まれた範囲を中心に硬化していた。覆土は住居が浅いこともあって焼土粒・山砂を少し含む黒褐色土の1層だけであった。

出土土器

土器はカマド及びその周辺から集中して出土した。1は在地の土器とは胎土が異なり、搬入された坏である。器面に赤色塗装を施しているが、器面の傷みがひどく痕跡程度にしか残っていないのでとくに図示しなかった。底面、及びその周辺は回転ヘラ削りを行っている。口径は13.0cmで、やや小振りな部類に属す。2は丸底の壺で、これはいわゆる「畿内産土器師」とよばれる搬入品である。約5分の1程度しか残っていない。短い口縁部はくの字状に外傾し、体部は湾曲しながら砲弾状の底部にいたる。口縁部端部は面取をしてある。被熱で内外面の器面がかなり荒れているために、調整痕跡はほとんど観察できないが、刷毛目調整はもともとなかったのか、完全に消してしまったのかのいずれかであろう。胎土には砂粒と雲母粒を含む。色調は本来灰白色系だったのだろうが、被熱した分だけ赤み（橙色系）がとして淡橙色が強くなっている。カマド内に散乱して出土した。3は底部の残る長胴壺で、底部近くは斜め方向のヘラ削りを行っている。4から6は口縁部の残る長胴壺で、5・6は口縁部がくの字状に外傾し、口縁端部の処理で異なる。4の口縁部は一端直立してから、斜めに外傾する。体部はいずれも縦方向のヘラ削りである。4はカマドの左脇、5がカマド内、6がカマドの右脇からそれぞれ出土した。7は完形に近い、先端がやや先細りする方柱状の土製支脚である。摩滅したためか面取の角はかなり丸みを帯びている。カマド内から出土した。重量は270gになる。

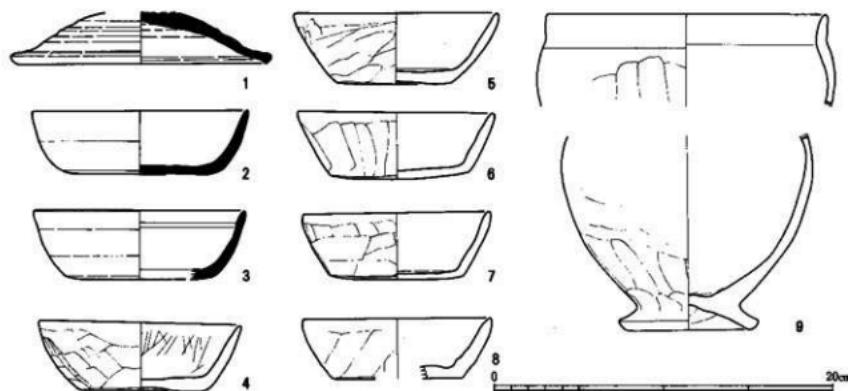
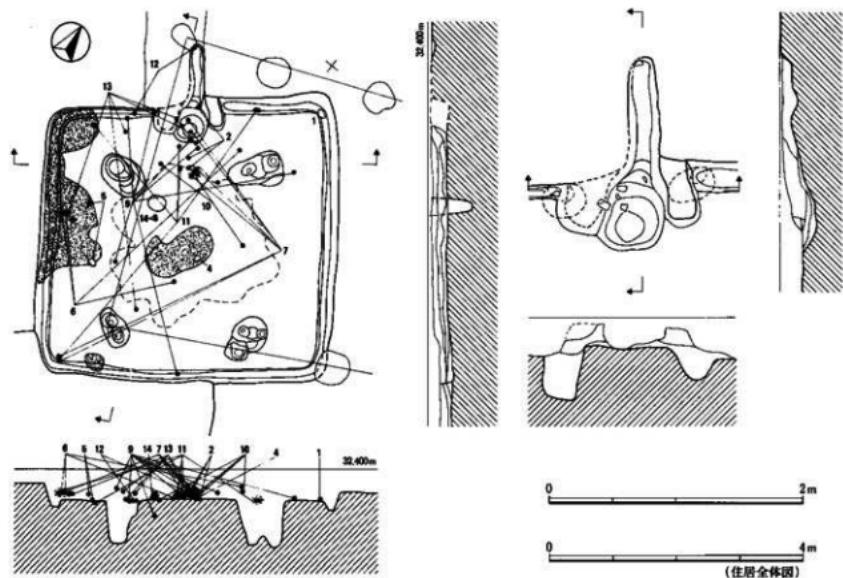
堅穴住居S I 06 (第70・71・87図、図版4・25・28)

調査地東部の2F-70を中心に位置する。後述する堅穴住居S I 07と重複するが、覆土断面を観察した結果では、S I 06がS I 07を切っていることになっている。また掘立柱建物S B 08とも重複するものの、新旧関係は不明である。カマド周辺を中心に擾乱をうけており、遺構の保存状態は決してよくない。主軸方位はN-35°-Wになる。主軸長は北壁がカマドの左右で食い違うために差が出る。長いほうで4.50m、



第69図 SI05出土土製品

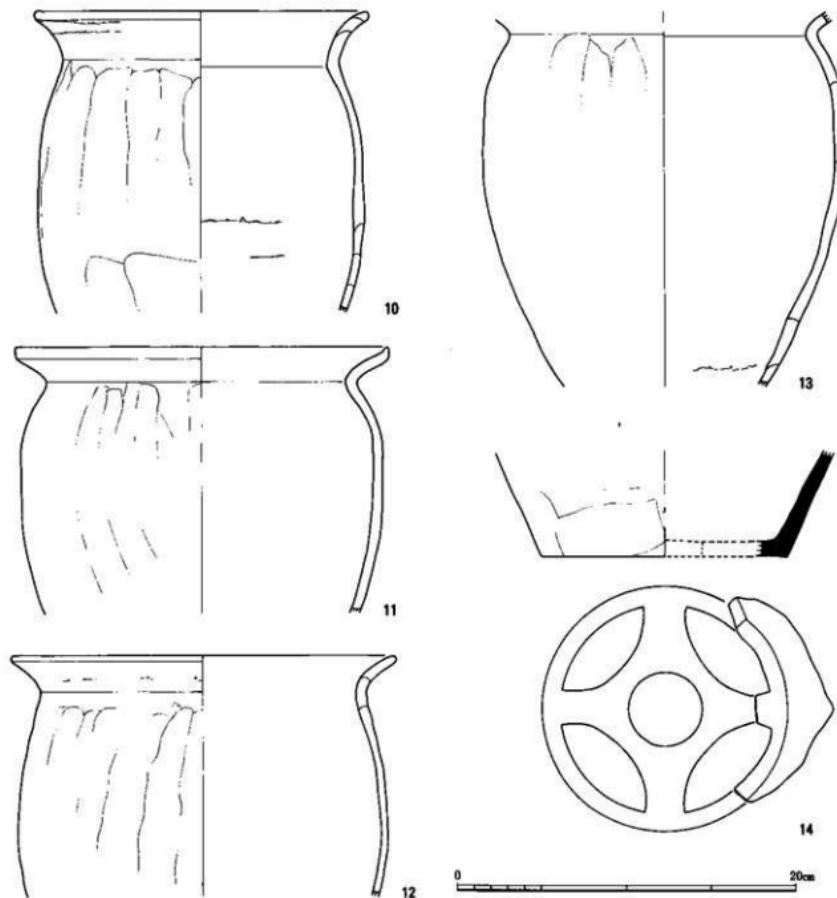
短いほうで4.28mになる。副軸長は4.76mになり、いくぶん副軸方向に長い竪穴住居で、各隅は丸みを帯びる。住居の深さは15cm~25cmでやや浅い。主柱穴は住居のほぼ対角線上に4本配置してあったが、いずれも掘方に中段を設けるなど複雑な断面形態で、北柱穴列については柱穴の掘方が重なっているようにもみえ、あるいは柱の建て替えを行っているのかもしれない。さらに南列の主柱穴2本はSB08の柱穴とも重なり、遺構ごとの掘込みがわからなかったので、図示した以上に複雑な掘方である。柱穴掘方の直径



第70図 SI06と出土土器（1）

は45cm~90cmで、柱穴によって直径の大小が顕著である。深さは50cm~70cmになる。壁溝はカマドを除く四周にめぐる。カマドは北西壁のほぼ中央に設置されていたが、カマドの左半分が搅乱されていた。かろうじて搅乱を免れた煙道部は、煙道が住居外へ85cmほど細長くのびる形態であった。左袖はほとんど搅乱をうけていたが、基底部は遺存していた。両袖はカマド構築材である山砂と黄褐色粘土で構築されていた。なお堅穴住居SI05のカマド同様、両袖の付け根部分に左右にそれぞれ1基ずつのピットが穿たれていた。左側のピットが18cmとやや深いが、右側の深さは10cmほどになる。

床は主柱穴に囲まれた範囲を中心に硬化しており、住居の西側半分の床面上に焼土が散乱していた。覆土はロームブロックと焼土粒を含む黒褐色土が主体であった。



第71図 SI06出土土器（2）

出土土器

土器類はカマド周辺と住居西側から比較的多くの土器が出土したが、個々の破片資料の多くは住居内に散乱して出土している。1は須恵器蓋で約2分の1遺存するが、つまみ部分を欠損する。口径15.4cmで、口縁端部の立ち上がりは低く、断面を三角形に整えている。灰白色で、口縁端部に重ね焼きの痕跡を残す。なお同一個体と思われる破片資料がS I 01からも出土している。2・3は須恵器坏で、いずれも口径が12cm前後、器高は4cm前後と似通っており、底面外周を回転ヘラ削りするのも共通する。底面の調整は3ではわからないが、2では回転ヘラ削りで調整している。2は被熱して器面が脆弱になっているが、胎土・焼成から永田・不入窯跡群から供給されたものと思われる。3は口縁内面の端部をやや厚手に作り、色調も2より灰白色に近く、細部で相違もあるが、火摺らしき痕跡もあることから、2と同様に永田・不入窯跡群の製品と考えてよいだろう。

4~8が土器器坏で、口径は10.4cmから11.9cmの間にあり、口径指数は8が32になる以外、40前後になる。暗文は4の内面にわずかに斜格子暗文が確認できただけである。しかし図示していない破片資料のなかに斜格子暗文の破片が10点、放射状暗文の破片が2点あった。体部はヘラ削りで調整しているが、4・6の短く削る例もある。9は台付甕である。体部の上半部はかなり薄手で、しかも被熱で傷みがひどく、上半部と下半部とが直接接合しなかつたために上下に分けて図示している。ただ土器自体にゆがみがあるためか、土器の上下で体部の弯曲具合や径にかなり違いがある。短い口縁部は薄手で、直立気味に立ち上がる。脚部は肉厚で、短くハの字状に開く。胎土は比較的緻密で、作りも薄手なことから、南武藏からの搬入品の可能性がある。10~13が長胴甕でいずれも底部を欠損している。口縁部はくの字状に開き、11は端部内側をやや折り返したり、口縁部の屈曲の度合いも個体ごとにやや差がある。13は体部上半に幅2cmほどの帯状の器面がこすれた痕跡があり、それ以下にカマド構築材がこびりついている。なお13はS I 07出土の破片とも接合している。14は須恵器の多孔式の瓶で、遺存部分から推測すると孔は5個になる。同一個体資料では、体部の成形は平行叩き目で行っている。色調は器外面が暗灰色で、断面は橙色になり、胎土には白色砂粒を多く含み、千葉市域産の須恵器に似る。

豎穴住居 S I 07 (第72・87図、図版5・28)

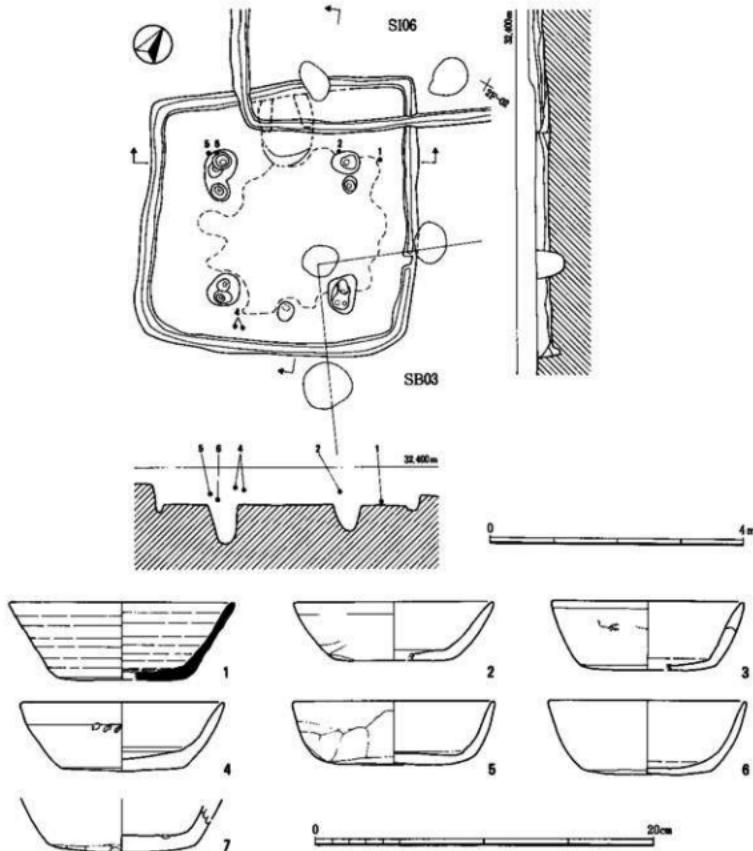
住居北側の一部が先述の豎穴住居 S I 06と重複し、2F-91を中心位置する。また掘立柱建物 S B 03の柱穴2本とも重複する。住居の覆土断面にS B 03の柱穴の断面を確認できたので、S B 03がS I 07より新しいことになる。主軸方位はN-31°-Wになる。主軸長は4.18m、副軸長は4.31mになり、S I 06同様、副軸長方向にやや長い豎穴住居である。南西壁にたいして北東壁がやや長いために、いくぶんいびつになっている。南側の各隅はかなり丸みを帯びる。住居の深さは25cm~30cmで、S I 06の床面とほぼ同一レベルになる。主柱穴は基本的には住居のほぼ対角線上の4本配置になるが、西主柱穴では柱穴の掘方と底面が柱穴2本分あり、輪郭も8の字状になる。北主柱穴では2本の柱穴が独立し、南側の柱穴も掘方の輪郭には現れていないが、柱穴2本分の掘方になっていた。4本の主柱穴すべてが建て替えた痕跡をとどめているといえるのかもしれない。したがって掘方の直径にかなりばらつきがあり、深さも45cm~75cmとかなり開きがある。またカマドの対向壁近くに、出入り口ピット思われる深さ35cmほどのピットを1本確認した。掘込みは住居の外に向かってやや斜めになっていた。壁溝は北東壁で途切れるものの、住居内をほぼ全周する。カマドは北西壁のほぼ中央に設置されていたが、そのほとんどがS I 06の床下に潜り込ん

でいるために保存状態は極めて悪く、火床部は一部しか確認できず、両袖もその痕跡を確認しただけである。床は主柱穴に囲まれた範囲を中心に硬化していた。住居覆土は黒褐色土を主体とし、上層に炭化粒を含み、下層にローム粒を含んでいた。

なお調査時に掘方部分を堅穴住居SI30としていたが、住居とする積極的な根拠がないために欠番とした。7の土器器坏はそのSI30出土として取り上げた資料である。

出土土器

土器類は住居全体から散漫に出土した。図示できたのは壺類だけである。カマドがSI06と重複するためか、壺類の破片は少量しか出土せず、形にもならなかった。1は須恵器の壺で、底面は回転ヘラ切りによって切り離している。胎土には白色砂粒を多く含み、粒径3.0mmほどの白色礫を少し含む。色調は灰白色で、常総地域の製品の可能性がある。2～7は土器器坏だが、暗文を施したものはない。他の破片資料



第72図 SI07と出土土器

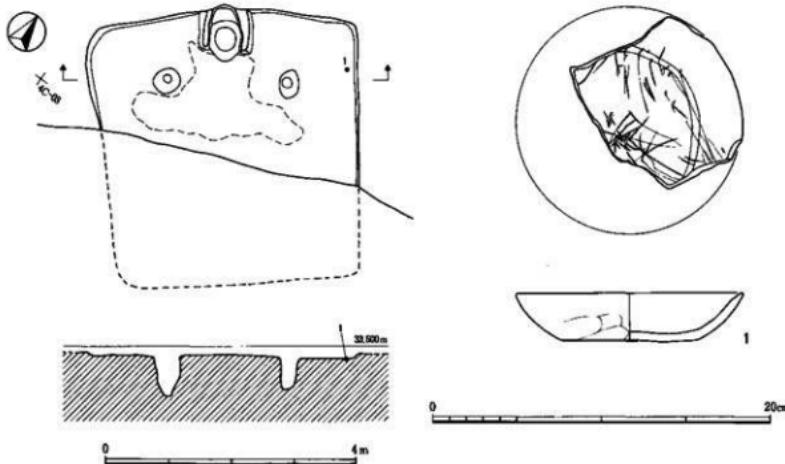
のなかにも暗文をもつ資料はなかった。いずれも底の接地面積が大きく平底化しており、体部と底部の境も比較的明瞭になっている。口径は11.2cm～11.8cmの間で、径高指数は2が29になる以外は、32～38で体部の立ち上がりが直立気味になっている。7はS I 30出土とする土師器坏である。やはり平底化しており、底面は丁寧にヘラ削りをして平滑に仕上げてある。坏の様相としては、いわゆる上総型坏の最終段階に近いものと思われる。

堅穴住居 S I 11 (第73図、図版6)

調査地の西部、当該期の堅穴住居としてはもっとも西に単独で位置し、3C-96を中心とする。住居南側の大半が道路によってすでに削平され、保存状態は悪かった。また台地そのものが道路に向かって緩やかに傾斜しているために、北側では住居の深さは10cmほどあったのが、南側では5cmほどしかなかった。主軸方位はN-37°-Wになる。副軸長は4.28mで、おそらく副軸長方向に長い平面形態と思われる。北側の2隅は丸みをもちながらカマドに向かってやや開き気味である。主柱穴は2本を確認したが、住居内の位置としては対角線上に配置されていたものであろう。大きさは長径で45cmほど、深さは西主柱穴で50cm、東柱穴で65cmになる。整溝は確認できなかった。カマドは北西壁のほぼ中央に設置されていたが、煙道は住居内にはほぼおさまる。カマド構築材が黒褐色土と黄褐色粘土の混合土という住居の覆土と紛れやすい土だったために、袖の細かい部分についてはよくわからなかった。床はカマドの前から住居中央にかけた範囲が硬化していた。住居の覆土は薄かったが、黒褐色土に焼土粒を含んでいた。

出土土器

住居が浅く、しかも住居の約半分を欠失しているために、遺物は出土量そのものが少なかった。1は底部内面を中心に暗文状の浅い筋が刻まれている。ただ文様というよりは、無作為な施文という印象をうける。推定口径13.2cm、径高指数は22で、体部が大きく開く形状である。図示した以外に斜格子暗文をもつ



第73図 SI11と出土土器

土師器片が2点出土した。

豊穴住居 S I 15 (第74図、図版 8・25)

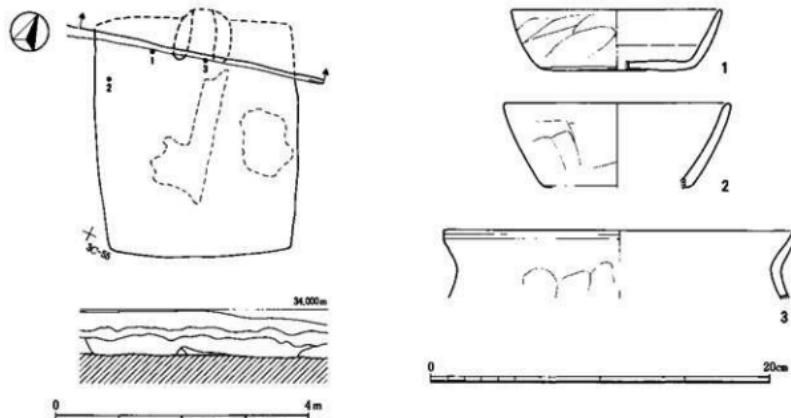
調査地西部の調査区境界にまたがり、住居北側が調査区域外になる。3C-45を中心位置する。その北側隣接地は(財)君津都市文化財センターが調査を実施しているが、そこではS I 15の延長部分がみつかっていないから、住居の北側部分はそこまでの間で完結することになる。主軸長は推定で3.80m、副軸長は3.16mで、主軸方向に長い長方形の豊穴住居である。主軸方位はN-31°-Wである。住居の平面は、壁の立ち上がりを確認できなかったので、床の残存範囲で確定した。ただし調査区境界の断面では、20cm前後の住居の掘込みを確認した。床の硬化範囲も、遺存していた範囲でしかなく、本来はもう少し広く硬化範囲は広がっていたのであろう。柱穴・整溝とも確認できなかった。カマドはほとんどが調査区域外になり、わずかに両袖の先端部を確認したにすぎないために、詳細は不明である。住居覆土は山砂と焼土粒を含む黒褐色土である。

出土土器

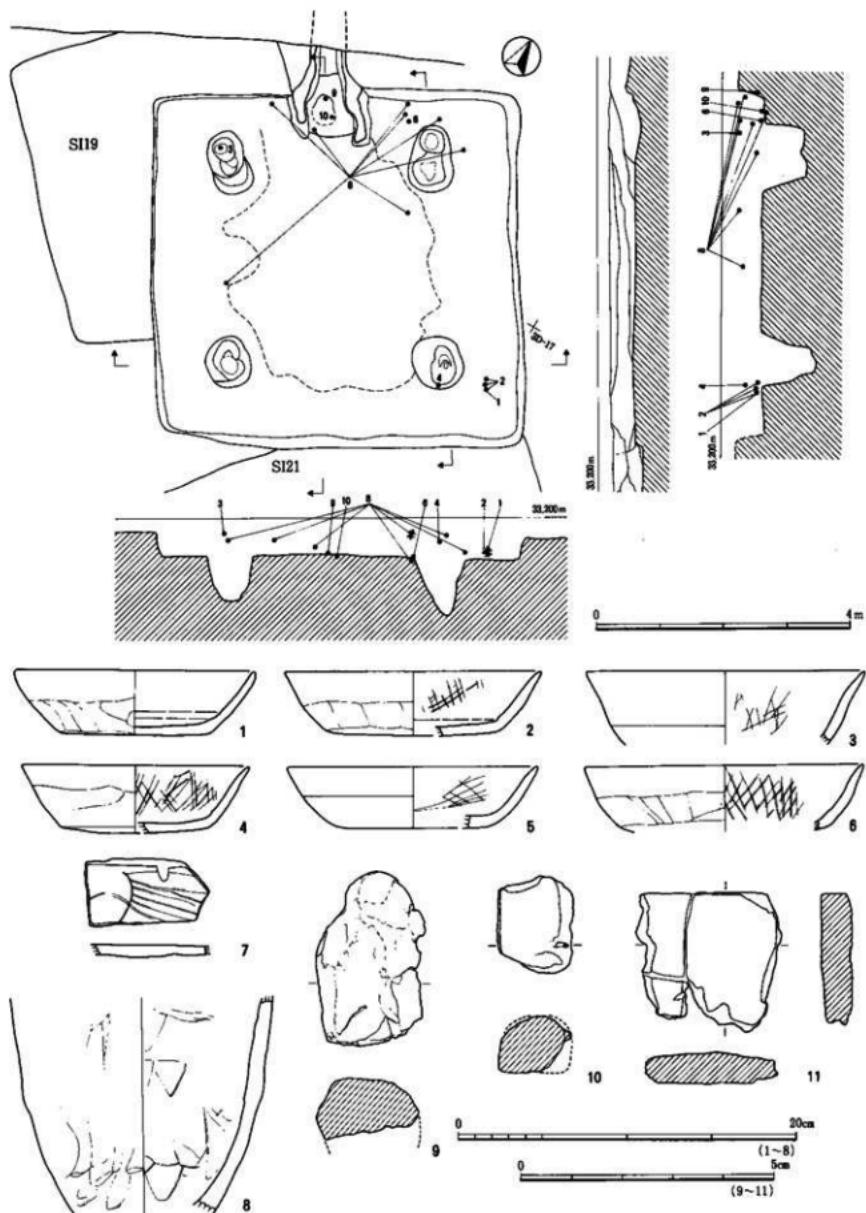
出土した土器は少ない。図示した資料はいずれも調査区の境界近くから出土した。1・2は暗文のない壺で、作りは1が浅めで、2が深めになる。体部外面はいずれも煤が吸着している。3は長胴壺の口縁部の資料である。口縁はやや緩やかにくの字状に屈曲する。口縁端部はつまみ上げて、断面では鋭角をなしている。

豊穴住居 S I 20 (第75・87図、図版 8・28)

調査地のほぼ中央、3D-15を中心とし、古墳時代の豊穴住居 S I 19と豊穴住居 S I 21と重複する。カマドの煙道部が調査区域外になるが、住居の全容はほぼ把握できた。主軸方位はN-31°-Wになる。主軸長5.54m、副軸長は5.80mで、副軸方向にやや長い平面形態である。今回報告する住居のなかでは、大



第74図 SI15と出土土器



第75図 SI20と出土土器・土製品

型の部類に属す。住居の深さは45cmほどである。主柱穴は4本を住居の対角線上に配置していた。北側2本の主柱穴は底面が2か所ずつあるような掘方で、掘方が南北方向に間延びし、その長さは100cm前後になる。南側2本の主柱穴は長径で85cmほどで、やや不定型な円形の掘方である。深さは65cm~100cmと不揃いである。北側の主柱穴は、その輪郭からあるいは建て替えた痕跡になるかもしれない。カマドは北西壁のほぼ中央に設置されていた。煙道の大半が調査区域外になるために詳しいことはよく分からぬが、少なくとも住居の北壁より外へ60cmのびているのは確かなので、煙道部を住居外に長くのばす形態のカマドなのであろう。カマドの両袖のうち、左袖は外側に崩壊しており、右袖により遺存状態は悪い。カマド底面より10cmほどせり上がった面に、赤変した火床面があった。カマド構築材には山砂と黄褐色粘土を混合して使用していた。なお両袖下の掘方にそれぞれピットが穿たれており、右側のピットは35cmと深く、左のピットは5cmほどの深さであった。床はカマド前面から主柱穴に囲まれた広い範囲で硬化していた。なおカマド内から9・10の土製支脚が出土した。壁溝は確認できなかった。住居の覆土はローム粒・焼土粒・炭化粒を含む黒褐色土が、上層から下層まで堆積していた。

なおS I 20の掘方精査時に、住居の輪郭より一回り小さい範囲で段差があったのを住居と認定して竪穴住居S I 34としていたが、住居とする積極的な根拠がなく、出土遺物も特になかったので、今回の報告にあたって住居番号から除外し、欠番とした。

出土土器・土製品

カマド周辺を中心に土器が出土した。1~6が土師器坏である。底部の残る1・2・4・5では口径は13.3cm~15.2cmで径高指数は30以下で、口径に比べて高さが4cm前後と低い。1を除いて、内面に斜格子暗文がある。だらしとろけるような胎土のために摩滅し、暗文の施文も含めて、調整痕跡はかなり不鮮明である。底面外面は基本的にはヘラ削りで調整するが、6だけヘラ削り後にヘラミガキを加えている。なお図示した以外の小破片に、体部内側に、斜格子暗文の下に螺旋状の暗文を組み合わせて施文している。全体の文様構成から判断すると、底径はかなり大きくなる。裏面には指頭圧痕が残る。また胎土は緻密で、硬質に焼き上げている。これらの特徴は在地産土師器の様相とは異なり、いわゆる畿内産土師器といわれるものに近い。8は長胴壺の体部下半の資料である。全体はヘラ削りで調整しているが、ヘラの削りだしを一端生地にめり込ませて行っている。他の在地産長胴壺に比べて、厚手で硬質に仕上がっている。9・10は土製支脚である。9は本来の面を比較的残しているが、定型的な成形をしているようではない。上面は山状に尖っており、底面はほとんど残っていないが平らに近いと思われ、側面は多角柱状の面取りをしている。いずれの角もかなり丸みを帯びている。胎土にはほとんど砂粒を含んでいないように見える。高さは13.2cmで、重さは419gになる。10は上面と側面の2面が残り、横断面は薄鉢型に近い。砂粒を多く含み、スサ等の圧痕が残る。重量は153gになる。11は板状の土製品で、厚みはもっとも厚いところで3cmある。1面は比較的平滑だが、もう片面には凹凸がある。胎土には微細な砂粒を多く含んでいる。重量は254gになる。一部に焼土やカマド構築材がこびりついている程度で、出土状況にしても積極的に用途を裏付ける材料はないが、カマドの袖の芯にでも使われたものであろうか。

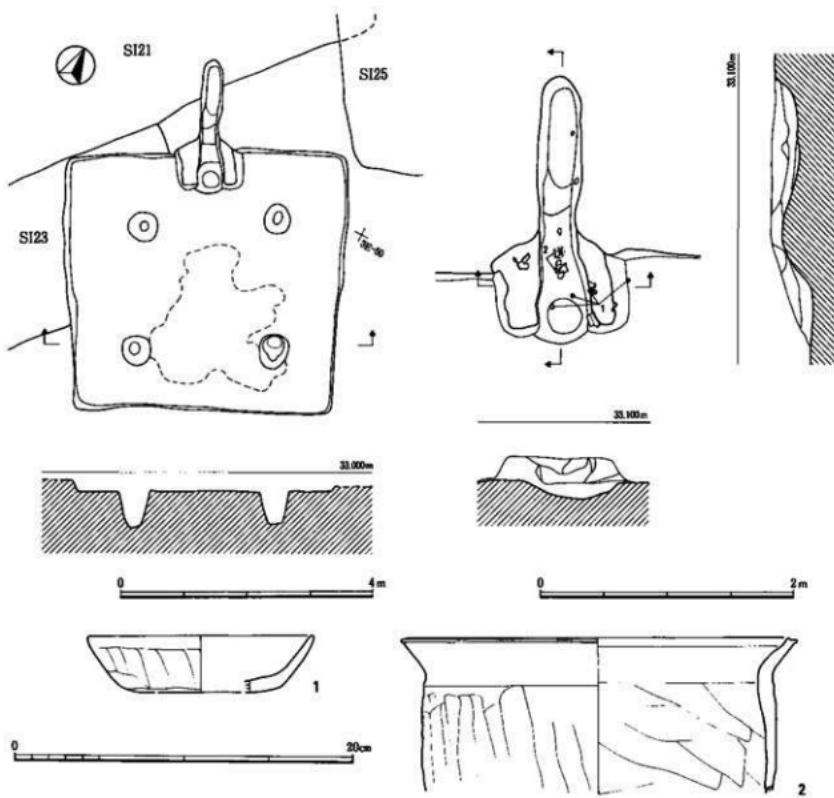
竪穴住居S I 24（第76図、図版10）

調査地のほぼ中央、3D-59を中心位置する。古墳時代の竪穴住居S I 21・S I 23と重複する。主軸

方位はN-26°-Wになる。主軸長3.96m、副軸長は4.33mで、副軸方向にやや長い平面形態で、各隅はほぼ直角に曲がり、平面形態としては整然としている。住居の深さは20cmほどで、やや浅い。主柱穴4本を住居のほぼ対角線上に配置しているが、北側2本の柱位置が壁からやや離れるのにたいして、南側2本はそれより内側にあるのが特徴である。主柱穴の平面形は円形にそろえてあり、径も50cm前後にまとまる。深さはばらつきがあり、50cm~70cmになる。カマドは北西壁のほぼ中央に設置されていた。煙道が住居外に長くのび、およそ140cmの長さになり、先端部にかけて煙道の掘込みが深くなる。両袖は比較的保存状態は良好で、両袖の内側の一部に被熱で赤変した部分があった。袖は黄褐色粘土と山砂を混合して構築材としていた。カマド内からは坏と甕の破片資料が若干出土した程度である。床は住居の南よりの範囲が硬化していた。住居の覆土は山砂・焼土等のカマド崩壊土を含む黒褐色土が主体である。

出土土器

図示したものはいずれもカマド内から出土したものである。1は土師器坏で、口径は13.3cm、径高指数



第76図 SI24と出土土器

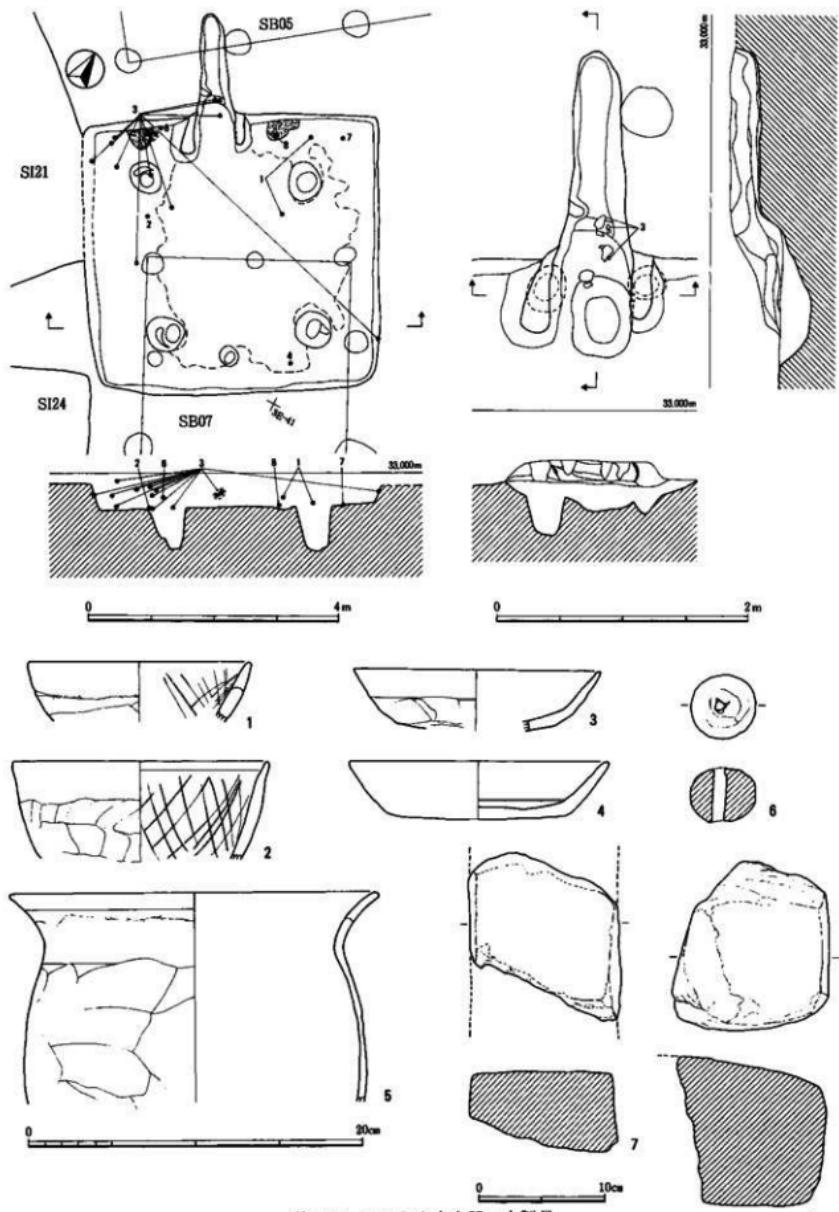
は26になる。やや平べったく、体部は逆八の字状に立ち上がる。細かい砂粒を多く含む。体部は短いヘラ削りで仕上げている。図示した以外に暗文を施した土師器坏の小片が5点出土した。そのうち1点は口縁部内側に稜をもち、体部上半で一端くびれる器形で、緻密な胎土で、硬質に焼き上がっており、いわゆる畿内産土師器のような雰囲気をもつ。2は長胴壺の上半部の資料で、遺存している範囲では体部はかなり直線的である。口縁部はくの字状に開く。口縁端部は内外からつまみ上げながら押しつぶすように成形しているために、両方向から生地がのびて溝状になり、それが端面にくぼみとなってめぐっている。

堅穴住居 S I 25 (第77・87図、図版10・28)

調査地のほぼ中央、3E-30を中心に位置する。古墳時代の堅穴住居S I 21と重複し、堅穴住居S I 24とは住居の隅がほとんど接する位置にある。また掘立柱建物SB 07と重複するが、SB 07の掘方がS I 21の覆土に紛れたために、両者の新旧関係は不明である。主軸方位はN-30°-Wになる。主軸長4.37m、副軸長は4.68mで、副軸方向にやや長い平面形態で、各隅は直角近く曲がる。住居の深さは25cmほどになる。主柱穴は4本を住居のほぼ対角線上に配置するが、S I 24と同様に北側2本の柱位置の壁からの距離が、南側2本はそれよりは短くなる。主柱穴の平面形は円形が基本のようだが、北主柱穴のようにやや長円形になるものもある。径は60cm内外になり、深さは50cm~70cmでやや不統一である。東主柱穴と南主柱穴を結んだ線より壁寄りに入り口ピットと考えられるピットを確認した。深さ24cmで、その断面は壁側には傾斜していなかった。カマドは北西壁の中央よりやや西側に設置されていた。煙道は160cmほど住居外に長くのび、幅も広い。煙道部の底面はほぼ水平で、先端部で直角に近く立ち上がっていた。カマドの両袖の遺存状態はやや良好だが、左袖に比べると右袖の遺存度は悪い。それでも両袖の内側には被熱で赤変した部分を確認できた。袖は黄褐色粘土と山砂の混合土が構築材である。なお両袖付け根の掘方部分で、円形の掘込みを確認した。左側のピットは深さ20cmほどで、右側は浅く15cmほどしかなかった。いずれもピットを掘り込んだ後に暗褐色土で埋め戻して、その上に両袖を構築していた。カマド煙道部からは5の土師器壺の破片が出土したが、接合資料は住居内にも広範囲に散乱していた。なおカマド左側の床面から7・8の面取りのある石製品と思われる資料が出土した。床はカマド前面から主柱穴に囲まれた範囲を中心へ硬化工していた。住居覆土は黒褐色土を主体にレンズ上に堆積していた。

出土土器・石製品・石製品

住居北側のカマドを中心にして土器類が出土した。1~4が土師器坏で、1・3には内面に斜格子暗文がある。1は体部外面に粘土紐接合痕を残す。3は遺存している高さだけでも6.0cmあり、体部も直立氣味に立ち上がり、欠損している底部の作りにてもよるが、箱形に近い壺といえよう。2は体部と底部に明瞭な境がなく、底面の接地面積が小さい。4は体部と底部の境は明瞭で、底面は中心部がやや出っ張る程度である。なお図示した以外に、暗文のある小破片が斜格子暗文で7点、放射状暗文で7点あった。5は長胴壺で口縁部は緩やかにくの字状に屈曲する。口縁部中位に粘土紐接合痕が残る。体部の調整は横方向にヘラで削っている。胎土は砂粒を多く含むが緻密で、胎土・調整とも在地産の壺類とは異なり、いわゆる武藏型の壺の範疇でとらえてよいだろう。6は球を少し押しつぶしたような形の土玉である。穿孔は角張った工具を使用している。穿孔後に、周囲の生地を削り取っている。重量は45gである。7は煉瓦状をした砂粒の塊で、混和剤等は認認できない。おそらく砂岩とか泥岩を素材にしているとは思うので、とりあえず石製品として取り扱う。上下を欠失しているが、側面が3面残り、3面とも平坦に整えてある。重量は



第77図 SI25と出土土器・土製品

871gである。8も素材はほぼ同じと思われるが、砂粒の密度が粗い。図示した位置では3面の側面が平坦面として残っているが、角はかなり丸みを帯びている。重量はかなり重く、1,619gある。7・8とも脆弱な資料なので、何らかの被覆をして使用したと考えられる。カマドの芯等の構築材がもっともふさわしいが、出土位置はカマドの右側の床面近くなので、出土状況からは積極的に裏付けられない。

豊穴住居S I 27 (第78図、図版11)

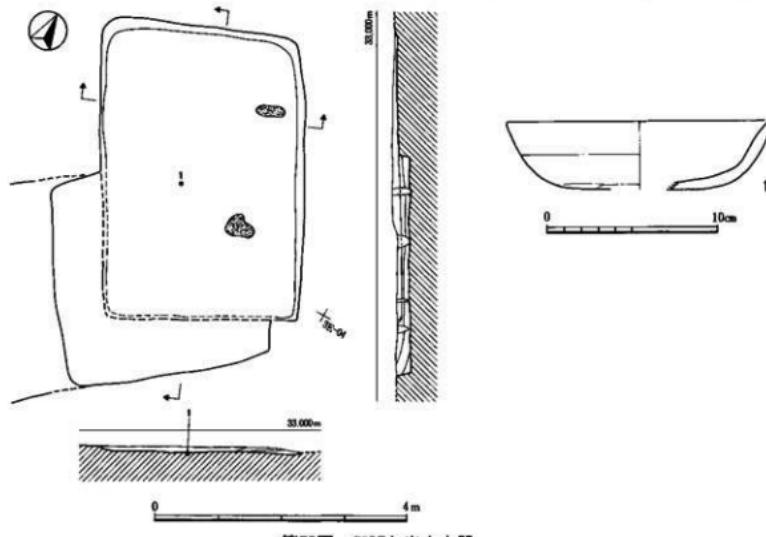
調査地の中央より東より、2E-92を中心位置する。豊穴住居S I 32を切って重複するが、深さは数cmと浅く、断面でその立ち上がりを確認したにすぎない。かろうじて3隅は確認できたので、およその規模は判明した。主軸方位はN-30°-Wで、主軸長4.64m、副軸長は3.22mで、ややいびつな長軸方向に長い平面形態になる。住居内にはカマド・柱穴・豊溝がなく、居住痕跡は希薄であった。なお床面には2か所で焼土が散乱していた。覆土は焼土粒を含む黒褐色土であった。

出土土器

住居ほぼ中央の床面から1の土器壺が1点出土した。推定口径15.5cmで、径高指数は27になる。内面に暗文はないが、体部と底面の境周辺を輪状にミガキを施している。外面の体部と底部の境は丸みがあり、やや不鮮明である。壺では他に斜格子暗文の小破片が2点あった。また図示できなかったが、長胴壺の比較的大きな資料が1点あった。

豊穴住居S I 32 (第79・87図、図版11・28)

調査地のほぼ中央、3E-02を中心に位置し、古墳時代の豊穴住居S I 26と重複し、先述の豊穴住居S I 27に切られる。主軸方位はN-52°-Eになる。主軸長は3.43m、副軸長が3.40mで、ほぼ正方形に近

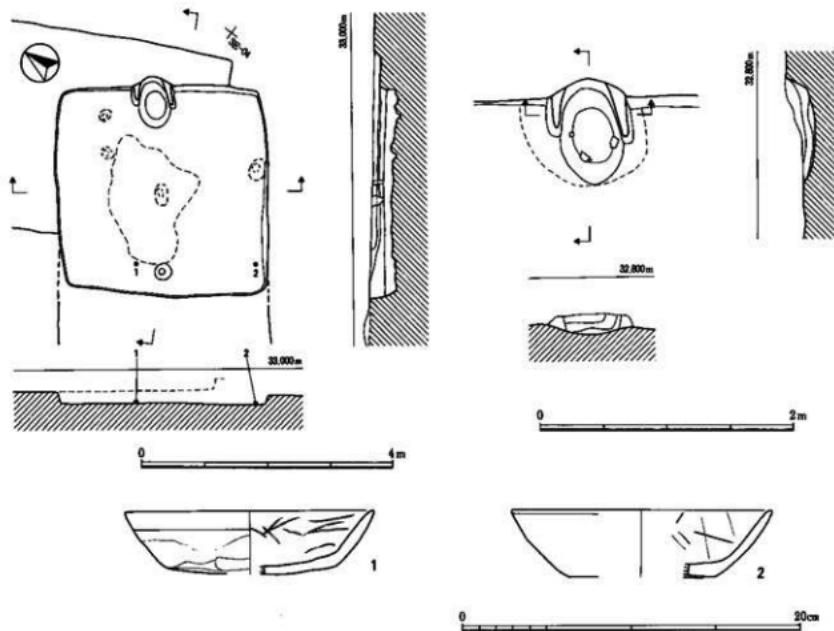


第78図 SI27と出土土器

い平面形態だが、南壁と北壁の長さに差があるってややいびつになっている。住居の深さは12cm~23cmで、比較的浅い竪穴住居になる。床面は主柱穴を据えた痕跡がなく、カマドの対向位置に出入り口ピットと思われる落ち込みを確認しただけである。深さは14cm、径も28cmと小さいが、床面から垂直に掘りくぼめてあった。なお平面図中には住居の掘方精査時に確認した落込みを波線で書き加えてあるが、位置が住居の対角線上でもないので柱穴の可能性は低い。カマドは北東壁に設置されており、他の同時期の竪穴住居のカマドが北西側になるから、やや特異な位置にあるといえよう。煙道部の住居外への掘込みはほとんどなく、両袖の長さも25cm~30cmで、他の住居のカマドに比べると構造的にもやや異質である。袖は黄褐色粘土と山砂の混合土が構築材としていた。床は住居中央を中心に狭い範囲が硬化していた。住居覆土は黒褐色土を主体とする。

出土土器

住居内からはある程度まとまって土器片が出土したが、図示できた資料は土師器壺2点と少ない。1・2はとろける胎土で器面が荒れている。内面に暗文があるがかなり不鮮明で、2の暗文は斜格子と思われるが、1は規則的な暗文ではなさそうである。口径は1が推定14.5cm、2が推定で15.2cmで、2の径がやや大きいが、口径指数はいずれも26と同じになる。他に小破片で暗文のある資料が9点あったが、すべて斜格子暗文の資料である。また図示できなかったが、長胴甕の比較的大きな資料が1点あり、部分的に口縁部と体部が残っていた。遺存している範囲では、体部下半でやや膨らみをもち、在地産の甕であろう。



第79図 SI32と出土土器

掘立柱建物 S B01（第80図、図版12）

調査地のもっとも東端の2G-53を中心に位置する。2間×2間の側柱建物で、柱筋の通りはあまりよくなく、西隅柱の柱位置がかなり南に寄っている。四周が等間の建物だが、南東・西北方向に若干長い建物である。それを主軸に据えて方位を測ると、N-50°-Wになる。桁行は推定の柱位置で3.55m、梁行もほぼ同じ3.50mになる。柱掘方は円形を基調としているが、掘方径にはかなり開きがあり、もっとも小さいもので25cm、もっとも大きいもので64cmになる。深さも不統一で20cm~90cmまである。総じて隅柱が深い。柱穴の埋土は南隅柱で確認しただけだが、黒褐色土が主体で、柱痕跡と思われる周囲はローム粒を多く含む土で充填していた。なお時期を決定できるような土器等の出土遺物はなかった。

掘立柱建物 S B02（第80図、図版12）

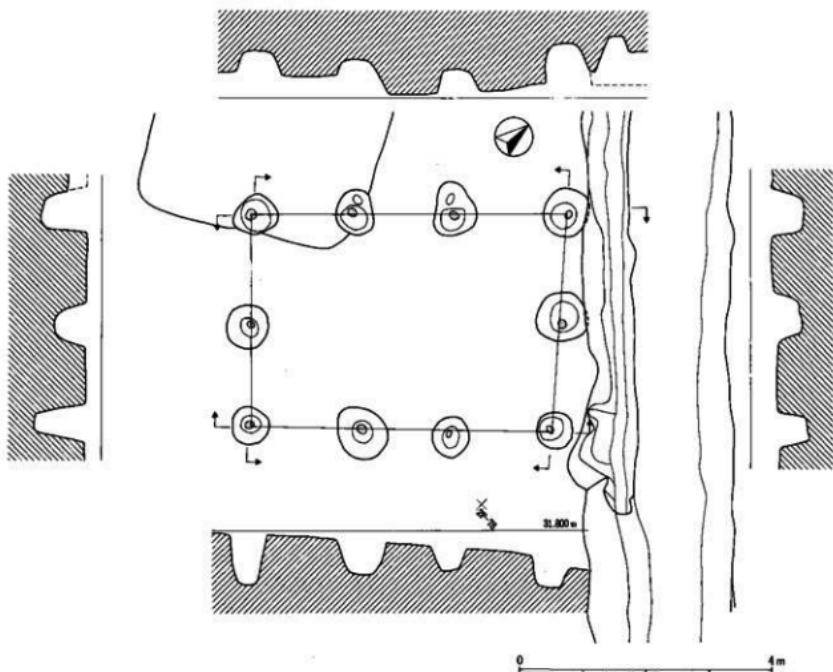
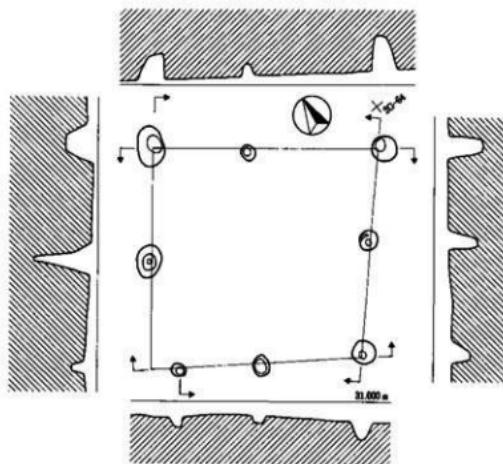
調査地東部の2F-66を中心に位置し、溝S D01に隣接する。2本の柱穴が奈良・平安時代の竪穴住居S I02と重複するが、新旧関係は不明である。2間×3間の側柱建物で、柱筋の通りは整っており、柱配りも整然としている。桁行方位をN-45°-Eにとり、東北・西南方向に長い建物になる。すべての柱穴底面で柱のアタリを確認できたので、その位置から規模を測ると桁行で4.75m、梁行で3.40mになり、桁行の2間目の間尺が他より広い。なお間尺の平均は1.65mになる。柱掘方は円形もしくは長円形で、掘方径は75cm~95cmになる。柱位置による径の大小はないようだが、深さでは隅柱を深くする傾向がある。間柱では40cm~50cmなのに対し、隅柱では80cmほどの深さになっていた。なお時期を決定できるような土器等の出土遺物はなかった。

掘立柱建物 S B03（第81図、図版12）

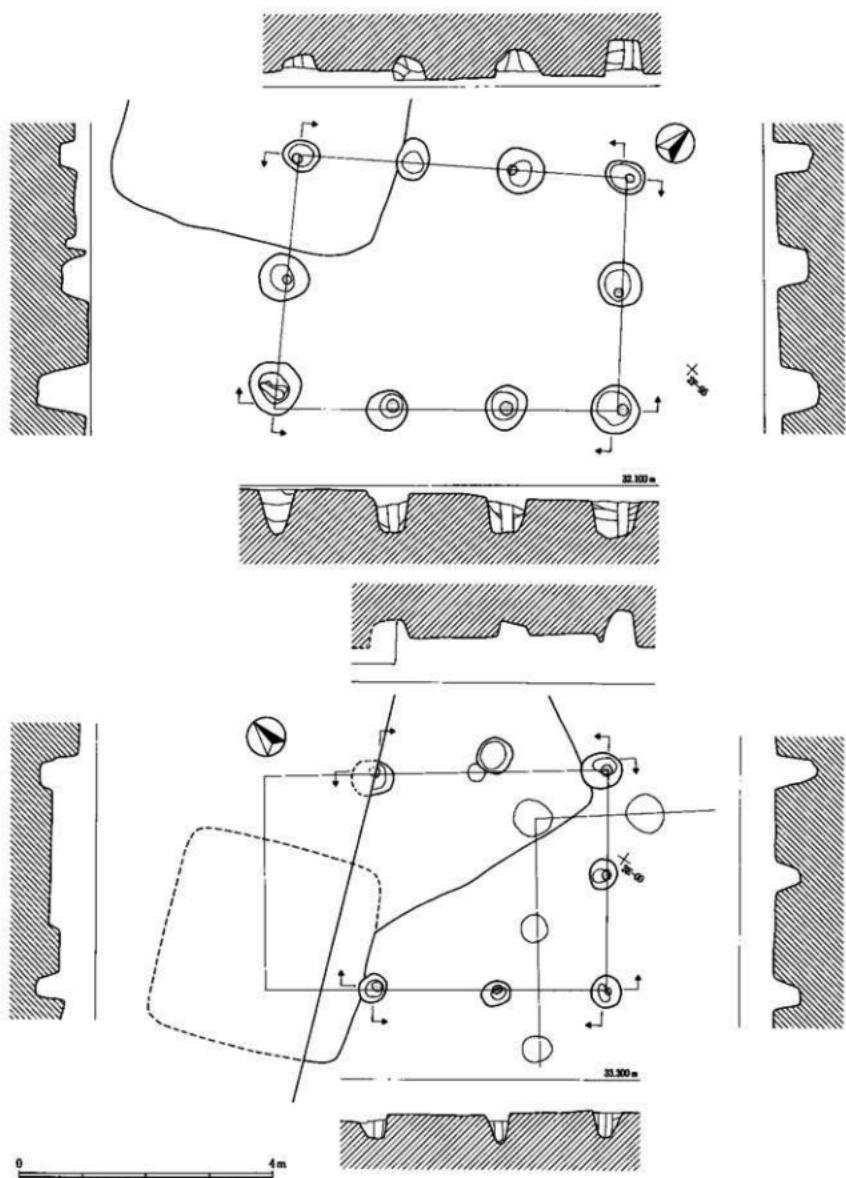
調査地東部の2F-93を中心に位置し、奈良・平安時代の竪穴住居S I07と重複するが、住居覆土の断面にSB03の柱穴の断面が現れていたので、SB03のほうが新しいことになる。桁行方位はN-48°-Eにとり、先述の掘立柱建物SB02とは桁行方向がほぼ一致しており、両者は3.6mの間隔をおいて位置することになる。SB02同様に2間×3間の側柱建物だが、柱筋の通りはやや悪い。ほとんどの柱穴で柱痕跡を確認できたので、そこからの規模を測ると南桁行長で5.48m、北桁行長で5.25m、西梁行長で3.73m、東梁行長で3.62mで、西側の間口がやや広くなる。間尺の平均は1.81mで、SB02より少し長い。柱痕跡は直径17cmほどである。柱掘方は円形もしくは長円形で、掘方径は65cm~85cmになり、柱位置による柱穴径の大小はとくにないようである。深さでは南隅柱が75cmと深い以外は、45cm~65cmの間にわたる。裏込め土はローム粒・ブロックを含む暗褐色土と黒褐色土が混在する。なお出土資料としては奈良・平安時代の土師器片が主体とするが、細かく時期を特定できるほどの出土遺物はなかった。

掘立柱建物 S B04（第81図、図版13）

調査地中央部の調査区域の境界にまたがって、2D-99を中心に位置し、北側の梁行が調査区域外になる。調査した7本の柱穴のうち、4本が古墳時代の竪穴住居S I28・29と重複する。また掘立柱建物SB05とも空間的には重複するが、柱穴どうしが切り合っていないから、両者の新旧関係は不明である。桁行方位はN-34°-Wにとる。2間×3間の南北棟の側柱建物で、柱筋の通りは比較的よい。柱穴のいくつかで柱痕跡ないしは柱のアタリを確認できたが、桁行の一部が調査区域外になるため桁行長の正確な数値



第80図 SB01・SB02



第81図 SB03・SB04

はわからない。間尺を合わせて調査区域外に延長して推定すると、5.40mになる。南梁行長は3.46mである。柱掘方はほぼ円形で、掘方径は45cm~65cmになる。深さは45cm~65cmの間におさまる。なお出土資料としては奈良・平安時代の土師器片を主体とするが、帰属時期を特定できるほどの出土遺物はなかった。

掘立柱建物 S B 05 (第82図、図版13)

調査地のはば中央部、3D-09を中心に位置する。北隅柱の1本が古墳時代の竪穴住居S I 29と重複し、先述したS B 04とは空間的に重複する。桁行方位はN-53°—Eにとる。2間×3間の東西棟の側柱建物で、柱筋は比較的通っている。桁行長は5.45m、梁行長は3.35mで、間尺は平均で1.75mになる。梁行の間尺が桁行に比べて狭いっぽうで、桁行の中央の間をやや広めにとる傾向がある。柱穴のいくつかで柱痕跡ないしは柱のアカリを確認できた。柱痕跡は太いもので18cmほどになる。柱掘方はほぼ円形で、掘方径は45cm~63cmになる。深さは30cm~60cmで、隅柱をやや深くする傾向があるものの、間柱でも深いものがあり一定ではない。柱穴の裏込めは黒褐色土を主体とし、裏込めする際の焼き固めた形跡が比較的顕著であった。なお北隅柱だけに裏込め土と柱痕跡土に山砂を含んでいるのを確認できた。あるいは建物の壁材等が混入したものかもしれないが、他の柱穴では確認していない形跡である。出土資料としては縄文時代から奈良・平安時代にかけての土器片が少量出土しただけで、帰属時期を特定できるほどの資料は出土しなかった。

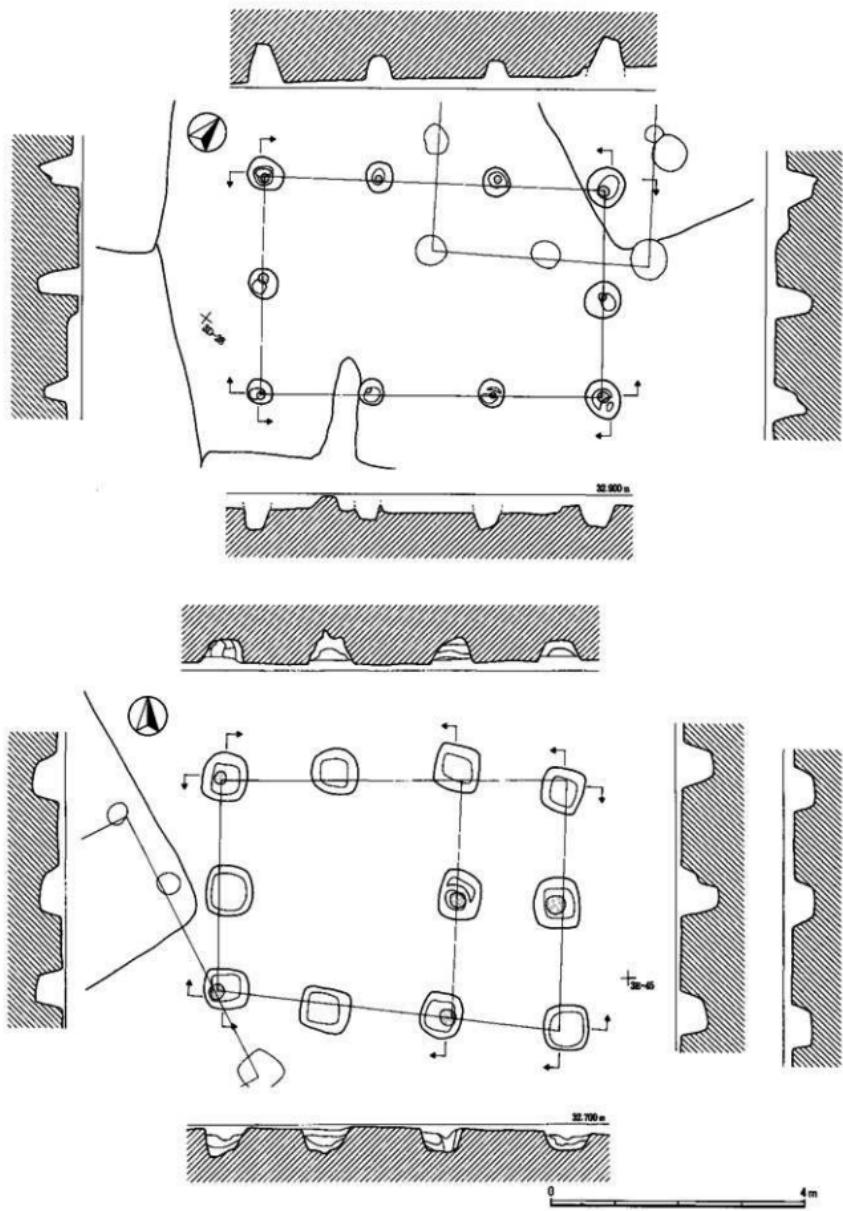
掘立柱建物 S B 06 (第82・87図、図版14・28)

調査地のはば中央部、3E-32を中心に位置する。S B 06は建築方位がほぼ東西南北方向で、柱掘方も方形を基本とし、側柱のなかにさらに柱を1本据えているなど、今回報告する掘立柱建物のなかではやや異質な構造をもつ。なお南東隅柱が掘立柱建物S B 07の1本の柱穴と重複していた。覆土の断ち割りの観察結果ではS B 07がS B 06を切っていることがわかったが、その重複はS B 06の掘方の輪郭を乱すことなく、S B 06の掘方内で重複が完結していた。桁行方位はN-89°—Wで、竪穴住居の方位ともずれている。建物平面は2間×2間の身舎の東側に1間分の庇がとりついたようにもみえる。しかし庇相当部分の柱穴列が他の柱穴掘方の大きさとも遜色なく、他の掘方との形状比較から、ここでは東1間に東柱を据えた2間×3間の東西棟の側柱建物としておく。建物の柱筋の通りは比較的よい。南桁行長5.45m、北桁行長5.50m、東梁行長3.30m、西梁行長3.31mで、間尺は平均で1.74mになり、梁行の間尺が桁行に比べて17cmほど短くなる。柱穴のいくつかで柱痕跡ないしは柱アカリを確認できた。柱痕跡は太いもので20cmほどになる。柱掘方は丸みをもった隅丸方形で、掘方底面ではさらに方形に近くなる。ただし東柱と考えた柱穴の底面だけ掘方の中段に段がある。掘方上面の1辺長は60cm~70cmにおさまる。深さは30cm~65cmで、40cm前後の深さが多い。掘方埋土はローム粒等を含む黒褐色土が主体である。

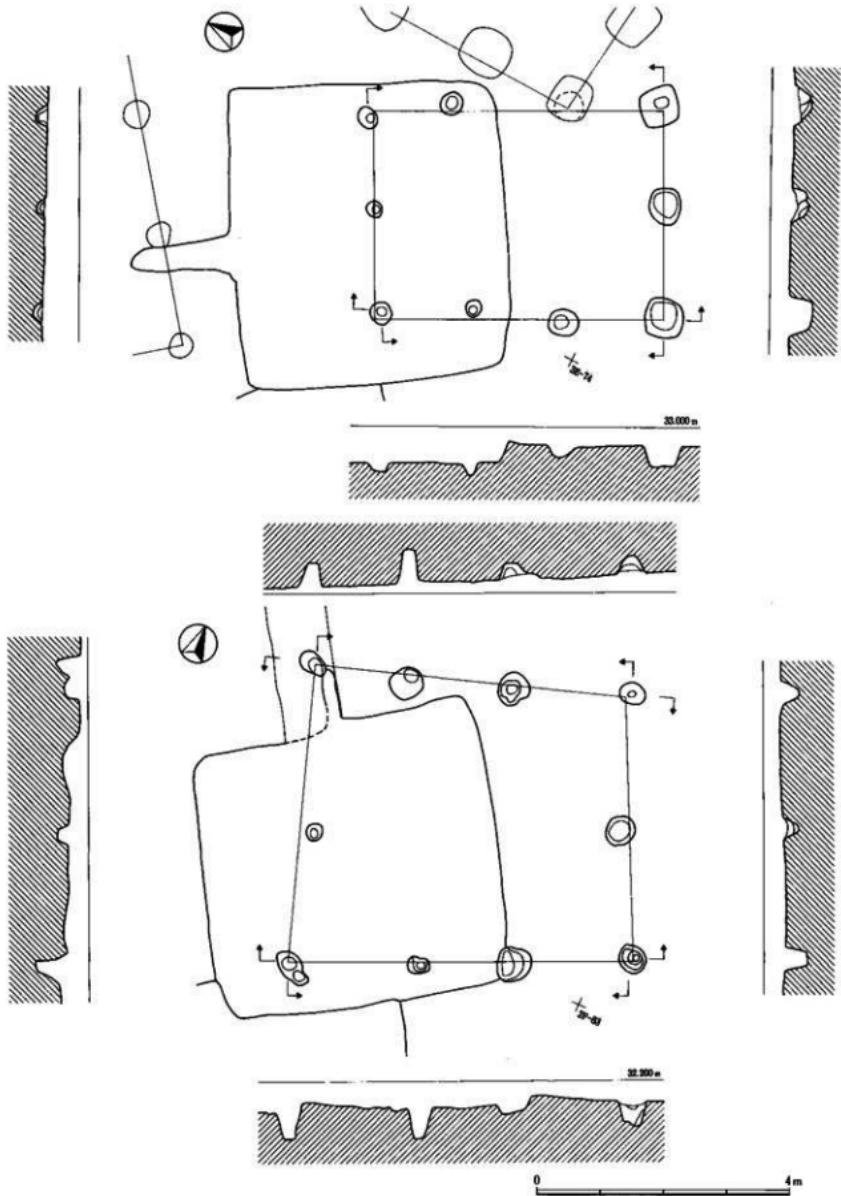
なお出土資料としては竪穴住居等の遺構との重複がないにもかかわらず、奈良・平安時代の土師器・須恵器片が多く出土した。図示できなかったが、内面に暗文のある土師器壊の小片が13点あり、須恵器も壊の小片が5点、微黒斑のある須恵器壊片が2点出土した。

掘立柱建物 S B 07 (第83図、図版13)

調査地のはば中央部、3E-32を中心に位置する。10本の柱穴のうち5本が奈良・平安時代の竪穴住居



第82図 SB05・SB06



第83図 SB07・SB08

S I 25と重複するが、S I 25の覆土に紛れて両者の新旧関係は不明である。またS B 07の1本の柱穴が前述の掘立柱建物S B 06の1本の柱穴を切っているが、その掘方の輪郭もS B 07の埋土に紛れて不明である。桁行方位をN—65°—Wにとる、2間×3間の南北棟の側柱建物である。柱筋は比較的通っている。東桁行長4.70m、西桁行長4.47m、南梁行長3.45m、北梁行長3.08mで、間尺の平均では1.54mと他の掘立柱建物に比べるとやや短い。これを南梁行だけでみると間尺は1.73mになり、他の間尺より20cmほど長く、この間尺の長さがいびつな平面形態を作り出しているようである。柱痕跡は2本の柱穴で確認できた。またS I 25と重複する5本の柱穴は埋土の大半について精査できなかつたために、柱の据え位置等についてはほとんど不明である。柱掘方はやや角張った印象をうけるものもあるが、基本的には円形のようである。径は40cm～60cmで、掘方径にやや大小が認められる。深さは20cm～40cmで、比較的浅い。掘方埋土はローム粒等を含む黒褐色土・暗褐色土が混在する。遺構の所属時期を決定するような出土遺物はしなかつた。

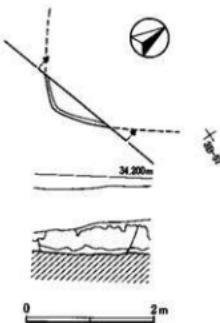
掘立柱建物S B 08（第83図）

調査地の東部の2F—71を中心とし、掘立柱建物S B 03の北に位置する。10本の柱穴のうち5本が奈良・平安時代の竪穴住居S I 06と重複するが、新旧関係は不明である。桁行方位をN—64°—Eにとる、2間×3間の東西棟の側柱建物である。西梁行の柱筋の通りが悪い以外は、比較的柱筋の通りはよい。南桁行長5.53m、北桁行長5.07m、東梁行長4.15m、西梁行長4.89mで、桁行の間尺の平均が1.77mにたいして、梁行では2.26mになり、梁間の間尺を長くとっているのが特徴である。柱のアタリはすべての柱穴で確認することができ、掘方底面のほぼ中央に柱を据えていたことがわかった。なお柱痕跡は覆土の断ち割りでも確認できなかつた。柱掘方は円形を基本とし、径は42cm～55cmと比較的そろっている。深さは30cm～50cmで不統一な印象をうける。掘方埋土はローム粒等を含む黒褐色土・暗褐色土が混在している。出土遺物はとくになかつた。

時期不明の遺構

竪穴住居S I 22（第84図）

調査地の西端部に位置する。わずかに住居の南隅部分を調査しただけで、残りは調査区域外になる。時期を特定できるような資料も出土しなかつた。周囲には古墳時代から奈良・平安時代にかけての竪穴住居が散在している。S I 22が方形を基調とする住居平面形態なのは確かだと思うので、そのいずれかに帰属する竪穴住居になるであろう。



第84図 S I 22

第6節 その他の遺物

ここでは、土器以外の金属製品・石製品・木製品等について報告する。なお金属製品として報告する小銅鐸は、出土例が僅少な遺物で非常に注目される資料である。

1 金属製品（第85～87図、巻頭図版1、図版9・26～28）

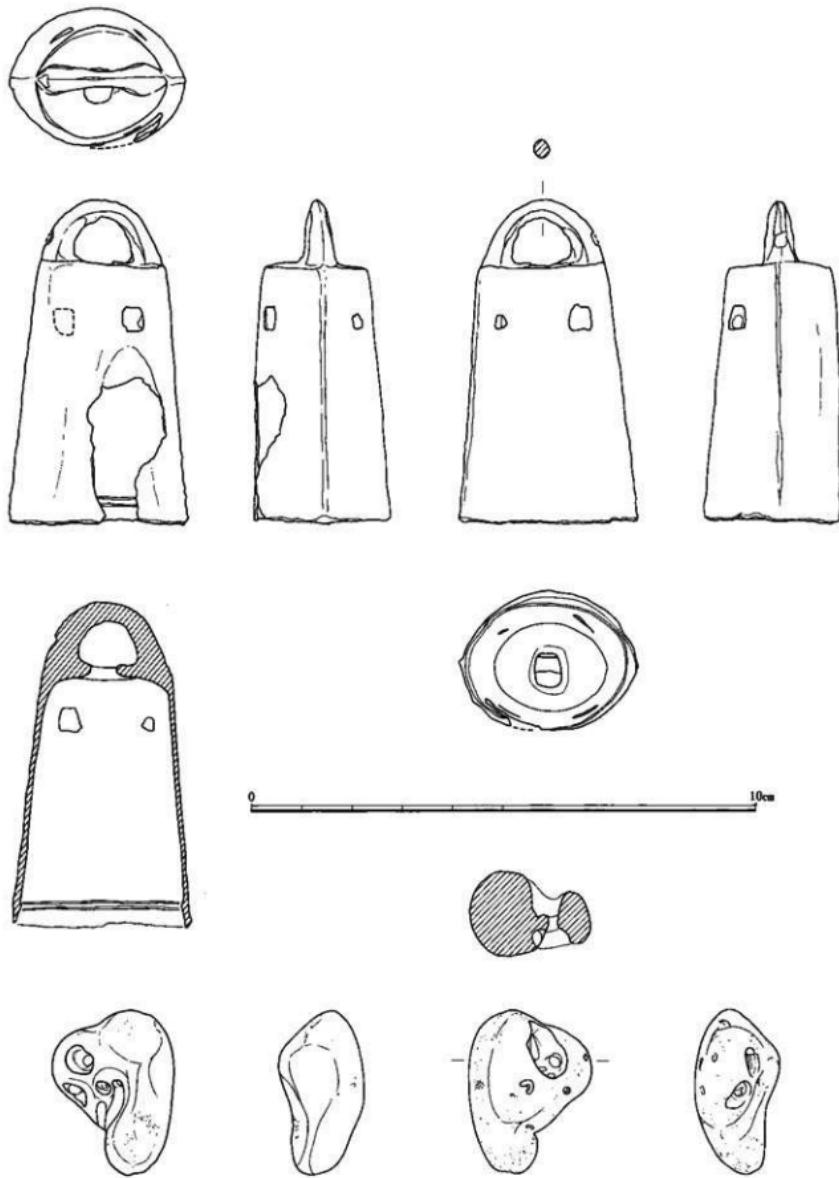
A. 小銅鐸・石製舌（第85・86図、巻頭図版1、図版9・26・27）

小銅鐸については、出土当時の詳細な報告がすでに『連絡誌』にある。ただ『連絡誌』本文でも断っているが、小銅鐸そのものについては鐸身内にまだ土が詰まった状態で観察し、その所見を報告したものである。現在では鐸身内の土も取り除かれ、保存処理も完了しているので、以下の記述では『連絡誌』の内容を参考にしながら、鐸身内部の土を除去した後に観察できた内容についてもあわせて報告する。なお計測値等については、煩雑を避けるために『連絡誌』の数値は省略した。

小銅鐸は集落内から出土することが多いが、中越遺跡でも既述のようにS I 19と重複するS I 20を精査している段階で、S I 19の埋土上層から出土している。『連絡誌』の記述では「S I-20の壁の精査の際に、S I-19との境界部分の精査を実施し、写真撮影等のためS I-19の覆土上面を清掃したときに、覆土の上面から顔を見せた緑青色の金属器が小銅鐸であった。」とある。また出土状況については「鉢を水平方向にした横位で、上面は一部破損し、破片が内側に落ち込みやや内側にくぼんでいるようで上面からの外圧によるものとみられた。」と記述している。そして小銅鐸の周囲を精査した結果、掘込みや共伴する遺物とも確認できなかったことから、小銅鐸は単独に出土したものとしたうえで、竪穴住居の覆土最上層への流れ込みと判断した。

小銅鐸の説明にあたっては『連絡誌』の記載と同じように、出土時の上面をA面とし、裏面をB面とし、左右をいう場合にはA面を正面にみた場合とする。出土時の色調は外面とも緑青色であったが、保存処理時に含浸した薬剤等の影響で、現在の色調はそれよりもかなり濃くなっているようである。表面は平滑で、文様等は認められない。また赤色塗彩痕跡も確認できない。破損か所を除けば、全体の遺存状態是非常によい。破損か所はA面の下半部にあり、裾端部から28mmほどの高さまで藤手状に欠失している。そして破面には、銅色の新鮮な破面もある（出土時実測図の矢印の箇所）。その部分は出土間もない頃に撮影された写真にも記録されている。『連絡誌』で「破片が内側に落ち込み」とした破片については、現在すべて接合・復元されているので、この破面は調査時に破片をすべて回収できなかったために生じたものであろう。したがって出土する前の欠損範囲は現状よりも小さかったことになる。なお裏面のほぼ同じか所で厚みを測ると1.5mmほどあるのに、破面の周囲では0.9mmしかない。もともと厚みが薄かったのか、銹化が進んで薄くなったのか定かではないが、いずれにしても破損しやすい部分であったといえよう。そして破損部の周囲は外部から圧力が加えられたかのように、内側にややめり込んでいる。B面にはとくに破損か所はない。ただA面では確認できなかった、鑄造時に生じたと思われる鑄を観察できる。

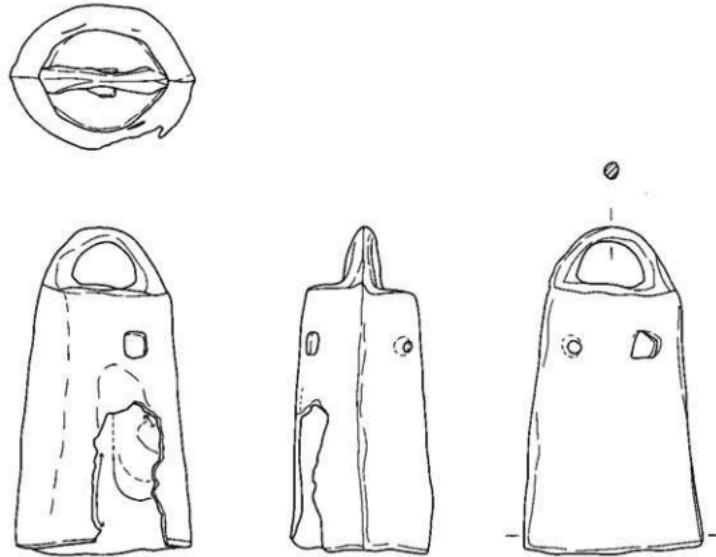
全高は63.3mm、紐の高さは12.8mm、鐸身高は50.9mmである。重量は33.89gになる。鐸身上端部（舞部）は、長径25.9mm、短径22.3mmの側面方向が鋭角になる紡錘形である。鐸身下端部（裾部）は長径35.8mm、短径27.8mmで、舞部と同じく紡錘形だが、A面側の円弧がやや押しつぶされたようになっている。ほぼ直線的な側面から鉢がとりつき、その形状は上下に開延びした半円形状である。鉢の厚みは3.2mm×4.0mmで上下方向に厚みがあり、断面は橢円形に近い。両端の鐸身にとりつく部分では、やや丸みのある菱形で、



第85図 小銅鐸と石製舌

左側の付け根部分にややはっきりした稜が認められる。太さは5.2mm～6.0mmになる。鉢の左側面にある2.5mmほどの欠損部分は、出土状況の写真にも写っているので、発見時の際に生じた傷であろう。なお『連絡誌』では、鉢の上部がやや細くなっているのを、鋸による外側からの破損であろうとするが、現状ではそれほど鋸化が進んでいるようにはみえないので、本来の形状と考えておきたい。鉢身の厚さは、計測できる範囲では0.9mm～1.5mmになる。なお鉢身の側縁には稜が認められる。左側ではさほどではないが、右側ではそれが段差として残っているので、製作時の型の咬合がずれたものと思われる。

舞孔は舞部中央よりA面側に寄った位置にあり、左右5.1mm、奥行きで6.8mmの大きさで、形状は隅に丸みをもった長方形である。なお舞孔と鉢の間にはいわゆる鉄放し時に生じたパリが三角形に残っている。型持孔は、外面から観察できるのはA面の右側に1孔、B面に2孔認められる。さらに内面から観察すると、A面の左側にも方形にくぼみんだ段差が残っている。これは製作時に型のその部分の高さが足りなかつたために、溶銅が回り込んで孔をふさいでしまったために生じたものである。この部分をX線写真でみると、右側の孔より0.5mmほど低い位置にあり、形状は下側の左右が長い台形になっている。孔の高さは6



(「連絡誌」掲載図面を再トレース)



第86図 小銅鉢（保存処理前実測図）

mm近くになる。A面右側の型持孔は縦4.6mm、横4.5mmのほぼ正方形の孔である。B面左側の孔は隅が丸い三角形で、底辺で3.0mm、高さで2.6mmほどある。右側の孔は台形に近く、縦が4.7mm、横が5.6mmある。舞孔は鐸身上部の中央よりA面に寄った位置に1孔ある。形状はほぼ正方形で一辺が約5.0mm～6.0mmである。鐸身内面の据部には、裾端部から3.5mmの高さに、幅1.3mmほどの内突帯が、欠損部分を除いて1周する。内突帯はB面では0.5mmの高さがあるが、A面では0.3mmほどしかなく、かなり不明瞭になっている。

そして出土時には鐸身のなかに土以外に、鐸身の破損か所から礫が1個顕を見せていた。保存処理等を進めるなかで、その礫を土とともに取り出した。その結果、礫は長さ33.2mm、幅24.0mm、厚み16.0mm、重量13.80gで、かなり丸みをもった礫であることがわかった。説明にあたっては、鐸身同様、出土状態の上面をA面、裏面をB面とし、実測図も出土状態にあわせて掲載した。左側面には、鐸身のB面の裏側に接していたために、鐸身の鋼がこびりつき、鐸身でもその部分の器面が剥落しているので、出土時の位置関係はこの痕跡から再確認できる。右側面と左側面の一部には何らかの付着物があるようでざらついており、色調も暗茶褐色をしている。それ以外の部分は緑青が染みて、薄緑をしている。そして礫としては異様なほどの光沢があり、光沢はややくほんだところにまで及んでいる。光沢部分を肉眼で観察してみても、とくに擦痕等は確認できないので、柔らかいもので磨いた光沢のようにもみえる。

礫は表面を観察した範囲では砂岩としてよいだろう。表面に穴状のくぼみや溝が数か所ある。これらを人為的なものとする見方もないわけではないが、穴は正円ではないし、一部には抉られている部分すらあるので、人為的な回転運動による結果とはいがたい。またA面から頂部に向けて貫通している穴はカーブを描いて貫通し、その延長の溝になっている部分まで含めると、かなり複雑に蛇行するので、むしろ海蝕でできた痕跡とするほうが適当であろう。ただA面からB面へ貫通している1個の穴は、当初から貫通していたのか不明である。わずかな厚みを最終的に人の手で貫通させた可能性はあるかもしれない。

この礫の用途については、『連絡誌』段階でも舌の可能性を指摘されながらも、結論は保留されていた。礫に人の手が加わっていることが顕著であるならまだしも、礫自体がきわめて自然状態に近く、現段階でも結論づける直接的な証左をつけられなかった。それは小銅鐸に懸垂されていたことを直接物語る擦痕等を確認できないからにほかならない。しかし以下の諸点を勘案して、この礫を小銅鐸の舌と考えておきたい¹²⁾。まず第一に、調査地内で出土した礫と比較すると、それらが近くの川や露頭面で採取されたと考えられるのにたいして、この礫のように海蝕をうけたような礫は出土していない。いわば「顔つきが違う」礫なので、この礫が選ばれた可能性があること。また光沢は人の手が加えられた公算が大きいこと。そして懸垂の際に紐を通せる穴があること、そして鐸身据部に内突帯があることなど、消極的ではあるが、以上を舌とするおもな理由としてあげておきたい。

礫を取り出す以前、鐸身の破損部分の破片がこの礫の下側からみつかれば、礫が土圧等によって鐸身の一部を壊して、めり込んだ可能性もあった。しかし結局そうした破片は内部からは出土しなかった。それよりも破損部に比べて礫が大きすぎることがわかったので、礫は裾端部からしか入れられないことになる。そして礫が小銅鐸内におさまっていた状況は、礫の貫通孔が小銅鐸の舞孔側になるので、ほぼ懸垂された状態で出土したことになる。こういう状況を『連絡誌』でいうように、堅穴住居の覆土最上層への流れ込みと表現することもできるが、礫を舌と考えるならば、堅穴住居の覆土最上層へ埋納したと表現したほうが適切なようにも思える。なお埋納坑としての掘込み等は確認していないが、小銅鐸が埋納坑の底面に埋置されていたのであれば、その痕跡を見つけだすのは困難だったかもしれない。

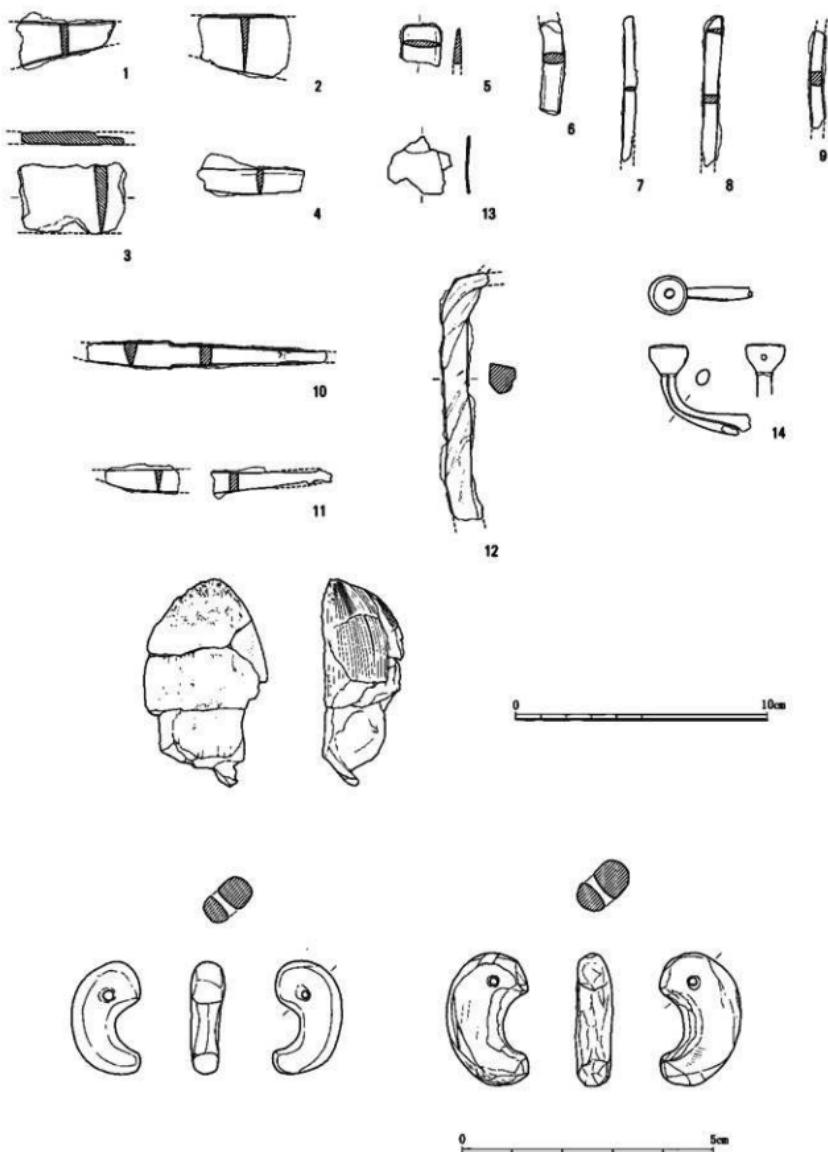
B. 小銅鐸以外の金属製品（第87図、図版28）

ここでは、小銅鐸以外の鉄製品と銅製品について報告する。鉄製品はおもに奈良時代・平安時代の堅穴住居から出土した。1は断面が長方形で幅に開きがあるので、鎌の茎の一部であろうか。とすればかなり茎尻に近い部分の資料ということになる。現存長40.3mm、重量は3.71gになる。S I 01から出土した。2は両端部を欠失しているが、もっとも幅が広い部分で24.5mm、狭い部分で18.2mmと、かなり差があるのでおそらく鎌の刃先の一部であろう。現存重量は10.45gである。S I 06から出土した。3は鎌の刃先の一部である可能性があるが、背は比較的直線である。現存重量は15.64gである。S I 06の住居床面から出土した。4は刀子の一部と思われるが、錆化が進んでおり、詳しいことはわからない。現存長42.2mm、重量は5.05gである。S I 06から出土した。5は盤状の鉄製品で、先端部に平刃をつけ、断面は薄い紡錘形をしている。幅は16.5mmで、現存長は16.2mmあり、重量は2.60gある。S I 06から出土した。6は断面が隅九長方形で、湾曲している鉄製品で、用途は不明である。現存長36.9mmで、重量は4.30gになる。S I 06から出土した。7は細長い板状の鉄製品で、鉄錆にしては厚みが薄く、用途は不明である。上端部は遺存し、ヘラ状になっているが、下端部は欠失している。幅は3.8mmで、厚みは1.5mmほどしかない。現存重量は1.28gである。S I 06から出土した。8は片刃箭式の鉄錆で、茎部を欠損している。錆身は錆化が進んでおり、はっきりはしないがおそらく無闇で、断面は片刃造りになると思われる。現存錆被長は60.0mmあり、現存重量は4.83gになる。S B 06の柱穴内から出土した。9は鉄錆の範被の一部と思われ、断面は長方形である。現存長は38.5mmで、重量は3.43gになる。S I 07の住居床面から出土した。10は細身の刀子で、刃先は32.2mmほどしか残っていないが、茎部は茎尻をわずかに欠くだけである。茎部の片面に木質が確認でき、木質をくるんでいた痕跡が圧痕で残っている。闇は刃闇・背闇とも遺存している。現存重量は8.73gである。S I 25から出土した。11も刀子だが、遺存状態が非常に悪い。闇の前後を大きく欠損し、刃部と茎部の一部が残っている。現存重量は6.52gである。S I 20の住居床面から出土した。12は直径6mmほどの鉄の棒3本を束ねて、太さ3.1mmほどにしたものである。それをねじって、棒状にしてある。先端部がやや折れ曲っている。現存長は98.8mmで、現存重量は28.93gである。13は板状の銅製品だが、装飾等の痕跡もなく、どのような製品であったのかよくわからない。現存重量は1.35gになる。S I 06の埋土中層から出土したので、住居より新しい可能性もある。14はキセルの雁首で、火皿後部に穿孔がある。脂返しは上方に大きく湾曲し、その後ろから欠損している。火皿と首の接合部分には、細い鋼板の補強帯がめぐり、形態的には古手の様相を残す雁首で、17世紀代の所産であろうか。S K 01から出土した。

2 木製品（第87図、図版28）

木製品は、通常であれば低地等で出土するのが一般的だが、ここでは炭化材に加工痕跡があるものを報告する。これらは樹種同定時に、木製品の可能性があると指摘されたもので、古墳時代の堅穴住居S I 21・SI-29から出土した資料について紹介しておく。

1はS I 21から出土した炭化材で、全長8.3cm、幅5.0cm、厚み3.3cmで、重量は31.4gで、直径5.5cmほどの、ヤブツバキの丸木を素材に加工したものである。木割りは縦方向に半分に割ったものを使用している。片面には表皮に近い部分が残り、加工面はかなり平滑な曲面に仕上げている。この部分だけをみれば未製品ではなく、完成品とみなしてよいようだ。断面は長楕円形で、上部がやや厚く側面観はやや反り返っているように見える。上面観・側面観から、その形状を表現すれば鮫の頭部のような形状というのがふさわしい。穿孔等の加工は確認できない。なおこの樹種は建築材や器具類によく使用される樹種ということ



第87図 金属製品・木製品・石製品

だが、横断面が長椭円形で、しかも先端部が鋭くなっているので、農耕具等の柄とするのにはやや難がある。建築材とすれば、それなりに装飾的な部分での使用を想定させる。またそれらとは別に祭祀等に使用する木製品の可能性も捨てきれない。いずれにしても類例の増加をまって改めて検討したい資料である。

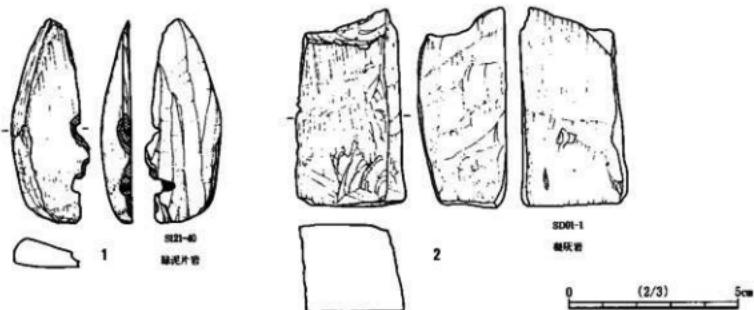
S I 21から出土した炭化材は、表面がほとんど剥落し、遺存状態が悪いために記述だけにとどめる。材の断面は台形で、現在残っている幅で2.8cm、厚みは2.0cmある。樹種同定時に1側縁を共有する2面に加工痕が確認されたが、現状では1面だけ加工面らしき面が残る以外、ほとんど遺存していない。

3 石製品（第87図、図版28）

玉類としては勾玉が出土した。1は三日月形のやや扁平な勾玉で、側面は平坦な面を大きくとり、断面は長椭円形になる。全長22.9mm、最大幅9.0mm、厚みは5.1mmほどで、重量は2.56gある。穿孔は片側から行われている。全体に丁寧に研磨されており、曲面に仕上げている。滑石製である。S I 02から出土した。2は研磨した際の面取の継線を多く残している。断面は長椭円形に近く、背部は丸みを帯びるもの、腹部は鋭角になっている。全長27.0mm、最大幅13.1mm、厚みは6.3mm～6.9mm、重量は4.36gである。穿孔は片側から行われている。黒光りのする黒色頁岩製で、S I 32から出土した。

4 石器（第88図、図版17）

1は扁平な円礫を素材として、全面を研磨している。器体中央部に、2か所の貫通した穴がある。器体中央部から大きく破損していることから器種については明確ではないが、穿孔痕のある磨製石器である。14.23g。2は砾石である。目の細かい凝灰岩を用いており、両端部と下端部を折断後やや粗い研磨を行い、表裏両面は非常に研磨が顕著である。器体中央部が最も厚みがあり、器体中央部を境にして、主に縱方向に線状の浅い溝が数条ある。上端部は破損している。74.07g。



第88図 その他の石器

注1 井上哲朗ほか 2000 「木更津市金二矢台遺跡・堀ノ内台遺跡」(財)千葉県文化財センター

2 鋸身内から出土した礫が、鋸身にはほぼ内接する大きさということをおもな理由にして、この礫を舌とはみなさずに、ほかの用途を考えるむきもある(相京邦彦 1995 「東日本における『小鋼鋸』の終焉」「古代文化」第47巻第10号)。たしかにこれまでみつかっている舌と比較すると、大きく、しかも重量があるというのは事実である。しかし実測図で鋸身図で鋸身内部と礫を重ねる限り、礫の懸垂の仕方にもよるが、4mmほどの空隙は確保できるので、礫の鋸身内への納りという点ではさほど問題はないと考えている。

第3章 まとめ

第1節 旧石器時代

1 石器群の概要（第1～3表、第89～91図）

旧石器時代の資料は、本文で説明したが、ここで改めてまとめて考察してみることにする。石器群の概要は以下のとおりである。

- (1)文化層は、第Ⅰ文化層～第Ⅳ文化層の四つの文化層に分かれる。その他に、単独出土石器がある。
- (2)出土石器の総点数は、517点である。文化層別の出土点数（ブロック数）は、第Ⅰ文化層24点（1ブロック）、第Ⅱ文化層9点（2ブロック）、第Ⅲ文化層90点（3ブロック）、第Ⅳ文化層384点（2ブロック）。単独出土石器10点。量・質とともに第Ⅲ・Ⅳ文化層が充実している。
- (3)第Ⅰ文化層は、IX a層に生活面を持つと推定される。第1ブロックが相当する。定型的な石器がみられず、扁平な円礫から不定型な横長剥片を剥離していることが特徴といえる。
- (4)第Ⅱ文化層は、VII層に生活面を持つと推定される。第2・3ブロックが相当する。本文化層が、出土点数が最も少なく、石器群の内容が明確でない。
- (5)第Ⅲ文化層は、VII層上部からVI層下部に生活面を持つと推定される。第4～6ブロックが相当する。黒曜石の占める割合が高く、黒曜石製のナイフ形石器・搔器で構成される。また、礫の占める割合が少ないことが、第Ⅳ文化層と対照的である。
- (6)第Ⅳ文化層は、V層上部からIV層下部に生活面を持つと推定される。第7・8ブロックが相当する。礫（礫片含む）の比率が圧倒的に高く、礫の接合関係が頻繁で、ブロック間接合もみられる。製品の占める割合が極めて低く、ナイフ形石器が1点出土しているが、粗い二次加工が施されており、切出形ナイフ形石器、角錐状石器の可能性もある。礫（礫片含む）以外の石器の石材は、嶺岡産珪質頁岩・ガラス質黒色安山岩・チャートを主に用いており、黒曜石は1点も含まれない。これらの特徴は、第Ⅲ文化層と大きく異なる。

2 第Ⅰ文化層の石器群について

(1)器種組成（第89図）

製品は含まれない。敲石と打面転移が頻繁に行われた石核と横長幅広の剥片が多いことが特徴といえる。1・2は二次加工のある剥片である。1は先端部、2は右側縁に折断加工が施されている。3は比較的良質な石材の左側縁と末端部に微細剥離痕が施される。4は接合資料である。扁平な円礫を素材として、数回の剥離で打面を作出後に剥片を剥離している。6はチョッピングツール状の残核の形状を呈する。5は打面転移の頻繁な石核である。7・8は敲石である。扁平な円礫を素材として、突出部に顕著な敲打痕がみられる。7は平坦部に線状の敲打痕がみられる。

(2)石器製作技術

本遺跡において、安山岩・トロトロ石（安山岩）を円礫の状態で持ち込み、ハードハンマーの7・8のような敲石を用いて、打面転移を頻繁に行い、横長幅広剥片を生産していることが推察される。

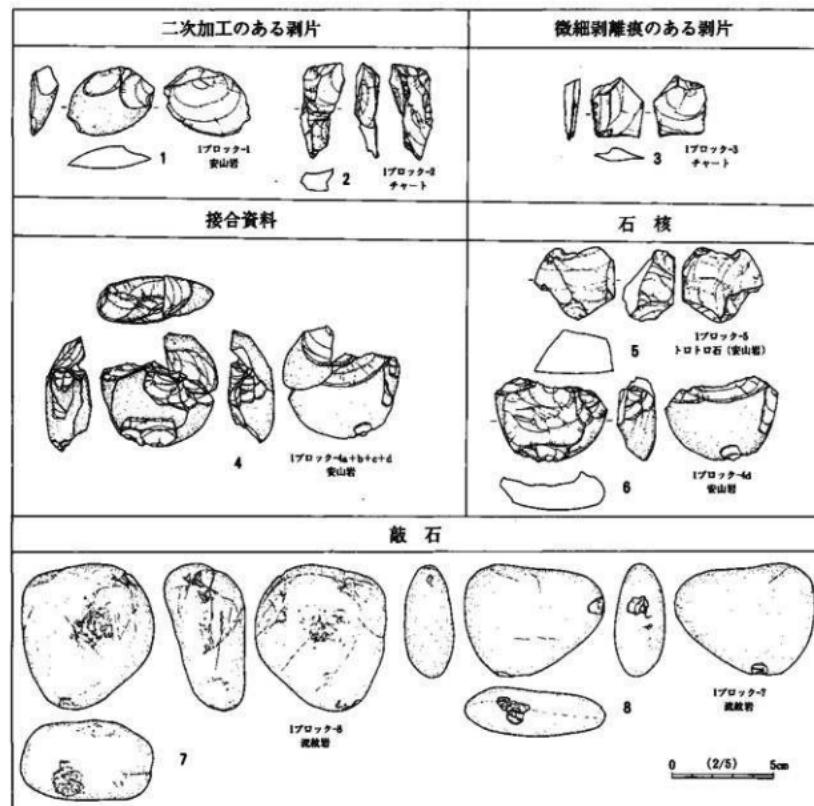
(3)石器群の位置づけ

石器の出土点数が少なく、調査区の北端際から出土していることから、本文化層の広がりは明確ではな

い。北東側に隣接する平成8年度に君津都市文化財センターが調査を行った石器群¹⁾と同一段階の石器群として捉えられることから、石器の分布は、北側に広がる可能性も残されているが、調査範囲と地形からみても、環状ブロックを形成するような石器群ではなかったことが推察される。出土層位からみて、生活面はⅨa層と推定される。また、器種組成においても、台形様石器やナイフ形石器が出土していないことから、環状ブロックが形成される時期よりも後の時期の所産の石器群と考えられる。ブロックの規模が比較的小規模であることと、器種組成・石器製作技術からみて、八千代市権現後遺跡第6文化層²⁾、北海道遺跡第3文化層³⁾、草刈六之台遺跡第3文化層⁴⁾等の石器群と共通する点もみられる。縦的には、下総台地田村・橋本縦年⁵⁾のⅡa期新段階、相模野台地源訪間縦年⁶⁾の段階Ⅲにそれぞれ位置づけられる。

3 第Ⅱ文化層の石器群について

出土点数が少ないので、石器群の内容は明確ではない。出土層位から、Ⅷ層に生活面を持つ石器群であると推定される。器種組成は、製品がほとんどなく、礫片の割合が高いことが特徴である。縦的には、



第89図 旧石器時代第Ⅰ文化層 器種組成

下総台地田村・橋本編年のⅡa期新段階、相模野台地源訪問編年の段階Ⅲにそれぞれ位置づけられる。

4 第Ⅲ文化層の石器群について

(1) 器種組成 (第90図)

1～4はナイフ形石器である。すべて黒曜石を用いている。黒曜石は、比較的良質ではあるが、気泡を多く含み、やや透明度のある石質である。1・3は主要剥離面方向に主軸を設定し、基部に打面を残置しており、両側縁基部側を折断後、面的な調整加工が施されている。サイズも1～4ともにはば同等のサイズをしている。5～8は二次加工のある剥片・微細剥離痕のある剥片である。5は先端部が折れていることから形状が不明だが、ナイフ形石器と識別することも可能である。6・7は不定形な厚みのある剥片を素材として、二次加工が施されている。8は良質のチョコレート色の珪質頁岩を用いて、大型の石刃を素材として、折断や楕円状剥離を行って刃部再生を行った痕跡がみられ、いわゆる「下総型石刃再生技法」によるものと考えられる。9・10は削器である。9は石斧を刃部再生した結果の最終形状と捉えることも可能である。11・12は搔器である。ナイフ形石器と同様に黒曜石を用いている。調整加工の方法もナイフ形石器の面的な調整加工と共通する特徴がみられる。13～19は楔形石器である。15以外は、安山岩・ガラス質黒色安山岩を用いており、13・17に残されている自然面の形状から、小型の円礫を素材として、両極剥離により剥離された、両極剥片を素材として、さらに両極剥離が施されている。いわゆる「遠山技法」によるものである。20・21は接合資料である。両者ともに自然面を大きく残している。特に、21の接合資料は扁平な円礫を素材として、打面を上部に設定して、交互剥離により横長剥片を生産していることがうかがえる。22・23は敲石である。上下両端に敲打痕がみられ、23は中央部に凹状の敲打痕が全周にめぐっている。

(2) 石器製作技術

石器製作技術の特徴は、以下の点があげられる。

①ナイフ形石器・搔器は、良質の黒曜石を用いており、調整加工に面的な調整加工が施されるという共通した特徴が見られる。

②8の石器は、良質のチョコレート色の珪質頁岩を用いており、大型の石刃を再生した痕跡がみられる「下総型石刃再生技法」によるものと考えられる。

③円礫を素材として、両極剥離によって生産された楔形石器がまとめて出土しており、「遠山技法」によるものと考えられる。

④安山岩・ガラス質黒色安山岩は、比較的大型の扁平な円礫を用いており、打面を上部に設定して、交互剥離により横長剥片を量産している。

(3) 石器群の位置づけ

出土層位は、Ⅶ層上部からⅥ層下部に集中する。また、上記の特徴から、類似する石器群としては、下総台地では、多古町千田台遺跡¹¹、佐倉市栗野Ⅰ・Ⅱ遺跡第Ⅱ文化層¹²、椎現後遺跡第4文化層¹³の石器群と類似する特徴を持つ。相模野台地では寺尾遺跡第Ⅵ文化層¹⁴、武藏野台地では鈴木遺跡Ⅵ層文化層¹⁵と類似する。編年的には、下総台地田村・橋本編年のⅡa期新段階、相模野台地源訪問編年の段階Ⅳにそれぞれ位置づけられる。

5 第Ⅳ文化層の石器群について

(1) 器種組成 (第91図)

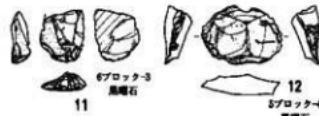
ナイフ形石器



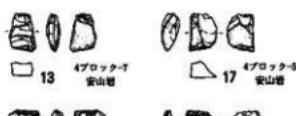
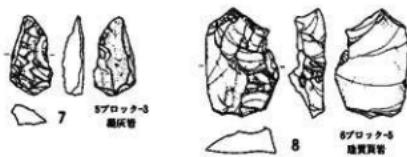
二次加工のある剥片・微細剥離痕のある剥片



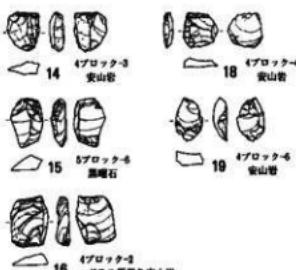
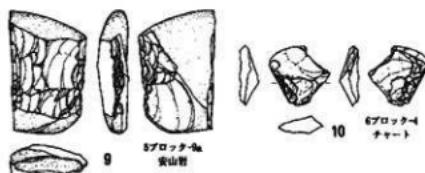
搔 器



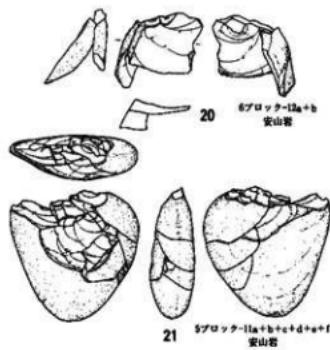
楔形石器



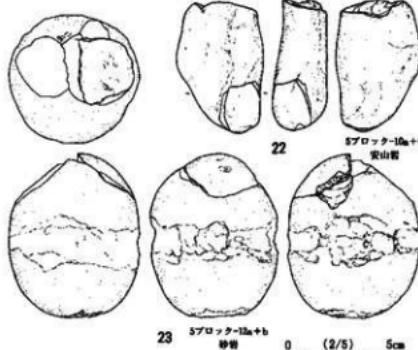
削 器



接合資料



敲 石



0 (2/5) 5cm

第90図 旧石器時代第Ⅲ文化層 器種組成

礫（礫片含む）が9割以上で、石器の割合がきわめて少ないことが特徴である。礫（礫片含む）以外の石器の器種組成は、製品の割合が極めて低い。1はナイフ形石器である。ナイフ形石器は1点のみであるが、打面部と基部を大きく折断後、調整加工が施されている。第Ⅲ文化層のナイフ形石器とは形態的に大きく異なる。切出形ナイフ形石器や角錐状石器、あるいは、二次加工のある剥片として識別できる可能性がある。2・3は二次加工のある剥片である。不定形の剥片を素材として、両側縁を折断して調整加工している。4・5は微細剥離痕のある剥片である。6・7は石核としたが、これらの石核から数枚の剥片しか剥離されていない。8～10は接合資料である。自然面を大きく残し、打面が平坦面であることから、拳大位の大きさの円盤を母岩として、分割後に分剖面を打面にして剥片を剥離していることが観察される。

(2)石器製作技術

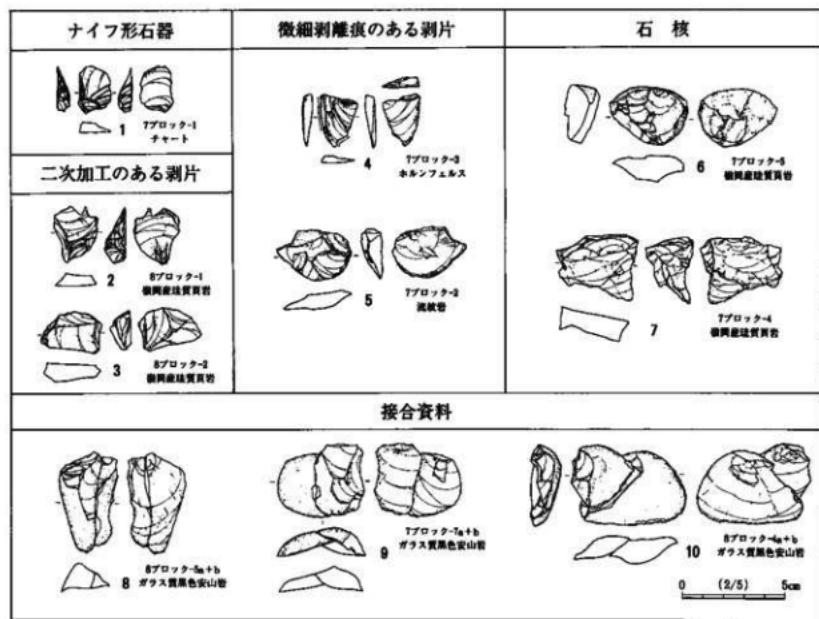
石器製作技術は、接合資料8～10に代表されるように、分割礫を素材として、不定形の剥片を生産している。また、製品の製作はほとんど行われていないことも特徴といえる。1はナイフ形石器として識別したが、通常のプランティング加工とは異なるもので、切出形ナイフ形石器、角錐状石器、あるいは、二次加工のある剥片と識別が可能である。

(3)石器群の位置づけ

石器群の特徴として、以下の点があげられる。

①礫（礫片含む）の割合が9割以上で、製品の割合が極めて低い。

②礫（礫片含む）の接合は頻繁で、ブロック間接合もみられる。



第91図 旧石器時代第Ⅳ文化層 器種組成

③明確な加工のある石器は、1の1点だけである。ナイフ形石器と識別したが、通常のナイフ形石器のプランティング加工とは異なるもので、切出形ナイフ形石器、角錐状石器、あるいは、二次加工のある剥片と識別可能である。

④石材組成では、砾（砾片含む）以外のものは、チャート・横岡産珪質頁岩を主体とし、黒曜石を1点も含まない。

⑤出土層位は、V層上部からIV層下部に集中している。

以上の特徴から、下総台地では、成田市取香和田戸（空港No60）遺跡第4文化層L・H・G地点¹⁴⁾の石器群と類似し、相模野台地では、柏ヶ谷長ツサ遺跡X I a文化層¹⁵⁾の石器群と類似するが、今のところ類例が少ない。縄年的には、下総台地田村・橋本縄年のII b期、相模野台地源訪間縄年段階V、亀田角錐状石器縄年I期¹⁶⁾にそれぞれ位置づけられる。

第2節 繩文時代以降

縄文時代から弥生時代にかけては、遺構といえるはっきりした生活痕跡は希薄である。縄文時代では中期の埋甕SK01が唯一になる。弥生時代では、S I 14出土の土器のうち甕類では、屈曲した頸部に輪積み痕跡があり、最大径が胴部にあるので、弥生時代でも終末段階に位置づけられる。いずれも単発的で、しかも周辺の調査成果をみても同時期の集落は確認されていないので、これらの段階ではまだ本格的な土地利用は進んでいないようである。

ただそうしたなかで調査地内に広範囲に広がる縄文時代早期を中心とする砾群の分布は、直接的な遺構とは言い切れないものの、早期の土器群の分布ともほぼ重なり、それなりに土地利用の痕跡をとどめているといえよう。そしてその分布範囲は隣接する地区的これまでの調査成果等を総合すると、今回の調査地内にその分布の中心があったようである。砾群にはしばしば下面に土坑等が存在することがあるが、今回の調査ではそうした痕跡は見いだせなかった。砾を採取して火にかけて使用するという行為は、どちらの場合でもおそらく変わらないと思うので、その具体的な使用方法に何らかの差があったのであろうか。なお今回出土した砾は石材の採取場所にもよるのだろうが、比較的小振りなものが多かった。この傾向は近隣の堀之内台遺跡¹⁷⁾の砾の内容に関する調査結果ともほぼ符合するので、小振りな砾の獲得は選択の結果ではなく、自然条件に制約されていた可能性がある。

古墳時代前期から中期にかけて、集落としての景観がある程度整うようになってくる。ただ今回の調査成果では住居の重複から新旧関係を必ずしも把握できたわけではないし、住居出土の資料とはいっても器種構成が完備しているわけでもないので、ここでは集落の変遷過程を地域的な土器縄年¹⁸⁾をもとにたどっておきたいと思う。なお今回の資料の中に明らかに前期前葉までさかのほる資料はないようなので、集落の開始時期は前期でも中葉からということになる。

前期中葉段階に位置づけられるのは、S I 03・S I 12になる。S I 12は規模の大きい竪穴住居で定型的な住居形態となって登場する。次の後葉に位置づけられるのは、S I 13・S I 19である。なかでもS I 19出土の甕類は、刷毛目調整痕跡をかなりなで消しているのが顕著になっているので、後葉のなかでもやや新しい様相を備えているといえよう。したがって住居覆土上層から出土した、小銅鐸はこの時期を上限として埋没、または埋納したことになる。そして末葉段階に位置づけられるのが、S I 09・S I 10・S I 26・S I 29である、そして平成8年度に(財)君津都市文化財センターが調査したS I 003もこの時期に位置づ

けられるであろう。これらの変遷をみるかぎり、前期も終わり近くになるにつれ徐々に竪穴住居の軒数が増えてくる。

そして古墳時代中期と考えたのは S I 18・S I 21・S I 23である。そのなかで S I 21は、規模が大きく、住居構造もやや特異である。竪穴住居から出土した杯類は中期でも後半段階の特徴をもつもので、前期終末まで続いた集落がその後一端途絶えたようである。なおこれらの住居群は今回の調査地の西側に偏在しているが、(財)君津都市文化財センターが調査した東側の一角でも、やはりほぼ同時期の竪穴住居を1軒確認しているので、今回の調査成果でみている以上に集落は広範囲に展開するようである。

ところで古墳時代の特殊な出土遺物として小銅鐸がある。これまで千葉県内では、中越遺跡例を含めて8例の出土例がある¹⁹これらを最近の比田井克仁氏の分類²⁰に照らすと、5大分類あるうちの3分類が該当する。つまりB類としたものは鉢の断面が扁平で、鋸があり、文様を描出したもの（川焼台1号鐸・2号鐸）で、D類は鉢の断面が円形もしくは梢円形で、鋸がないもの（天神台鐸・文脇鐸・大井戸八木鐸・中越鐸）。そしてE類としたものは、鉢・鋸がないものである（草刈遺跡H区鐸・I区鐸？）。そして県内の出土例の半数が含まれるD類について、比田井氏は銅鐸をかなりデフォルメしたものとして位置づけ、その成立時期を弥生時代後期に考えている。

県内で出土したD類のなかで文脇鐸・大井戸八木鐸の2例が、墓坑という明確な遺構に伴って出土している。大井戸八木鐸では墓坑から鉄石英製管玉と銅劍が出土しており、その埋納時期については弥生時代後期と考えられている。文脇鐸はさらに時期を特定できる資料はないものの、周囲の集落の状況から弥生時代後期に考えられている。天神台鐸が、出土遺物からその後に続くのであろう。したがって中越鐸は県内出土のD類のなかではもっとも新しい段階のものであるといえよう。こうした序列を他の要素でみていくと、もっとも目につくのが鐸身高である。制作実験の所見から、この属性を除外する意見もある²¹。たしかに鐸身裾部を削り取ることがある場合を想定するかぎり、内突帯のないものについてはさほど有効な指標とはならないかもしれない。しかし内突帯のあるものについては、制作時のある程度の高さはわかるわけだから、鐸身高と内突帯の有無は運動させて考える必要があるだろう。そういう観点でみていくと、文脇鐸は内突帯が1条あり、鐸身高は108.0mmある。大井戸八木鐸は内突帯はないものの、94.5mmの高さがある。天神台鐸はかなり変形し、内突帯もなく、68.0mmしかない。それでも中越鐸よりも若干高いことになる。天神台鐸を他の小銅鐸と形態を比較すると、舞部の径に比べて高さが低く、かなり寸詰まりの印象をうけるので、最終的にかなり高さをつめた可能性がある。とすると、数少ない資料の中ではあるが、鐸身高の高いものから、低いものへという変遷を見て取れることになる。また小銅鐸の埋納場所も墓坑からそれ以外へという変遷もたどることができるであろう。ただそれが共同体が保持していた祭祀形態を含む当時の習俗とどのようにかかわるのかは、小銅鐸全体のなかで考えていかなければならない問題であり、ここではこれ以上触れないことにする。

なお中越鐸は集落の変遷のなかのどの段階で入手されたのであろうか。今回の調査成果からでは、弥生時代から古墳時代前期前葉までは、遺構自体が非常に希薄なので、この時期を入手時期とするにはやや難がある。ここではとりあえず前期中葉から後葉までの間に小銅鐸が入手されて、後葉の終末段階で埋納、または埋没したものと考えておきたい。

これまで県内出土の小銅鐸のなかで、舌の可能性のあるものが出土したのは中越鐸だけである。全国的にみてみると、銅鏡を転用したものや礎まで出土しており、ある意味、素材は多様であるといえる。それ

は舌の素材にある程度の堅さがあれば、金属を鳴らすことはできるわけだから、素材の多様性はさほど問題にならないのかもしれない。そういう意味では内突帯のある文脇鐸の墓坑から出土した、スタンプ状の小型土製品は、注意しておく必要があるかもしれない。出土した土製品はちょうどスタンプの持ち手にあたる上端部を欠損し、全容は不明だが、残っている部分から想定しても、十分鐸内には納まりそうである。中越鐸のような、ほとんど自然礫を素材とした石製の舌があるのであれば、文脇鐸の土製品に舌の可能性がないのかどうか、内突帯もあるので、再度検討する必要があるだろう。ただこの土製品の墓坑における出土状況が、鐸の裾とは反対側の位置から出土していることが気にかかる。しかしこれは舌の入った鐸が棺上に置かれていたのであれば、棺が腐朽して棺材が陥没するなかで、本来の位置関係を保てずに埋没したとすれば、それも説明がつくよう思う。

そしてその後中越遺跡では、古墳時代後期から8世紀前半まで、また集落が途絶えてしまうようである。およそ8世紀第3四半期に位置づけられるのが、S I 04・S I 20・S I 25・S I 27・S I 32で、隣接地の北側を(財)君津都市文化財センターが調査した際にみつかったS I 001もこの時期に含まれるであろう。この段階の竪穴住居は、規模がやや大型になる傾向がある。8世紀第4四半期に位置づけられるのはS I 01・S I 02・S I 05・S I 06・S I 11・S I 15・S I 24などがこの段階になり、(財)君津都市文化財センターが調査したS I 002もこの時期と考えておきたい。そして9世紀初頭ではS I 07の1軒のみとなる。S I 07を壌して造られたS B 07はそれよりも新しい段階の掘立柱建物ということになる。棟筋をぼん揃えられたS B 02についても同じであろう。

今回の調査成果からだけでは、S B 07と同時期と考えられる竪穴住居が存在しないわけだから、集落概観として一見不自然にも思える。しかし今回の調査地の東側を調査した(財)君津都市文化財センターの成果をみると、S I 005から9世紀前半に位置づけられるロクロ土器器坏が1点出土している。1点だけの出土で、器種構成までわからぬので何ともいえないが、今回の調査地内からはロクロ土器器が1点も出土していないので、これがS I 07よりも新しくなる可能性がある。そうするとS B 07をその時期に考えれば、掘立柱建物と併存する竪穴住居が存在することになる。いずれにしても9世紀後半以降は、集落としての営みはまったく絶えてしまうようである。なおここではS I 007を出土土器がもっとも平底化していることから、もっとも新しい段階の竪穴住居と考えたが、調査時の切り合い関係の所見ではS I 06のほうが新しいことになっていることを付言しておく。

今回報告した奈良・平安時代の資料中に、在地産以外の製品を何点か散見する。そのなかでS I 05から出土した壺は、平城宮の器種分類で壺Aとよばれているもので、平城宮土器編年のV・VIに併行する時期のものと考えられる。いわゆる畿内産土器の壺Aは、最近県内でもその出土例が知られるようになってきた³¹。しかしいずれも体部のほぼ全面に刷毛目調整を施しており、今回の出土例のように器面上に刷毛目調整痕跡を残さない例はないようである。これを畿内の出土例でみてみると、長岡京跡の出土例³²などに刷毛目がみえない壺Aがあるので、あるいは8世紀後半以降、こうした手法の壺も生産され、その製品が中越遺跡に持ち込まれたのであろう。いずれにしてもいわゆる「畿内産土器」とよばれる一連の土器群は生産地も多様で、今現在ではこの壺の出自すらはっきりしない。今後、生産地を特定する作業を進めるなかで、再度検討してみたいと思う。

注1 山形美智子 1997『千葉県木更津市中越遺跡』(財)君津都市文化財センター

- 2 橋本勝雄 1984「董田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅰ—八千代市椎現後遺跡—」(財)千葉県文化財センター
- 3 橋本勝雄 1985「董田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅱ—八千代市北海道遺跡—」(財)千葉県文化財センター
- 4 島立 桂 1994「千原台ニュータウンⅥ—草刈六之台遺跡—」(財)千葉県文化財センター
- 5 田村 隆・橋本勝雄 1987「房総考古学ライブラリー1 先土器時代」(財)千葉県文化財センター
- 6 源訪間 順 1989「相模野台地における石器群の変遷について」『神奈川考古』第24号
- 7 新田浩三 1995「下總型石刀再生技法の提唱」『千葉県文化財センター研究紀要16~20周年記念論集』(財)千葉県文化財センター
- 8 田村 隆 1989「収束」『佐倉市南志津地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』(財)千葉県文化財センター
- 9 矢本節朗 1996「B R / W南側N D B用地(無線施設)埋蔵文化財調査報告書—多古町千田台遺跡—」(財)千葉県文化財センター
- 10 田島 新 1991「佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅴ—佐倉市栗野Ⅰ・Ⅱ遺跡—」(財)千葉県文化財センター
- 11 前掲注2
- 12 鈴木次郎 1980「第VI文化層」「寺尾遺跡」神奈川県教育委員会
- 13 織笠 昭 1978「鈴木遺跡Ⅵ層出土石器群についての一考察」『鈴木遺跡Ⅰ』 鈴木遺跡刊行会
- 14 新田浩三 1994「取香和田戸遺跡(空港No60遺跡)」『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ』(財)千葉県文化財センター
- 15 堀 隆 1997「第XI文化層a」「柏ヶ谷長ツサ遺跡」柏ヶ谷長ツサ遺跡調査団
- 16 亀田直美 1996「角錐状石器」「石器文化研究5」石器文化研究会
- 17 井上哲朗ほか 2000「木更津市金二矢台遺跡・堀之内台遺跡」(財)千葉県文化財センター
- 18 誰墨知義ほか 1996「君津地方における弥生後期~古墳前期土器の土器編年」『研究紀要VII』(財)君津都市文化財センター
- 19 千葉県内の小銅鐸に関するおもな文献を以下に掲載しておく。
- 浅利幸一 1983「千葉県市原市天神台遺跡出土の小銅鐸」『考古学雑誌』第68巻第3号 日本考古学会
- 柳原弘二ほか 1984「市原市川焼台遺跡出土の小型銅鐸について」『研究連絡誌』7・8合併号 (財)千葉県文化財センター
- 相京邦彦ほか 1986「川焼台遺跡出土の2号銅鐸について」『研究連絡誌』15・16合併号 (財)千葉県文化財センター
- 柳原弘二ほか 1986「小銅鐸の展開—川焼台一号鐸・同二号鐸をめぐって」『千葉文華』21号 千葉歴史学会
- 小高泰雄 1988「第5章 まつりと楽器」「房総考古学ライブラリー4 弥生時代」(財)千葉県文化財センター
- 相京邦彦 1989「千葉県市原市川焼台遺跡出土の小型銅鐸」『考古学雑誌』第75巻第2号 日本考古学会
- 白井久美子ほか 1989「千葉県市原市草刈遺跡出土の小銅鐸」「考古学雑誌」第75巻第2号 日本考古学会
- 白井久美子 1989「市原市草刈遺跡H区(千原台地区)」「千葉県文化財センター年報」No15 (財)千葉県文化財センター
- 農田秀治 1991「市原市草刈遺跡Ⅰ区」「千葉県文化財センター年報」No16 (財)千葉県文化財センター
- 桐村修司 1991「大井戸八木遺跡」「君津都市文化財センター年報」9 (財)君津都市文化財センター
- 古内茂ほか 1989「君津郡袖ヶ浦町文脇遺跡出土の小銅鐸」「考古学雑誌」第75巻第2号 日本考古学会
- 相京邦彦ほか 1994「銅鐸の出土状況」「日本考古学協会1994年度大会研究発表要旨」 日本考古学協会
- 麻生正信ほか 1994「木更津市中越遺跡出土の小銅鐸について」『研究連絡誌』42号 (財)千葉県文化財センター
- 相京邦彦 1995「東日本における『小銅鐸』の終焉」「古代文化」15・16合併号 古代學協会
- 加藤正信ほか 1995「袖ヶ浦市文脇遺跡」(財)千葉県文化財センター
- 20 比田井克仁 2001「関東における『小銅鐸』祭祀について」『考古学雑誌』第86巻第2号 日本考古学会
- 21 萩原恭一 2000「千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書 XIV—印西市鳴神山遺跡・白井谷奥遺跡—」(財)千葉県文化財センター
- 22 高橋美久二ほか 1976「長岡京左京三条一坊発掘調査概要」「京都府埋蔵文化財調査概報」京都府教育委員会

付章 中越遺跡の焼失竪穴住居跡出土炭化材の樹種同定

植田弥生（パレオ・ラボ）

1はじめに

当遺跡は、木更津市大久保字中越に所在し、房総半島中間部の東京湾に面した標高約30mの台地に立地している。ここでは、古墳時代の焼失竪穴住居跡から出土した炭化材の樹種同定結果を報告する。

焼失住居跡から出土する炭化材は、遺構の性格からその多くは建築材と推定されているが、形状や形状から建築材と確認できる場合や生活用具が含まれている場合もある。従って出土炭化材の樹種を明らかにすることは、包含層から出土する木製品や自然木の樹種調査と同様に、その時期の建築材や住居内で利用していた木製品の樹種利用の実体とそれを伐採利用していたであろう遺跡周辺地の森林環境を明らかにしてゆく資料となる。

今までに房総半島北東部の東京湾に面した村田川流域では、縄文時代は針葉樹のカヤや落葉広葉樹のナラ類やシデ類など種類数が豊富な落葉広葉樹林であったが、古墳時代には照葉樹林要素が拡大したことが、花粉分析や木材樹種調査から判っている（辻ほか 1983、鈴木・能代 1985など）。また、人間活動と森林利用の視点から植生の変化を見ると、稻作の開始期に低湿地林の破壊があり、次に古墳時代になると台地上面に遺跡が分布拡大することに伴い台地上の森林が大きく影響をうけたとされる（辻ほか 1983）。東京湾に面し房総半島の中間地にある当遺跡での調査は、まさに古墳時代に台地に展開された居住地では、どのような樹種を伐採して生活していたのか、という森林の利用を知る具体的な資料のひとつとなる。

2炭化材試料と樹種同定の方法

ビニール袋に採取された試料は、住居内の出土位置が限定される試料と複数が一括採取された試料がある。またひとつのビニール袋中に複数破片がある試料は、すべてがまたは一部が接合するものや、異なる分類群が混在する試料、すべて同一分類群であるが接合せず形状も異なるなど、状況は様々であった。従って採取された段階の試料を元に、横断面の形状や検出された分類群を記録した。横断面の形状は、使用されていた材の太さや製材の程度などを知るための参考として記録した。

樹種同定作業は、まず炭化材の横断面（木口）を手で割り実体顕微鏡で分類群のおおよその目安をつける。アカガシ亞属・コナラ節・クヌギ節・クリ・シイノキ属などは横断面の管孔配列が特徴的なので、実体顕微鏡下で同定可能であるが、それ以外の分類群については3方向の断面（横断面・接線断面・放射断面）の材組織を走査電子顕微鏡で拡大し、形質を確認して同定を決定した。また上記の分類群でも、年輪幅の狭いぬか目や逆に年輪幅の広い試料などは実体顕微鏡下では誤同定の恐れがあるので、走査電子顕微鏡で確認した。走査電子顕微鏡用の試料は、3断面を5mm角以下の大さに整え、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡（日本電子機器製 JSM-T100型）で観察と写真撮影を行った。

3結果

表1に各試料の同定結果をまとめ、第1表に各遺構の検出分類群を比較した。

調査試料からは、アカガシ亞属・クスノキ科A（落葉性の可能性もある）・クスノキ科B・ヤブツバキの常緑広葉樹4分類群、ヤマグワ・カエデ属・エゴノキ属・トネリコ属の落葉広葉樹4分類群、そして大型となる草本性のイネ科ススキ属が検出された。

採取された炭化材の形状は、丸木のものは少なく、放射方向の径が3cm前後で樹芯部に近いみかん割りのものが多かった。丸木で取り上げられた炭化材は、直径3.5cm～4cmの太さであった。面取りや先端を丸く形成するなどの加工痕の認められた炭化材が、古墳時代中期の住居跡(S I 21・S I 29)から検出された。加工痕のあった分類群は、アカガシ亜属とヤブツバキで、これらは形成して使用した建築材であったかもしれないが、大きさや形状などから柄や部材などの道具類またはその製作途中のものが焼け残った可能性も頗るされる。この2種は建築材としても知られているが、器具類にもよく使用される樹種であった。

古墳時代前期の試料数は古墳時代中期の試料数に比べ少ないため、同等にその検出樹種から樹種選択性を比較は出来ないが、常緑広葉樹のアカガシ亜属は2時期から検出されていることから、アカガシ亜属の樹木はすでに建築材として利用可能なほど森林内に多く生育していたと考えられる。中期の試料からは、アカガシ亜属のほかにも2タイプのクスノキ科とヤブツバキの常緑広葉樹が検出された。

下に時期別に各住居跡から検出された結果を記し、次ぎに同定根拠とした材組織の観察結果を分類群ごとに記載する。

古墳時代前期

S I 12の遺物番号33からは、アカガシ亜属とヤマグワが検出された。アカガシ亜属は直径3.5cmのやや梢円形の丸木であり、樹芯が偏在していたことから分枝する部分と思われ、このような部位も含めて利用していたようである。ヤマグワの材は、ほとんどが角形を呈した破片であり、最大は3cm(放射径)×5cm(接線径)であった。

S I 19の遺物番号32は、表面に縦筋があり、直径は8mm前後、やや軟質で節が見られる試料もある多数の秤であった。横断面の維管束配列の特徴も合わせ、ススキ属と同定した。

S I 29の遺物番号60の4点はすべて接合し、横断面が半円形の長さ9.0cmの棒状である。横断面は樹芯を含まないがほぼ樹芯から半裁して半円形に形成されていて、直径方向の幅5.0cm、放射方向の厚み3.0cmである。一端は破損しているが、片端はまるく球形に加工されていた。建築材ではなく柄などの加工木と思われる。

古墳時代中期

S I 18からは、アカガシ亜属・クスノキ科A・カエデ属・エゴノキ属・トネリコ属の5分類群が検出された。アカガシ亜属は、住居中央部の床直上や焼土のなか、そして西側半分から検出された。クスノキ科Aは南隅から、カエデ属は北部隅から、トネリコ属は覆土焼土中と一括取り上げ試料から検出された。エゴノキ属は一括採取された試料中から、クスノキ科Aやトネリコ属と共に検出された。

S I 21からは、アカガシ亜属・クスノキ科B・カエデ属の3分類が検出された。アカガシ亜属は、遺物番号105・63・96・97から検出された。遺物番号63の5点のアカガシ亜属は、丸木や破片など異なる形状で加工痕があるものも含まれていた。図面では、均一の形状ではないが1本の材のようであることから、遺物番号63は同一の材の異なる部位から採取された炭化材であったと思われる。いっぽう、遺物番号97の10点からは、アカガシ亜属・クスノキ科B・カエデ属が検出された。クスノキ科Bは、遺物番号63からも検出された。

同定された樹種の材組織記載

(1)コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 写真1 1a-1c (S I 12-33)

集合放射組織を挟み中型～小型の単独管孔が放射状や枝状に配列する放射孔材。接線状の柔組織が顕著である。道管の壁孔は小さく交互状、穿孔は单一である。放射組織は同性、単列のものと広放射組織があり、道管との壁孔は横状や交互状に大きく開き配列している。樹芯部に近く樹齢が若い材部のためか、広放射組織の出現頻度が低く、広放射組織の細胞幅もあまり広くない試料がほとんどであった。

アカガシ亜属は常緑性でドングリをつけるカシ類の仲間で、おもに暖温帯に分布する。山野に普通なアラカシ・アカガシ・シラカシ、関東以南に多いイチイガシ・ツクバネガシ、海岸や乾燥地に多いウバメガシ、寒さに強くブナ帯の下部まで分布するウラジロガシなどがある。材は丈夫で弹性や耐湿性がある。

(2) ヤマグワ *Morus austoralis* Poiret クワ科 写真1 2a—2c (S I 12—33)

年輪のはじめに中型の管孔が配列し、その後は小型や非常に小型の管孔が多数集合して塊状や斜状に分布する環孔材。道管の壁孔はやや大きくて交互状、穿孔は单一、小道管にらせん肥厚がある。放射組織は異性、1～5細胞幅の紡錘形、上下端の單列部や縁辺部に直立細胞が多く、道管との壁孔は大きて交互状に配列している。

ヤマグワは落葉高木または低木で、温帯から亜熱帯の山中に広く分布する。材は重硬・強韌で心材はとくに保存性が高い。

(3) クスノキ科A *Lauraceae A* 写真1 3a—3c (S I 18—53)

小型の管孔が単独または2～3個が放射方向に複合し均一に分布する散孔材。道管の壁孔は交互状、一部では階段状に移行する部分が観察され、穿孔は单一である。放射組織は異性、1～3細胞幅、上下端に大きな油細胞が見られる。

管孔が小型であることから、クロモジやアブラチャンなど落葉性で小低木が多い、クロモジ属の可能性が高いと思われる。

(3) クスノキ科B *Lauraceae B* 写真2 4a—4c (S I 21—94)

やや小型から中型の管孔が単独または2個が放射方向に複合して分布する散孔材。管孔の周囲には柔細胞と油細胞が顕著に見られ、年輪界で管孔の径は小さくなる。道管の穿孔は、單一と階段数の少ない階段穿孔がある。放射組織は異性、主に2細胞幅、上下端に大きく膨らんだ油細胞がある。

上記のクスノキ科Aとは異なり、管孔が大きく、油細胞も比較的多く、單穿孔と階段穿孔が同程度に観察されたことから、シロダモ属シロダモ、クスノキ属ヤブニッケイ、タブノキ属タブノキ、ハマビワ属などが候補として考えられたが、特定は出来なかった。

(4) カエデ属 *Acer* カエデ科 写真2 5a—5c (S I 18—32～36)

小型の管孔が単独または2～3個が放射方向に複合して散在し、帯状の柔組織が顕著な散孔材。道管の壁孔は対列状や交互状、穿孔は单一、内腔に細いらせん肥厚がある。放射組織は同性、単列と5～10細胞幅の太いものがあり、道管との壁孔は対列に整然と配置している。

カエデ属は日本全土の暖帯から温帯の山地や谷間に生育し、約26種と多くの変種が知られている。材は堅く緻密で割れにくく保存性は中程度である。

(5) ヤツツバキ *Camellia japonica* L. ツバキ科 写真2 6a—6d (S I 29—60)

非常に小型の管孔が単独または2～3個が接合して散在し、年輪前半の管孔はやや大きい散孔材。道管の壁孔は交互状、一部で階段状への移行が見られ、穿孔は横棒が太く10～20本の階段穿孔である。放射組織は異性、1～3細胞幅、上下端に方形・直立細胞があり、中間の多列部は平伏細胞からなり、道管との

壁孔は交互状と階段状、結晶を含み膨らんだ大型の油細胞がある。

ヤブツバキは暖帯の海岸から山中に普通に生育する常緑の低木または高木である。材は緻密で強くて硬い。

(6)エゴノキ属 *Styrax* エゴノキ科 写真3 7a—7c(S I 18—53)

小型の管孔が単独または2~4個が複合して放射方向に配列し、年輪界付近では径と分布数が減少する散孔材。道管の壁孔は小型で交互状に密在、穿孔は横棒数が少ない階段穿孔である。放射組織は異性、1~2細胞幅、多列部の上下端は方形・直立細胞からなる。

エゴノキ属は暖帯から温帯下部の山地や渓谷に生育する落葉高木である。エゴノキ・ハクウンボク・コハクウンボクがある。材利用は、柄や器具類が多い。

(7)トネリコ属 *Fraxinus* モクセイ科 写真3 8a—8c(S I 18—53)

中型~大型の管孔が1~3層配列し、その後は小型で厚壁の管孔が単独または2個が複合し散在する環孔材。周囲状や晩材部では帯状柔組織がある。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一である。放射組織は同性、1~2細胞幅である。

トネリコ属はおもに温帯に生育する落葉高木で、シオジ・ヤチダモ・トネリコ・アオダモなど約9種ある。材は硬で弾力性がある。

(8)スキ属 *Miscanthus* イネ科 写真3 9a—9b(S I 19—32)

直径8mm前後の草本性の稈で、節部はやや膨れて葉鞘の付け根で段が付く。稈の中心部は崩れているが、スポンジ状の基本組織のなかに維管束が散在する不整中心柱であることが判る。稈の外周は、厚壁細胞からなる厚い細胞層に囲まれて小さな維管束が接近して1~2層配列している。それより内側は、周囲の厚壁細胞層が薄い維管束が散在している。

スキ属は大型になる多年草で一般にはカヤ(茅)と呼ばれ、約7種ある。日本全土の平地から山地の陽地に普通に見られ、刈って屋根を覆く材料とされてきたスキ、北海道から九州の湿地に生育するオギ、東北南部から近畿北部の山中の陽地に生育するカリヤス、関東南部以西の堤防の草地に生育するトキワスキなどがある。現時点では稈の組織から種を識別することはできていない。

4.まとめ

古墳時代前期の3住居と古墳時代中期の2住居から検出された分類群は、常緑広葉樹のアカガシ亜属・クスノキ科A(落葉性の可能性もある)・クスノキ科B・ヤブツバキと落葉広葉樹のヤマグワ・カエデ属・エゴノキ属・トネリコ属の合計8分類群、そしてイネ科スキ属であった。常緑広葉樹と落葉広葉樹の分類群が、約半数ずつ検出された。しかし出土頻度は、常緑広葉樹のアカガシ亜属が圧倒的に多かったことから、普通に、もしくは強く選択使用されていたと思われる。

加工痕のある炭化材も検出され、その形状や太さなどから柄や部材などの用具類や製作途中で焼けた可能性が考えられた。加工痕のあった分類群は、アカガシ亜属とヤブツバキで、これらの分類群(樹種)は建築材として出土することも知られているが、柄などの器具類にもよく使用されている樹種である。スキ属は、屋根材や壁材として利用された可能性が頗推されるが、稈の一本一本がバラバラになっており使用されていた状況が判る産状は不明である。

千野(1991)は、集落で利用した建築材や燃料材の木材樹種を各時代ごとに集計することにより、人間活動に伴い森林が二次林化してゆく過程を理解できないかと考え、南関東地方の遺跡の報告を集計している。

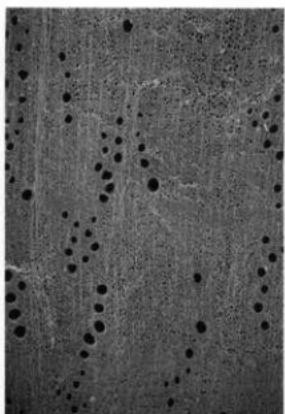
それによると建築材は、縄文時代はよく知られているようにクリが圧倒的に多く使われているが、古墳時代は弥生時代と共にクヌギ類とコナラ類を含むコナラ亜属の出土例が多くなり、遺跡周辺にコナラ亜属を中心とした二次林が広がった可能性を指摘している。山田(1993)による1992年度までの集計資料を通覧すると、千葉県内の古墳時代の住居跡出土樹種も、千葉市より北西部の遺跡ではクヌギ類やコナラ類が優占出土する遺跡が多い(日秀西遺跡・殿平賀向山遺跡・外原遺跡など)。しかし千葉市の城の腰遺跡(千野、1979)では、ユズリハ属・常緑カシ類(アカガシ亜属と同義)・クスノキ科などの常緑広葉樹が目立ち、そのほかに複数の落葉広葉樹と針葉樹のカヤが出土している。房総半島の東京湾岸に面した北東部の城の腰遺跡とそれより南に位置する当遺跡では、複数種類の落葉広葉樹と共にアカガシ亜属などやはり複数種類の常緑広葉樹が多く検出され、クヌギ類とコナラ類は検出されていない。このような検出樹種の構成から、当遺跡の周辺も房総半島北東部の同時期と同様に、複数の落葉広葉樹を含みアカガシ亜属が豊富な照葉樹林が成立(辻ほか、1983、鈴木・能代、1985)しており、その森林を利用していたと類推された。

引用文献(引用順に記した)

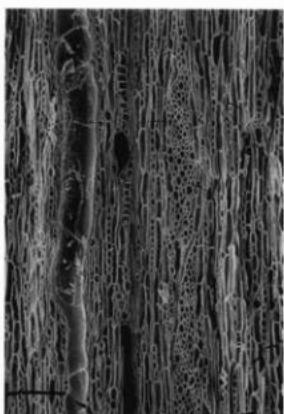
- 辻 誠一郎・南木睦彦・小池裕子 1983 縄文時代以降の植生変化と農耕—村田川流域を例として— 251-266 第4紀研究 第22巻 第3号
- 鈴木三男・能代裕一 1985 千葉市村田服部遺跡(古墳時代前期)出土木材の樹種 11-69 Ann.Sci.Kanazawa Univ.
- 千野裕道 1991 縄文時代に二次林はあったか—遺跡出土の植物性遺物からの検討— 214-249 研究論集X 東京都埋蔵文化財センター
- 山田昌久 1993 日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成-用材から見た人間・植物関係史 1-242 植生史研究
- 千野裕道 1979 炭化材樹種の同定 440-450 千葉市城の腰遺跡—千葉東金道路建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告3—(千葉市大宮地区) 財団法人 千葉県文化財センター

表1 中越遺跡の焼失居住跡出土炭化材樹種

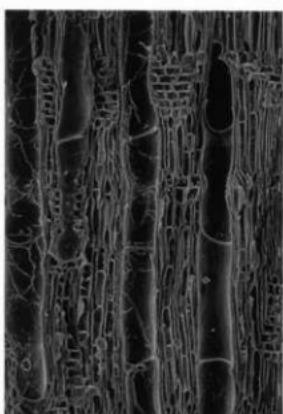
| 遺構 | 遺構の時期 | 遺物番号 | 試料No. | 遺物番号 | 出土状況など | 検出樹種 | 研磨数 | 標考(r: 放射方向の長さ φ: 現存の直径) | | |
|-------|--------|------|-------|------|--------|--------|-----|-----------------------------------|------|--------|
| | | | | | | | | アガシ・亜属 | ヤマグワ | φ3.5cm |
| SI-12 | 古墳時代前期 | 1 | 33 | 腐土中層 | | アガシ・亜属 | 1 | r: 放射方向の長さ φ: 現存の直径 | | |
| | | | | | | ヤマグワ | 5 | 3.0cmφ以下の破片 | | |
| | | | | | | | | r:3.0cmで30年輪以上の破片あり | | |
| | | | | | | クスノキ科A | 2 | r:2.0cmとr:2.5cmのみかん割り | | |
| | | | | | | アガシ・亜属 | 11 | r:2.0~4.5cmのみかん割りや破片 | | |
| | | | | | | カエデ属A | 4 | r:2.5~3.5cmのみかん割り | | |
| | | | | | | アガシ・亜属 | 2 | 2片複合する r:5.5cmみかん割り | | |
| SI-18 | 古墳時代中期 | 6 | 49 | 粘土の中 | | アガシ・亜属 | 7 | r:4.5~5.5cm みかん割り | | |
| | | | | | | トネリコ属 | 3 | 2片は複合するみかん割り | | |
| | | | | | | クスノキ科A | 4 | r:1.8~3cm みかん割りが多い | | |
| | | | | | | エニノキ属 | 3 | r:3cm みかん割り | | |
| | | | | | | トネリコ属 | 1 | φ4.0cm丸木 | | |
| | | | | | | スキ属 | 3 | r:2.5cm みかん割り | | |
| | | | | | | アガシ・亜属 | 1 | φ8cm前後、節部あり やや軟質の桿 | | |
| SI-19 | 古墳時代前期 | 9 | 32 | 床面 | | アガシ・亜属 | 1 | r:3.0cm みかん割り | | |
| | | | | | | 丸木 | 1 | φ3.5cm 丸木 | | |
| | | | | | | | 2 | 2片複合する 径4.0cmの半數 一端面取り加工 | | |
| | | | | | | | 1 | r:2.5cm 破片 | | |
| | | | | | | | 1 | 加工痕 幅3.0cm・厚2.0cm・長さ4.5cm | | |
| | | | | | | | 1 | 一端は丸く加工、側面も加工 | | |
| | | | | | | | 1 | r:4.0cmの角形やφ3.5cmの丸木など | | |
| SI-21 | 古墳時代中期 | 12 | 94 | 床面 | | クスノキ科B | 3 | r:2.5cm以下 みかん割りや破片 | | |
| | | | | | | アガシ・亜属 | 3 | r:3.0cm みかん割り | | |
| | | | | | | アガシ・亜属 | 1 | r:2.0cm みかん割り | | |
| | | | | | | クスノキ科B | 4 | r:2.0cm以下の角形に近い破片 | | |
| | | | | | | カエデ属 | 4 | r:1.3cm 同様な形状の破片 | | |
| | | | | | | ヤブツバキ | 4 | 4瓣片複合する 加工痕 | | |
| | | | | | | | | 幅5.0cm・厚み3.0cm・長さ9.0cm 半數 一端を丸く加工 | | |
| SI-20 | 古墳時代中期 | 15 | 60 | | | | | | | |



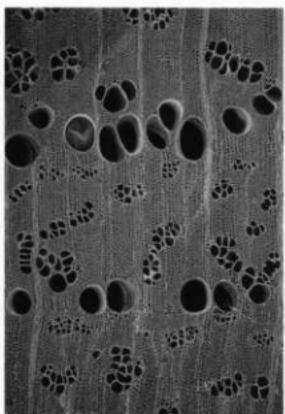
1a アカガシ亜属 (横断面)
SI12-33 bar:0.5 mm



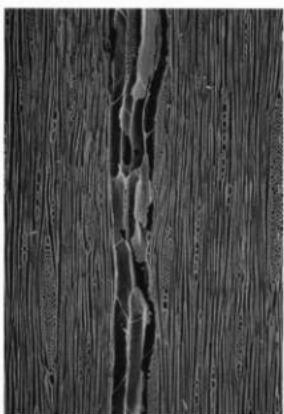
1b アカガシ亜属 (接続断面)
SI12-33 bar:0.5 mm



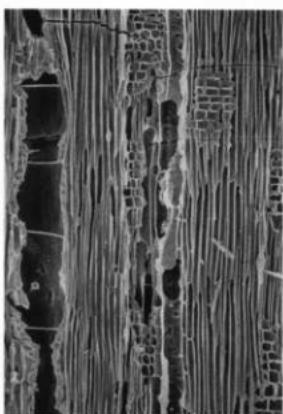
1c アカガシ亜属 (放射断面)
SI12-33 bar:0.1 mm



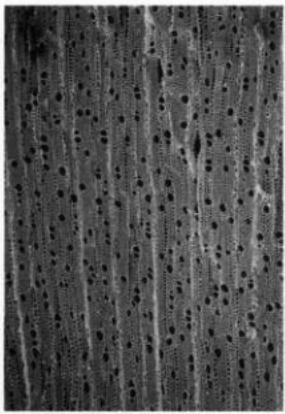
2a ヤマグワ (横断面)
SI12-33 bar:0.5 mm



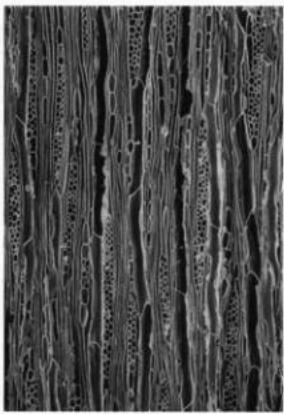
2b ヤマグワ (接続断面)
SI12-33 bar:0.5 mm



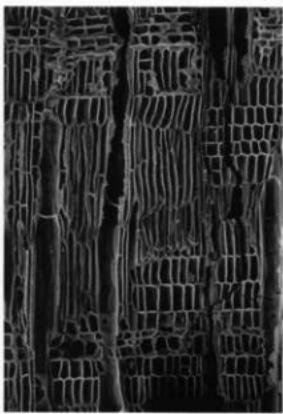
2c ヤマグワ (放射断面)
SI12-33 bar:0.1 mm



3a クスノキ科A (横断面)
SI18-53 bar:0.5 mm

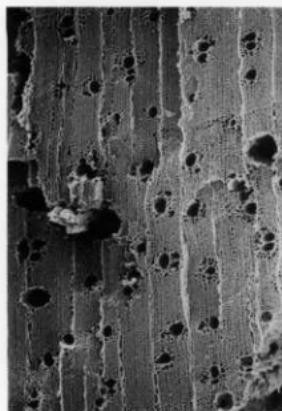


2b クスノキ科A (接続断面)
SI18-53 bar:0.5 mm

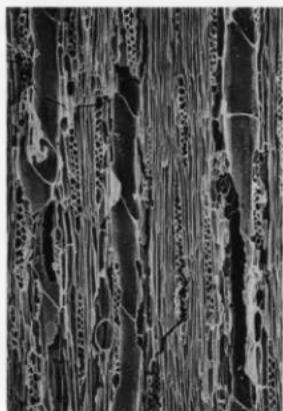


2c クスノキ科A (放射断面)
SI18-53 bar:0.1 mm

写真2 中越遺跡焼失堅穴住居跡出土炭化材樹種



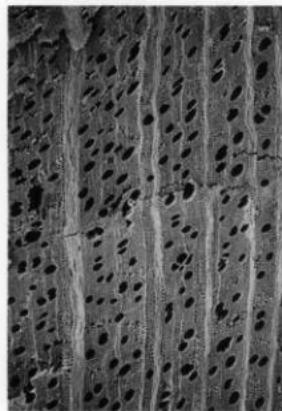
4a クスノキ科B (横断面)
SI21-94 bar:0.5 mm



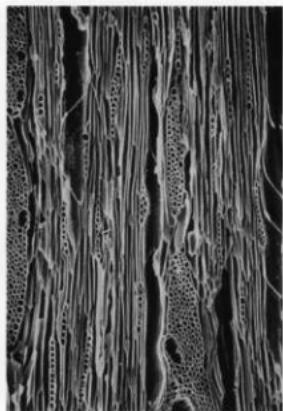
4b クスノキ科B (接線断面)
SI21-94 bar:0.5 mm



4c クスノキ科B (放射断面)
SI21-94 bar:0.1 mm



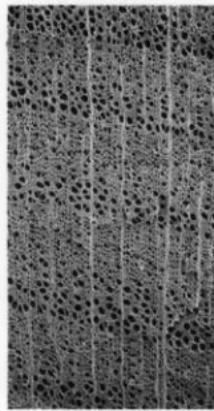
5a カエデ属 (横断面)
SI18-32~36 bar:0.5 mm



5b カエデ属 (接線断面)
SI18-32~36 bar:0.1 mm



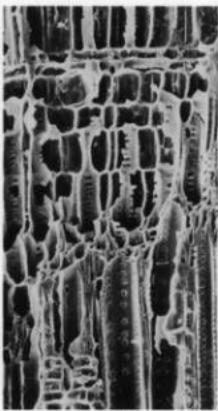
5c カエデ属 (放射断面)
SI18-32~36 bar:0.1 mm



6a ヤブツバキ (横断面)
SI29-60 bar:0.5 mm

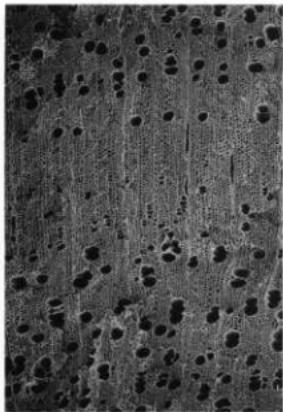


6b ヤブツバキ (接線断面)
SI29-60 bar:0.1 mm

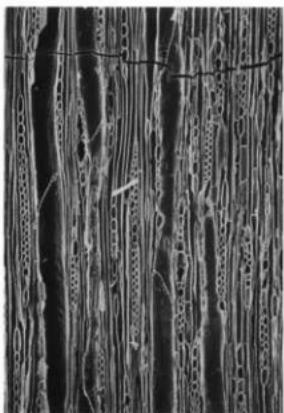


6c-d ヤブツバキ (放射断面)
SI29-60 bar:0.1 mm

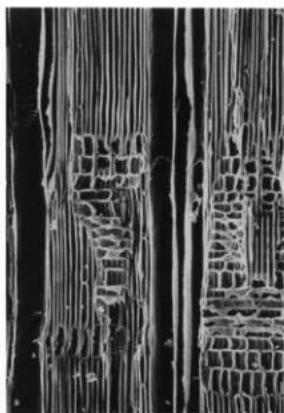




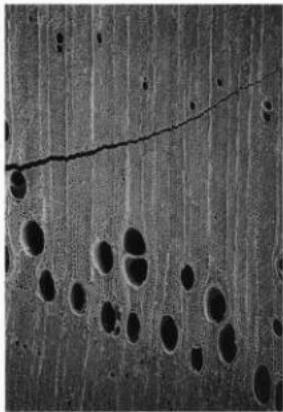
7a エゴノキ属(横断面)
SI18-53 bar:0.5 mm



7b エゴノキ属(接線断面)
SI18-53 bar:0.5 mm



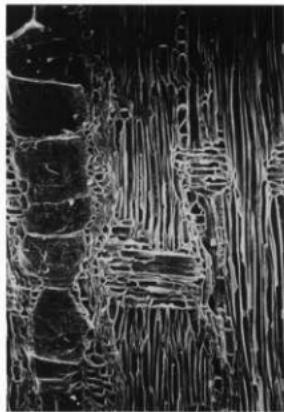
7c エゴノキ属(放射断面)
SI18-53 bar:0.1 mm



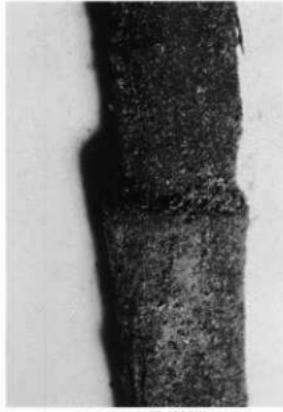
8a トネリコ属(横断面)
SI18-53 bar:0.5 mm



8b トネリコ属(接線断面)
SI18-53 bar:0.1 mm



8c トネリコ属(放射断面)
SI18-53 bar:0.1 mm



9a ススキ属(外観)
SI19-32 bar:5 mm



9b ススキ属(横断面)
SI19-32 bar:0.5 mm

写 真 図 版



航空写真(昭和60年秋撮影)
(約1:5000)



航空写真(平成13年3月16日撮影)
(約15,000)



1. 石器台 (10025)



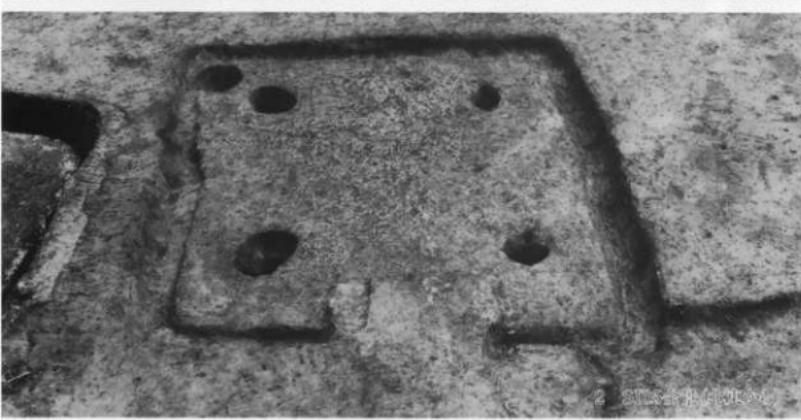
2. 石器台 (10025)



3. 石器台 (10025)



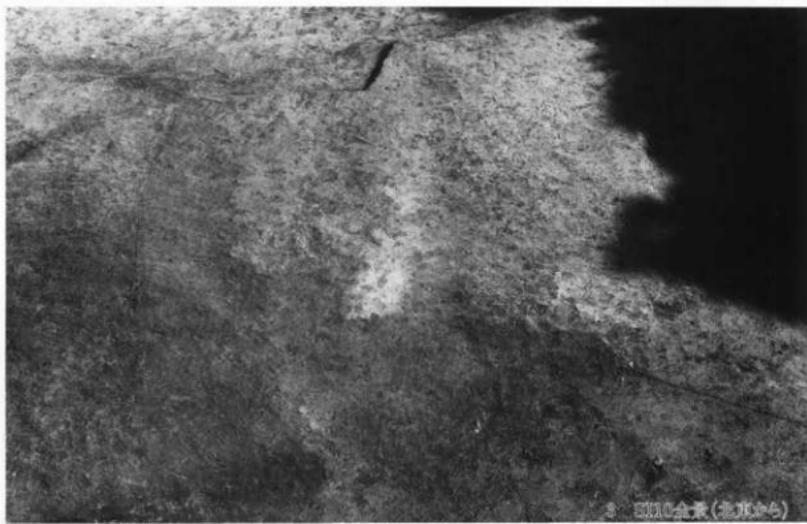
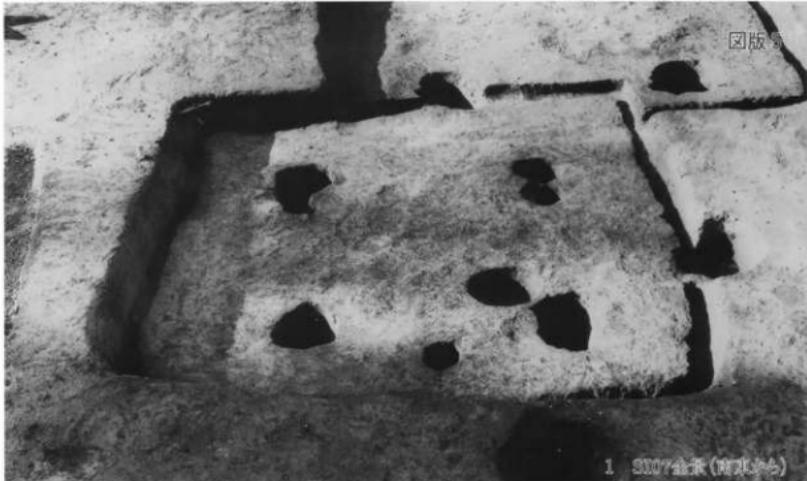
1 STONE (石器)

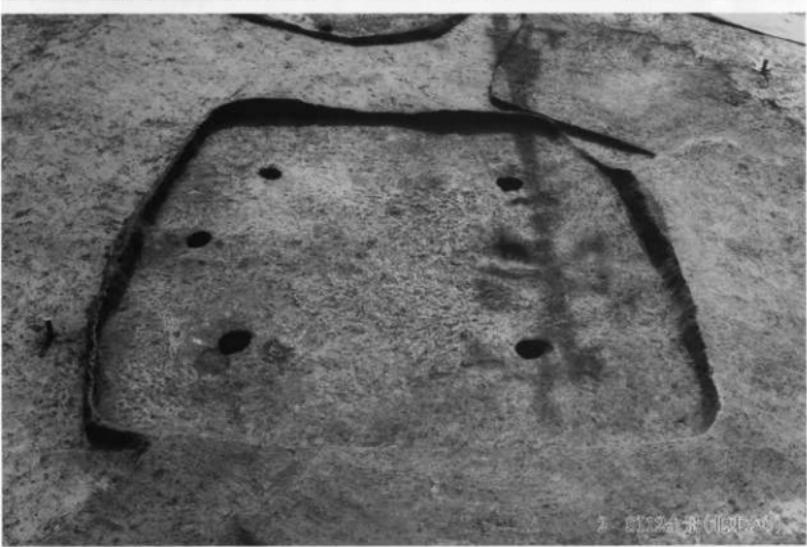


2 STONE (石器)



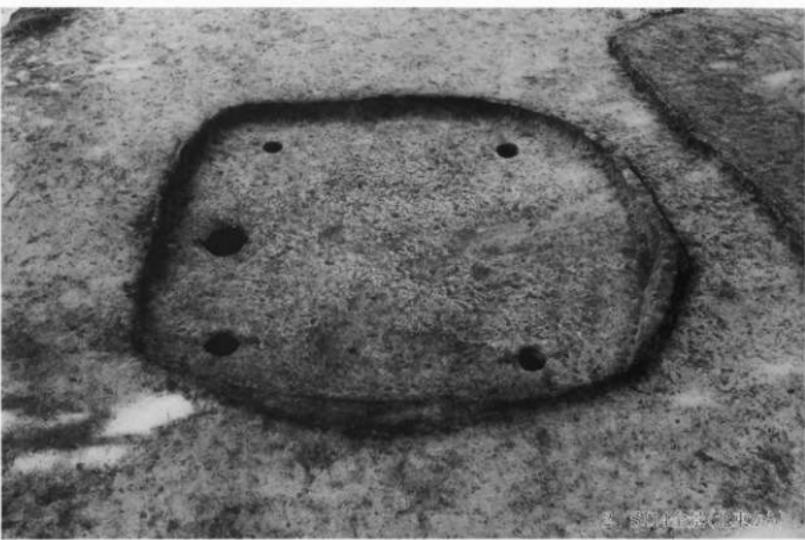
3 STONE (石器)







1. 石器(北東約5)



2. 石器(北東約5)



3. SII1遺物(土状洗面器)



4. SII1遺物(土状洗面器)





1 SI18遺物出土状況(東側)



2 SI19遺物出土状況(西側)



3 SI18小僧像出土状況(EPS)



4 SI19小僧像出土状況(東から)





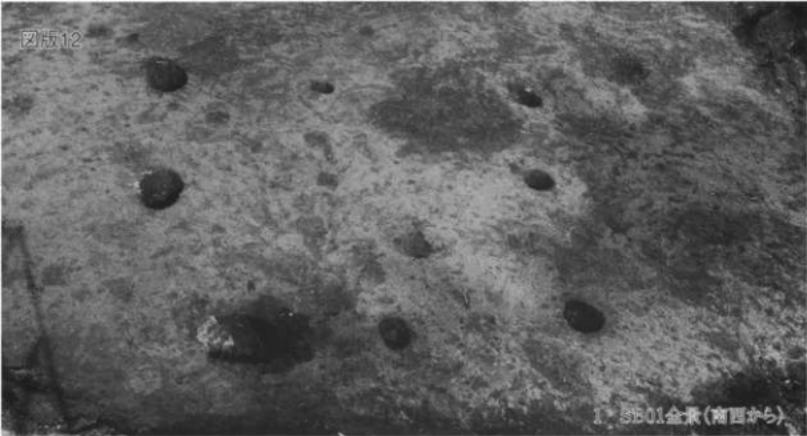
1 SI26·27·32金录(南西から)

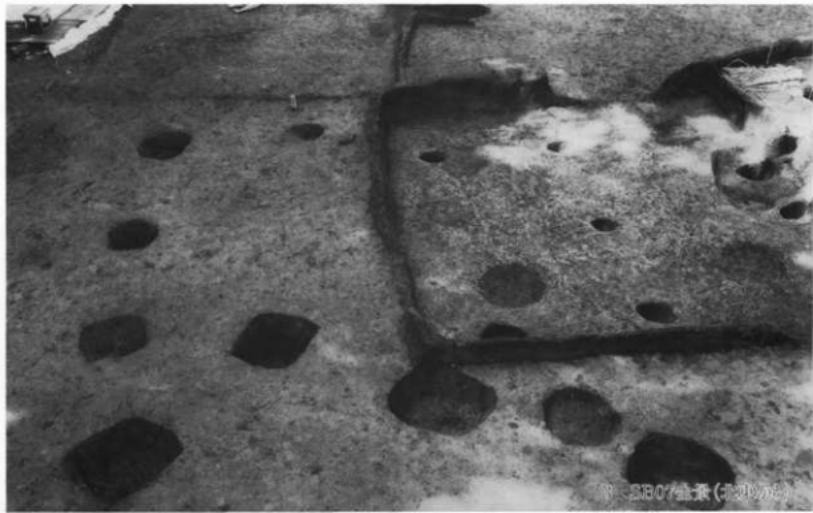
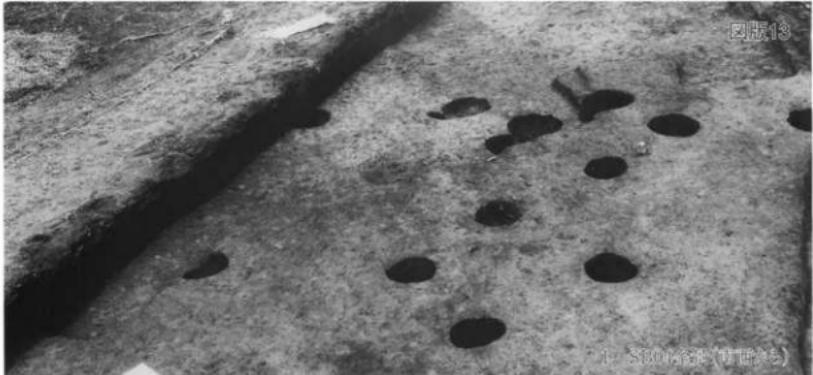


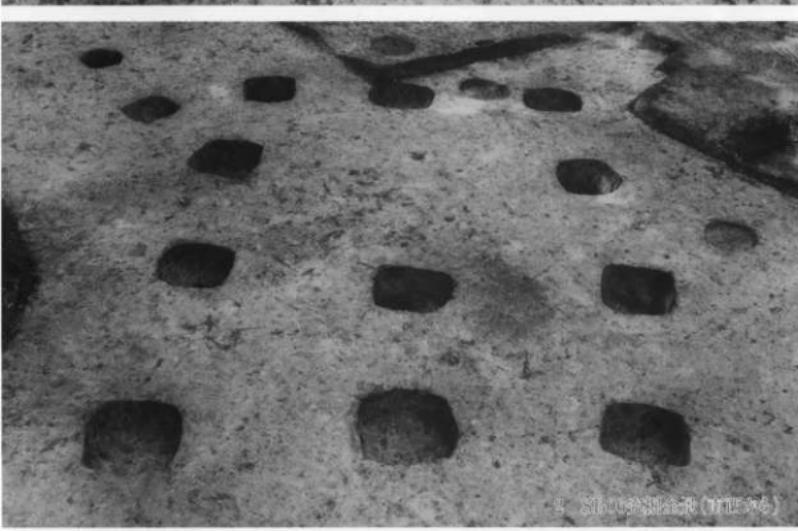
2 SI28·29金录(南東から)



3 隅2金录







第1 ブロック



1



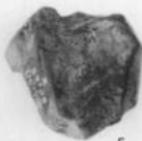
2



3



4a~d



5



6

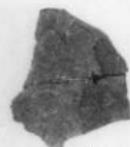


7



8

第2 ブロック



1a+b



1



2



3



4



5



6



7

第5 ブロック



1



2



3



4



5



6



7



8



10a+b



11a~f



12a+b

9a+b

第I ~ III文化層

図版16 旧石器時代石器(2)

第6 ブロック



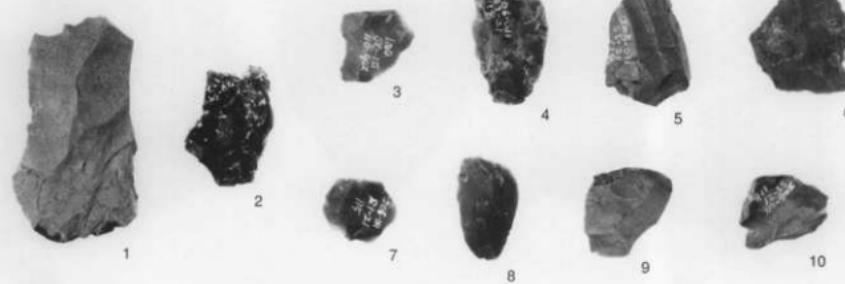
第7 ブロック



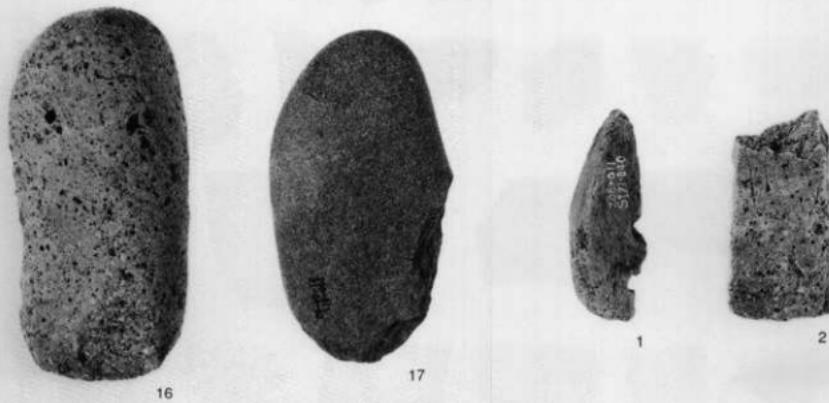
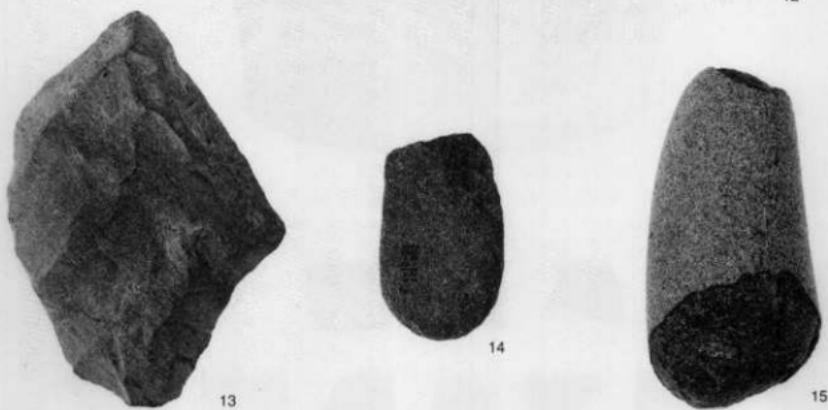
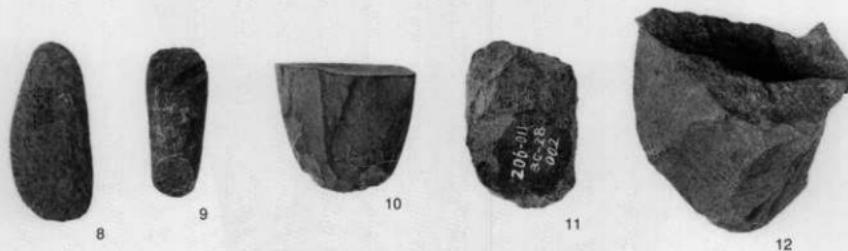
第8 ブロック



単独出土石器



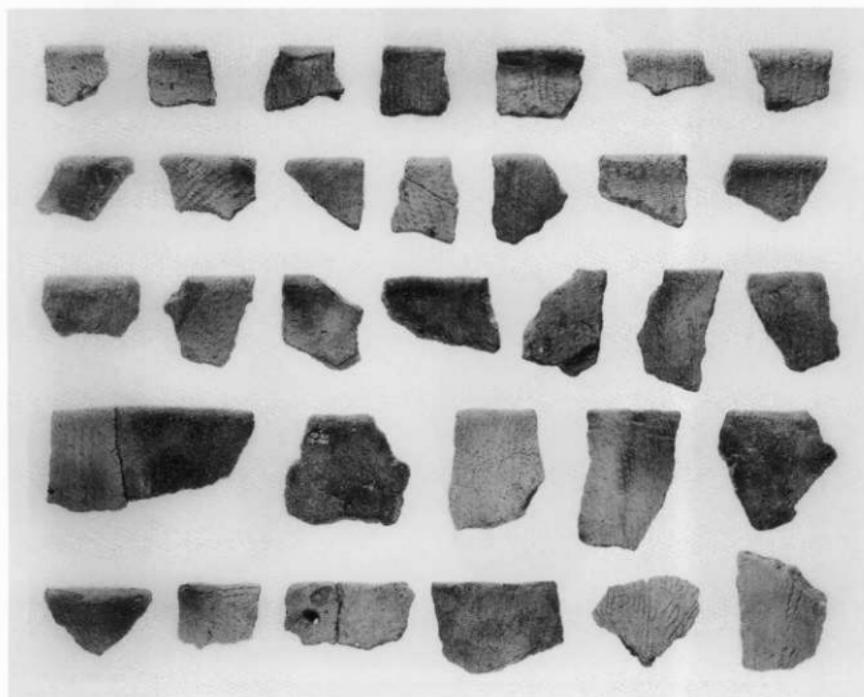
第III～IV文化層・単独

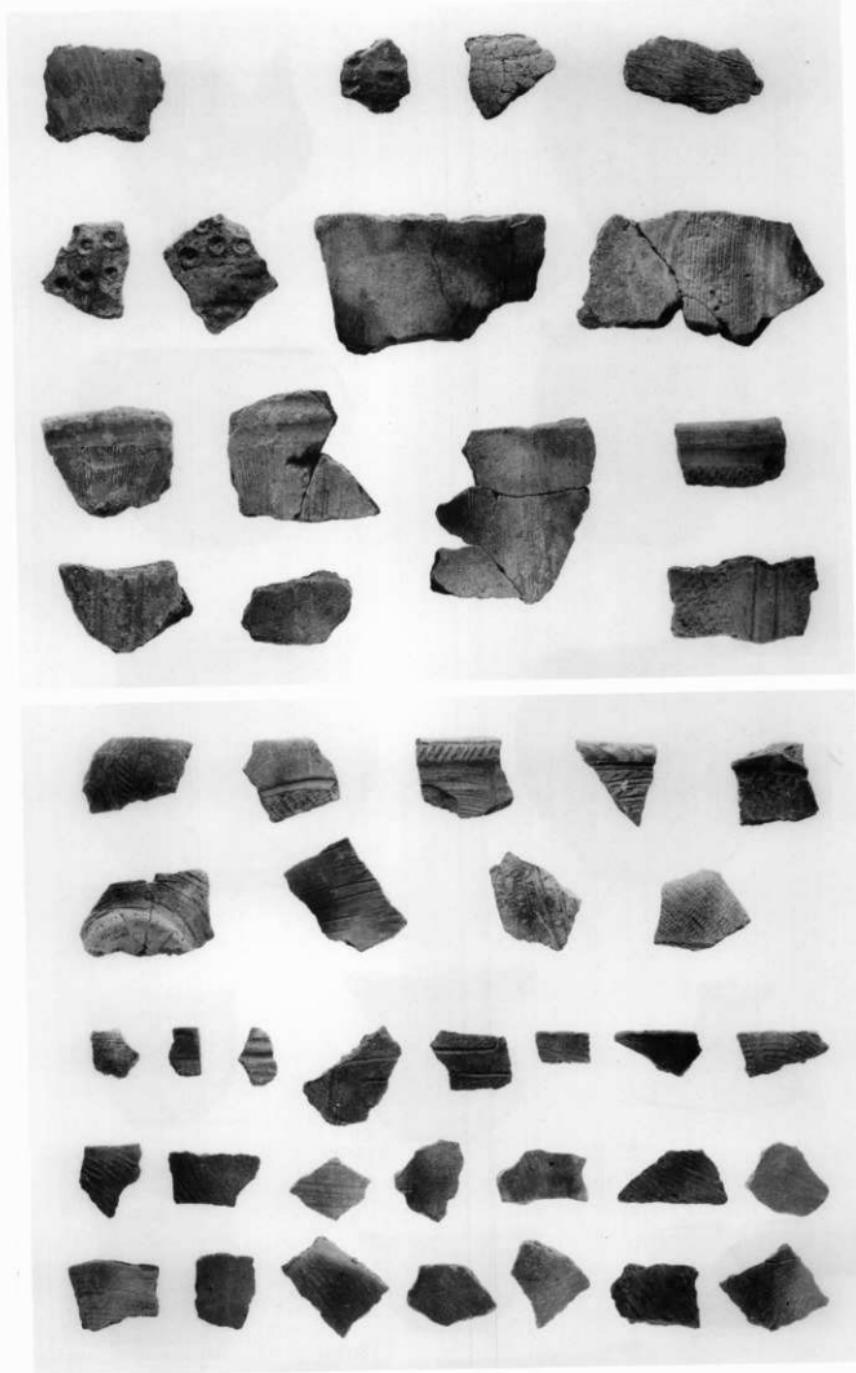


図版18 繩文土器(1)

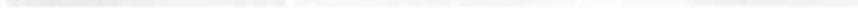
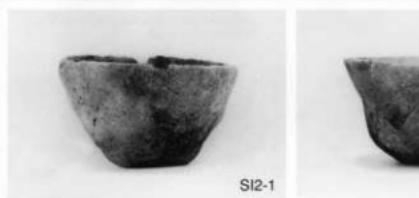
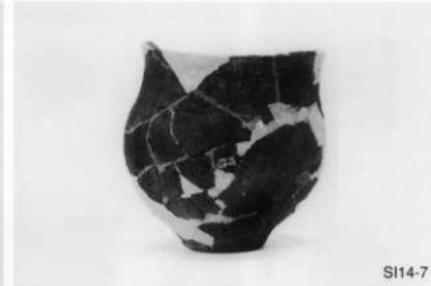


SK02





図版20 弥生土器・古墳時代土師器(1)





SI12-9



SI12-3



SI12-4



SI12-10



SI12-8



SI18-1



SI19-9



SI19-5



SI19-3



SI19-8



SI19-10



SI19-2



SI19-1



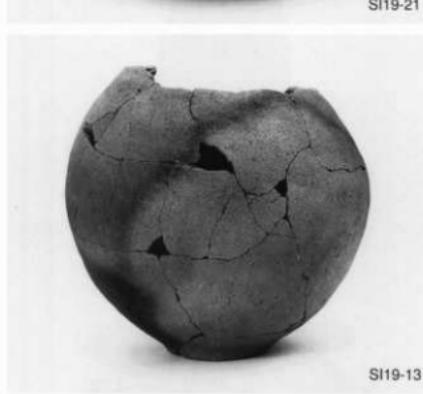
SI19-6



SI19-4

図版22 古墳時代土師器(3)





図版24 古墳時代土師器(5)



SI21-4



SI21-1



SI26-7



SI26-6



SI26-4



SI26-1



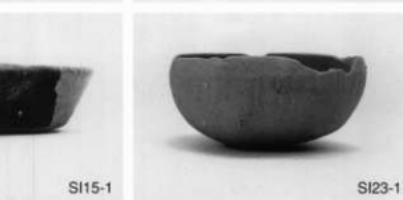
SI26-3



SI26-5



SI06-2



SI23-1

図版26 小銅鐸



(約1:1)



(約1:1)



(約1:1)



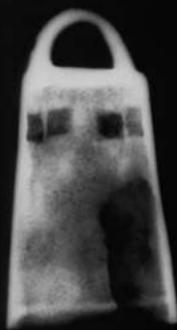
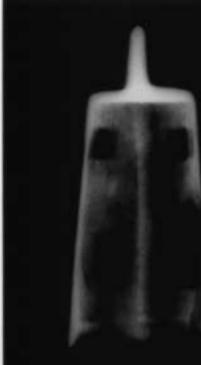
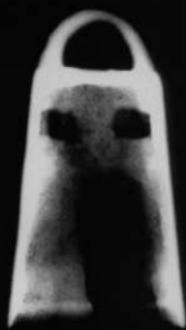
(約1:1)



(約1:1)



(約1:1)

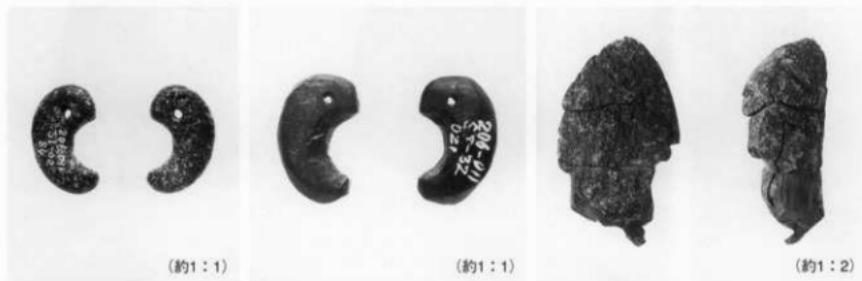




(約1:1)



図版28 鉄製品・石製品・木製品・土製品



報告書抄録

| ふりがな | ひがしかんとうじどうしゃどう（ちば・ふつつせん）まいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ | | | | | | | | |
|---------------|---|-------|------------|---|--|--------------------|---------------------------|---------------------|------|
| 書名 | 東関東自動車道（千葉・富津線）埋蔵文化財調査報告書 | | | | | | | | |
| 副書名 | 木更津市中越遺跡 | | | | | | | | |
| 巻次 | 11 | | | | | | | | |
| シリーズ名 | 財団法人千葉県文化財センター調査報告 | | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第436集 | | | | | | | | |
| 編著者名 | 今泉潔・新田浩三 | | | | | | | | |
| 編集機関 | 財団法人 千葉県文化財センター | | | | | | | | |
| 所在地 | 〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2 | | | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦2002年3月25日 | | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在 | 地名 | コード 市町村 | 道路番号 | 北緯 | 東經 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| 中越遺跡 | 木更津市大久保 字中越334ほか | | 12206 | 011 | 35度 20分 51秒 | 139度 55分 30秒 | 19940116 / 19940531 | 3.500m ² | 道路建設 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | | | 特記事項 | | |
| 中越遺跡 | 包蔵地 | 旧石器 | 遺物集中地点 8か所 | 石器（ナイフ形石器・楔形石器・削器・搔器・石核・剥片等） 縄文土器・石器・礪 | 古墳時代前期末の堅穴住居（S I 19）から、小銅鐸が出土し、鐸身内から舌と考えられる櫛も出土した。 | | | | |
| | 集落跡 | 绳文 | 埋甕 | 1基 | | | | | |
| | 集落跡 | 弥生 | 堅穴住居 | 1軒 | | | | | |
| | 集落跡 | 古墳 | 堅穴住居 | 14軒 | | | | | |
| | 集落跡 | 奈良・平安 | 堅穴住居 | 13軒 | | | | | |
| | | 時期不明 | 掘立柱建物 | 8棟 | | | | | |
| | | | 堅穴住居 | 1軒 | | | | | |

千葉県文化財センター調査報告第436集
東関東自動車道（千葉・富津線）埋蔵文化財調査報告書11
－木更津市中越遺跡－

平成14年3月25日

編 集 財団法人 千葉県文化財センター
発 行 日 本 道 路 公 団
東京都港区虎ノ門1-18-1
財団法人 千葉県文化財センター
千葉県四街道市鹿渡809-2
印 刷 大 和 美 術 印 刷 株 式 会 社
千葉県木更津市潮浜2-1-10
